THE CENTRAL REVIEW

中央公論

四月號

第四十三年　第四號　第四百八十三號

昭和三年三月十八日印刷納本
昭和三年四月一日發行（每月一回一日發行）



四版出來

獨逸 ショーペンハウエル著 増富平藏譯

人生達觀

●四六判總布製 定價金貳圓七拾錢 郵稅十二錢

「西洋では貴婦人が自動車に乘つて易者の處へやつて來る**文明の矛盾だ**」と云つた者がある。ところが、この事實はむしろ**人間性の缺陷と要求**とを物語つてゐる、眞實に知つて居り確めてゐる事の無限に少ない人間が占ひを求め豫言を欲するのは當然の事である、然るに、**最高等の占ひであり豫言**であるのは、**偉大な哲學者の人生觀**である。そこには運命の大きな底流れが示され、不可測の消息が明斷され、**人生の根本的**なからくり、仕掛けが解體され、**現實と未來**に對してどう歩みどう進むべきかが數へられ、失はれたもの捜されて居るもの〻何處にあるかゞ指されてゐる。我々は實に此の『**人生達觀**』が**斯樣な意味での秘錄**であることを信じて江湖にお薦めする。

著者	因果論 原名『根據の原理』	貳圓參拾錢 郵稅十錢
譯者	處世哲學 八版	貳圓八拾錢 郵稅十二錢
同前	ショーペンハウエル隨想錄 三版	貳圓六拾錢 郵稅十二錢

獨逸 ショーペンハウエル著 増富平藏譯 （三卷完成 上卷三版）

宇宙及人生

▲全三卷總紙數
▲二千五百二十餘頁
▲四六判九ポイント組
▲總洋布裝函入

定價 上卷四圓五拾錢 中卷金四圓 下卷金四圓 郵稅各卷十八錢

本書は獨逸の大哲學者ショーペンハウエルの大著「**意志及び心識としての世界**」の逐字的口語譯である。原書は**ニイチエ**も二週日の間一時に寢ね、六時に起て一千頁を讀破したといつた位深淵の思想と無限の興味とを兼ね具ふる點に於て有ゆる哲學書中の白眉を以て目さるゝ世界的名著である譯筆の明快は云ふ迄もない

駒澤大學長 文學博士 忽滑谷快天著

『上下完成』

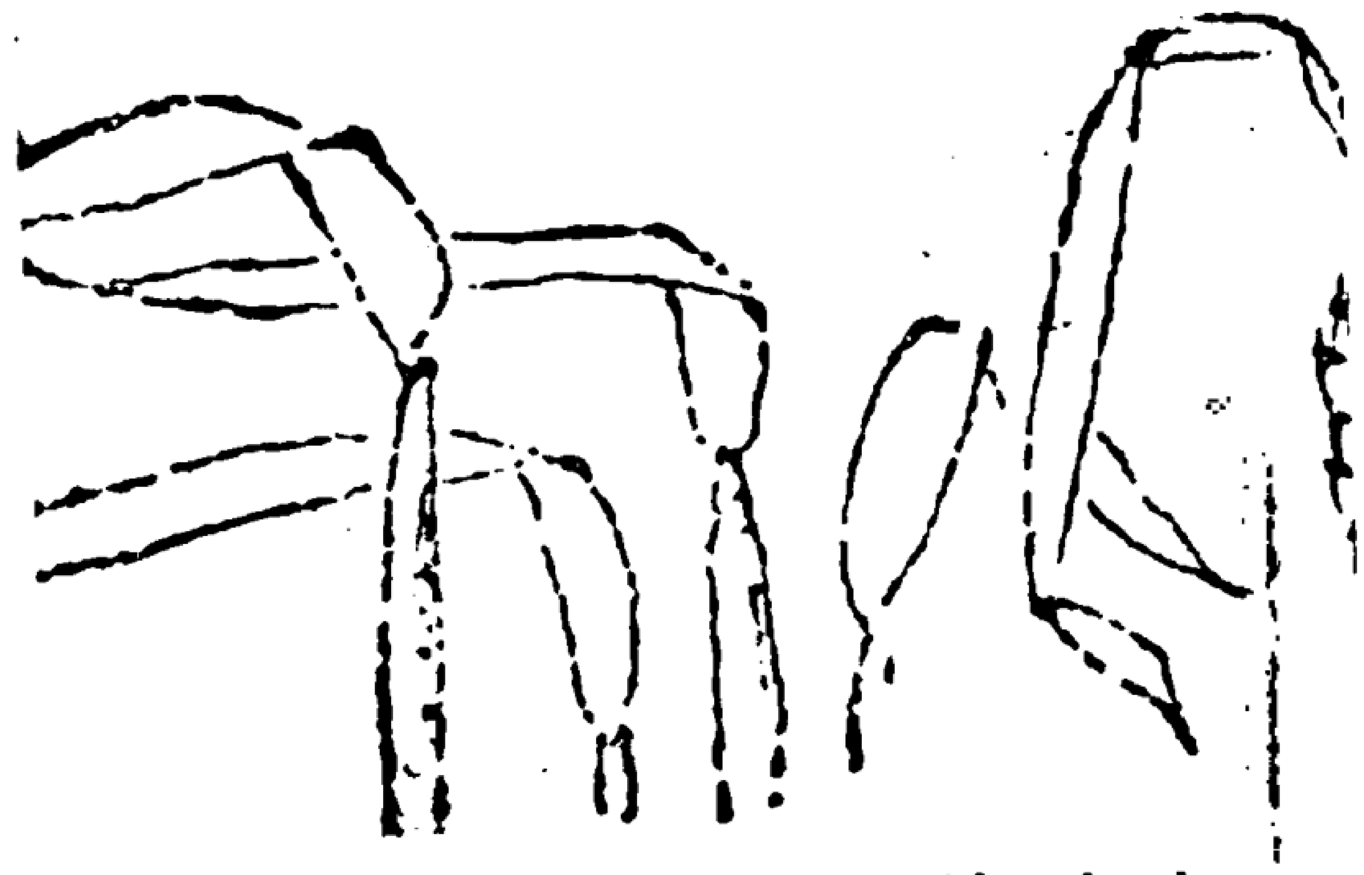
禪學思想史

▼上下二卷菊判總布製
▼紙數千六百五十餘頁
▼函入肖像挿畫各三葉入

定價各六圓五拾錢 小包料—內地二十七錢 其他五十五錢

▼禪家に未だ曾て思想史あらず、本書を以て嚆矢とす。

東京本郷西片町 **玄黃社** 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番



敗戰記)



血管の硬化！

早老及老衰の豫防に

早老及老衰の原因は血管の硬化にあり、身體の各部に榮養を配給する血管の疲弊は直に血液の巡行を不圓滑ならしめ種々の病的障害を誘起し、活動能力を阻止する結果として老衰を急ぎ短命に導く、而して幼若動物の血管内膜及中膜の成分アニマザが血管硬化に對し原因的効果を奏することは左記の批判によりて明かなり

『**高血壓を伴ふ諸症**に對し**アニマザ**は最も推奨し得べく生理的早老現象を防止し、既に動脈硬化存する場合には病狀を輕減し、自他覺的に迅速且つ顯著に良好となり血壓昂進し動脈硬化の初期には豫防的に用ゐて血壓を下降す』シュタインバッハ氏

『**血管硬化の初期に**あるものと深く進行せるものとを問はず**アニマザ**は最良の治療劑にして血液中に存する毒素に抵抗し、生活上の愉悦を恢復し老年期の健康生活を保證し或る場合には生命の延長をすら可能ならしむるが如し』ミゲオド氏

『**原因的効力を有し**アニマザ内服の結果として先づ認めらるゝは活動力の恢復にして、他の藥劑又は食餌療法を以て無効なりし呼吸促迫、頭痛、眩暈、項筋痛、强迫觀念、頭部灼熱感、思考力缺乏、倦怠、性的無力等が次第に且つ顯著に輕快に赴くことなり』コップ氏

動脈硬化症
腦溢血
治療及豫防劑
アニマザ

說明小冊子送呈

三〇錠……二圓四十錢
一〇〇錠……六圓八十錢
各地有名藥店にあり

獨逸オスナブルク臟器治療藥會社總代理店

東京日本橋區本町　田邊元三郎商店

A228



大和の春

安田靫彦筆

漱石全集

偉大な藝術家の作品はその一つを讀めば、次のものが讀みたくならずには居られぬ。漱石の「吾輩は猫である」「草枕」「坊ちやん」などは年々數萬の新しい讀者を得て來た。これらを讀んで全集を求めたくなる人は次第に殖えて行く。然し漱石全集は從來高價であつたために誰でも買ふといふわけには行かなかつた。たゞ高價なる故をもつてのみ日本の藝術家が日本人のものとならないのは當に不合理だ。今度の普及版こそは此の憾みを徹底的に驅逐する。

一冊一圓

內容見本 進呈

御申込は最寄書店又は直接

內容目次

申込略規

頒布方法 全二十卷。豫約申込者にのみ頒ちます。

刊行期日 昭和三年三月より毎月一冊宛刊行します。

體裁 裝幀、漱石著案による。四六判九ポイント一段組。振がな附。紙數約五百頁。朱色刷總布裝本最上製。口繪挿入。印刷、凸版印刷株式會社。

申込方法 申込期限までに「豫約申込金」金一圓を添へて御申込みを願ひます。

配本 御申込順により三月十五日より第一回分配本をしました。

申込期限 昭和三年四月五日まで。

會費 毎月拂 一冊分 金一圓　一時拂 全二十冊分 金十九圓

會費の他に左の送料を申受けます

東京市內一冊分六錢、內地十二錢、臺灣朝鮮滿洲平均十二錢

東京神田岩波書店內

漱石全集刊行會

振替東京三八一五一番


Agfa
FILMPACK
ROLLFILM
寫眞材料界の權威
アグファの製品を推薦す
東京市麴町區丸ノ内
仲通十四番館五號
アグファ合名會社
大阪市東區備後町二
野村ビル
アグファ合名會社

無産黨議員に對する國民の期待

——（卷頭言）——

無産黨議員は議會に於てどんな事を爲るであらうか。之に付ては大體二つの種類が想像され得る。一は一層よき場所を得たりとして更に大に所謂階級的立場の宣傳に努むることであり、他は靜に國利民福の此でもの増進を目指して議會政治の向上に協力することである。

無産黨に取て今日は仍ほ大に宣傳を必要とする時代たるは疑ない。彼等の多くが凡ゆる機會を捉えて主義の宣傳に熱中するは或る意味に於て吾人の大に多とする所である。併し乍ら議會は實は這の目的の爲に利用さるるに適當な場處ではない。のみならず斯の如きは國民の迷惑にこそなれ、決してその希望に副ふ所以でもない。

議會では兎に角我々國民の現實の利害が取扱はれるのだ。勝手な熱は外で吹くことにし、此處でだけは與へられた問題に付き徹頭徹尾眞面目に討議して貰ひたいものだ。既成政黨に望みを失つた國民は、必ずや新に加つた無産黨議員の『議會政治への協力』に多大の望みを寄せて居るに違ない。彼等の出現が單に議會を賑かしたに止まり國民の利福の進めらるる端緒が毫も之に由て開けぬとあつては、國民の失望や測り知る可らざるものがあらう。

然らば無産黨議員は如何なる方法に依つて今日の議會政治に協力することが出來るか。私の考には之にも積極と消極との二つの場合があり得ると思ふ。

積極的協力とは勢力の相伯仲する二大政黨の孰れかと一定の條件の下に聯繫することである。政友民政の双方が內心大に之を希望し無産黨に取て亦陰に陽に這般誘惑の襲ひ來るべきは想像に難くないが、併し此方策の無産黨に於て斷じて執る可らざるものなるは論を待たない。假令一時の事でも、既成政黨に信を置き難きは云ふ迄もなく、又現下の政情に於て彼等の孰れにもさう手易く無産政黨の揭ぐる重要政策の唯一つでも之を實行する見込はないから。

併しされはと謂て既成政黨共に與するに足らずとして彼等の抗爭より絕對に超越するは亦決して國民の爲に親切な仕方ではない。國民は既成政黨の孰れをも信頼せぬが、併し其の孰れかが現實に我我の利害を拘束する地位を執るのだ。無産政黨に未だ之に取て代るの實力なき限り、せめて其の牽制監督に依て此でも多く我々の利福の進められんことは實に多數國民の切望であらねばならぬ。大衆の要望を率直に議會に表白して貰ふことも無論肝要なことだが、その爲めの代辯の任務を終つたからとて、跡は既成政黨の暴威を振ふに委すると云ふのでは困る。於是私は無産黨議員に向つてその『議會政治への消極的協力』の重要性に反省せられんことを希望せざるを得ない。

私の所謂消極的協力とは既成政黨の孰れとも何等恒久的關係を結ぶことなく、カスチング・ヴオートを握る地位を巧に利用し、二大政黨をして各々善を爲すに競はしめること是れだ。換言すれば、常に自主獨特の立場を保持し、二大政黨の抗爭に對しては全然是々非々主義を以て一貫することである。斯くする時既成政黨は無産政黨の歡心を買はんが爲め嫌でも應でも善事を競はずには居られなくなる。折角のカスチング・ヴオートも此處まで善用されなくては眞に寶の持ち腐れではないか。切に無産黨議員諸氏の自重を希望する。

中央公論



第三十年第四號
四月號
四百八十三號

重要な問題及び一層重要な問題に就いて

生田長江

『堂々たる大論文』――といふ言葉は、通例如何なる意味に用ひられてゐるか。

それが、序論、本論、結論といふやうに順序を立てゝ、所謂體系的に、論理的に、しかも實際の必要以上にさへ煩瑣に長たらしく書きのばされたものを意味するならば、老子だとか、禪家の語錄だとか、エマスンやニイチェの述作だとかいふ風なものは、『堂々たる大論文』と全然別種の物である。

私とても所謂『堂々たる大論文』を書いて見たくなることがないではない。しかし、當分のところ書きたくない。と云ふよりも、寧ろ書けさうにもない。

今後の少くとも二三年を、事によつたら十年以上を、『佛陀傳』の創作に沒頭しようとしてゐる私は、折々の所感や思索を斷片的に書きしるして活字にすることは出來ても、それらのものを所謂『堂々たる大論文』にまで練り上げて見るだけの餘裕を、時間の上にも、心持の上にも見出し得ないのである。

しかし、私のこれから折々書くかも知れない斷片的な述作は、つれづれなるままに書かれる『隨筆』ではない。結果はいかほど無用に終らうとも、とにかく何等か自他を利益する爲めに、懸命に緊張した態度の下にかかれてゐるのだと思つていただきたい。

隨筆家はディレツタントである。そして私はディレツタントと全然別のものである。

代議士の選擧騷ぎに際して、政友會にも民政黨にも屬しない候補者等を、旗幟不鮮明だと云つて、政友派も民政派も攻撃してゐた。これは馬鹿々々しすぎて可笑しくもない。

處が、マルクス主義者もしくはボルシエギキと無政府主義者との鬪爭に於て、二の何れにもくみしないでゐて社會問題を論ずる者があれば、右の二黨派から旗幟が不鮮明だと云ふので攻撃される。

これこそは十分笑ふに堪へたる馬鹿々々しさではないか。

アナアキストと云はるゝほどのアナアキスト悉くが、少くとも、一切の權力支配を否認するといふ點に於ては共通の主張を有つてゐる。

ボルシエヴヰキも所詮、一切の權力支配を撤廢した所謂無政府的社會を實現する手段として、無産階級もしくは共産黨の一時的獨裁を是認するといふに歸着する。

處で、この所謂權力支配なるものは、人類の社會に於て抑も何時からはじまつたのであるか。アダムとイヴとが樂園を逐はれない以前の事は暫く措き、我々の現實的な認識の溯り得る限りに於て、そもそも何時の世に權力の支配しない人類社會といふものがあり得たか。

限りなく遠い過去から人類社會に伴つてゐたらしい權力支配が、千九百何十年か、乃至それより何百年かの後に、奇麗にこの地上から跡を絶つてしまふことが、そもそも可能であるといふのか。

そして、これが『科學的な』社會主義、もしくは科學的な社會觀であるといふのか。

曾つて或る者は、獅子の百獸を支配する如くして支配した。又或る者は、妖術者の愚民を支配する如くして支配した。更に又或る者は、これらの支配者を兼ねたるものとして支配した。

我々の現前の社會では、主として財力に土台を置いた、組織的な、科學的な武力の所有者が支配者となつてゐる。

支配するところの權力は種々さまざまである。歷史的に見れば變遷推移があるとも云へる。進化論者にいはせれば、權力その物が進化して來てゐるだらう。

だが、何等かの意味に於て權力を有する者が、支配者となつてゐなかつたやうな社會は曾つてない。

支配するところの權力の性質が、今後もこれまでと同じく變遷推移し、乃至進化し得るものとしたならば、財力に土台を置いた、組織的な、科學的な武力といふやうな現前の社會的支配力が、いつまでも我々人類の間に支配力として存続すべしとは想像しがたい。

又、人類生活の現在が下り阪へ來てゐるのでなくて、むしろまだ〳〵上り阪にあるのだとしたならば――私自身はこの點に於て、あまり樂觀主義者ではなくなつてゐるのだが――現在の支配的權力を、どれだけかより立派な、よりリファインされた權力に置きかへるとか、改善するとか云ふ意味での、大きな變革なりリヴォリューションなりを期待したり企圖したりするといふのは、必ずしも不可能な事ではないかも知れない。

例へば、小作料や、地代や、家賃や、銀行からの利子や、會社からの配當で、全然不勞所得で生活してゐる人々の財力が、私達を支配する權力となつてゐる社會に比べると、かなり狹義の生産事業に於てでも、經營の頭腦や、科學的知識や、技術的熟練をもつた人達が資本の所有者以上の權力者であり得るやうな社會は、たしかに一段と住心地のよい社會と云はれるだらうし、また、さうした新しい權力支配へ推移して行くやうにと努力することは、決してつまらない事ではない。

だが、さうした新しい權力の支配する社會の來るか來ない內に、更に望ましい權力支配への要求は起つて來るだらう。そして私達の現在思考し得る限りに於て、最も望ましい權力支配は、基督や、佛陀や、ソクラテスや、孔子などの如き人間が權力者になつて、人類社會を支配してくれることとである。

しかし、讀者諸君は早合點をしてはいけない――私はさう云ふ結構至極な社會の近々に到來するものだと期待してゐるのでは毛頭ない。それどころか、私はさうしたユトピアの出現する前に、人類は多分滅亡してしまふだらうとさへ思つてゐる。

私は十字架につけられて殺された大工の子を『神を見る如くして見』、猪の乾肉に中毒して沙羅樹の間にノタレ死をした乞食僧ゴォタマを如來佛陀として歸依することを辭しないほどに、甚だ古風な理想主義者ではあるけれども、一切の權力支配のない無政府的社會が、近々に出現し得るなぞと考へる人達ほど、それほど非科學的なユウトオピアンではない

のである。

私は一切の無政府主義的空想を斥ける。そしてただ、少しでもより善き權力支配を待ち望んでゐるだけだ。

しかも、より善き權力支配を來す爲めの努力が流血革命であることを私は好まない。

佛蘭西の革命や露西亞のボリシエギキ革命の如きを是認するのは、良人の爲めに身賣りをするお輕の貞操觀である。鼠小僧の博愛論である。

私は流血革命を憎惡し、流血革命を餘儀なくさせるところの、挑發するところの反理性と反人道とを、それ以上にさへ憎惡する。そして、單にそれだけである。

私は自分の身賣りをしてまでも『貞女』にならうとはしない。私は泥棒をしてまでも施しをする氣にはなれない。

一口に權力とか支配とか云つても、その中に限りもなく種々さまざまなる權力や支配のあり得ることを考へ落し、その爲めに大切な處で私達と袂を分たなければならなくなるのは、單に無政府的社會を夢想する人達ばかりではない。

支配への、權力への意志を肯定して、その上に超人主義を築き上げたフリイドリッヒ・ニイチェの如きも、權力とか支配とかいふ概念の前に陶醉してしまつて、その實質にふくまるものの具體的認識を閉却してゐた一人である。

彼はチェエザレやナポレオンの中に權力への意志を見ながらも、救主にならうとしたイエスの中に、人天の導師、如來、佛陀にならうとしたゴオタマの中に、何故同じく權力への意志を見ることをしなかつたか。

『權力への意志』を肯定するのも善いが、それに、限りなく醜惡なものから限りなく崇高なるものへの、無數の段階あることを强調するのは、更に一層有用なことではなかつたか。

あらゆる過剰と缺陷とにもかゝはらず、私のどうしても愛しないでゐられないニィチェが、『權力への意志』を偶像として、その前に跪くに至つたよりさきに、殆んど同じ位に私の愛するショウペンハウエルは、『生命への意志』を否定して、有名な厭世哲學を打ちたてた。

苦惱その物であるところの、『意志及び表象としての世界』からの解脱は、彼によると、二通りの手段によるのである。

その一は、彼の所謂『無意志の認識主觀』を通しての藝術的解脱である。

今一は、慈良、貞潔、清貧等による禁慾的解脱である。

處で、前者は一時的の、從つて間に合せの解脱手段であり、後者は永續的の、從つて本當の解脱手段であるとショペンハウエルは言ふ。

しかしカント流の無關心と異語にして同義であるところの所謂無意志を、私達自身の藝術的體驗に從つて、はじめに無我と訂正し、次ぎに小我に對する大我と訂正し、そしてこの大我が結局彼の所謂禁慾的修行のめざすところの境地と別種の物でないことを明らかにするならば、藝術的解脱が一時的で、禁慾的解脱が永續的であるなぞと差別することは出來なくなるであらう。

一時的といへば、禁慾的解脱も一時的であり得る。永續的といへば、藝術的解脱も永續的であり得る。

加之、藝術が藝術として完全なものに近づけば近づくほど、禁欲的な何物かを愈々必要と感じて來るに違ひない。

又、禁欲が禁慾として申分のないものになつて行けば行くほど、藝術的な何物かを具へて來るに違ひない。

解脱の入口に藝術門と禁慾門（又は克己門、乃至道德門）との二つを分けるのはいい。

この二つの門より入る者が、深く進むに從つて、互に相近づくといふことを理解しないのは、承認しないのは、本當に藝

術を體驗してゐない爲めか、本當に道德を體驗してゐない爲めか、乃至藝術と道德とのいづれをも本當に生活してゐない爲めかである。

此の場合手短かにいふと、シヨオペンハウエルの如きは、禁欲的、克己的、道德的修行を、殆んど完全にお留守にしてゐた一人のやうに思はれる。

自分自身では基督教的な、餘りにも基督教的な道德的生活を營みつつも、あれほどまでも反基督を高唱した、あの病的に敏感な僞惡者のニイチェと——禁慾主義の哲學をあれほどにまでふり廻しながら、少しも禁慾的に生活しなかつたらしい、あの驚くべき氣のささない僞善者のシヨオペンハウエルと。この二人の對照ほど興味のあるものはまれだらう。

解脫または解脫の結果は佛陀の教に謂ふところのニッバアナである。

ニッバアナの境地は、さまざまな否定的な言葉で以て說明されるのを常とする。それは其體驗のない者、乏しい者に對して概念的說明を試みる場合、さうでもするより外に仕方がないからである。

醉つたことのない者に醉を說明する爲めに、それは素面で覺めてゐるのでもなく、單に眠くなつてゐるのでもなく、眠つてゐるのでもなく、眠から覺めかけてゐるのでもなく、眠の中に夢を見てゐるのでもなく——云々と、總じて否定的な表現を用ひることを餘儀なくされるやうなものである。

從來歐羅巴の大多數の學者等が、ニッバアナの概して否定的に表現されてゐるのを見て、その本質をも單に否定的消極的なものであるかの如く見てしまつたのは笑止である。

基督教に謂ふところの限りなき命も、永遠の生命も、これを時間的に非常に長く生きることの意味にすぎないと取つたら、いかに滑稽なものとなるだらう。

永遠の生命といふのも、畢竟は一の比喩的象徴的表現にほかならないではないか。

言葉は解脱でも、ニッバアナでも、永遠の生命でも、そのほかの何でもよい。兎に角これらの清淨にして神々しい生命の最高頂へ到達する爲めの手段は、大體に於て二に分れると、私も（ショオペンハウエルと同じく）考へてゐる。

ニッバアナへ、永遠の生命への道たることを意識しながら、克己復禮の努力をしてゆくのは道德門である。

少くとも享樂の刹那々々に於ては、これが如何なる目的のためであるかを意識することなくして、しかも邪なき詩に親み、樂に遊ぶ間に、自らにしてニッバアナへの、永遠の生命への天路を歷程する如きもの、これが藝術門である。

所謂藝術はそれ自體を目的にしてゐるのではない。所謂道德もそれ自體を目的にしてゐるのではない。

藝術の最善なるものは既に藝術以上のものであり、道德の最善なるものも亦、既に道德以上のものである。

藝術以上の藝術、道德以上の道德――これを私達は何と呼ぶべきであるか。

この場合、『宗教』といふ高貴な言葉が、餘りにも無殘に俗化され、冒瀆され、凌辱され、殆んどなぶり殺しにされてゐるのを見て、長太息を禁じ得ない者があるだらうか。

だが、しかたがない。この死にかかつてゐる言葉を今一度介抱して、扶け起して、役立つ限りを私達の爲めに役立つて貰ふこととしよう。

宗教――その本來の、最も正しい意味に於ての宗教から、緣遠くなればなるほど、藝術は道德からも愈々遠ざかり、藝術としても愈々低級なものになる。そして愈々單なる娯樂へ近づいて行く。

同じく宗教から、緣遠くなればなるほど、道德は藝術からも愈々遠ざかり、道德としても愈々愚劣なものになる。そして愈々單なる苦行、もしくは苦行の耽溺的享樂に近づいて行く、

キニイク派ストア派などによつて代表される克己主義と、キレネ派エピクロス派などによつて代表される享樂主義とを對比して見れば、前者は私の所謂道術門を修行の中心にして居り、後者は藝術門に修行の眼目を置いて居るとも云へるであらう。

しかし乍ら、克己主義の最高理想も合自然で合宇宙で、外部の轉變からも内面の煩悩からも動かされない、自由にして平靜なるアパテイアの安樂境をめざしてゐる限り、又享樂主義の最後に求むるところも、放恣淫縱の生活情態ではなくして、寧ろシャフツベリの所謂『詩人の直觀にも比すべき天才的直觀によつてのみ捕捉し得らるる』中庸と調和とに土台を置いた、過不足の苦みなく擾亂の恐れなき、アタラクシアの閑寂な生活情態である限り、克己主義と享樂主義との、歸着するところはつひに同一不二のものでなければならぬ。

イエスもゴオタマも不放逸と克己とは說いてゐるけれども、單なる苦行や、苦行の爲めの苦行を聊かもすすめてゐない。

ゴオタマにいたつては、その初轉法輪に當つて何よりも先づ苦行の成道に益なきことを喝破したのみならず、その後もしばしば其事を力說強調してゐる。

彼が世俗の樂みに耽るものであるかの如き誤解を被つたのも其中道觀の爲めである。提婆自立の如き悲むべき事件の持ちあがつたのも、ゴオタマの中道觀と提婆等の苦行主義と相容れがたきもののあつたが爲めである。

所謂苦行か、でなければ其正反對の樂行か、この二の中のいづれかには從ひ易く、ゴオタマの教ゆる中道には寧ろ從ひ難かつたらしい不幸な提婆達多は、特に印度人の大多數を代表して居り、ゴオタマ自身は特に印度人の中での驚くべき少

數の例外者に屬してゐるらしく思はれる。

苦行は屢々變態的な、病的な享樂となる。自己殘虐の耽樂である。

印度、ビルマ、シアム等の地方に於て今尙は見らるゝところの多數の苦行者が、何等かの程度に自己殘虐を耽樂してゐるのだと見ないのは、生きた心理學の初步の初步をさへわきまへない人達である。

苦樂二邊のいづれかへ逸してしまひ易く、釋尊の中道修行に最も不適當な印度人達が、最も早くから佛陀の敎を誤解し、もしくは最もたやすく放棄してしまつたのに無理もない。

しかし、さうした事情の故にこそ、佛陀の敎は最も印度人に必要であつたと言へるかも知れない。

愈々入滅の間際にも、釋尊は反復不放逸を戒め乍ら、一方では、『阿難よ、我が滅後に於て僧伽は小々學處（小戒の義）を捨つるも可なり』云々（長阿含第四遊行經）と注意してゐられる。異つた土地、異つた時代に於て、戒律が中道をはなれて苦行を强ひるものとなり、戒道に益しなくなることを思はれたからであらう。

中道觀が釋尊によつてのみ說かれたのではないことは、聖婆伽梵歌第六自我品に、『されどアルジュナよ、瑜伽（心統一）は、過度に食する者はこれを得ず、しかも極度に禁食する者も亦これを得ず。過度の眠に耽る者も、また常に目さむる者も、ともにこれを得ず』云々とあるのを見ても想見することが出來る。

しかし乍ら、敎說の上でも實行の上でも、釋尊ほどあざやかに、適切に、しかも力を入れて中道的修行を示してくれた聖者をほかに見るべくもない。

しかるに大乘各種の經論等に於て、所謂有無の二邊を越えたる中見に關して、あれほど夥しい敎說や見解が持ち出されてゐるに係はらず、その中見に脊中合せをなすところの中道に關して、諸家の意見をきくことが餘りにも少いやうに見え

るのはどうしたものであらうか。

大乘と云へば、法華經や華嚴經などが、爾餘の諸經は悉く皆方便の教說たるに止まり、眞實の法門はただ此處にのみ開かれてゐると云ふやうに自己宣傳をやつてゐるのを、眞面目に物を考へる少數の人々は、どう解釋してゐられるのであらうか。

既に言語道斷の境地である以上は、一切の經文に於て未顯眞實ではないだらうか。また苟くも、方便の中に眞實があり得るならば、一切の經文が方便であり、これこそは眞實門と云ふのさへ方便であつても異むに足りないではないか。

沙門ゴオタマは曾つて同じ修行者仲間であつたところの五比丘と、再び鹿野園に出會つた時、彼等から『友よ』と呼びかけたのを斥けて、彼が既に無上正覺者であることを告げ、如來佛陀の名を以て呼ばるべきことを言ひきかせた。

ゴオタマが如來であり、佛陀であるといふのは眞實であるか、方便であるか。方便であつてしかも眞實であるか。方便の中の眞實であるか。

謙讓の德を聊かも解じたらしく見えないゴオタマが自らを如來佛陀と稱し、大工の子供なるイエスが『我を見し者は父を見しなり』と憚らず公言してゐる――少くとも一應は不可思議至極に思はれるあの事實に關して、私達に多少なり納得の出來るやうな說明をしてくれた人があるであらうか。不幸にして、私はまださう云ふ深切な人に一度も出會はない。

それ故、私はただ私だけの間に合せの、次ぎのやうな解釋で以て當分を堪へ忍んでゆくよりほかはないのである――

私達自分自身の十分に偉くないことを知りぬいてゐる人間でも、年のゆかない自分の子供たちを教へ導かうとする場合

には、『お父さんの言ふ通りになさい。する通りになさい。さうすれば間違ひはないから』と言ふ。

私の考へは間違つてゐるかも知れないし、私のすることは善くないかも知れないけれど、とにかく私の言ふ通り、する通りにせよ――などと、年の行かない子供達に對して言ひ聞かす人は恐らくないであらう。

その子供達の智慧と私達の智慧との距りが、私達の智慧と佛陀や基督の智慧との間にあつたとしたらどうだらう。そして私達が子供達を愛する如く、佛陀や基督が私達を愛して居り、私達が子供達をあやぶむ如く、佛陀や基督が私達をあやぶんでくれたとしたらどうだらう。

一切の人類、一切の有情者に對する大聖の大慈悲心が、どうして『我は無上正覺者なり』と言ひ、『我を見し者は父を見しなり』と言ふに、逡巡躊躇してゐられようぞ。

しかも、かくの如きもの尚ほ且つ方便であるとしたら、何といふ有りがたい方便であらう。かくの如き大なる方便をほかにして、そもそも何處に眞實といふものがあらう。あり得るだらう。

このつまらない斷片的な感想の記述からペンを拭はうとして、さて氣がついて見ると、私は政友會や民政黨の話や、ボルシエギキやアナアキストの話なぞから書き出してゐたのである。

これでは、最初のうち多少の興味を有ちながら讀んでくれても、基督だとか釋迦だとか云ふやうな、隨分ふるくさい話にまではいり込んでしまつたので、すつかり退屈してしまつた諸君があるかも知れない。そこで、それらの諸君にさて一言の御挨拶を申上げるつもりで、最近の拙詩『革命と復古主義』といふのを書き添へて置くことにする。

『我はかつてかくの如きよき人を見しことなし、

いかに彼女のめづらかに新しきかな』
――初めて二の愛人を見出でたる人間の
その一の心は斯く叫べども、聽け、更に今一の心に。

『否、こは彼女を見たる二度目なり。
この世にてか此世ならぬ世にてか知らず、
別れ來し日の餘りにも遥けく、又
餘りにも近く覺ゆることの不思議さよ』

一の郷愁にして、しかも新しき島への
新しき一の遠征なる戀愛と革命と、
この二の物の軌道はつねに螺線を描く。
螺線はもと出でし方を慕ひ求めつゝ、
未だ知られざる處へと走り行くもの、
げに回歸的前進なり、飛躍的の回轉なり。
嗚呼、汝等革命の愛人なる若者よ、學び知れ、
復古主義的の憧憬と狂熱とに出發せざる
如何なる革命も曾つてあらざりしことを。

（一九二八年三月）

大學卒業生諸君に寄する語

——高等教育に關する謬念と知識階級に關する迷想——

永井亨

一

今から七年前の頃と記憶するが、イギリスの或る新聞記者が我國に來遊したとき、いかなる世相を見て痛感したものか、日本の將來に起る深刻な失業問題は勞働階級といはんよりは寧ろ知識階級のそれではないかと私に語つたことがある。果してその豫言が的中したものか、最近數年間における我國の世相を見ると、年毎に知識階級の失業が深刻味を帶びてきて、先づそれが大學專門學校卒業生の就職難となつて現はれ、官公吏員の行政整理ともなれば一般事務員の淘汰解雇ともなり、高等教育を受けた人々の地位生活が甚しく脅威を蒙つて、帝都の眞中には知識階級の勞力團が横行したり又自由勞働者の群には智的勞働者が落伍したりしてゐる。しかるに皮肉な世相は、それとは反對の事象に伴はれて、近年教育の進歩、知識の普及、理智の啓發驚くばかりであるためか、小學から中學へ、中學から專門學校又大學へと上級學校志望者の入學難がそこに現はれ、官私專門學校の大學昇格ともなれば高等教育機關の擴張增設ともなり、しかも是等學校へ入學せんとの學生青年の期待が全く裏切られて自暴自棄の結果は不良の徒を群出し又煩悶苦惱の結果は厭世自殺者をも發生せしめつゝある。一見いかにも痛嘆すべき世相であり又いかにも矛盾した事象である。一方就職難が甚しくなればなるほど他方入學難が著しくなり、一方卒業生の失業が著しくなればなるほど他方學生の落伍者が甚しくなる。一見いかにも皮肉な世相であり又いかにも憂慮すべき事象である。一體何れにその原因が横たはるか又何人にその責任が歸するのか。それは教育の方針か社會の組織か、教へる者か學ぶ者か、雇ふ

者か使はれる者か。

二

世界戰後の幻影の如き財界好況期はやがてその反動として不況恐慌期を産んだ。されば戰爭の禍害や軍國の疲弊の然らしむるところか、或は産業の周期的變動の然らしむるところか、何れにするも資本主義の成熟期又は爛熟期の産物であらう。恰も戰後の我國は産業革命の過程を終へて資本主義の成熟期又は爛熟期に入りつゝあると一般に說かれてゐる。果して然るや否やは暫く措き、世界大戰が我國にも産んだ投機、思惑、成金者の沒落からはじまつて最近國民の眼前に暴露された銀行の取付破綻に至るまで、その間の世相を一瞥して見よ。宛ら資本階級の失神、有産階級の失産、勞働階級の失業、無産階級の失食相次いで踵を接するもの皆これ失ふものばかり、ただその間同じ一事象たるを失はないものは知識階級の失職であつた。かくて戰後の失業問題は時代の社會問題となつてはじめて我が國民の面前に展開されたのであるが、それは世界大戰の結果として發生したものゝ如く見え、加ふるに當時恰も軍備縮少會議の結果として又關東大震火災の結果として多數の失業者が簇生したゝめに、國民の目は眩んで問題の所在さへ明かでなかつた。もちろん知識階級の失職、學校卒業生の就職難が勞働無産階級の失業に例外を示すものとは何人の目にも映じなかつた。恰も又當時排日移民法案が米國上院を通過してその事が日本の國論を沸騰させたがために、平和條約この方提げ來つた人種平等の標語が民族自存又は自尊——それは民族自決ではない——の感情、精神乃至確信に結びついて、奇しくも海外移民——それは民族發展策——こそが失業問題その他の社會問題——戰後始めて勃興した勞働問題や農村問題——を解決すべき唯一若くは重要な方策であるかの如く唱へられた。かくて移民問題が失業問題その他の社會問題と一體の如く結ばれたのであるが、これより先き早くも明治の後半食糧輸入國となつて外國米の輸入を餘儀なくされた我國の食糧自給策——それは人口增殖と相俟つて富國强兵策を支へきたもの——が自らの傳統的地盤を搖がされ、そこに發生したる食糧問題が最近數年間の異常な人口增加の現象と相俟つて謂ゆる人口食糧問題を發生させ、謂はゞ食糧不足に基づく過剩人口の豫斷の上に人口問題が形作られたのである。かかる食糧問題即ち人口問題を解決せんためにも移民問題が一體の如く結ばれて、同時にそれは上述の如く失業問題即ち人口問題を解決せんためのものでもあつた。さうしてこの失業問題即ち人口問題といふのは戰後の恐慌時に入つてから發生したる失業

問題が最近數年間における人口激增の現象と相俟つて發生させた謂はゞ失業人口問題であり、資本需要の不足に基づく過剩人口の獨斷の上に形作られた人口問題である。果して現代日本の人口問題が食糧問題であるか失業問題であるか、――或は失食問題であるか職業問題であるかといつても差支ない――何れにせよ國民の目は眩んでその何れに人口問題があるかさへ分らずにゐる。この時謂ゆる知識階級の失職――智的勞働者の失業――殊には學校卒業生の就職難が發生しつゝあるのだから、動もすればそれが失業問題の如く又人口問題の如く――時としては食糧問題の如く又移民問題の如く――國民の目に映ずるといふことに何んの異とするところがあらう

そこで我國刻下の社會問題といへばそれは甚しく錯綜し混淆してゐる。一方賃銀勞働者乃至工業勞働者――或は都會における自由勞働者――を中心とする勞働問題となつて現はれ、他方農村における小作人農民を中心とする農村問題、小作問題乃至農民問題となつて現はれてゐる。その前者にあつては失業問題が當然それと一體を成して發生し、その後者にあつては食糧問題がそれと極めて密接の關係を結んで發生してゐる。しかも都市、工場、鑛山等に業を失へる勞働者は地方農村に歸鄉し歸農しようとしてもその收容するところとならず、又地方農村の生活に窮せる農民小作人は都市、工場、鑛山等に職を求めようとしてもその吸收するところとならない。しかも又都市地方を通じて人口は激增し、殊には集約的耕作が極度に行はれてゐる農村に人口の增殖が著しいのであるから、そこで人口過剩の現象又は傾向が都會における失業及び貧困狀態を通じ又農村における貧しい一般生活狀態を通じて察知せられ、そこに今日の人口問題が發生しつゝあるのである。更に移民問題――その實人種問題乃至民族問題――がさも人口問題そのものであるかの如く出現し、更に又食糧問題――その實農村問題乃至農民問題にあらざれば國防問題――がさも人口問題そのものであるかの如く出現してゐる。それは恰も失業問題――その實勞働問題乃至都市問題――がさも人口問題そのものであるかの如く出現してゐるのと對應してゐる。かくて一方人口增加と食糧不足との間に過剩人口が生じ又人口（食糧）問題が存するかの如く考へられ、他方資本需要の減少と勞働供給の增加との間に過剩人口が生じ又人口（失業）問題が存するかの如く考へられてゐる。實はその何れもが過剩人口でなく又人口問題でない。今日普通に過剩人口といひ人口問題といふのは一國の全體社會又は一體としての社會の生産力――社會が生活資料を獲得する力――がその國の民族又は國民全體の人口數を從來の分配比率の下には又

在來の生活標準の下には支持し得られないところに發生する。かやうに社會の生產力と人口との對比に社會的、相對的過剩人口が發生し一般的、抽象的人口法則が存在すると見るのが社會科學的人口法則である。食糧と人口との對比に自然的、絕對的過剩人口が發生し、一般的、抽象的人口法則が存在すると見たのが自然法的人口法則——マルサス人口法則——である。資本と勞働(人口)との對比に社會的、相對的過剩人口(失業人口)が發生し、特殊的、具體的人口法則(失業法則)が存在すると見たのが社會主義的人口法則——マルクス人口法則——である。果して我國の今日に發生したる學校卒業生の就職難はその何れの法則の適用を受くべき現象であるか。

三

或る學者(河上博士「人口問題批判」)はいふ「近年學校卒業生の大多數のものが甚しく就職に困るやうになつたのもかゝる根本的事實の一つの現はれである、一定の能力を具へた學校卒業生も仕事がないために遊んでゐなければならない、かくて彼等に勞働力發揮の機會が封鎖されるのである、彼等の生產力が抑壓されるのである、語を寄す諸君、かゝる事態は今後益々甚しくなるであらうが、諸君はそれを希望するか? 諸君はそれが永續すると信ずるか?」と。右の言句中に「かゝる根本的事實」とあるのは「今や資本主義はその後期の階段に入り、すでに生產力の發展形態からその桎梏に轉化した」ために又「今やその資本家が增加し來れる人口を收容し得なくなつた」ために、或は又「資本家の雇傭し得る人員の增加率が人口の自然增加率に及ばなくなつた」ために起れる事實をいひ、更に又それは「働く能力を有ち働く意志を有つ人間が職業を得ざるがために——生產手段を獨占せる資本家が雇つてくれないために——强制的に無爲に暮さねばならなくされてゐる」事實をいふ。

かく學校卒業生の就職難といふ事態を解釋することはマルクスの謂ゆる相對的過剩人口の一つの現はれであるとする見解である。さうしてそれは資本家的生產の高度の發展期又は資本主義の後期乃至末期の必然の產物であるとするそれである。詳しくいへば「資本家的生產の進行」に伴ふ「勞働の生產力の發展と資本構成の高級化との關係」から生ずる過剩人口の一つの現はれであり又「行き詰れる資本主義の一產物」「資本主義末期の疾病から生ずるうめき」「資本主義の機構が已に死に近づける一つの徵候」であるとする見解である。マルクスの謂ゆる相對的過剩人口なるものがその資本對勞働の過剩即ち失業を人的基礎の方面から見たに外ならないで、人口問題の見地よりする過

剩人口でないことは前述の如くである。しかもかゝる過剩人口即ち失業人口が必ずしも資本主義の後期又は末期の産物たるに限らず．ましてや人口問題の見地よりする過剩人口が必ずしも資本主義の產物でないことは後に述ぶる如く史實の證するところである。然るにも拘らず、我國近時の學校卒業生の就職難を過剩人口の一つの現はれであるといひ、資本主義必然の產物であるといひ、その後期又は末期の必至の徵候であるといふは少くとも大なる疑問であらうのに、今や世に出でんとして職を求め得ず煩悶せる青年に向つて何等の疑問をも提供せずして何ものか暗示を與へ、宛ら信仰に導かんとするが如き態度を示すに至つては、妄評ながらあまりに非科學的であり非實證的であるといはざるを得ない。

四

學校卒業生の就職難を中心とする知識階級の失職をいかなる事態と見るべきか、その眞相を明かにせんためには過剩人口と失業との關係を明かにする必要がある。過剩人口が失業に伴はれ易いことは恰も失業が貧窮に伴はれ易い如くであるが、しかし過剩人口必ずしも失業者でないことは恰も失業者必ずしも貧窮者でない如くである。それ故に過剩人口は失業人口でなく、資本家の收容し得ぬ勞働人口でなく、資本家の雇つてくれぬ失業勞働人口でなく、それは恰も失業人口が貧民窮民人口でない如くである。過剩人口といふのは前述の如く社會の生產力が生活標準の低下又は生活程度の劣化を見ずしては人口を支へ得ず、かくて人口が一般生活標準の低下又は平均生活程度の劣化と見るべき狀態に置かれた場合である。失業といふのは或る人々が勞働の能力と勞働の意思とを有しながら相當の條件の下に相當の職業を見出し得ない狀態に置かれた場合である。よしや人口過剩が屢々失業の狀態を呈し貧窮の狀態に陷らしむるものにせよ、又失業が屢々人口過剩の狀態を呈し貧窮の狀態に陷らしむるものにせよ、おのづから皆これ別異の觀念である。マルクスは失業論を人口論として扱ひ、マルサスは貧窮論を人口論として扱つた。人口論と失業論とを區別し又失業論と貧窮論とを區別するやうになつたのはその後の事である。殊にはマルクスは賃銀勞働者即ち無產者階級を民族的階級とは見ないで、たゞ將來政治的支配權を奪取することによつて自らを民族として構成する階級とならねばならぬと考へたほど、それほど勞働無產階級を國內の他の階級から又その國の民族から引き離してゐたのであるから、そこで今日の如く一國の社會又は一團の民族について一の人口論を試みるまでに至らず、資本對勞働の經濟的

關係にのみ視野を狭めてゐたのである。これは恰もマルサスが貧しい人々を富んだ人々と共に社會的、文化的民族を構成するものとは見ないで、食糧對人口の自然的關係にのみ眼界を限つてゐたのと對應してゐる。

然らばマルクスの謂ゆる相對的過剩人口即ち失業人口がいかなる場合に發生するかといへば、それは必ずしも國々によつて一律でなく、資本家的生産の行はれ又は資本主義の支配する社會にあつてもその範圍や程度が異なるに從つて事情が違ふ。例へば資本主義の前期又は生長期、殊には産業革命時の過渡期において産業組織の變革が徹底的に行はれるときにはそれに伴ふ一時的の急激な失業が屢々行はれることは當時のイギリスの如くである。例へば又産業革命時において農工業兩つながらの併進を期しその完成後に資本主義の急速なる異常の發展を呈しつつあるときには失業の生ぜざること帝政時代におけるドイツの如くである。例へば又資本主義の後期又は末期、その成熟期又は爛熟期には産業の周期的變動に基づく比較的長期に亘る深刻な失業が發生することは十九世紀末葉以來、殊には世界大戰後におけるイギリスの如くである。さて我國は明治維新後封建主義から資本主義へと移る過渡期に失業状態を呈したと察せられる外、資本主義の生長期乃至産業革命時における不徹底なる産業組織の變革——就中農業組織の零細維持——が資本主義の異常なる發展を見るまでに至らないで——同時に農村の發展を見るまでに至らないで——そのため失業の災厄を逸れ得たかの觀があり、世界大戰後に至れば産業革命の完成に伴ひ資本主義の成熟期又は爛熟期に入らんとして早くもそれが早熟し、既にその機能を發揮し得ない状態に置かれてゐるから、長期に亘る緩慢な失業が今や發生しつゝあるのである。

さて然らば上述の如き失業人口ではなくして過剩人口がいかなる場合に發生するかといへば、イギリスの如く産業革命時及び其の完成後に商工業の驚くばかりの發展と異常の發達とを見た國にあつては農村に人口過剩の現象又は傾向を呈せずして一部都市に貧窮状態を生じ又工業界に屢々失業状態を生じ、一時ながら人口過剩の現象又は傾向が産業革命時において著しかつたのだが、世界戰後に及べば長期に亘る失業と相俟つて動もすれば戰前の生活標準の下に人口が支持されがたくなつてゐる。かやうな工業輸出國にあつては人口過剩と失業とが大體において表裏合體してゐる。戰前のドイツの如く農工業が併進しつゝ發展したときは人口過剩の現象が失業と共に發生しなかつたけれども、戰後に至れば間歇的の失業こそ發生すれ常時に失業がないにも拘らず生活標準を低下し、劣化しここに過剩人口が發生して

ある。フランスの如く人口過少の國で、しかも戰後の人口が戰前のそれよりも尚その絶對數において減少したところでさへ小規模の短期の失業状態が戰後に發生した。さて我國の如く農村に人口稠密なる國にあつては、産業革命時においても又その完成後の今日においても、常に人口過剩の傾向が農村に著しく、その農村人口が都市の膨脹、商工業の發展につれてそこに吸收さるれば調節され、之に反して都市の貧窮者が增し工業界に失業が生ずれば、農村の生活程度が低下し又農業界に過剩人口が發生する傾向を呈する。戰後の不況期に入つてからその後者の場合がつゞいてゐるのであるが、しかし都市又は工業界には失業人口と共に過剩人口が存するとはいひ得ても、農村又は農業界には過剩人口と共に失業人口が存するとはいひ得ない。しかも世人の知る如く我國の商工業組織には資本主義が行はれ、農業組織には封建主義が行はれ、しかも又資本主義と封建主義の何れもが農商工業何れもの組織に並び行はれてゐる。それは今日の我國が半農半工の國であり封建制から資本制へと移つてその何れもがまた交錯し混淆してゐることを物語つてゐる。

以上の如くに論ずれば謂ゆる失業人口と過剩人口との別異のものであることが明かになつたであらう。先づ周期的の長期に亘る深刻な失業こそは資本主義の後期乃至末期又は爛熟期の産物であることイギリスにおける如くであるが、それとてアメリカの如き資本主義の末期ならずとも爛熟せる國にあつてさへ大戰後一時大規模の失業状態が出現したに止まつてゐる。次には一時的の急激な失業が資本主義の前期又は生長期の産物であることイギリスにおいて最も顯著であつたが、それとて間歇的の短期な急激な失業が資本主義の爛熟せる戰後のドイツに發生してゐる。同じ戰後ではあるが長期に亘る緩漫な失業が行はれつゝある我國にあつては資本主義が早熟のまゝ行き詰らうとしてゐるし、同時に又封建主義の傳統が餘勢を保つてゐる。革命後のロシアには共産主義が試みられて産業の國有、勞働の强制、職業の保障が行はれたために失業状態を免れたが半飢餓の人口過剩状態に陷つたことは何人も知るところであらう。今やそのロシアに新經濟政策が採用されてその結果は半飢餓の状態を免れたが失業状態を呈しつゝ人口過剩状態を脱せずにゐる。畢竟みなこれ各國の天然資源と社會組織と國民心理の然らしむるところである。各國の資本主義といはれる經濟組織が失業や過剩人口發生の上にどれだけの役割を演じつゝあるかの一斑が以上で察し得たであらう。試みに問はう、大學卒業生諸君！　今や諸君は就職難に脅して定めし前途を悲觀してゐるであらうが、諸君はその就職難といふ事態を過剩人口の一つの現はれと見るか

？諸君はそれを資本主義末期の産物と考へるか？

五

我國の國土は狹く資源に乏しく、國民は久しく壓せられ理智は啓かれず、社會の傳統は古く因襲は深く民心を囚へてゐる。が、しかし何人も明治維新この方領土は擴張され、耕地は開拓され、地下の埋藏物は採掘されて産業の發展、貿易の振興驚くばかりであり、民權の伸張、教育の普及亦驚くばかりであることを知らないものはなからう。又何人も封建崩壞に續ぐ社會組織制度の驚くばかりの變革と目眩しい變遷を知らないものはなからう。今や我國に資本主義の經濟組織が行はれ、立憲主義の政治組織が行はれ、個人主義の社會組織が行はれてゐることを何人も知つてゐるであらう。今や又我國の資本主義が帝國主義となつて海外に發展し世界に活躍し、早くも軍國主義と結んで領土の擴張と共に膨脹しつゝあることを何人も知つてゐるであらう。今や又我國の立憲主義が官僚主義を脫して議會主義、政黨主義乃至民主々義へとその機能を發揮し普通選擧の制度も亦そこに實施されつゝあることを何人も知つてゐるであらう。今や又我國の個人主義が資本主義と合し立憲主義と結び國家主義の保護の下に社會組織を構成してゐることを何人も知つてゐるであらう。かくて日本は僅か人間一代の間に西洋型の軍事的、産業的列强の一となつて西洋諸大國と同じ帝國主義的資本主義國となり世界的植民帝國となつてゐる。かくて又日本は僅か半世紀の間に歐米型の立憲的、法治的主權國家の一となつて歐米諸國と同じ個人主義的立憲國家となり國家主義的國民國家となつてゐる。

けれどもそれは半面の視察であり一面の考察である。日本の資本主義は當初から自國の軍國主義に支へられ、又早くも歐米の帝國主義に脅かされ、國内にその基礎が確立せざる間に海外に膨脹して、動もすれば自立の途を失はうとしてゐる。又日本の資本主義は終始國家の保護助長の下に置かれ又低廉な自覺なき勞働の上に据ゑられ、利潤を貪り管理を怠り生産の能率を擧げ得ないがために、その內容が充實されず又その機能が發揮されずにゐる。しかもかゝる資本制の經濟組織は一般に農業界に及ばず一部の商工業にも及ばないで、小作制の農業組織の如きは封建的傳統因襲の最も著しいものであらう。農村における自作小作農、都市における小賣商、小企業、小運送の如きはみなこれ資本主義の産物と見るべきものではなからう。我國の資本主義そのものが天然資源に惠まれず、社會傳統に制せられ、恰も資本主義と封建主義とが相結んで互に牽制しあつてゐる。立

憲制の政治組織も亦その舊封建制の傳統と官僚制の因襲とに因はれて最も民主的たるべき政黨組織すらがその民主的ならざる典型的のものである。我國にあつては未だ立憲主義が民主々義とはならないで、封建主義から官僚主義へと地方的色彩が濃く又家族主義から個人主義へと家族的、個人的、特徴が著しい。職業的、機能的色彩も階級的、國體的特徴もない。一般個人制の社會組織はもと資本制の經濟組織と立憲制の政治組織とを中心として構成されたものであるが、封建制乃至家族制の傳統因襲に捉はれてゐるために、封建主義と家族主義とが個人主義を色彩づけ資本主義乃至立憲主義を特徴づけてゐる。たとひ經濟上の資本主義はその實政治上の封建主義の後身とも化身とも見るべくしてその特徴を共有してゐるとはいへ。一見西洋型の個人主義的、資本主義的立憲國家の形態を具へてゐながらその内容を點檢して見ればこれは東洋型の家族主義的封建國家でもある。

何故に上述の如き社會組織が我國の今日に構成されてゐるかといへば、それは明治時代に變革されたる諸般の社會制度が必ずしも徹底したものでなく、しかも當時一たびその制度が定まればいかに國情に適はず時勢に添はずとも爾來今日に至るまで容易にそれを改めようとせず、その間舊來の傳統を襲ふて改革の試みられなかつたものも決して尠くなかつたがために、いつか明治時代の組織制度がその思想精神と共に固定し膠着し鑄型されて今日に及んだからである。維新當初の國是と明治初期の國策とは國家の統一とその富強とを期して列强の間に伍せんことにあつたのだから、そこに國力が集中され今やその目的がおほよそ達せられてゐる。しかし一國の社會を統一し國民の生活を安定し向上し世界の文明國民たらんことには考へ及ぶ暇がなかつたから、そこに國民の自覺が生じ社會の力が協されたことがない。そこで早くも新興國民たる面影が消え失せて、國民各自の反省努力が足らず、生産の能率が擧らず、消費の節約が期せられず、人口は増殖し社會の生産力は増進せず、多産多死の國民であり冗費浪費の多い國民である。一言にしていへば日本の國民は未だ甚だ不生産的である。社會組織も亦甚だ不生産的に構成されてある。しかも天然資源は乏しく生産力はこれによつて局限されてある。しかも又生産額の分配は公正を缺いてゐる。けれどもかゝる日本の社會の現狀を見て直ちに資本主義經濟組織の産物であると考へ、それにのみ責を歸せしむる譯にはゆかぬ。寧ろ日本の資本主義は内にあつてもその地盤が狹くして脆く、爛熟せずして早熟し、機能を發揮し得ずして缺陷を暴露しつゝある。それ故に資本主義の經濟組織ばかりが日本の社

會を支配し左右してゐるのではない。それには國民心理も天然資源も一般社會組織も與つて、國民の努力、資源の開發、組織の改革相俟つのでなければ社會の生産力は發展し得ない。

以上の如く日本の社會を考察すれば謂ゆる知識階級なるものが我國にあつてはいかなる特徴を有するものか又いかなる地位に置かれてあるものかゞ略ぼ推測されたであらう。

六

謂ゆる知識階級とはいかなるものか、それは智的乃至精神勞働者として又財的獨立を缺く從屬的勤務者として勞働無産階級の中に編入されべきものか、それとも勞資有産無産の一階級の中間に位し中堅を占めその所得も亦中等、中流に當つて舊中産階級又は小有産階級の列伍に加へべきものか、それとも又文化的能力の優秀なるものとして名譽や尊敬や威力の伴ふ獨立の職業階級と認むべきものか。その所得の源泉より見れば勞働階級の如くであり、財産の有無より考へれば無産階級の如くであり、所得の大小より察すれば中産階級の如くであり、職業の種類より顧みれば知識階級そのものである。けれども社會階級として見たる謂ゆる知識階級はその社會的區劃において又階級的團結において、その社會的勢力及び地位においてその階級的利益及び意識において甚しく曖昧であり複雜である。果してかゝる知識階級がヨーロッパにあつては嘗ては僧侶、後には官僚であつたや否やはこゝに問ふところでないが、今やその最大多數のものが産業革命の過程の間に勃興したる資本主義の産物であり、又その最大部分のものが賃銀勞働者と同じく從屬的勤務の下に置かれて何等職業上及び生活上に保障を受くるものでないことは、我國の今日にあつても例外を示してゐない。

しかしながら、我國の知識階級といはれる官公吏その他の勤人、使用人、俸給々料生活者は時として自らも精神勞働者と稱する如くであるが、一般にその自ら懷く心理においても又世人がそれに對して懷く心理においても、おのづから他國のそれとは異つてゐる。恐らくたゞ帝政時代のドイツ、オーストリア、ロシアの知識階級に似通つたものがあつたのであらう。我國の知識階級はいはゞ身分階級である。封建時代の武士又は士分階級の後身である。明治維新後に士農工商の身分は廢されたけれども華士族平民の族稱は採用され今も猶ほその慣行はれてゐる。明治初期の知識階級は封建武士の後身たる藩閥士分を中心に形作られ、一般に士分又は士族にあらざれば學問教養がなく、官尊民卑及び職業貴賤の念慮は深く人心を囚へて今も猶ほそれが去らずにゐる。人の知る如く明治政府は薩長藩閥が中心

となつて一部の公家と共に樹立したものであり、土肥藩閥は志を得ずしてその一部が政黨を組織し民權運動を起したものである。一時政黨が全滅して内閣が太政官に代はり、閥族が化して官僚となり、官僚こそは當時の知識階級の中心であつたのであるが、その間專門の學識ある者が缺如して國家の機關を運用することさへ困難であつた。殊には久しく封建治下に依らしむべし知らしむべからずの狀態に置かれた一般國民を啓蒙する必要が切であつたから、早くも教育の普及、學校の勃興となつて國内の人材は官吏に登用され官界に地盤を据ゑた。後には產業の勃興、會社の簇生に伴れて民間實業界に身を投ずる學校卒業生も亦激增した。かゝる官民朝野の知識階級は時代の治者階級と、なり指導者階級となり何よりも經世の器、事務の才が重んぜられ、今日の如く知識技倆や學問藝能が商品となつて需給の法則に從ふといふのではなかつた。ところがその粗製濫造が帝都の法學校を通じて行はれ、官學を通じての法學萬能の官界もそこに形作られた。一般に官私學校卒業生は職業を求むるといふよりは寧ろ身分を獲得せんとしたのであつた。當時の知識階級は職業階級と呼ばんよりは寧ろ身分階級と名づくべきものであつた。その報酬は當時の物價に比して甚だ高く威容を整へ門戶を構へ得ずとも生活に餘裕があつた。しかるところ、日清日露の兩役に伴れて產業革命の過程が進み、一般勞働者の需要と併つて勤人使用人のそれも累增した。教育の普及發達に伴ふ無數の學校卒業生がそれに應じた。時勢は進步し物價は騰貴した。が、知識階級の俸給々料はそれに伴ひ得なかつた。そのため威信品位が保たれなくなつたといはれてきた。今でも所得不相應の生活を營んで置きながら身分相應の地位が保たれないといはれてゐる。或る學者（高田保馬博士「人口と貧乏」）は「食へないと云ふのは一定の體面が保てないと云ふこと……一定度の虛榮が食へないと云ふこと」といつてゐるが、我國の知識階級こそはまさしく體面と虛榮とで生きてゐるものであらう。殊には一たび業を卒へ職に就けば書見を廢し學問を棄てゝ平然としてゐる。學問教育は世に出で職を求め身を立てんがためのものと思はれてゐる。皆これ封建時代の因襲であり明治時代の遺習である。明治前期における謂はゞ智的人口過少の幻影である。知識階級の素質が低まつたといはんよりは寧ろ他の階級の素質が高まつて世人の多く顧みるところとならなくなつてきた。官僚の威力も役人の名譽もその氣力や實力と共に漸次に失はれてきた。會社の重役は資本家の傀儡となり使用人は重役の器械となつた。學問知識はいよいよ商品化されて商品の如く轉々し地位は定まらず生活は安からずなつた。殊には世界戰時及び戰後に

至れば勞働階級の勃興と共に知識階級の勢力頓に衰へ動もすれば勤人使用人の所得は熟練勞働者のそれに及ばなくなつてきた。まことにそれは當然の事である。が、勤人はかく考へない。彼等勞働者は團結を以て脅かしこの賃銀を高からしめてゐるのに、我等勤人はその地位高く責任重くしてかゝる行動に出づる譯にゆかず。しかも體面を重んじ品位を保つ必要上生活の程度高かるべきであるのに却つてその所得が劣つてゐるといふ。皆これ封建時代の傳統であり明治時代の遺風である。戰後の不況期に入れば賃銀勞働者の失業と共に俸給々料生活者のそれも亦當然發生して、しかも一たび業を失へば容易に職を求め得ず、殊には年々累增する學校卒業生、就中政治、法律、經濟等の學問を修めた官私大學卒業生の大部分はその職に就き得なくなつた。かくて謂ゆる知識階級の失業問題が學校卒業生の就職難を中心として起つた。そこで知識階級はいつか純然たる勞働階級の如くなり、勞資の需給關係に基づく過剩人口の如くにもいはれ、資本主義を呪ふ寄語ともなつた。或は嘆れる、資本主義の末期ではなくして知識階級の末路ではないかと。

七

嘗て封建時代の武士階級は一定の知行を受け祿を食んで體面を重んじ虚業を充し得た。もし今日の知識階級がその職業及び生活に何等の故障もないのに徒らに體面を重んじ驕りに虚榮を充さんとするならば、たゞ没落の運命あるのみであらう。大正九年第一回國勢調査の結果によれば、我國の職業人口二千七百〇九萬人（内業主中の無職業者五十八萬人を含む）中業務を主宰經營する者即ち業主が九百五十五萬人（三五・三パーセント）業主の下に事務又は技術に從事する者即ち職員が百五十七萬人（五・八パーセント）業主及び職員の下に單に勞務に從する者即ち勞務者が千五百九十七萬人（五八・九パーセント）であり、その内業主百六十二萬人、職員十七萬人、勞務者八百十七萬人が女である。我國の職業人口中業主が多く勞務者中女の多いことは注目に値する。謂ゆる知識階級の人口は詳かでないが大體職員の人口數によつて推測されよう。かくては、職業人口に對する知識階級の割合が實際よりも少きに失するやうに考へられるが、しかし我國の職業人口（本業者二千六百五十一萬人及び家事使用人七十二萬人）は全人口の四八・五パーセントを占めてフランスを除く他國の何れよりも高位にあるらしく、しかもその精確なる割合が不明であるといはれ、しかも又職業の名はあつても賓生活の低い人々が甚だ多いことを知らねばならぬ。

兎もあれこゝに論ずる主題は大學卒業生であり、或は專門學校卒業生であり、就中文科的乃至法科的高等敎育修了者である。今日最も多く就職難に際會しつゝある謂ゆる知識階級である。明治の前半にあつてはかゝる知識階級の需要が最も切であり又かゝる學校卒業生中に立身出世をした者が甚だ多かつた。爾來學校は卒業後に職業を得せしめん目的の下に競ふて增設擴張され、學生はその父兄と共に卒業後の職業を得ん目的のために爭ふて入學を志望した。殊には官尊民卑の我國である。官立の法學校はもと官吏の養成を目指してその卒業生中官界に成功した者が甚だ多かつたからそこへ入學せんことを競ふたのは勿論であり、私立の法學校も高等文官、司法官或は辯護士試驗の合格者の數を競ふて入學者を迎へたものであつた。後には官私何れの學校卒業生も實業界に職を求める者を增加して各種の會社企業も競ふてそれを迎へた。しかるに漸次に官界も民間も年々增加する卒業生を採用するだけの餘力を失ひ又その必要を認めなくなつた。その時戰後の不況期が到來して知識階級の整理淘汰がはじまつた。もちろん高等敎育を受けた者もその中に加へられた。もはや大學專門學校の卒業生を顧みる餘裕も希望もなくなつた。恐らく將來好況期が到來しても從來の如くにそれを要求しないであらう。かくなつた所以のものは必ずしも資本主義の然らしむるところではない。もし共産主義が行はれてゐるとすれば、例へば革命後のロシアの如く、更に一層かゝる學校卒業生に職業と報酬とを與へないであらう。學校卒業生なるがために體面と虛榮とを與へないであらう。職業的知識階級なるものに多くの地位と名譽とを與へないであらう。それは恰も資本主義が封建主義よりも更に一層さうであつたやうに。幸か不幸か我國の今日には資本主義と封建主義とが交錯し混淆してゐる。知識階級は宛ら優越階級か特權階級かの如くたゞ高等專門の學校を卒へたといふ一事で高尙の職業、高價の報酬が得られるやうに考へてゐる。が、今やその優越の地位が失はれその特權が剝がれつゝある。いな、その職業にさへ就き得ずにゐる。そこに學校卒業生の就職難がある。それは知識階級の失業であり、廣義における失業ではあるが、過剩人口の現はれではない。今日の過剩人口の現象又は傾向は主として賃銀勞働者や農民小作人の無産階級がその職業の有無に拘らず生活を支持し得られないところにある。然らば何故に學校卒業生の就職難が起つたかといふに、それは一方明治時代の敎育方針が今日猶ほその儘踏襲されて、卒業後に國家須要の地位を得せしめんために敎育し又社會的に名譽ある高き職業を求めんために入學し、そのため高等敎育機關を擴張し公私專門學校を昇格し、國家社會が宛

ら多々益々かゝる人材を要求してゐるかの如く見せかけられ又考へられてゐるからである。他方かゝる卒業生を職業的知識階級として收容すべき餘裕と必要とが實社會において減じつゝあるからである。殊には今や不況失業期に際會してその事が甚しいといふのは立憲主義や資本主義が封建主義と異なつて知識階級に對してのみ職業や生活を保障してゐないからである。謂はゞ育ては過少智的人口であつたのが、今や過剩勞働人口即ち失業人口となつてゐる。その實その何れもが過少又は過剩人口の問題ではない。もし今日の就職難に陷れる學校卒業生を過剩人口であるといふならば生産力を增進し人口を調節せんために不生産的乃至不能率的なる職業的智的人口の發生を制限する必要があらう。

八

試みに明治維新以來の學制變遷の跡に一瞥を投げて見る。夙に維新前から洋學校の擡頭を見たが、維新後の舊弊打破の思想は早くも教育刷新の聲となつて、明治五年はじめて學制が頒布され、それは「反譯の事業を急にする事」を一眼目としたものであつた。同じ五年官立法學校の嚆矢たる明法寮が開かれ、六年東京開成學校に法學科を加へ、十年東京大學の設立と共にそれが合して後に帝國大學中の法科大學となつた。私立法學校も尋で勃興し十二年の東京法學社は今の法政大學（和佛法律學校）の前身である。同じ十二年教育令が制定されて學制の劃一主義乃至干涉主義を自由主義乃至放任主義に改め、爾來私立法學校の續出となつて十三年專修學校（今の專修大學）が創立され、十四年明治法律學校（今の明治大學）が創設され、同年東京法學社は東京法學校と改稱され、十五年東京專門學校（今の早稻田大學）が設立され、十七年獨逸協會學校に專修科が置かれて法律學を授け、十八年英吉利法律學校（今の中央大學）の創立、十九年關西法律學校（今の關西大學）の創設、二十二年日本法律學校（今の日本大學）の設立となつて同年慶應義塾に大學部が新設され、二十四年同志社に法律學校が設置された。世の知る如く慶應義塾は安政五年最古の洋學校である。明治の前半かくばかりに法學校が勃興し當時他に勃興したる學校は語學校と醫學校と女學校であつた。農、商、工學校も亦勃興しなかつたのではない。かゝる實業教育に關しては明治四年官立工學校が工業學校の嚆矢であり十年工部大學と改められ後に東京帝國大學の一分科となつた。十四年の東京職工學校が今日の東京高等工業學校の前身である。農業學校は明治九年の假學校が後に札幌農學校（今の北海道大學農學部）となつたにはじまり

八年頃から公私の農學校が各地に起つた。商業學校は八年私立商法講習所が九年府立となつたにはじまつてそれが東京商業學校から東京高等商業學校へと今日の東京商科大學となつた。商船學校の嚆矢は八年三菱會社商船學校である。明治十九年帝國大學令其他の謂ゆる學校令が公布され今日の教育制度は何れもみなこれに基いたものである。爾來大學及び專門學校の學生々徒が累増した。例へば東京帝國大學法科大學の學生數を見ると十九年僅かに百二十人であつたのが、二十五年二百七十四人となり、三十年七百十九人となつてその年京都帝國大學が新設され、三十五年千〇六十六人、四十年千八百五十七人となつてその年東北帝國大學、四十三年九州帝國大學が設置され、大正元年二千二百九十六人となつた。私立法律學校の在學生徒數は詳かでなく、その卒業生についても精確の統計を缺いてゐるが、全體を通じて大體の傾向をいへば、十八、九年の頃には一年百人乃至百五十人の卒業生であつたところ二十三、四年に一躍して千五百人乃至二千人となり、爾來減じて毎年千人以下となり三十五、六年以降増して千五百人から二千人へと四十三年には二千五百人に上つたが再び二千人となり大正四、五年に至つて千人に減じた。かゝる私立法律學校は明治二十一年以來文部大臣の特別認可學校となり法律學、政治學及び理財學を敎へる學校となつたが、二十六年には司法大臣の指定學校となり、爾來三十二年仙臺東北學院に專門科が設置され、三十三年臺灣協會學校(拓殖大學)及び京都法政學校(立命館大學)が新設され、三十六年以降は專門學校令と共に何れの私立法律學校も法律專門學校となつた。三十二年實業學校令この方實業專門學校及び實業學校が全國に勃興し、その年官立實業(農業、工業、商業)專門學校生徒數が千百七十一人であつたのに大正元年に至れば五千八百六十九人となつた。

かくて大正年代に入れば明治二十九年の高等教育會議が廢止され、或は教育調査會、或は臨時教育會議、或は臨時教育委員會、或は教育評議會、或は臨時教育行政調査會といふやうに學制の調査研究がしきりに企てられたが、何等教育の根本方針に變改が加へられたのではなく、その最も活動したる大正六年臨時教育會議は官公私の大學教育については「國家に須要なる學術」を授けよと決議し「國家思想の涵養」に一層力を致せよと希望し、その決議に基づき希望を容れて公布されたる大正七年の大學令は官立の外公立、私立を認め綜合、單科の二制をも認めてこゝに我國大學教育の形式が完備した。しかしそれは依然として國家須要の教育機關であり、國家思想の涵養機關であり、國家試驗と相俟つて國家機關を運用せんためのものゝ如く

である。かくては必ずや國民は大學卒業生の地位及び職業について國家が保障せんことを期待するであらう。そこに官私大學昇格運動が起つて大正九年東京商科大學昇格この方官立大學の新設となり、同年慶應早稻田兩大學をはじめとして私立大學の設立許可が行はれ數種の佛教大學もそれに加はつた。更に大學令による資格を附與せんために大正十年以降七私立大學に對して十箇年間補助金を交付することゝなり、爾來各私立大學は競ふて校舍の新築、規模の擴張を行つた。更に又他方官立高等學校及び專門學校志望者の入學難に伴ふ高等教育機關擴張の議が起つて、大正七年内帑金一千萬圓の下賜があり、四十一議會に四千四百五十萬圓の追加豫算（大正八年度以降六箇年繼續費）が通過して擴張計畫が實施された。けれども官立法科大學の收容學生數は大正五年最高限度に達して東京二千四百二十五人、京都八百九十一人がそれであつたが、各私立大學法律科（專門部を含む）の卒業生數は大正六年千〇六十五人が十二年二千〇三十二人に劇增して十四年二千八百十三人といふのが最高の記錄である。實業（農業、工業、商業）專門學校の生徒數は大正八年官立八千〇〇七人公私立千八百三十七人となり、實業教育に重きを置く機運は近年著しくなつたが、未だ法律、政治、經濟に關する大學教育が民心を捉へてその官私大學卒業生の就職難が今日の問題の中心となつてゐる。

以上大要記述したところによつて明かである如く、いかに我國が官學萬能であり法學萬能であつたかを知るに足らう。然るに明治前期の官僚治下に切なる要求があつた官學及び法學が今も猶ほ時代の要求であるかの如く考へられてゐる。明治の前半時代の要求に應ずべく勃興したる法學校が今や大學令の下に昇格するに至つたが、當時の教育方針は今に及んで改められてゐない。昔ては官界に身分を獲得せんための學校教育が今は職業を獲得せんためのそれとなつてゐる。我國の大學はいはゞ職業的知識階級の養成所であり供給所である、製造所であり販賣所である。職業を獲得せしめんため又獲得せんために大學教育を授受してゐるやうでは學問の墮落となり製品の濫造とならう。從來の教育方針を改めずして入學難を救はんために高等教育機關を擴張してもその結果は就職難を增すのみとならう。我國にあつては實業教育や技術教育が今も猶ほ輕視され、程度低き一般職業教育も普及されず、却つて法律、政治、經濟に關する大學專門教育が職業教育かの如くなつてゐる。高等教育方針の刷新は今日の急務である。明治時代の教育方針に囚はれたる謬見は打破しなければならぬ。囚はれたる教育方針の下にいかに學校を擴張し入學を容易ならしめても又そのため入學を困難なら

しめてもそれでは入學難も就職難も緩和されない。將來かゝる高等教育を受けたる職業的知識階級の多くのものを社會は要求しないであらう。その代りにはいかなる職業に從ふ者でも教養ある知識階級たらんことを社會は要求するであらう。さうしてその職業は生産的にして能率的ならんことを社會は要求するであらう。現に職業に就き勞働に從ふ者のために大學の講座を開放し擴張することを社會は要求するであらう。私は希望する、出來得べくんば何れの大學專門學校そのものをも開放し擴張して上級下級又は本校豫備校等の特權的連絡を徹廢してしまひ、何人も通學し、休學し或は獨學して何れの學校へも何等資格上の制限なく又一定の試驗を經て入學し得るやうにすればよい、そこに教育の機會均等が行はれて今日の如き就職難や入學難の問題がなくなるであらうと。

九

然らば今日現に就職難に陷りつゝある大學專門學校卒業生をいかにすべきか、自然の成行に放任するの外なきか、もし一大多數の有爲の青年に向ってその前途に暗影を投ずるが如きことあらばこれ由々しき問題であらう。例へば豫言者の如き態度の下に、卒業生諸君よ、諸君は安んじて可なり、諸君を就職難に陷らしめた資本主義の現社會は必ずや沒落するであらう、と福音を齎らし呪文を暗んじたとせよ。もしこれに卒業生が共鳴するとしたならば、その結果は社會の沒落とならずして自らの沒落となるか又は社會と共に沒落することゝならう。私は憂へる、資本主義の社會が沒落せんよりは寧ろ知識階級が自らの封建主義によって沒落せんことを。恐らくは封建主義よりも資本主義、資本主義よりも共産主義の社會は知識階級に向って特權と名譽と報酬、威信と體面と虛榮、閑暇と怠惰と奢侈とを與へないであらう——社會が生産的になればなるだけ又能率的になればなるだけ——と私は前言した。恐らくは又共産主義の新社會は生産的となり得ず又能率的となり得ずしてそのため更に一層知識階級に向って何ものをも與へないであらう——革命のロシアが文化的職業者に選擧權を與へなかったやうに——と私は附言する。それ故に私は今や就職難に陷りつゝある卒業生諸君に向って勸告する、先づもって學校出身の肩書を棄つるだけの覺悟があってほしい、將來のためどんな低いといはれる業務でも生産的且つ能率的なるものゝ體驗を得て置いてほしい、當分の間は獨立の生計を營み得るに足らずとも忍んでほしい、一言にしていへば卒業後も暫くの間は學生であってほしい、學生の境遇にあると考へてほしい、若し一家に餘裕あらば研學を繼續

し、餘裕なくとも教養に努めてほしい。今少しく率直に忠告する、優越的な特權的な知識階級たる階級意識を去らねばならぬ、封建的な身分的な體面虛榮の傳統に囚はれ又は職業貴賤の因襲に囚はれてはならぬ。精神勞働者として熟練を積むか智的職業者として專門を修めるかの二途を取らねばならぬ。何等の體驗熟練さへもなくして精神勞働者なりと考へ、何等の專門的教養さへもなくして智的職業者なりと考へてはならぬ。傳統的な因襲的な知識階級に關する迷想を一掃せねばならぬ。

終りに臨んで今一たび我國の知識階級なるものに一顧を與へて見る。職業を求めんために教育を受け、職業を求めんための教育を受けず、學校を卒れば學問を廢し、職業を得れば教養を怠り、日常の業務にさへ最善を盡さず、他の階級に比して多かるべき閑暇をも空費し、體面を重んじ威容を作り、虛榮に捉はれ因襲に囚はれ、勞働階級や無產者に對しては特權階級の如く優越者の如く振舞ひ、その實有產資本階級に對してはその地位從屬的勤務階級である。今日の我國の如き不生產的、不能率的な社會にあつても他の階級又は職業に較べて最も不生產的であり不能率的であるのが知識階級である。皆これ畢竟封建時代の傳統と明治時代の因襲の然らしむるところである。封建主義から資本主義への過程の產物でもある。今や我國の社會は封建主義と資本主義の中間に彷徨して行き詰りつゝある。しかしそれは共產主義への過程を辿りつゝあるのではない。この時知識階級がその社會的使命を完うし得る途は精神勞働階級として又智的職業階級として資本階級の專制と勞働階級の獨裁とを制しつつ民主々義の確立へと努力することであらう。それ故に私は世の先覺者となるべき大學卒業生諸君に向つて語を寄する、高等教育に關する謬念を打破せよ、知識階級に關する迷想を一掃せよと。

（昭和三、一、二八）

現内閣の辭職すべき時

馬場恒吾

政友會内閣は何故辭職しないかと、此疑問が總選擧の結果が判つて以來、多數の國民の頭にこびり付いて離れない。恰も下手な碁打ちが、既に負けに決つた碁を、未練がましくいぢり回はしてゐるに似て、内閣は其思ひ切りの惡るさの爲めに、徒らに見物の反感と輕蔑を買つてゐる。あれほどの多士濟々の政友會に、此局面を達觀する者が一人もないのかと、傍から見てゐて齒痒く思はれる。

總選擧に臨むに際して、政府の目算では、與黨の政友會代議士を二百二十五名乃至二百三十名當選せしめ、反對黨の民政黨を百九十名乃至百九十五名に落し、其上に中立議員三四十名が出る中から約二十名の政府味方を得て、政府與黨として二百四十五名乃至二百五十名を數へる積りであつた。衆議院議員總數四百六十六名の半數は二百三十三であるが故に、二百四五十名の與黨を有てば、政府黨は絶對過半數を占めて、今後四年間は政友會内閣安泰を期し得る筈であつた。

然るに、目算は外れた。二百名以下に追ひ落すべき筈の民政黨が、二百十七名の數で出て來た。そして政友會自身は二百十八名しか得られなかつた。(尤も此數は政府と民政黨に依つて區々に計算されてゐるが、茲には第三者の立場に居る新聞の計數を取つた)。外に少數黨として、

無産政黨	八
革新黨	三
實業同志會	四

が出た故に、政府が三四十名出ると豫想した中立は十六名しか出なかつた。(其中一名は當選承諾書を出した後に死亡した)。故に中立から政府の味方として取る筈の二十名がよく取れても十名しかなくなつた。それを政友會二百十八名に加へて、漸く二百二十八名の與黨を作り得られるのみであつて、衆議院の半數

たる二百三十三名に對して尙五名の不足を生ずる譯けである。初めの目算の二百四五十名を得て、衆議院內に絕對多數の勢力を張らんとした計畫は、浦島の玉手箱と同じく、開けてくやしき、煙の如く消へ去つたのである。

茲に若し政府或は政友會に政務を見る事の鋭敏なる人が居つたならば、政府は直ちに政權を投出して、新規蒔直しに、政友會更生の途を講じたであらう。何となれば、總選擧の結果がかうなつた事は、外の事は扨置いて、人心が政府を去つた事を證明するものだ。現に總選擧の結果が東京大阪の如き大都市に發表せられたときの光景を見たものは、如何に政府が人民に憎まれてゐるかを痛切に感ぜずには居られなかつた。政友會の當選議員の名前を貼り出すと、群集が『そんな物は貼り出さなくともよい』と叫ぶ。政府黨と反對黨の數字が雁行してゐるとき、反對黨が一名でも增すと群集が喝采して喜ぶ。そして、此掲示の行はれた二月二十二日の夜は十二時迄も群集が散ぜずに居た。

總選擧の最中、及び總選擧後に於て、各政黨の立會演說が屢々東京に於て行はれた。其時政友會の代表者は悉く聽衆に冷笑と反感を以て迎へられた。彼等の演說が上手であるとか下手であるとかは問題でなかつた。初めから彼等は相手にせられなかつた。其後も政友會と民政黨の代表者をして、內閣總辭職の當否を討論さすべき計畫があつたが、此上政友會代表者を公衆の前に引張り出すは可愛想だと云ふので、此計畫は中止されたと聞く。

今回の總選擧に於て、民政黨が豫想以上の好成績を得たのは、國民が民政黨それ自身の價値を認めて、之に投票したといふよりは、寧ろ政府が憎い故に、政府を倒す爲には、民政黨を勝たしめる方がよいとの心持があつた。現に無產政黨に同情してゐるものゝ中にも、『自分の贔屓にする無產黨候補者の落選したのは殘念だけれども、民政黨が勝つたのだから、まあいゝわ』と云ふ者がある。

此心持ちが影響して、中立議員の當選も少なくなつた。國民の政治的關心が深くなるに從つて、彼等は中立候補者を疑惑の目を以て見るやうになる。中立候補者は其政治的立場が明白ではい。何方に動くか判らない。從つて信用出來ないと云ふのが選擧民の結論である。殊に今日の政情に於て、國民の關心が政府を倒ほす事にある時に際しては、彼等の信賴が中立候補者よりは、明白に政府反對を標榜する政黨に向ふ事は已むを得ない。

實業同志會は三十一名の候補者を立てゝ、四名しか當選しなかつた。其の不振の原因も同じ所にあると見られる。今年春の議會に於て、實業同志會は彼等獨自の立場からして、政府は直ちに議會を解散すべしと云ふ決議案を出した。[illegible]

民政黨は政府の施政方針の演説に對し、數日間の質問を試み、そして政府の弱點を暴露した上で、不信任案を提出する方針を有つてゐた。然るに實業同志會が議會解散の決議案を出した爲めに、政府と政友會は、此決議案に乘つて議會を解散し、それで、民政黨の質問を封ぜんとする形勢が作られた。それ故に、民政黨も議會劈頭に於て不信任案を提出せざるを得ない破目になり、彼等の言論は封じられて、議會は解散される事になつた。此間の事情を見て、實業同志會と政府及政友會が通謀して、議會劈頭の解散を招いだと見るのは、少しく實業同志會に殘酷であらう。併し結果から見れば、實同が恰も政府の意志に迎合したかの如く思はれる。實同の政策上の主張は、英國流の自由主義の立場を取つてゐるが故に、中には日本の時弊に適切なるものがある。それにも關らず、其候補者が國民に歡迎せられないのは、それが政府に對する態度に於て、甚だ明瞭を欠くものがあるが爲めだ。

政府は民心を失つてゐる。それ故に、政友會それ自身の選擧成績が思はしからざるのみならず、苟くも、政府反對の態度が明瞭を欠く所の中立議員、及實業同志會の成績すら思はしくなかつた。國民がこれほど迄に、政府を憎むには、正當の理由があるか、ないかは暫らく措くとして、國民が憎むと云ふことは疑ふ餘地のない事實である。

人心を失つた政府は何の目的があつて政府に止まつてゐるか。それは常識では判らぬ事柄である。政府が如何なる政策を行はんとしても、國民は之を惡意に解して、其政策を行はしめない。若しさうした國民に彈壓的態度を以て臨まうものならば、國內に如何なる變事の起るやもしれない狀態になる。現に總選擧後に於て、政友會には其黨更生の爲めに看板塗り更へを主張し、色々の新らしがつた政策を陳列するものがあつた。然るに輿論は、これぞ政友會が無產黨抱き込みの手段だとして、一向眞面目に相手にしない。それ故に看板塗り更への議は立消へになつた。かうした狀態の下に內閣が政權を維持してゐるのは、一日政府に居れば一日丈け立往生の姿を國民の前に洒らすに過ぎないのであるが、それでも尚內閣は退却の樣子を見せない。それは、政策は行はずとも、政黨は破滅にならうとも、只單に兎も角も政權を握つて居たいと云ふ不合理な心理狀態から出る決心としか見えない。

それ故に政府は當面の難關たる四月二十日に召集される特別議會を切り拔けるべく全力を擧げて努力しつゝある。選擧が豫想通りの成績を示さず、從つて公明正大なる手段に依つて政權を維持する事が困難なるが故に、不公明、不正大なる手段に依つても政權を維持せざるべからずと云ふ結論に達したかの如く見へる。そして特別議會に於て勝敗を決すべき問題は不信任案の採決にかゝる。此票數に對する豫想が種々に行はれる。若し

此間に何等の術策が行はれないとすれば、不信任案賛成者は民政黨二一七、無産政黨八、革新黨三、民政系中立の確實なるもの五名、合計二三三名を得、而して一名の議員欠員がある故、これは衆議院の過半數となる。加之、實業同志會中に二名の不信任案贊成を言明してゐるものがある。よし彼等が黨内の關係よりして、不信任案に贊成の投票をせずとも、彼等あるが爲めに、實同四名全部棄權するときは、不信任案は五名の多數を以て通過する事になる。

然るにそれは、特別議會迄に何等の術策が施されないと見ての計算である。若し其間に政治は力である、目的の爲めに手段を擇ばずと云ふマキヤベリズムの原則が適用される場合には、此計算の基礎がぐらつくのである。現に代議士一人の買收費が二拾萬圓であると噂される。民政黨は其黨の代議士一人が十萬圓と參與官の椅子を提供されたと報告してゐる。欠席料三萬圓と云ふ事も新聞に出た。

總選擧後に於て、鈴木内相は與黨議員を特別議會迄には二百五十名にして見せると豪語したと報ぜられた。斯の如く政府が有望であるかの如く公言するのは、政府に就かんか、野黨に就かんかと迷つてゐる議員を誘惑する爲めに發せられる宣傳である。何となれば利害の打算に明かなる中立議員は、政府危しと見れば決して其誘惑に應ぜぬが爲めである。併し宣傳にせよ、宣傳でないにせよ、與黨二百五十名は中立全部十五名、實同四名を入れても尚其數に達しない。これを其數に達せしめるには政府は十名内外を反對黨派より誘拐しなければならない。蓋し議院政治の下に於て、代議士の鞍替へほど不德義なものはない。例令ば自分は民政黨であると云つて投票を集める。そして當選した後に政友會に轉籍する。選擧民に對してこれほど公々然たる詐欺はない。而して此詐欺を行はしめなければ、鈴木内相の云ふ所の二百五十名の政府與黨は作れない事を考へるとき、政府の政治的良心の極めて低調なる事に驚かざるを得ない。

同じ鈴木内相は總選擧投票日の前夜、議會中心主義を否認する聲明書を出して物議を釀もした。議會中心主義の可否は別として、彼れは此聲明書の中に、政府は衆議院に於て多數を失ふ事に依つて必ずしも進退を決せずと云ふ意味を述べた。それが憲法上に如何なる理論の根據があるにしても、衆議院の多數に反對されて、如何にして實際政治の運用が可能である乎。只それを可能ならしめるのは、憲政の逆手を使用して、議員を誘拐し、若しくは議會解散を連發する外はない。それは共に憲法政治の精神に逆行するものである事は云ふ迄もない。併し總選擧の結果がまだ分明でない時に此聲明書を發したのは、選擧に於て政府が豫想通りの成績を得なかつた場合、政府は憲政の逆手を利用しても、尚其政權を維持する決心をほのめかした所の、

一種の伏線とも見られる。

政府の方に於て採る所の憲政の逆手が、民間に於ける憲政の逆手に存在理由を與へる。今日無産政黨及び民政黨は内閣倒壞運動を始めてゐる。原則的に云へば、内閣倒壞運動なるものは憲政の逆手である。立憲政治の下に、政爭は選擧と議會に於て行はるべきものだ。選擧に負ければ退く、議會で負ければ退く。又政府を攻める側から云ふと、政府を倒す方法としては選擧で勝つか、議會で勝つかの方法あるのみだ。それを議院外に民衆運動を起して、其勢に乘じて政府を倒さんとするのは、これも亦憲政の逆手たるを免れない。併し、政府が選擧に負けても退却せず、却つて憲法政治に許すべからざる手段を用ひて、議會を切拔けんとするとき、玆に民間に於て憲政の逆手が生れる事を、厭々ながらも是認せざるを得ない狀態になる。

併し來るべき特別議會に於て、最も注目さるべきは無産政黨の態度である。今回の總選擧に於て彼らは八名の代議士を得た。其得票數が二大既成政黨各々四百萬に對して、無産政黨四十七萬を得た事は、彼らが選擧戰術に熟達し、且彼等同志の地盤協定さへ滿足に實行さるゝならば、今日に於ても二十有名を得べく、將來は急速に進出すべき事を豫想せしめる。其意味に於ても、無産黨代議士の行動は世間より深甚の注意を拂はれる。

彼らは既成政黨排擊を標榜して起つた。その故に、現在の政友會内閣に對して、彼等獨自の立場から不信任案を提出せんとする。そしてそれが成立しなかつた場合には、民政黨の提出する不信任案に贊成するであらう。何となれば、現在の内閣に對しては、之を田中反動内閣と稱して、平生より明白に反對して來たのみならず、如何なる理由に依つて、行動するにしても、若し彼等が民政黨の不信任案に贊成せず、從つて其通過を不可能ならしめる場合には、それは直ちに政府を助ける結果になり、世間よりは政府から買收されたかの如く疑はれ、折角進出しかけた無産政黨全體の破滅に結果するからである。

併し政府よりする懷柔の手は現在に於ては無産政黨に及んでゐないかの如く見へる。寧ろ政府は無産政黨と事を共にする事は、彼等の平生云ふ所の危險分子と握手する事になり、政友會の名譽を傷ける結果になる事を恐れてゐる。民政黨にしても蓋し同じ心持ちがあるのであらう。彼等は無産政黨が民政黨の不信任案に贊成して與れる事を希望し、且つ期待してゐるけれども、之れと握手して共同動作を採ると云ふ積極的行動には出てゐない。一方無産政黨としては、斯くして既成政黨から敬遠さるる事が寧ろ喜ぶべき事とせざるを得ない。それはさうさるゝ事に依つて、彼等は既成政黨の臭氣に感染する事を免かれ、同時に其良心の命ずる所に從つて、何人にも遠慮する事なく、勇

往邁進する事が出來るからである。斯くして其所信を貫く事に依つて、彼等は益々世間の信用を博し、其前途洋々たりと云ふ希望をつなぎ得る。

尤も無産黨代議士と一口に云つても、其黨派別は複雜を極めてゐる。民衆黨四名、勞農黨一名、日勞黨一名、地方無産黨一名、合計八名が所謂無産黨代議士である。彼等が議會に於て共同動作に出る事は、彼等の立場から見て何の不自然もなく、且又望ましき事である。併しそれと同時に彼等は院外に於て內閣倒壞運動に共同動作を採らんと試みて居る。茲に一つの危險が伴ふ。

云ふ迄もなく、日本の無產階級運動の極左翼には、レーニンズムの指導精神を以て指導精神とするものが存在する。その人々は內閣倒壞運動に參加して、それを單なる內閣倒壞運動に止らしめず、一步進んで、レーニンズムの大衆行動に進展せしめんとする。それは彼等自分の抱懷する目的から云へば如何に是認すべき事であつても、內閣倒壞運動としては自殺的効果を生むに止まる。何となれば內閣倒壞運動と稱する民衆運動が、常軌を逸して過激なる性質を帶ぶる時、それは田中反動內閣をして其得意とする所の彈壓手段を濫用する口實を得せしめるものであるからだ。斯の如き場合に、一般に民衆が政府の彈壓を是認するか否かと云へば、却つて是認する可能性が多分に存在し、從つてそれ丈け此不人氣なる內閣に存在の期間を與へる結果を生む。

同時に亦、極左翼の意圖する大衆行動が、此倒閣運動の波に乘る事に依つて、豫想せざる大規模のものに發展する可能性も存在する。これが若し、他の今日の如く國民に憎まれざる內閣の下に行はれる民衆運動であつたならば、其民衆運動は運動其物の價値に依つて評價され、それ相當の成績を得て終末を告げるであらう。然るに今日の政府は深刻なる國民の反感を買つてゐる。若し茲に倒閣運動が起るならば、其倒閣運動の動機の何たるを索めず、民衆全體が共鳴して國內に重大なる事態を發生せしめる危險が存在する。それは一政友會內閣の存亡よりは今一層重要なる事柄である。倒閣運動は元より不可でない。無産政黨が共同して之を行ふ事も、民政黨が之を行ふ事も、又一般民衆が之に參加する事も亦避くべからざる事である。只之がかほどまで國民に憎まれてゐる政府に向つてなさるゝ故に、其結果に恐るべきものがある。而して事態重大になつて、今の內閣を組織してゐる連中が、其辭職すべき時に辭職したらよかつたと後悔しても、時已に遲いのである。人は死ぬべき時に死なねば、死にまさる恥ありと云ふ。內閣も其辭職すべき時機を誤つてはいけない事を、眞面目に考へる必要がある。　（三、三、七）

選擧を遣り直せ

細迫兼光

一

讀者諸君、我が國にはかういふ法律があるのである。そんなことはトックの昔に知つてる、と怒らないでマア私の云ふ處を聞いて下さい。

憲法第二十三條　日本臣民ハ法律ニ依ルニ非ズシテ逮捕監禁審問處罰ヲ受クルコトナシ

同法第二十九條　日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著作印行集會及ヒ結社ノ自由ヲ有ス

刑法第百九十三條　公務員ソノ職權ヲ濫用シ人ヲシテ義務ナキ事ヲ行ハシメ又ハ行フベキ權利ヲ妨害シタルトキハ六月以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

衆議院議員選擧法第百十六條　選擧ニ關シ官吏又ハ吏員故意ニ其ノ職務ノ執行ヲ怠リ又ハ職權を濫用シテ選擧ノ自由ヲ妨害シタルトキハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

なんとスバラシイことではないか！

日本臣民萬々歳！

選擧の自由、言論の自由萬々歳！

二

昭和三年一月二十一日、議會解散、直ちに選擧期日の告示あり、日本最初の「普選」の幕は切つて落された。

われ後れじと、あちにも、こちにも立候補者は續出した。既にポスターを貼るに好適な場所は占領せられた。演説會場の學校も手廻しよく借り切られて終つた。あと二十日しかないのに屆出の濟んだのは僅かに四人だ。

『アスマデニカネオクラネバヤメルゾ、オホサカ』

『一〇ヒマデニハデキル、ソレマデタチカエタノム、イワテ』
『ドウシテモ〇デキヌ、タノム、タノム、ハコダテ』
『ホンブハワレラヲミゴロシニスルキカ、〇スグオクレ、ナゴヤ』
『〇デキヌ、テンメイヲマツ、タイサクシレイタノム、ヒロシマ』

神奈川第一區の神道寛次君の事務長糸川君、漸く屆出を濟ませて最初の演說會場を借入るべく出掛けた。會場費五圓、懷中を逆さにして四圓二十三錢。爾來『四圓二十三錢候補』と稱せらる。

『ハゲシキダンアツトタ、カイツヽ、ケイセイマス〲ヨケレドモ、カネ一モンモナシ、ヒヨウゴ』

喧々、金だ、金だ、金だ！

沖繩縣へ馳せ向つた井口君はギリ〲の十三日の夜、全國候補者の殿を承つて漸くに屆出る事が出來た。

かくして唯一の武器、言論による政策の徹底は期日不足の點からも到底不可能に陷つて了つた。

三

保證金制度を撤廢せよ！

本部に集るレポートを見てゐる。各地の情勢を視察する。スバラしい人氣だ。

神奈川第一區の『四圓二十三錢候補』の演說會では金時計が飛ぶ。自轉車の提供の申込がある。牛乳の組合から毎日五十本づつの寄附がある。魚屋さんの組合から毎日五十人分の魚をかつぎ込んで呉れる。米が舞込んだので一杯半の二食主義を漸く脫却する事を得た。電車へ乘りさへすればその日の演說會場を車掌さんが指敎へて呉れる。自分の金で作つたポスターは一枚もない皆應援者からの寄附だつた。

差支があるだらうから明言を憚るが、或る所では色紙に手書したポスターを毎日事務所に持ち込んで呉れる女性がある。名を聞いてもどうしても云つて呉れない。ソツと尾行して見たら或る小學校へ入つた。ひそかに探つて見ると、そこの女敎師さんが皆なで毎晩居殘つてセツセとポスターに筆を揮つて呉れて居るのであつた。その報告を聞いた荒男が皆涙を流して手を合せた。

靜岡第一區では會場費のいる演說會場では必ず入場料を貰つた。小學校でやる場合でも有志から五錢以上の入場料を貰つた。それでも何時も滿員の盛況、かくして集め得た金で翌日の演說會を開いて行つた。

『すでに現在でさへ、言論戰では我が黨の絶對勝利だ。たとへば上諏訪の最后の演説會を擧げやう。小川平吉派が二つの大會場を借り占めたにも拘らず、聽衆がわづか百五六十人、一つの會場の如き、開會三十分間で閉じるの已むなき態たらくだ。それに反して、わが黨の會場は小屋も割れるばかり八百人の聽衆で、なほ入れ切れずして歸つたものが數知れずある。然かも最后に私が演壇を下らうとするや、聽衆諸君は熱狂して萬歳を叫び、私は二度まで演壇へ呼び戻された。

　更らに著しい現象は、青壯年諸君の聲援だ。青年會及び壯年團の殆んど全部が私及びわが黨を支持し、決議に推薦廣告に、あらゆる努力をして呉れた。婦人の聲援も到る處に聞いた。もし男女二十才以上でさへも選擧權が與へられてゐたら、わが黨は絶對だ。否現在でさへ、買收さへ行はれなかつたら確實だ………』（藤森成吉）

　實際その通りだ。全國を擧げてこの無產大衆の熱狂的支持聲援！

　然るに投票の結果を見るに、既成政黨の得票九百三十萬。無產政黨の得票四十七萬、當選者八名。勞働農民黨について云へば得票十九萬、當選者二名。

　これが民政黨や、日本勞農黨中央委員會のいふが如くに「正當な民意の反映」であり得やうか。絶對に否！

投票所を增設せよ！

投票日を公休とし、日給全額を支拂へ！

十八才以上の男女に選擧被選擧權を與へよ！

大選擧區、比例代表制とせよ！

第五十五議會を解散せよ！

選擧法を徹底的に改正して、選擧をやり直せ！

四

鈴木内相、山岡警保局長は地方長官、警察部長を一々呼び入れて秘策を授けたといふ。大干渉、暴壓の暴風雨は全國を蔽ふた。世は暗たんとして專制治下にあるを思はしめた。最も甚しいのを兵庫縣と香川縣とに見る。

　兵庫縣第二區（候補者近内金光君）の報告によれば、

　二月一日、選擧事務長以下七名演説會場前にて檢束、

　二月二日、總檢束（尼ケ崎）同日淡路に於ても辯士總檢束、三日にも會場入口で總檢束、五日にも同樣な事あり、三日他の場所に於ては事務長以下總檢束、十八日夜半から十九日早朝にかけて全運動員並にわが黨員、一區二區に亘つて演説會で總檢束、檢束もれの者は自宅から引張られた。二十日には遂に

黨の事務所や組合の事務所や黨員の宅も一齊に家宅搜索せられ、官憲の泥靴で蹂躪せられ正服巡査により占領せられ、近寄る者片つぱしから檢束さる。又選擧事務長は淡路より退去を命ぜられ、神戸へ上陸した所を檢束せられた。

こんな事を一々書いて居ても仕方がない。要するに、徹頭徹尾、言論を封じ且つ選擧人を畏縮せしめ去らうとしての仕事である。前揭の例にも見える樣に、その目的の爲めには選擧事務長であらうが正式の運動員であらうが見境はない。コ奴辯士面をしてる、と思はれる者は凡て、會場の入口で檢束、多くの場合、候補者一人が演説をやらねばならぬ始末であつた。だが、辯士は檢束せられても、せられても、後から、後から、もぐり込んで行つた。服裝をかへて聽衆の間にまぎれ込んで行つたり、背間から天井裏へ隱れてゐたりした。然し一たび演壇上に姿を現はせば忽ち檢束し去られるのが例であつた。

全くその彈壓振は狂氣の沙汰といふも愚かな有樣であつた。

海を渡つて香川の有樣を見れば、委員長からの手紙の一部は次の樣に報じてゐる。

『昨日戰地へ歸りました。彈壓は相變らず益々激烈を極めて居ます。今日四回の演説會中、どうやらこうやら中止なしにすんだのは只の一回です。實に馬鹿々々しい中止をやるのです。まるでお話にも何にもなりません。

勝間に於て「勞働農民黨の本質を述べよう」といふと中止、理由を聞かうとすると「大山郁夫退場を命ず」と怒鳴りました。

比地大村で「わが黨選出の縣會議員が如何に約束を實行したか」といふと中止。

粟井に於て「我々を誹謗するものは既成政黨か反動團體か暴力團だけだ」で中止。

それでも私には、まだ多くはしたので各地とも殆んど總ての辯士が幾分の内に中止せられたといつても、決して誇大ではありません。』（大山郁夫）

候補者並に應援辯士の盡くがその口を封ぜられて了つた。三百萬圓事件や機密費事件に觸れたら勿論のこと、既成政黨の政策の批判などさへ一言も觸れる事は出來なかつた。香川縣會に於ける我が黨議員の活動振が又きまつて中止の種であり、甚しきに至つては、わが黨の掲げたる政策を讀み上げる事が出來なかつた。

米村辯護士が冒頭に掲げた選擧法第百十六條「……職權を濫用シテ選擧ノ自由ヲ妨害シタルトキハ二年以下ノ禁錮ニ處ス」と法文を讀み上げたら「辯士中止！」。聽衆承知せず「今讀ん

だ法律でやつつけろ！」と騷ぎ立て警官をして顏色なからしめた。

人の中止せらるるのを見てさへ顏面筋肉のピク／＼し出す河上博士が自ら受ける中止の亂發によく堪えて約一週間應援せられたが、述懷して曰く「私は日本といふ國がコンナにまで不愉快な國であるといふ事を始めて知つた。研究室での三年に優る勉强をした」と。

例を擧げればそれこそ文字通り枚擧に暇がない。二月十八日、私が香川に於て臨み得た一回半（後の一回の演説會の中途から檢束せられたから半回だ）の演説會場で、現在此の眼で見、この耳で聞いた實例を擧げるに止めやう。

三豐郡仁尾町、瑞雲寺、八名の辯士中六名中止。

辯士平井重太「大山先生は早稻田の教授の職を辭して勞働農民黨にはまつて來た」で中止。

辯士池田三千秋「勞働農民黨は他の政黨と違ふ、わが黨は民衆の間から生れたものだが他の既成政黨は個人が代議士などをカキ集めて作り上げたものである」で中止。

辯士横田林太郎「三黨首妥協で愼重に審議すべき豫算をうのみにして了つた」で中止。

辯士田代卓爾が大阪の砲兵工廠の話をし「新しい職人が來て段々古い職人は首を切られて行く」で中止。

辯士細迫兼光が、第五十一議會の大正十五年一月廿三日政友會議員板野友造の演説速記録を五行ばかり讀んだ所で中止。

辯士益田豐彦も中止せられたが今私の手許に記録がない

同夜、丸龜附近の鹽屋のセンソウ寺に於て、長谷川如是閑氏が「嘘の事がイカンといふ事はわかるが、往々眞實の事がイケナイ事がある」で中止。此の間約三十秒

細迫兼光が「皆さんお寒い所を多數御來會下さいまして有難ふございます。お陰でわが黨は各地に於て非常なる民衆の支持後援を得て居ります。御承知の如くわれ／＼の黨には金がありません」後にも先にも、これだけの言葉で中止。後、辯士控室から檢束。

丸龜署から、夜中の十一時頃から自働車に乘せられて、約二十五哩を隔つる觀音寺署へ送還、翌十九日午后六時過檢束を解くといふ。御丁寧に檻房を出る所を、パッと寫眞、釋放の事實の後日の爲めの證據といふ譯だらう。

「日沒は五時二十分ですが、縣警察部の指揮を仰いで居たので遲れました。惡しからず。これから御歸りの琴平までお送りします」

自働車に乘せられて琴平行。琴平署の手前で「止れ！」

ヒソ〳〵と何か囁きかはされる。そのまゝ又丸龜逆り。

丸龜の町の中で自働車を降ろされた。そこには私服二人が待ちかまへてゐる。

「一體どうする氣だ。また檢束か。」

「吾々は尾行を引きついだだけだ。君の勝手にしたらよからう」

「よし、それなら驛へ行く」

五六歩、歩み出したら

「驛へ行く前に一寸署まで來て貰ひ度い」でそのまゝ檢束、

翌二十日午后四時頃、

「物は相談だが、實は君の祖母が死んだ相だ。で警察部長は、すぐ香川縣から出て行くなら出してもよい、といつとるが、どうするか」

こんな事は、然し、多くの同志の受けた迫害のホンの一例の一端に過ぎない。「私も四日間タライ廻しで、此の汽車で追放です」といふ東京の同志と岡山まで同車した。

山口縣の守田君は大山氏の宿屋へ到着した處を、そのまゝ檢束。

十八日に監獄から出て來たばかりの伏石事件の前川正一君も、檢束、縣外追放。

讀者諸君は、もう讀みあきられたでせう。私も同じやうな事を云ひ續け度くはない。然し、もう一事例を附け足す事を許され度い。投票日數日前から「大山派の選擧違反、益々擴大」「檢擧既に五百名」といふ樣な新聞記事がデカ〳〵と書かれ出した。事實、各地の黨員、組合員等が續々警察や檢事局へ呼び出されつゝあつた。そこでは

「お前はナゼ大山を推薦するか」

「大山氏は我々の黨の黨首で一番すきな人だから」

「ケシからん奴だ。大山の言ふ事をよい事だと思ふのか。凡ての人民に自由を與へよ、なんて。そんな事をしたら、どうなると思ふか。人を殺す自由、物を盜む自由が許されると思ふか、馬鹿奴！」

といつた樣な問答が繰り返へされる。西讃に出張してゐた高松の檢事だが、名前は預つておく。ある運動員を引張つて、

「お前は××に向つて大山の推薦狀を出す樣に依賴したらう」

「そうです」

「大山の爲めに投票を得る目的だらう」

「勿論そうだ、私は大山氏の運動員ですよ」

檢事が聽取書を書かすのを見るに

「××の一票、及びその他の多くの投票を得る目的を以て…」

「違ふ〳〵、私はその人の推薦狀によつて他の多くの投票を得ようとしたのである。そして、さう述べてゐる」

「馬鹿、一票はいらんのか、お前は運動員ではないか、一票はどうなつてもよいのか！」

推薦狀の依頼を戸別訪問にひつかけやうといふコンタンである。

因みに、内務省警保局編纂「選擧法質疑」續編第二十四頁には次の様に書いてある。

問、選擧委員が選擧人の各戸につき又は個々に面接して左の行爲をなしたる時は戸別訪問又は個々面接運動となるや、

(2)推薦狀に記名を依頼すべく依頼する行爲

（その他略）

答、右の行爲が投票を得若しくは得しめざる目的を併せ有する場合の外消極に解す（司法省）

かうして書いて來れば、我々はむしろ滑稽を感じて來る。然し事實は滑稽や笑談事ではない。苛酷にして、乱暴な取調は、第二區に於て一人の自殺者、一人の自殺未遂者を出し、第一區に於ても未遂者一人を出してゐる。而して蹂躪は尚續く。選擧後と雖も組合の幹部、黨の幹部處は殆んど總て檢束を續けられて居り、東京から大山氏の主として身の廻りの世話をする爲めに行つてゐた田部井君や、應援に行つた中村義明君やその他未だに行衞不明の者が多數にあり、前川君の縣外追放も未だ解禁せられない。今この稿に筆をとつてゐる三月六日に至るも未だ前記の多くの同志の檢束が解かれた報に接しない。自分に對する復讐を防止する爲めに、命のある限り目ぼしいものを檢束して置くつもりだらう。

もうホントウに、これだけで止めて置く事にしますが、これだけの事だけでも、如何なる事が、その地方で、否、全國に渡つて、行はれ續けられたであらうかを想像する事は決して困難な仕事ではないと信じます。

私は、こゝいらで一つ法律の條文を御紹介する必要があると思ふ。

治安警察法第十條　集會ニ於ケル講談論議ニシテ前條ノ規定（犯罪の煽動等）ニ反シ其ノ他安寧秩序ヲ紊シ、若ハ風俗ヲ害スルノ虞アリト認ムル場合ニ於テハ警察官ハ其ノ講談論議ヲ中止スルコトヲ得、

行政執行法第一條　當該行政官廳ハ泥醉者、瘋癲者、自殺ヲ企ツルモノ其他救護ヲ要スト認ムルモノニ對シ必要ナル檢束ヲ加へ（中略）ル事ヲ得、暴行、鬪爭其ノ他公安ヲ害スルノ虞アル者ニ對シ、之レヲ豫防スルタメ必要ナル時亦同シ、前項ノ檢束ハ翌日ノ日沒後ニ至ルコトヲ得ズ

條文を讀み下しただけでは何の變テツもない、あたり前の事

が書いてある規定に過ぎない如くに見えるが、これこそ、われわれの口を封じ、自由を剝奪する處の彼等の利劍であるといつたなら、今一度讀み直して見る氣には確かになる。然し何度讀み返して見ても、別にさう大した魔力を持つたものとは見えないが、使い手によつては種々雜多な働きを見せる代物たる事に變りはない。民衆の生活を求め、自由を求める運動が如何に、常日頃から、この法律の名による迫害を蒙りつつあることか。それは決して選擧だからといつて用捨はせられなかつた。否、寧ろその暴威をたくましうした。

明治三十三年に制定せられた此の法律が如何に全選擧期を通じて亂舞亂踏を續けたことよ！

讀者諸君は此所で、今一度、本文の冒頭に掲出した法律を讀み返して下さるならば、人民の自由を保證したかの如き外觀を有するそれ等の規定が、如何に有名無實で、單に人民に對する政略の役目をのみ勤めて居るものであるか、又表面別に不都合でもない樣に見える法律が、實際に於ては如何に民衆の自由を剝奪しつつあるかを知らるるであらう。

日本臣民萬々歲でなくて資本家地主萬々歲なのだ。

我々は選擧法の改正を叫ぶ。それは選擧の自由が得たいからだ。而して今我々は單に一つの選擧の自由ですらが、一つの選擧法の改正によつてだけでは手に入るものでないことを感づいた。選擧干渉をした官吏をば百萬年懲役にやるといふ法律を作つても、恐らく何等の效果を、もたらさないだらう。

即ち我々は人民の自由を壓迫する道具に供されさうなあらゆる惡法の全撤廢を要求しなくてはならぬ。

完全なる選擧の自由を與へよ！

人民壓迫の、あらゆる惡法を撤廢せよ！

五

鳥取縣では候補者の立會演說會を催すことを禁じた。その理由は、立會演說は、演說による第三者の運動でもない、それかと云つて推薦狀では勿論なし、取締るべき法規がないから、といふにある。

取締法規のない事については人民は自由を有するのではないか。憲法第二十三條、第二十九條を見よ！　だが理屈を云つて見てもだめだ。立會演說なるものが無產黨候補にとつて絕對的に有利であるといふ事實が禁止の眞の理由なのだらう。

勝手の惡い事は結局やらせはしない。

資本家と大地主との政府の治下にある間は永久に「同一條件の下に於ける公正なる選擧」などは望み得べからざる事である。

眞に政治的自由、選擧の自由を要求するものは、政友、民政による資本家地主の政府を打倒して、勞働者農民の政府を樹立しなければならぬ。

以上、

中間景氣の現出を排す

（財界大恐慌及政府救濟策の影響）

渡邊鐵藏

昭和二年の日本の財界を回顧すれば、未曾有の大混亂を來し、肌に粟を生ぜしめるやうな危急の狀態に陷つたことさへある。彼の震災手形問題に關聯して起つた財界の不安に依り、銀行の休業が續出して、遂には日本全國の銀行の一時休業及び全國的モラトリウムの施行となり、彼の日本銀行特別融通法案並に臺灣の金融機關に對する資金融通の二法律の成立に依つてやうやく此危地を脫することを得た。日本銀行特別融通法は、最初政府提案の趣旨は單にモラトリウム明け後の取付騷ぎに對抗することを主眼としたのであるが、民間の熱心なる要求と在野黨の希望に依つて、此法律の恩惠を休業銀行にも適用せしめ得るやうになつたのである。實際此法律が出來ても、單に取付騷ぎの鎭靜劑に適用するのみで、休業銀行の整理に應用することが出來なかつたならば、事實に於て財界は安定せず、預金者の損害の大なるは勿論、金融機關に對する不信用の念、反感の高まる結果如何なる事情を生じたかも量り難い。此法律に依る特別融通が休業銀行に適用さるゝに至つたことは最も喜ぶべきことである。其後休業銀行の整理は甚だ緩漫ながら、今日に於ては東京に本店を有する休業銀行は、渡邊銀行を除くの外、漸くにして整理の曙光を得て、十五銀行及び近江銀行の二大銀行も、將に其整理案に對して殆んど全部に近き預金者の同意を得る狀況に進んで居る。休業銀行の整理が一段落を告げて預金者が其預金の一部は損失しても一部を再び利用することが出來る狀況になれば、預金者としては絕望の中に或程度の光明を認め得る次第である。

併し今震災手形問題以來の財界の大動亂及び之れに對する政府の救濟手段が、一般的に我國の經濟界に現在及將來に亘つて何のやうな影響を與へるかを考へて見たい。財界安定の救濟策は、勿論被救濟者に對しては利益であり、少くとも損害を輕減

する利益があるが、之れに關する政府の援助は一般國民の負擔に歸すべきものであるが、其當否に就いては既に震災手形法、日銀特別融通法、台灣金融機關融通法等の制定に際して帝國議會に於て十分に論議されたことであつて、之等法案の成立に依つても明かなる如く、私は政府があの程度の援助をしたことは十分理由のあることゝ信ずる。其理由は今更茲に說く必要もない故之れを略するが、之等の救濟策が一般經濟界に如何なる影響を及ぼすかは考へて見たい。殊に世間には之等の救濟策の結果として兌換券の膨脹を來し、不自然な中間景氣の現出を惧れる向もある故此點にも言及して見たいと思ふ。彼の震災手形法に依つて一億圓の保償公債、一億圓の貸付公債が發行されて銀行の手元に入るのであるが、之等の公債は從來日銀に出入して居た割引手形中所謂震災手形と稱せられる震災當時のスタンプ付の手形に代るものに過ぎずして、兌換券の增發とは全く無關係のものである。此點は既に其當時に於いて論議された通りである。次に台灣の金融機關に對する資金融通法に依る二億圓の融通資金は手形割引の方法に依り日本銀行より融通されるものであるが、之等は從來大銀行の融通して居た資金を日本銀行が肩代りをするものに過ぎず、之れに依り日本銀行が損失を被る時は、政府が二億圓を限り損失を保障する義務を負擔するが、兌換券の膨脹には全く無關係のものである。震災手形でも、台銀の資金融通でも、損失の負擔者が銀行の代りに政府になつた丈の話で、所謂新なインフレーションの問題には全然無關係の事である。只日銀特別融通法に依る資金の融通丈は其實行方法如何に依つては新資金の提供、兌換券の膨脹に關係が生じ得る。併し之れとて擔保物の範圍、擔保價格に就いては相當の制限があり、只一般に貸付限度を高くして、不動產にも貸付範圍を擴張した事に依りて、新な資金が日本銀行を通して流出し得る途が開いた譯である。但し此特別融通に依る貸付は昭和三年五月九日までであつて、政府は之れに依つて日本銀行が損失を受けた時は、五億圓を限つて其損失を保障する義務があるのであるから、今日迄に貸出された此特別融通と、今後二ケ月餘の間に此五億の限度の中どれほどの貸出が行はれるかといふことが實際問題になる。但し特別融通の期限は十年間であるから、其期に至つて特別融通に依り借りた金を返還することが出來なければ、日銀の損失即ち政府の損失となつて、それ丈けの資金は日銀に回收されず、兌換券膨脹の形が殘ることになる。要するに日銀が特別融通に依つて此二ケ月の間に何億貸付るかゞ問題である。元來此特別融通は最初に述べた如く取付防止の目的でもつたが、實際は休業銀行整理に利用され、今特に休業せさるも

内容不良の銀行の整理に利用されんとして居る。此種の銀行は放任すれば取付に會ふ惧れある故、否緩漫なる取付を受けて居るかも知れぬ故、特別融通法第一條に曰ふ「日本銀行ハ現ニ預金ノ拂戻停止中ニ非ル銀行ヨリ其預金ノ支拂準備ニ充テルタメ資金融通ノ請求アリタル場合ニ於テ、財界ノ安定ヲ圖ルタメ必要アリト認ムル時ハ之レニ對シ特別融通ヲナスコトヲ得」といふ法文に當嵌るといふことが出來る。即ちモラトリウム明け直後に取付はなかつたが、今將に共生する惧れありと見做すことが出來るであらう。さて此意味で此法律を利用して五億圓迄特別融通をすると云ふことになれば、それはなか／＼我國の金融界一般經濟界に種々の影響を與へる。インフレーションの問題にも觸れて來る。

休業銀行中京濱地方所在のものは十五銀行を除く外、全部震災手形法の救濟を受けて整理案を作製したのであるが、之等は自ら直接に特別融通を受けることを得ないが、新銀行昭和銀行が休業銀行より肩代りした不動産に依つて、預金支拂準備の爲特別融通を受けることであらう。十五銀行は全然震災手形法に依る救濟を政府から受けないが、單獨開業の後には更に八千萬圓内外の特別融通を受け得ること丶考へられる。是等は特別融通の豫約と見るべきものであるが、昭和二年十二月末に於いて日銀特別融通額は既に一億八千萬圓に達してをる故豫約に屬するものを合算すれば間もなく四億數千萬圓に達し、更に所謂「休業せざる休業銀行同様の銀行」に之れを及す時は五億圓の政府補償限度に達するかも知れぬ。

今試に財界恐慌前より最近に至る日本銀行の貸出金の變化を見るに、昭和二年二月二十六日の日本銀行週報に依れば、日銀貸出は割引手形一億五千七百萬圓、貸付金五千萬圓、外國爲替貸付金五千五百萬圓、合計三億六千二百萬圓であるが、最近即ち昭和三年二月二十五日の週報に依れば割引手形七億二千二百萬圓、貸付金五千萬圓、外國爲替貸付一千萬圓、合計七億八千二百萬圓となつて居る。即ち財界恐慌を經過した此一年の後に日銀貸出は四億二千萬圓を增加して居る。勿論彼の大恐慌當時を回顧すれば日銀貸出は最高昭和二年四月二十三日には十七億圓を超へ、其後着々減少し、六月に入つて九億圓迄減じたが、其後本年一月に至るまで八九億圓台を一進一退して居て、二月の十日を過ぎて初めて七億八千萬圓程度に減じて來たのである。此狀勢を見れば現在昨年同期に比較して二倍以上の日銀貸出の膨脹のあることは寧ろ財界大恐慌當時の貸出が未だ十分に回收されない爲であつて、特別融通法の適用に依る貸出の影響は未だそれ程大きいものとは云ひ難いが特別融通法に依る貸出

がなければ日銀貸出高は猶一層多く收縮し得ることは確であらう。又恐慌當時の非常貸出が特別融通に肩代りしたものもあらうと思ふ。

日本銀行の貸出増加は、他に日銀に兌換券の入り來る途があれば必しも直ちに兌換券の膨脹にはならない。日本銀行の預金勘定を見るに昭和二年二月二十六日には政府預金五億八千萬圓、民間預金七千九百萬圓、合計六億五千九百萬圓であつたが、最近昭和三年二月二十五日には政府預金七億三百萬圓、民間預金二億一千五百萬圓、合計九億一千八百萬圓であつて、此一年間に二億五千九百萬圓の増加を示して居る。即ち同じ期間に於て日本銀行の貸出増加は預金増加と相對して六千萬圓超過して居るに過ぎない。其兌換券に對する影響は之れにて察することが出來るであらう。

要するに兌換券膨脹の問題は今後の日銀特別融通法の利用如何に存するが、我々が寧ろ茲に一層重要視しなければならぬことは、恐慌後絶ず注目されて居る資金偏在の問題である。恐慌後中小銀行の資金が大銀行及政府郵便貯金に對して移動したことは世間周知のことであるが、試に東京に於ける四大銀行、第一、三菱、三井、安田の東京に於ける預金勘定を見るに、昭和二年一月末には四行合計七億八千七百萬圓であつたが、三年一月末には十一億三千三百萬圓となり、即ち此一年間に東京の勘定だけで三億四千六百萬圓の増加を來して居る。此間東京手形交換所社員及代理交換所預金勘定は休業銀行に依る減少、新加入に依る増加あれども、僅に純額に於て二千五百萬圓を増加して居るに過ぎない。東京に於ける此狀況のみを見ても大銀行に對する資金の移動が甚しきものであることは明かである。次に政府郵便貯金激増の事實も人の知る如くであるが、昭和二年三月末十二億一千六百萬圓であつた郵便及振替貯金は昭和三年二月十五日には十六億七百萬圓となり、此一年間に約四億圓の大激増を示して居る。之れは總て中小銀行及び貯蓄銀行から吸收されたものである。此事實を見れば中以下の銀行が如何なる苦痛を嘗めつゝあるか、之れと取引して居た小商工業者が如何に猛烈な金融難に苦しめられて居るかゞ窺ひ知られる。此激烈なる資金移動の數字を見れば現に營業せる銀行に對して日銀特別融通法の適用を必要とする事情の潜在することは之れを打ち消すことは出來ぬのではあるまいか。

一方大銀行は其激増したる資金の運用に困難を感ずるのは當然であらう。從て之等遊資は日本銀行に對する民間預金の増加となつて現れ、前記の如く日銀に在る民間預金は此一年間に一億三千六百萬圓を増して居る。他方に政府は激増する郵便貯金

の利用に困惑して其増加額の大部分は空しく日本銀行の庫中に政府預金として睡眠を貪つて居る。大藏省預金部は昭和二年三月末日には九千二百萬圓の内地預金を持つて居たが、昭和三年二月十五日には三億一千二百萬圓の内地預金を有つて居る。即ち二億二千萬圓の増加である。勿論郵便貯金の増加に伴ひ、之れが一年間に多少運用の増加したものもある。即ち國債に於て約三千萬圓、地方債八千四百萬圓、勸業債券一千六百萬圓其他證券五千八百萬圓の増加があるが、興業債券に於て千八百萬圓の減少がある故、差引一億七千萬圓は證券に依る運用が増加して居る。政府は或は地方債の増加に依つて資金の地方還元を説くかも知れぬが、勸業債券の増加と興業債券の減少が帳消になり、又地方債が如何なる程度に於て産業方面に利用されて居るか、今之れを明にしないが、其額たる微々たるものであり、又其利用が實際に適切に行はれて居るか否かも研究を要する。

殊に少くとも二億二千萬の日銀庫中に眠れる政府の内地預金の増加額は如何なる打撃を我國の小銀行並に小商工業者に與へて居るかといふことは想像するに難からぬことである。此金と日銀民間預金の増加額一億三千六百萬圓と合せた三億五六千萬圓の資金は、小くとも小銀行の手元より奪はれて日銀庫中に死藏されて居るものである。其金額は追々減少するとしても稍相當の時日を要する。況んや大銀行及預金部に於て利用せる増加資金の金額を併せ考れば此恐慌を經過せる一年間に於て少くとも八億圓以上の資金が小銀行より大銀行及び預金部の手に移り、從て小銀行の苦痛、小商工業者の金融逼迫は想像も及ばぬ狀態に在る。玆に小銀行の倒潰を防止せんとするならば、本年五月九日迄の期間に於いて日銀特別融通法を更に活用する必要を生ずるかも知れず、從て一時多少の兌換券膨脹の狀況を生ずるかも知れぬ。而し他方に更に大銀行の資金利用を圓滑にすると共に殊に預金部資金の運用を敏活にすることが最も肝要である。

私は嘗て恐慌當時に政府が彼の財界危急の際郵便貯金を無限に受け入れることは政府自ら財界攪亂者たるの譏りを免れぬといふことを論じて郵貯口座の開設に制限を設くべきを主張したが、民間に此意見に同意するもの少く、政府亦之れに耳をかさなかつた。政府自ら一年間に四億の資金を銀行より引上げて自ら之れを運用し得ず、郵貯預金者に四歩數厘の利子を支拂ながら、自らは日本銀行に數倍の巨資を死藏して僅かに二分の利子を得て此間莫大の損失を被り他方に日本銀行特別融通法に依つて手元窮迫せる銀行の救濟のために國庫の損失をも吝まざるが如きは甚しき矛盾を感ぜざるを得ぬ。寧ろ滑稽である。

政府は曾て預金部運用規則を制定して、郵便貯金の運用に

いて過去の放埒なる大失態に鑑みて嚴重な運用制限方法を講じたのは寔に時宜に適したことであり、我々も其主張者の一人として大に喜んだ處であるが、過ぎたるは及ばざるが如し、運用規則嚴に過ぎて、總て國債、地方債、勸業債券、興業債券、産業債券を通じての外運用の餘地なく、此點に就いては運用上の責任に反せざる範圍に於て改良の餘地があるやうに思はれる。露骨に云へば、自分で使へぬ金ならば、そんなに骨を折つて預らぬ方が好い。殊に今日の時期に於てさうである。寧ろ現在餘つた資金を日銀から引出して手元の窮屈な銀行に預けてやれば、銀行も潰れず、預金部も損をせずに濟んで一擧兩得とも云へるが、併之れは過去に於て支那や其他事業資金に貸出したと同じに、預金とは云へ危險が伴ふ故に、運用規則の如何に拘はらず實際は出來難い相談であらうが、されば元に返つて此際自分の利用出來ぬ金を民間經濟界から引上げて、損をしてまで預る必要はないのであるから直ちに當分の中郵便貯金の受入に就いて制限するのが適當ではなからうか。少くとも費用をかけて郵便貯金の奬勵をすることは暫時見合せるがよからう。

思ふに我國の金融界の狀況は、恐慌後大盤石のやうな變化を生じて居るのであるが、近き將來に就いては只一つ日銀特別融通法の適用如何に依つて、我國の經濟界が如何なる影響を被るかといふ問題が殘つて居る。之れに依つてインフレーションが生じ、中間景氣の到來を惧れる向もあるが、此適用を嚴密に行へば不健全な景氣が出るといふ程のことはあるまい。不謹愼な融通を爲した場合の惡影響は之れは云ふ迄もないことである。要するに我々は上記の銀行資金大移動の結果として休業せざる銀行に對する特別融通の必要を多少生じはしないかを憂ふると共に、此融通法の適用に就いては關係者が愼重な注意を拂ふことを希望せざるを得ぬ。政友會内閣は所謂積極政策を標榜して經濟界の景氣を出す方針を執るやうに云ひ觸す者もあるやうであるが私共の考では政府の力では我々の云ふ經濟界の景氣といふものに就いては微塵たりとも影響を與へ得るものでないことは、從來屢々繰返し斷言して居る處である。政治家にして若し政府の力に依つて經濟界の所謂眞の景氣を出し得るものと考へる者があれば、それは全然經濟の事を知らぬ者である。私は茲で經濟界の景氣論を説く時間を持たないが、一國の經濟界の景氣は其國の自然界の生產の狀況及び通商相手國の生產界の狀況殊に密接な貿易關係に在る國の生產狀況或は時に政治の狀況等に依りて左右されるものである。政府の力に依つて若し經濟界の景氣を出さんとすれば、或は不公平な商工業の保護、不健全な取引所政策をとり、不急の土木事業を起す位のものであつて

或は國民の負擔の増加、公債政策の缺陷、或は特殊利害關係者の不平等待遇等の結果に陷る惧れがあつて、政治上に暗雲を生ずる事はあつても決して明快合理的な政策をやることが出來ぬやうにならう。何處の國でも政府が經濟界の景氣を出すことを政策に現す國はあるまい。アメリカなぞでそんなことを云へば笑はれるに相違ない。但し關稅政策等に於て多少商工業の發達に直接影響する政策をとり得ることもあらうが、之れとて消費者及び他の利害關係者との關係もあることであるし、又國際通商との關係もあることとであるから、樂々と自國の産業を發達せしめ得るやうな巧い方法があるものではない。之等の意味に於て何人が政府を組織するに拘はらず、假令歐洲大戰後、又大震災後殊に今日の財界大恐慌に依り弱められた我國經濟界の不景氣に國民總てが飽き〳〵して居るとは云へ輕々しく積極政策、景氣政策を主張すべきものではない。否寧ろ昨年の財界大恐慌は今猶其創痍が癒ぬのみならず、未だ亂陣の收拾に努力して居る時期である。之れと共に他方戰時時代の物價高騰期に高い建設費を以て新に創業された資本金總額百億圓に上る此新事業會社の過度に膨脹した資本金に伴ふ營業上の困難に着目して寧ろ事業界の整理に對して眼を注ぐことが最も肝要である。財界の整理は一半の仕事である。他の一半の仕事は事業界の整理である。之れに依つて經濟界が堅固な基礎に返つて後初めて此新な立脚點より再び我國の産業は榮え得て眞の景氣も出で得るのである。事業界の整理は民間の自力に俟ち政府の援助し得る部分少しとしても、政府が其必要に着眼することは其一般の政策の立て方に於ても又國民を指導する上に於ても役立つ點が多いであらう。少くとも政府や政治家の手に依つて景氣を出し得る如く信じ、若くは其手段を廻らすことは禁物である。若し日銀特別融通法を故意に濫用して其融通を必しも必要と認めざるに拘はらず、五億圓の限度に達せしめんとする如きことあらば、所謂中間景氣を出現することは之れを想像し得べきも、斯くの如きは將に將來に大なる禍根を培ふものであつて、まさか其局に關する人達が其必要の限度を超へて之れを濫用するが如き事はあるまいと思ふ。又政治經濟界の一部に於ける手段に依つて、一時取引所に於ける相場の騰貴を圖ることも出來やうがそれは所謂經濟界の景氣ではない。固より取引所は經濟界景氣變化の最も切實なバロメーターではあるが、人爲的に高められた景氣は其壓力を止めれば直ちに舊に返るものである。取引所は決して經濟界の景氣を導くことは出來ない。經濟界の實力が取引所の景氣を支配するのである。目下の我國の經濟界の實情に於いて眞の景氣の現出を期待することの誤れることは勿論であつてむしろ不健全なる中間景氣の現出は之を排斥せねばならぬ。

外國記者の我が總選擧觀

（一）活殺の劍を握る少數黨

デーリー・テレグラフ
東京特派員
ゼー・エス・ペンリングトン

日本最初の普通選擧が行はれた。——二大政黨は言ふまでもなく、少數の議員を出した各派の人々もその結果に就て深き考慮を廻らさねばならない。

第一の事實は、一千二百萬以上の有權者によつて最も多く選まれた者が保守的なる政友會及び民政黨の議員であり、政府與黨の勢力がいささか劣つてゐる事である。新興勢力は未だ充分にその力を現はしてゐない。彼等の時代は近き將來に現出するであらう。

選擧の結果から見て現政府の基礎は極めて薄弱なものとなつた。しかしながら民政黨が粹つて政權を握つたとしても、政情の不安は除かれない。反對黨を壓倒するやうな力が二大政黨の何れにも無いからである。

だから『勢力のバランス』は結局數多の少數黨によつて保たれる事になる。少數黨が互に結合して議會に臨んだならば、英國下院における愛蘭（アイルランド）黨が、長く活殺の劍を握つたやうに、政界を支配し、誘導する事が出來るであらう。少數黨が正しき判斷力を持ち、政治的才能を充分に備ふるならば、二大政黨の何れよりも高き地位に座する事が敢て困難ではあるまい。日本における二大政黨は何れも大衆の心、大衆の立場をその政策の根幹としてゐるものでは無い。その何れも古風な、利己主義的政治家の集團である。故に初めて議會への進出を試みた力強き、若き自由の黨派は、一切の舊勢力を追ひ、遂には滅亡せしめんとする覺悟を持たねばならぬ。

現在の日本においては、二大政黨の何れが政府を組織しても五十步、百步である。何れも『官僚政治』の外の何者でも無い。總選擧の前夜、內務大臣の投じた『政治的爆彈』（譯者附記、鈴木內相の議會政治非認の聲明を指す）は日本にとつて實に重大な問題と言はねばならぬ。內務大臣の口から漏れたものは正しく日本の官僚が國民に對して、永久に、鬪爭の準備をしてゐるといふ決心を示したものではないか。彼等が宛かも將軍時代の如き封建的思想を持つて國民を支配せんとする意志の表明ではないか。

日本は過去五十年間において著しい躍進を見せたが、官僚政治家の反動的精神は依然としてゐる。『若き自由黨』は何よりも官僚政治の絕滅に力を盡さねばならない。

日本の新興勢力は今や絕好の機會に直面してゐる。他の如何なる國家におけるよりも、遙かに多幸にして且つ重大な時期に向つてゐる。彼等の力によつて政府の態度を改めさす事が出來る。彼等の父祖が夢想さへしなかつた自由と繁榮と幸福との追求に進み得る時が到來せんとしてゐる。新らしき道の開拓に彼等は努力と戰鬪を續けねばならぬ。彼等は常

に、政府が何れに奮つてもその內容は不變であるといふ事を銘記せねばならぬ。眞に國民の繁榮を計り、眞に大衆の幸福を意とする內閣は官僚政治を一掃して後に、初めて期待される事を忘れてはならない。

更に、日本における內政上の組織はすべて變革する必要がある。それ等は多く、過去の獨裁的、封建的政治思想の產物であり、貧民階級、下層階級に無關心なる利己的時代、壓制政治の名殘であるからである。政友會及び民政黨の何れが內閣を組織する實力を備へても、內閣の本質には何等の差異もない事を吳々も忘れてはならない。

以上の意味において新興勢力は何よりも第一に團結せねばならぬ。高き理想によつてお互に容認し、日を逐ふて堅實な力を增すことに努めつつ、次の選擧に備へねばならぬ。

次の選擧に際しては、婦人にも參政權が與へらるべきものと私は思ふ。

新興勢力は既成二大政黨の持たぬ新らしい政策を持つてゐる。そして、將來においてこの新勢力が大なる發展を遂げた時に、日本國民の進步に大障害を與へてゐる反動思想、官僚政治は滅びるであらう。

警察力を武器として民衆を抑壓する官僚政治、すべての自由意志を彈壓せんとする反動思想を、現內務大臣によつて代辯され、我々はむしろ奇拔なるに驚ろき、國家的危險をさへ感じたものであるが、多數日本國民の思想はかゝる傾向と相反せる事實を認めて祝福せざるを得ない。

普通選擧は僅かに第一回を終つたのみである。日本の若く、活氣ある自由の民衆は、お互に共力し、社會生活においてあらゆる抑壓を受けてゐる現狀を、合法的手段をもつて打破せねばならぬ。とも信念をもつて進み、その事業に成功した時に、諸君は、新らしき正義、公平の時代の建設者としての榮冠を受けるであらう。（二月二十三日）

（二）更に一つの國家的誇りへ

シカゴ・トリビューン
東京特派員　マセウソン

日本の各黨派の勝敗に關する興味は別として、我々外國人が日本最初の普通選擧の結果を見て、第一に失望した事は何れの黨派も絕對的の勝利を得なかつた事である。一つの黨の政策が正しいか、他の黨派の政策が面白くないか、國民の前にはその黑白が明かに判るといふのが選擧の通例であるが、今回の結果にはその事が判然してゐない。

これによつて、政局は相變らず停頓狀態を續けるであらう。黨派間の小鬪爭が繰返されるであらう。日本國民は目下、國內的にも國際的にも各種の重大な問題を控へてゐる。そして黨派の小鬪爭によつて、政權が變移し、誰が內閣を組織するかといふ事よりも、早く政局の安定を見て、力強き國策の行はれん事を熱望してゐる。

財政問題、食糧問題、人口問題、更に對支政策、國際的軍備縮少問題と、日本には政友會と民政黨の鬪爭的興味以上の問題が充滿して居り、實際問題として、その何れかゞ、一時も早く時局を拾收して國民の不安を除かなければならないのである。

たゞ我々が、日本に永く住んでゐる我々が最も驚嘆したものは、新ら

しい多數の有權者が、正當にその權利を行使した事實である。棄權率が極めて少なかつた事である。初めて與へられた『淸き一票』を大多數の有權者が投じた事實は、日本國民が充分に世界に向つて誇り得るものと私は思ふ。

我々は、過ぎし日曜日以來、日本國民がデモクラシーの第一歩を踏み出したものと見てゐる。恐らく長い旅路であらう。が、今後日本の帝國議會は多數日本國民の代表者によつて形成される。限られたる少數の者から選ばれるのではない。衆議院議員の上には絶えず國民の監視の眼が注がれる。しかも多數の無産階級が議員の行動を注目するのである。

この結果、選ばれたる人々は、一層社會公共の問題に盡さねばならない。國民の意志、國民の希望を第一義として、從來のやうに、政治的策計にのみ沒頭する事は許されない。

總選擧の結果によつて、田中首相が如何なる態度に出るかといふことは、我々外國人の想像、論議する範圍ではないが、私個人として、その黨派を重視すると同樣に切實なる國家の利害問題に深慮を拂ふべきものと思ふ。日本におけるすべての政治家が、その立場立場において、自黨を重視するとともに、同樣の考慮を國家、國民の爲に注ぐやうになれば、第一次普通選擧における國民の投票振が、誇り得べきものであつたと同樣に、更に一つの國家的誇りを加へるものであらう。（二月廿三日）

選ばれた無産黨議員への要望

○ 佐野學

八名の議員はその數が必ずしも多くない。當選して欲しいと思つた人が落ちたり、その逆のことがあつたようなことも有る。だが骨拔きの選擧法と無比の暴壓の下から八名の議員が當選したのは勞働者農民がいかに反ブルジョア政黨的、反ブルジョア政府的であるかを眞率に語つてゐる。だから八名の人々の當選したことは意義が非常に深く且つ其任務が重い。私どもは此人々が眞に勞働者農民の代表者として階級的に行動することを希望する。そこで次のことが之等の人々の當面の任務だと思ふのである。

第一、田中内閣の倒壞のために戰ふこと。そしてこの倒閣運動について大切なことは政友會と同じく資本家地主の一分派にすぎざる民政黨をも假借なく痛撃することだ。それがなければ、倒閣運動は小ブルジョア的運動にすぎなくなる。倒閣運動は民政黨内閣を作つてやるためでない。

第二、議會の再度解散を導き出すこと。無比の暴壓の下に行はれた總選擧は少しも各階級の力を殊に勞働者農民の階級勢力を、反映するものでない。こんな議會を信任する少しの理由もない。

第三、新議會をして眞先に選擧法改正を議せしめること。

第四、次いで餓えたる勞働者のために失業手當法の制定、土地不安におびえる農民のために小作法の制定勞働者農民の階級運動の發展を害する治安維持法其他の暴壓法令の撤廢を迫るべきこと。

第五、議院内に聯盟を作つて一致的行動をとるべきこと、嚴格に黨の統制を守り、且つ議院外の大衆的闘爭の發展に從屬して行動すべきこと。等。

○ 小泉信三

寧ろ要望者に望む。要望失望共に性急なること勿れ。

○ 山川菊榮

一、無産黨議員は議會の内部でキャスチングヴォートを握る有利な地位を利用し、男女共通の徹底普選、暴壓法令の撤廢等をはじめ、無産者の利益を代表する一切の政策のために一致して戰ふこと。婦人のためにはまづ第一に結社權を獲得すること。

二、無産黨議員は、無産階級の男子のみならず、女子に對しても同等の階級的義務を負

ふものであることを瞬時も忘れぬこと。從つて直接又は間接に無産婦人に對して不利な影響を與へる一切の政策に反對すること。例へば選擧權擴張にせよ、失業手當金制度にせよ、最低賃銀法にせよ、ブルジョア諸國の慣例は常に婦人に對して不利な條件を附し、或は婦人を除外してゐるが、さういふ差別的な條件付きの改革案には、絶對に反對せねばならぬ。即ち男女平等の條件のものでない限り、いかなる改革案をも支持してはならない。これは單に女子のためのみでなく、同時に男子のためである。なぜならば、かゝる差別待遇は女子を奴隷化することによつて男子の地位をも脅かし、全無產階級の階級的團結を破壞する効果を伴ふものだからである。無產婦人の利益を裏切る行爲は、階級的裏切を意味するものであることを記憶せねばならぬ。

○上司小劍

議場の演壇の自由性を利用して、普通の演說會では言へないことを、堂々發表するのですな。しかし、あすこの演壇にも、現在では可なりに拘束があるらしいから、十分に言ひまくることが出來るかどうか、わかりませんね。無產黨がせめて百名の議員を出し、それでうまく、どうにか一時的にでも、結合して行けたとしたら、政友、民政の兩大資本黨は（梅蘇第三期の意味）は必然合同して、これに當るでせう。さうなればちよッと面白い。……けれども實のところ私は議會政治全體に對して、たいした要望をもつてゐません、選擧とか投票とかいふことにも疑ひがあります。投票紙を投票函に投ずる瞬間の行爲が、果してほんたうの參政權と言へるものでせうか。それも考へてゐます。

○那須皓

一、小異を捨てゝ大同につき、共同一致の歩調を採られたし。

二、過激に走らず空論に流れず、直ちに實現し得べき具體的政策に關する無產黨の立場を明らかにして國民の信頼を得るに努められたし。

三、小作法、勞働組合法の制定、治安維持法の改廢に直ちに盡力せられたし。

○藤井悌

一、少くとも議會內に於ては緊密なる共同戰線を布き、無產者諸政黨合同の機運を促進すること。議會內で『理論鬪爭』をやらぬこと。

一、差當り議會內では飽くまで現實の政策施設に即して言動し、その主張に對しては、根本的立場に於て反對する者も也に耳を傾けざるを得ざるやうにすること。

一、既成政黨とは如何に小範圍に於てでも包括的の共同動作をとらぬこと。個々の政策に就いて共同する場合にも必ず階級的立場を明かにすること。『政治家』にならぬやう、『取引』『諒解』の臭味に濡染せぬやう嚴に戒心すること。

○下村海南

あまりに黨本位に偏する既成政黨の弊にか

んがみ無產階級の爲をはかると同時に日本といふ事を念としなるべく安部磯雄君を中心とし一致の行動をとられたし。

○河村又介

一、院內に於ては三黨固く協調して共同動作をとること。

二、政治が實際なるに省みて、高踏的理論に囚はれずに行動していたゞきたし。之れを具體的に申せば、『政友會も民政黨も共にブルジョア黨なれば常に反對す』などと申さずに、比較的に見てより惡しき政友會內閣の倒壞運動には民政黨と協力し、姑く民政黨內閣をして、選擧法改正（大選擧區比例代表法）その他進步的政策を實行せしめること。

○米田實

一、既成政黨議員の言動が裏面の利害若くは情實關係に動かさるゝ折柄、無產黨の諸君には捕はれざる清新の言議をやつて頂き度い、少數でも政界改善の好刺戟でしやう。

二、勞農黨は立脚點が違ふので、望み難いでしやうが。社會民衆黨、日本勞農黨等の諸君にはイギリスの勞働黨の遣り口、即ち一九二四年組閣當時階級的では無く國民全體を考へた』風の政治振り、殊に最近一年半に於けるその自重振りなどをも考へて置いて頂き度い。

○千葉龜雄

議會內政策としては既成政黨及び既成政黨政治機構のカラクリの暴露。

一般政策としては、差あたつて急務と思はれるものを、四政黨の政策から一つづつ、拾ひ上げます。

農民政策の確立、
失業者救濟制度の確立、
植民地民族の差別撤廢、
財產稅の創設と相續稅の高率累進賦課。

○

○堺利彥

私は無產黨議員が第一に無產黨合同の爲に盡されんことを切望します。そしてそれには、言葉の上だけや形式の上ばかりでなく、本當に出來る樣な話をお互に持ちかけて貰ひたいと思ひます。出來ない相談の合同說にはモウ飽きはてました。

○緒方竹虎

一、勝利を長い將來に期すること、從つて場當り的な奇捷を考へたり、速成にして既成的なパーラメンタリアンを學ばぬこと。

二、院內から無產黨合同の氣運を作るに努力すること。

○高島米峰

無產黨議員は、せめて議會で働いて居る間だけでも、異體同心的に結束してはどうか。小異に固着して內輪喧嘩などして居ては、到底大を成すことは出來ない。英國では已に勞

働黨が一度天下を取つたぢやないか。日本でも總選擧の三度も經た後には、無産黨内閣の一度位出來そうなものぢやないか。

○ 小川未明

無産黨議員は、協力結成して、既成政黨と對立し、最も眞理と信ずるところに從つて同一の步調を取り、互に反目することから、極力避けなければならない。常に、大衆無産階級の精神的にも、物質的にも、代辯者たることを忘れてはならない。

○ 小野武夫

新無産議員に對しては私は第一に土着主義を要望します。平生其選擧區に在りて選擧民の爲に政治教育者なり、又は其他の色々なる面倒を見てやることは、選擧區民に對する報恩であるばかりでなく、次の總選擧への準備にもなります。第二には無産黨議員の貴族化を恐れます。汽車の一等客高等旅館の一等室に納まる無産議員の精神的優柔化と、選擧民に對する期待の裏切は、少々ではありますまい。土着主義と、素朴主義、之が私の要望です。

○ 石橋湛山

一、各派の大同團結を行ふ事。次回の選擧に若し今回の如く無産各派間の同志打が行はれ、或は議會内に於て無産派議員の協調が保たれざる如き事態を生ぜば今後國民の同情は無産派を去るであらう。

二、政策を洗練し實行性あるものたらしむる事。今までの無産各派の掲ぐる政策は甚だ實行性に乏しく若しくは出鱈目である。速に之を洗練し即座に實行に移し得るものたらしむる要がある。無産派議員は先づ目前の議會に於て何か具體的中心政策として主張するか、それを定めて貰ひたい。

三、議會政治は discussion and compromise の政治であることを忘れぬ事。徒に議論ばかりでコンプロマイズの用意を缺いたら其議論は實行性なく、遂に國民に飽かるゝであらう。政策を本位として既成政黨ともコンプロマイズするを要する。

○ 林癸未夫

一、今度の議會で、世間注目の焦點になるのは無産黨議員に相違ないから、大向あてこみの言動などは止して、正々堂々の態度を維持してもらひたい。

二、勞農黨一流の暴露政策よりも、無産黨としての主義政見を徹底させて貰ひたい。

三、田中内閣の倒壞には民政黨其他と共同戰線を張つてもらひたい。

○ 上杉愼吉

國家を本位とし、最も愛國の熱情に富める無産者の代表として合理的に行動せられんことを期待して居ます。

○ 奥むめお

既成政黨の正體を民衆の前に暴露することに依つて、彼等の欺瞞から民衆を救ひ出してほしい。

海外近事

ヨッフエ自殺の眞相

日露國交に大影あるヨッフエが自殺したといふ電報が日本の各新聞にのつて、朝野を驚かしたのは、昨年も暮のことであつた。當時世間では、ヨッフエ君が日本に居つた時から病氣で、長く熱海に靜養し、また本國においても、その容態ははかばかしからず、日露協定の交渉に際し、病院から擔架で會場に來たり、會場から直ちに病院に歸つたといふやうな情報を聞いてゐたので、病氣を悲觀しての自殺とばかり思つてゐた。

然るにかれが自殺した後から一通の手紙が現はれた。それはかれの久しい僚友トロツキーに宛てたもので、その原文は逸早くゲー・ペー・ウー（國家警察）の手で押收されてしまつたけれども、寫しは僅かにモスコウの同志の手に入り、それがベルリンに行つて新聞に發表されてしまつた。

この手紙が當時すでに囚はれの身であつたトロツキーの手に這入つたかどうかは明瞭でない。ロシアの研究家マックス・イーストマン君の説では、スターリンの部下は直ちにこれを沒收して、これをトロツキー君に渡さなかつたといつてゐる。いづれにしても勞農ロシアに關する限り、この手紙は一行と雖も發表されなかつたのは事實であつて、モスコウから來る日本の新聞電報が、毫末もこの死囚に觸れなかつたのは、怪しむにたらない次第である。

ヨッフエ君が自殺したのは昨年十一月十六日のことで、かれはピストルを以て、われとわが頭を打ち貫いて死んだのであつた。かれがこれをなしたのは、勞農ロシアの現狀に對する不滿、そして流されてゆくトロツキーに同情して、スターリン標政に對する抗議の意味であつたのである。後に譯出するやうに、かれは自殺が黨の規定からいつても、許されないことであることを認めた。併し自身の抗議を發表する手段として、この外に方法がないことを訴へた。かれが日本に來た時に、何を研究し、何を考へたかは、かれのみが知る事であるけれども、併し自殺を以て自己の意志を發表する方法は、西洋流、ロシア流でなくて、それは日本流であると私は考へる。

この手紙をあてられたトロツキーは、アジア大陸の眞中、支那の國境に近いトルキスタンに敗殘の日を送つてゐる。それはWyernyiといふ場所で、前にはヒマラヤ山脈の巨峯が屏風の如くに立ちふさがり、それを越へるとチベットに出る。從來もこゝに流されたものが何千を以て數ふることが出來ようが、それはどうにも逃げられないところである。この一つの例外として、一人の勞農の壯漢が逃亡せんとし、九ケ月を經てモスコウに歸つたが、モスコウに到着すると同時に再び捕縛されたといふ事實もある。

モスコウから汽車にのつて、まる四日かゝつてTashkentといふにつく。それから三百マイル以上を馬や駱駝にのつて流謫の地に着くのである。それはモスコウから三週間を要

する旅路である。かれはこゝでは比較的に自由な起居をエンジヨイする筈であるから、著書に精進するであらう。

それにしてもロシアの革命を縫ふ彼等の生涯が、何といふ波瀾重疊さであらう。彼等の生活は牢獄に始まつて牢獄に終つてゐる。トロツキーもスターリンも四十九歳の男ざかりである。自殺したヨツフエは四十四歳、ラコフスキーと同じに——また後藤新平子と同じに醫者として教育された。

左はヨツフエ君の遺書の殆んど全文である餘り長くなるから二三個所を省略したところもある。手紙は眞先きに To Leon Trotzky と書いてある。

遺書の全文

Dear Leon Davidovich,

私が一生を通して考へたことは、政治家は如何にして適當なタイムに過ぎ去るかといふことである。これは丁度役者が舞臺をやめることと同じで、餘りに遲きに失するよりも、寧ろ早過ぎるを可とするのである。

今から三十年以前に、私は一つの哲學を感得した。これは人生といふものは何ものか無限のものゝために盡すことによつて、またその盡す程度によつてのみ意義があるといふことこれであつた。われ等にとつては人道こそ無限である。（譯者曰く英語のヒユマニチーであつて、人類と譯してもいゝと思ふが私は人道としてをいた）。他は有限であつて、從つてこのために働くことは無意義である。かりにその人道も亦それ以外に目的ありとしても、その目的は極めて遠い將來のことに屬し、われ等にとつては人道こそ絶對に無限と考へていゝと思ふ。私はかういふ意味においてのみ人生の價値を見出して來たのである。

私は過去二十七ケ年の間、わが黨の黨員として暮して來た。この間の過去を顧みると、私は私の意識する限りこの哲學に忠實であつたといふ權利があると思ふ。私はこの意味の人生觀によつて生きて來た。即ち人道の向上の爲に働き鬪つて來た。私は私の生涯の一日も無意味でなかつたといふ權利があると思ふ。

併し今や私の生命はその意味を失し、そしてその結果、それを放棄し、それを終らせしむる日が來たと考へる。

過去數ケ年の間、わが黨の現在の黨首連は反對の共産員には仕事を與へないといふその方針に從つて、私の實力を發揮するに足るやうな政治的或は國家的な仕事を與へなかつた。昨年（昭和一年度）は君（トロツキー）も知るやうに、反對者（オポジシヨニスト）として政治的仕事から、全く私を隔離してしまつたのである。

私の健康は益々惡くなつた。九月二十日に中央委員會の醫務醫員は、何の理由か知らないけれども、私を呼んで專門家の診察に附した。この結果專門家は私の病氣が、私の想像してゐるよりも惡い事、一日もモスコウに止るべきではない事、そして直ちに外國に行つて適當なる療養所に行くべきことを斷然私に申し渡した。

私は質問した。「外國に行けば癒る機會があるか。私はロシアに居つて、仕事を廢せずに治療できるか」と。これに對し中央委員の醫師アブロソフ及びクレムリン病院の幹部その他は、一齊に口を揃へてロシアの療養所は私には駄目であつて、西洋（ウエスト）に行かねばならぬ事を述べ、更に私が彼等のいふところに從へば私は長い期間に亘つて仕事が出來るであらう

ことを附言した。

それから二ヶ月の間、中央委員會の醫事委員は私の外國に行くことについても、乃至は國内で加療することについても、何等の方法をとらない（彼等の發意で診察したに拘はらず）。そればかりではない、從來クレムリン藥局は處方に從つて私に醫藥を與へて來たのにそれを禁止した。即ち私は自由藥を得ることが出來なくなつたので、市内の藥店からこれを買はざるを得ざるに到つたのである。これは丁度現在、權を握つて居る人々が、その政敵であるところの「反對側（オポジション）の腹部を打て」といふ方針の下に反對の僚友を訪問して居る時のことであつた。

ある晩、中央委員會の醫師ポチオムキンは私の妻に通告して、中央委員會の醫事委員會は、私を海外に送らずに、ロシアにおいて養生せしむることに決定した旨を知らして來た。この理由は私が外國に行けば長期間の療治を必要とし、短期間では無益である。併し中央委員會は私の療治に對し二千圓（日本金にして）しか與へず、それ以上は不可能だと決定したからである。

私が最近外國に行つた時に、私は私の回顧錄に對し二萬ドルの權利（ロヤルチー）を保障して、交渉して來た書店があつた。併し私が回顧錄を書いたからとて、それは政治局（ポリトビュロー）の檢閲を受けねばならず、また實際わが黨と、そして革命との歴史が、如何にわが國において僞られて居るかを知るが故に、私はかゝる僞造に對して、私の手を貸すことを屑よしとしなかつたのである。政治局はその總べての檢閲によつて、個人とその行爲に對する批評は彼我共ー—革命の實際の指導者乃至は現に權力に座する人々の何れに對しても許されないことにしてゐる。

この結果、私は中央委員會から金を得ずして病氣の療治をする方法はない。そして私は私が過去二十七年の間、革命の事業に從事したことに顧みて、私の生命と私の健康が、一千ドルを超過しない額だと考ふることは困難である。

私が私の生命を終止せしめる必要ある時が來たといふのはこの事である。私はわが黨の意見が自殺に反對だといふことを知つてゐる。併し私の事情を諒解する者は、何人もこれがために私を咎めないことゝ信ずる。

もし私が健康であれば、私はわが黨の内部に釀成されたる情勢に對し、闘ふだけの力と活力がある筈である。併しながら私の現在においては、わが黨が沈默の間に、君を排斥するその情勢に堪ゆることは出來ない。無論私は遲かれ早かれ、わが黨に危機が來て、かくの如き不名譽に陷れた人達を振ひ落すのやむを得ぬに到るであらうことを絶對に信ずるものである。この意味において私の死は抗議である。わが黨を斯くの如き汚辱に陷いれた者、そして何時かは反動せざるを得ざる境地に導きたるものに對する抗議である。

私をして小なるものを以て、大なるものとの比較をなすの自由を許せ。君とそしてヂノヴイエッフの排斥は極めて歴史上重大なる問題であつて、それは必然にわが革命にサーミダーの時代を開くものである（譯者曰くこれはフランス大革命當時の一七九四年四月にロベスピールが仆されたる時のことを指す）そしてこの事に加へて私が二十七ヶ年の間の革命運動の後に、何ものも殘らず、彈丸を頭に打ち込むの外ないといふ二つの事實は、たゞ一

つのそして同じ事を物語つてゐる。それはわが黨の現在の政權についてである。そして恐らくはこの二つの事件は、大小の相違こそあれ、いづれはわが黨を覺醒せしめて、サーミダーの道に走るのを止めるであらう。

愛するレオン・ダヴイドイツチよ。

わが等は十ケ年の間、同じ目的の下に、共に働いて來た。そしてこの個人的友情の故にこゝに別れに臨んで、私が見て以て君の弱點だと思ふところを述べしめよ。

私は君が指示した道の正しいことについてかつて疑つたことがない。「永久の革命」から以來、二十ケ年の間私は絶えず君と共にあつた。併しながら私が常に考へて來た事は、君はレニンに比して、かれの非妥協、不變といふ點において缺くるところあることである。かれは必要ならば一人でもその仕事に當り、その行く道を示して、將來多數を得、また何人もその正しかつたことを認めるに至ることを確信して居つたのである。君は一九〇五年の始めから政治的には常に正しかつた。そしてよく私が君に話したように、一九〇五年において正しかつたのは君であつて、レニンではなかつたことをレニン自身が認めてゐた。それは私自身が直接に聞いたことである。死に面して何人も嘘をつくものでない。私はこれを今、こゝで繰り返したい。

併しながら君は屢々君の正しい立場を、協定、妥協のために抛つて來た。そして君は協定や妥協の價値を重視しすぎるが、これは誤りだ。私は繰り返す、政治的には君は常に正しかつた、そして今は過去の如何なる時よりも正しいと。いつか黨はこれを諒解するであらうし、また歴史はこれを認めざるを得ざらしめる。

そればかりではない。現在ある者が君を捨て去り、殊に多数の者がわれ等の望む如く君に來ないとしても決して恐るゝなかれ。君は正しいのである。但し君の眞理の勝利は、絶對に說を變へない場合にのみ來るのである、嚴格に自己を守り、總べての妥協を排し確く自己の上に立つてのみ來るのである。それはイリツチ（レニン）の勝利の秘訣であつた。

私は何回もこれを君に語らうと思つた。そして君に別れんとする刹那において今始めてこれをなし得た。

私は、君が常に示したと同じ活力と勇氣を振ひ起さんことを望み、かつ速やかに勝たんことを望むものである。左樣なら。

A・ヨツフエ

二伸　私は私の手紙を十五日と十六日の夜間に書いた。本日（十六日）メリー・ミカイロヴナ（夫人）は醫事委員會に赴き、一ケ月でも二ケ月でもいゝから、私を海外に送るやうに主張して來た。彼等は專門家の意見なりとして海外に僅かばかり滯在することが絶對に不用である旨を述べた。かれ等はかの女に語るに直ちに私をクレムリン病院に移すことに決したことを以てした。かくして私の健康のために小旅行をすらも許さないのである。總べての醫師がロシアにおいて回復することは不可能だといふ意見に一致してゐるにかゝはらず。

左樣なら、愛するレオン・ダビドヴイツチ。強かれ。君は強かるべき必要がある。そしてまた活動的であれ。そして私に絶望を持つなかれ。

大衆觀

政治的概念としての大衆

長谷川如是閑

『大衆』といふのは、一種の量的勢力をいひ現はしたものであるが、それを政治的概念として成立せしめたのは近代政治の進化である。古代の政治に於ても、いろ〳〵の意味で量的勢力はないではなかつた。たとへば、絶對的の寡頭政治が破れて、階級的の支配が開始され、ある意味の民主的政治の起つた場合——その最も發達したのはギリシアのそれであつた——には政治が量的勢力に左右され、いかにその量的勢力を制馭すべきかが古代政治學の主要な問題となつてゐた。然しその民主的乃至共和的支配は、量的ではあつたが、今日の意味に於ける大衆を含んでゐるものではなかつた。その意味の量的勢力は、家族的の支配が崩れて、經濟的優越に基づく特權階級全體の支配が起つた場合で、平民といつてもそれは今日の市民、地主といふと同じく經濟的特權による支配的地位を占めたものであり、それが量的勢力として、寡頭政治を牽制し、壓迫したのであつた。セーキスピアが對象としたローマの市民の如き量的勢力も、實は全體として、ローマ帝國の世界的殖民地に對し支配的地位をもつた特權社會であつた。從つてその量的勢力は、今日の意味の所謂大衆ではなかつた。その時代に於ては今日の意味の大衆は奴隷としての生産勞働者であつたが、さういふ人間の群は當時の政治的概念の中には入れられてゐなかつた。それらの生産勞

的者は、政治的概念としての支配的集團に附屬しその經濟的勢力の基礎をなすものであつたが、然し政治的勢力としての量をも質をも持たないものであつた。

されば古代政治に於ける量的勢力の具體的の現はれは、家族的首長の獨裁政治が頽れて、支配群の合議制が行はれた時に、始まつたものであつて、日本で云へば、八百萬の神々なるものが、その量的勢力を代表したものであつたが、これは決して大衆ではなく支配的集團そのものであつた。然し往々政治學その他に於てその時代の民主的乃至共和的觀念を以て今日の民衆乃至大衆を理解しやうとする傾きがある。例へば古代又は近代の政治に於ける「公衆」又は「輿論」といふやうなものを所謂大衆的現象であると解釋する。然し、公衆とか輿論とかいふものは、元來支配階級内の量的勢力を言ひ表はしたものであつて、民主的乃至共和的支配に於いて何等かの意味の投票權を持つ者の間の現象である。アメリカ人や支那人のいふ輿論又は公衆といふのは今日の意味の大衆的といふのとは全く違ふ概念で、支配階級内部の機構として、昔の家族的支配が行はれなくなり、階級内の政治鬪爭に依る支配的勢力の生存競走が支配者を決定するといふ意味であつた。又それは單に家族的勢力のみならず、支配的階級の内部に於ける一つの勢力に片寄る支配の持續を妨げやうとする概念でもあつた。富力、智力、聲望、因縁、その他の社會的勢力に依つて成立した優越でも、それに片寄る支配の持續を避けやうとする傾向が、公衆乃至輿論の基礎であつた。支配者の選擧制度、その短い任期、再選の制限その他の文、占卜、信任投票等に依る支配者の更新等は凡てある一定の勢力が恒久的に持續される事を妨げる方法であつた。政治的支配を支配階級全體の利害に基づけ、局部的勢力に片寄らないやうにするのが、所謂『公衆的』といふ意味であつた。

輿論といふのも、右に云つたやうないろ〳〵な制限を設けて、支配的勢力の固定を防がうとしたのと同じ概念であつて、それは公衆といふ概念を、その意見の側から言ひ表はしたものであつた。輿論政治といふ事は、年齡、血統、宗教等に依る固定的の支配が崩れて、全階級の支配的勢力が具象的に表現された政治に於て、階級内部の利害が調和されるための過程であつて、つまり階級的優越が現實に政治的支配の勢力として具體化されるための仕組であつた。アメリカの政治はその意味で本國たるイギリスの王家の血統的支配に反對して起つたものであつて、現實に支配的優越力を持つ階級が――それは即ち經濟的に支配的地位にあつた階級であるが――その利害に基づく政治を實現しやうとしたものであつた。支那の政治は、絕えず種族的支配で

あつたが、それは一系の種族的勢力が持續されたものではなく、所謂易世革命に依つて、種々なる種族の系統が新陳代謝することに依つて、觀念的に、支配者は決して血統に依つて固定することなしに、所謂王者の德を具へたものが、新陳代謝するといふ政治哲學を持つてゐる。その王者の德を具へてゐるや否やを判斷する者は、公衆の輿論であるといふのがその政治哲學の基礎であつた。而かもその公衆即ち支那の政治に所謂『百姓』といふのはやはり姓をもつもの即ち特權階級のことであつた。

然し、これらのものは決して今日の大衆を意味するものではなかつた。アメリカやイギリスのデモクラシーに於ける公衆、支那の政治學に於ける百姓といふものは、今日の意味に於ける大衆ではなく大衆に對して絕對的支配權を持ち、決して大衆の勢力をその政治的概念の中にとり入れようとはしない、又とり入れる必要を感じなかつた階級であつた。支那の政治道德として高調された人民に對する種々なる約束は、特權ある百姓に呼びかけたもので、大衆をその觀念に入れてゐるものではなかつた。

今日の意味に於ける大衆の概念は、右に云つたやうな公衆乃至輿論を向ふに廻して、それと對立する階級的構造を持つたものである。公衆といふのは、いかに大衆に對する支配的勢力を維持すべきかに就いて全く共通の利害を持つところの集團であり、大衆といふのは、いかにしてこの公衆の絕對的支配から解放さるべきかに就いて、共通の利害を有する集團である。故に二つは全く對立したものであつて、舊政治學の概念としての公衆を以て現代の大衆と同質のものとすることは誤りである。無論かやうな對立そのものは決して新しい事柄ではなく昔からの存在であるが、この存在は政治的概念としては、舊政治の範疇に這入つて來なかつた。それは當時の社會に於ては大衆なるものがその支配組織の機構に入り込んでゐなかつたからである。從つて、輿論といふものゝ中にも、大衆の要素は加はつてゐなかつた。それは元來輿論といふものは政治的意見であつて、從つて政治的機構に入り込んでゐない昔の大衆には全く政治的意見なるものはなかつたからである。大衆はデモクラシー迄の政治に於ては、公衆でもなかつた如く輿論でもなかつた。彼等は、公衆の資格たる政治的權力が與へられず、又輿論の要素たる政見を持つべき何等の構造を持つてゐなかつたのである。

無論大衆は昔から支配階級に對する存在物としては、可なり有力な量的勢力を持つてゐた。然しその勢力は、風や水やの自然力としてのそれと同じく、殆んど物理的に有力なのであつて、それが政治的機構に影響しなかつた事は海濱が政權を取り得な

かつた事と異らない。ギリシア、ローマの奴隷は絶えず騒動を起し、時には貴族乃至市民の支配を脅かした事もあつたが、當時の支配階級は、それに對して丁度猛獸の襲來に對するが如き處置を採つてゐた。それは、當時の大衆が政治勢力たるべく組織化されなかつたからである。反亂的組織が成立した事は屢あつたに相違ないが、それは何時でも反政治的のもので、政治的支配の組織の把持者にとつてはたゞ全く犯罪的の組織であつた。若しそれが非常に尨大で、量的、質的に恐ろしく有力であつた場合でも、それは蠻人の來襲乃至蒙古の來襲のやうな性質のものであつて、公衆又は輿論といふやうな、政治的支配の内部的機構とは全く別のものであつた。

政治的概念としての大衆はかやうに、古來から對立した非政治的集團の量的勢力が政治的機構に於ける組織的勢力として構成されたものである。家畜のやうな隷屬的大群が時に主人に對して反噬したのが昔の大衆の運動であつたが、今日の意味に於ける大衆運動はそれに對する支配階級の政治的機構の中に大衆の量的勢力が作用するやうな構造を持つた政治的進化の產物である。

昔のデモクラシーは政治的勢力を事實支配的地位にある階級一般に分布せしめやうとす組織であつたが、この所謂民主政治の基礎をなすものは、經濟的支配即ち生產要具の獨占、從つて分配の獨占であつた。それは原始的には宗族的勢力に歸してゐたのであるが、その獨占が階級そのものゝ手に歸したために、政治的勢力も又公衆的になつたのであつた。この公衆的勢力が更に大衆的となつたのは、やはり經濟組織の發達と共に、生產分配に於ける階級的獨占の勢力が崩壞して、生產者の產業組織に於ける地位が逆に生產並びに分配の機構を決定するやうな組織に進んだためである。大衆とは生產及分配の支配者でなく、生產力の把持者、即ち生產者そのものゝ群が政治的機構に入り込んだものである。故に大衆の發生は、產業組織に於ける生產者の地位が、產業支配者の地位を經濟的に左右する機構の發達によつたもので、それには資本主義組織の崩壞といふ根本的事實が存在せねばならない。それは市民の支配が封建國家の支配に代るには封建國家の崩壞といふ事實がその進化の根柢に存在せねばならなかつたのと同じである。即ち、市民的經濟行動が市民の政治行動に先在し、それを基礎づけるものであつた。同樣に生產者の資本主義的經濟組織に於ける行動が、その生產群の政治的勢力の基礎であらねばならなかつた。されば大衆といふ政治的概念は、生產者の經濟組織そのものに於ける勢力の反映であつて、單なる抽象的觀念乃至政治的又は道德的意識の結果ではな

い。それらのものが經濟的事實の結果なのである。

大衆は、それ故に、新らたな政治的組織を持ち來す勢力であつて、既存の政治組織によつて持ち來たされたものではない。大衆はその勃興の根抵に強大な政治的勢力を有つてゐるものではない。既存の政治的權力は、飽くまで大衆が政治的に有力となることを妨げる組織をもつてゐるので、大衆の政治的勢力は、既存の政治的機構を變改せしめる度合に應じてその領域を擴大せしむるものであるが、それには經濟的に結成された勢力がそれだけ伸展せねばならぬ。如何なる政治的結合もこの條件の進まぬうちは、大衆の政治的地位を強大にすることは出來ない。如何なる觀念や道徳もそれだけで封建國家を打ち壞はすことが出來なかつたと同じく、大衆の組織が市民の組織に代る過程も、決して抽象的政治行動のみによることは出來ない。歴史的に、生産者の經濟的行動がその政治的進出の基礎となつてゐる所以である。

右のやうな根柢の上に成立する大衆が、政治的概念としての大衆であるが、然しまた、あらゆる時代を通じて存在した被支配群の意味で大衆を解するものが多い。それは抽象的な「下層階級」を大衆とするのである。

然し、さう云ふ意味の下層階級が漸次に存在を失ひつゝあるのが現代的進化である。蓋し、現代の經濟組織に於ては、所謂下層階級は、悉く生産勞働者の群に收容され、決して、昔のやうな個人的無産者として存在するものではないのである。從つて生産者の結成による階級層が、昔の抽象的下層階級に代つて成立するのが現代的過程である。

下層階級的大衆觀は、その理由によつて事實の根據をもたない抽象である。大衆といふものを、かやうな意味の下層階級として、その群的性質を推定し、大衆の支配は社會的墮落であり、道徳的乃至法律的秩序の破壞であり、人間的文化の崩壞であるといふやうに理解するのは、大きな錯誤である。

大衆が市民的社會の道徳的乃至法的秩序を破るといふのは、進化的の意味に於ても亦已むを得ないとである。それは市民社會の支配が、その昔の軍國的道徳秩序乃至法的秩序を打ち壞したのと同じで、生活態度を異にする社會集團の支配は、それ〴〵異る道徳、法律をもち、異る文化的構成をもつとは當然である。

大衆の組織はこの意味でそれ自體の特徴をもつ。その道徳、法律、藝術、宗教、その他の文化的産物に對する態度は、生産者的生活態度の必然性によつて規定され、決してそれと反する階級的生活の所産に規定されないのもまた當然である。

大衆主義と資本主義

高畠素之

一

考へて見れば、大衆といふ文字も平俗化したものである。七八年前、斯くいふ筆者などが『大衆運動』といふ週刊新聞を發行し、陋屋を名附けて『大衆社』と呼んでゐた頃は、それが八シリだつたせいもあらうが、恐ろしくギゴチないものに印象されてゐた。ところが、どうした風の吹きまわしか、急に震災前後から流行的に濫用され出し、大衆文藝や大衆興業などはまだしも、汁粉屋の廉賣に『大衆デー』を敢て命名する時勢となつてしまつた。かうと知つたら、逸早く『大衆』の特許權でも出願して置いたものを、今となつては後の祭りで何んとも致し方がない。などと、これは戯談だが、それほど『大衆』は時代の寵兒となり、硬軟兩面から珍重がられてゐる。

大衆とは何んであるか？　大衆は大衆である。有れども無きが如く、無けれど有るが如く、その正體は一向に明瞭でない。無産黨的論客の口吻に從へば、大衆とはプロレタリアそれ自體と同義異語であるかに聞こえるし、有産黨的辯士の演説に依れば必らずしも然らず、漠然たる國民的多數といふ程の意味に使用してゐる。大衆文藝や大衆興業の場合は、ヨリ高いものに對するヨリ低いものを現はし、通俗的安易的な娯樂といふ程の意味に通ずる。若し夫れ汁粉屋やバナナ屋に至つては、單なる價格的低廉を意味するだけで、大衆と小衆とを論ずべき問題でなささうに思はれる。斯くの如く、大衆の意味内容に關しては十人十色の解釋を下し、お互ひに自分勝手な理屈を求め、彼等自身の正當性を是認する口實たらしめてゐるのだから、大衆の正體も勢ひ浮動を免れぬのが當然である。禪的遁語を用ひずとも、有れども無きが如し、といふの外はなからう。

しかし、一應の理屈は理屈として、いはゆる大衆も決して有名無實の存在ではない。物あれば必らず大小あり、比較的大と比較的小とは如何なる場合にも免れがたい。六千萬國民を分別

するとき、假りに所得の問題を中心とすれば乏しき者が多數であり、教養の問題を中心とすれば低き者が多數である。尤も右の場合、所得なり教養なりの標準的高低に依り、多少の異同は免れぬところであるが、大體に於いて『擇ばれたる少數』と、然らざる多數とは常に併存してゐる。大衆とは即ち、後者の『擇ばれざる多數』の意味に外ならない。

二

富者を崇め賢者を尊ぶのは、東西古今を問はぬ人類の通癖であつた。然るに、大衆萬能の當今となつては、却つて貧者や愚者が幅を利かし、新しい時代の偶像に祭り上げられたのである。例へば、昔なら衆愚の蔑稱で十把一束にされた彼等だつたが、今では『輿論』の名に於いて萬事が是正され、お追從なりにも『民の聲は神の聲』など、まるで似ても似つかぬ豪勢さを示してゐる。蜜柑だつて一ト山十錢のそれは、核が多いか尻が腐つたか、大抵は食ふに耐えぬ劣等品と見てよい。だから、如何に醉狂者でも『蜜柑は夜店の投げ賣りに限る』と言はぬが、人間ばかりは淺猿しくも、核が多からうが尻が腐らうが、敢て質の良否を檢討しようともせぬ。多ければ多いだけ、それだけ珍重がられてゐる。

そこで質疑は當然、何故に人間は、斯くも量のみを重視するかの問題に向けられねばならぬ。人間だとて、決して質を輕視する譯ではない。寧ろ却つて、旨い酒を旨いとし、美しい女を美しいとして、量よりも質を尊ぶのが通性である。同じやうに、馬鹿よりも悧巧がよく、貧乏より金持ちがよく、下品より上品がよいに違ひない。唯だ悲しいことに、這般の是非善惡を露骨に表現すべく、浮世の萬事は餘りにも複雜となつてしまつた。啻に人情關係に於いてばかりでなく、商賣關係が極めて複雜微妙となつたのである。それがため、不自然ではあるが決して不必要でなき大衆煽動が、白晝公然と、彼等の利害の反對者に依つて企てられたのであつた。

今の世は資本主義の世である。資本主義の世といふ意味に、大資本に依る大經營の時代、換言すれば、大量生産の時代といふ意味に外ならない。既に大量生産の時代であつて見れば、薄利に依つて多賣を制することが、唯一の商賣原則として採用されなければならぬ。薄利多賣の對象となるべきは、取りも直さず『大衆』であつて、大衆を顧客とすることに於いてのみ、彼等の利潤は期待し得られるのである。果たして然りとすれば、大衆は彼等のお華客樣であり、仇やおろそかに考へて濟むべき義理ではない。そこで勢ひ、內實はどうでも、表面だけは大衆

様の御機嫌を取り結ぶことが必要となる。台所口の御用聞きが、悪たれ小僧を促へて『お坊ッちやま』呼ばはりをする如く、見え透いたお世辭の百萬陀羅を並べ立て、大衆でなければ夜も日も明けぬやうな騒ぎとなつたのも、偏へに商賣往來が然らしめたればこそである。

三

大衆は自覺したといふ。或はさうかも知れない。だが、大衆は決して主動的に自覺したのではなく、他動的に自覺させられたのであつた。而もそれは、彼等の自覺を最も歡迎せざる資本家と、そしてその代辯者達に依つて促がされたのだから、皮肉といへば全く皮肉この上もない。

先づ第一に新聞紙である。新聞紙は大量生産を最も必要とする企業だが、それだけに、大衆への媚態を最も露骨に發揮しなければならなかつた。昔ながらに社會の木鐸らしく見せかけ、大衆の心理を巧に捕へて商賣の實益を忘れぬところ、さすがに巧言令色の張本たる資格はある。新聞の論調を見よ。揃ひも揃つてデモクラ的であり、强權への反抗を能事としてゐる。同じ見地から、無産黨などに對しても多大なる同情を表し、そのことに依つて、恰も新聞紙それ自體が、無産者の味方なるかに見せかけることを忘れない。尤もその半面には、同じ無産者といふ意味で、記者自身が正眞正銘の同情同感を表する場合もあらう。が、紙數增加を唯一無二の生命と心得る新聞資本主義の立場としては、ヨリ以上ニュース・ヴァリューに投ぜんがためであり、更にヨリ以上、斯くすることに依つて無産者の味方なるかに装ひ、以つて大衆顧客の贔屓を贏ち得んとする有意無意の打算と解すべき部分が多い。

同じ理法は、出版物や興行物やの場合にも作用する。殊に前者なら圓本的な場合、後者なら淺草的な場合に於いて、極度に發揮され易いのを常とする。けだし、それらの場合は、生產そのものを大量的ならしめる關係上、恰も生產者たる彼等の利益を犠牲に供し、以つて消費者たる大衆の利益に奉仕するかの如く装はねばならぬからである。何んぞ知らん、彼等は斯く見せ掛けることに於いて大衆の共鳴共感を唆り、對手の油斷に乘じて懐中を抜かんとする狡智に過ぎない。犠牲的出版の奉仕的興行のといふも、畢竟は彼等の利潤目的を中心として考へた文句であつた。圓本的乃至淺草的な宣傳廣告を見れば、思ひ半ばに過ぎるものがあらう。

四

大衆は如何に『衆愚』であつても、右の如き商業主義の見地に於いては、最も有りがたかるべき大事な顧客である。さればこそ、上はヘンリー・フオードより下は木内興行部に至るまで、大衆主義を唯一の看板としなければならなかつた。その結果、時代に對する大衆的興味を著しく助長したと共に、大衆そのものを味方に惹き入れんとする當面の商策は、やがて大衆に對する煽動にまで發展したのである。無產黨に對する新聞紙の態度などは、その最も代表的な一例だが、既成政黨對普選の關係などにも同じことが言ひ得られる。

制限選擧の上に支持せられてゐた既成政黨は如何なる意味に於いても、普選に贊成すべき理由を認められなかつた。而も彼等が、內面は兎にかく表面の理屈に於いて普選に反對し得なかつたのは、彼等の立場がヨリ大なる國民的利害を代表するかの如く見せかけねばならなかつたことに原因する。彼等の支持する資本主義が、その經濟的利害から大衆への迎合を敢て表明した結果、政治上に於いても迎合を餘儀なからしめたからである。殊に一旦、普選が施行されて見れば、有權大衆たる無產者の投票を獲得せねばならず、それがためには、倍加的に無產大衆への迎合政策を掲げなければならぬのみか、時には彼等の味方なることを積極的に誇示する必要上、脊に腹を代へて大衆の煽動に憂き身をやつさしめたのであつた。斯くして、大衆に對する時代的興味と時代的尊敬とは著しく高揚されたが、それが大衆彼等の自發的努力に出發しなかつたことは、以上の經緯で明瞭となつたらうと思ふ。先づ大衆を持ち上げ、その機嫌を取り結ぶことに依つて利益する『小衆』があり、斯うした小衆の煽動があつたればこそ、副次的にして偶然的なる結果として、大衆の自覺も間接に奬勵されたに過ぎない。寧ろ小衆の側からいへば、大衆に迎合し大衆を煽動はしたが、それは斯くすることに依つて彼等自身が利益し得るからで、假りにその結果として、大衆の物質的利益や精神的自覺が齎されたとしても、それは『招かざる客』であつた。

要するに、大衆主義と資本主義とは楯の兩面である。

大衆の現實について

青野季吉

「大衆の中へ」とか、「大衆に訴へる」とかいふ言葉が、無産者運動の陣營からばかりでなく、この頃では既成政治家の口からさへ、盛んに發散されるやうになつた。

いつたい大衆と言つただけでは、至極曖昧であつて、外國で政治論策の場合にこの言葉を使用するときには、たいてい勞働（アーバイター）大衆（マッセ）とか、勤勞大衆（ウェルクテーティーゲン・マッセ）とか言つた風に、その性質を規定してかゝるのが、普通のやうである。

勞働大衆、勤勞大衆と言へば、そこに餘程明確な限界がついて、一個の社會的範疇を示唆することが出來る。つまり筋肉勞働にせよ、頭腦勞働にせよ、勞働による以外にはその生活を維持する手段のない大衆、一般に勤勞によつてのみ生活を維持してゐる大衆といふことになつて、そこからは明らかに遊食者の範疇が取り除かれる。

たゞ大衆と言つたゞけで、その性質を規定しかからないとすれば實際上は無意味に近いと言つてよい。否、そこにまつはる曖昧性の故に、いろんな混雜や、危險さへ生れて來ることがある。

既成政治家たちが大衆と言ふ場合、それで指標しやうとするものは、たゞ社會の全員と言つたほどの範圍であつて、勞働大衆や勤勞大衆もふくまれておれば、遊食者の大衆もふくまれてゐる。たゞ漠然たる大勢の民衆と言ふ意味である。

これはかの文壇の既成文學者たちが、大衆文學とか、大衆作家とかいふ場合の「大衆」でも同じことである。この場合何もそこに明確な社會的範疇が指標されてゐるわけではない。たゞ漠然と、これまでの文學愛好者の範圍でなく、モツト廣い讀者大衆といふほどの意味である。だから、謂ゆる通俗でさへあれば何んでも彼でも大衆文學であり、筋を追つて「面白く」書きさへすれば、誰も彼も大衆作家と呼ばれるのである。彼等大衆作家と、謂ゆるプロレタリヤ作家とを比べて考へると、事態が一層ハツキリする。大衆作家は漠然たる大衆を相手にしてゐるのであるが、プロレタリヤ作家は、明らかに勞働大衆、勤勞大

衆を對象としてゐる。何でも彼でも大勢の民衆に讀まれさへすればいいと言ふのは、決してプロレタリヤ作家の念願ではない。大衆は大衆であつても、それは勞働する大衆であり、勤勞者の大衆である。そこへ行くと、謂ゆる大衆作家たちは、無規定的である。

既成政治家だちも、つい近い過去までは大衆などと言ふ言葉は口にしなかつた。文壇でもやはりさうであつた。既成政治家だちの場合には、廣汎な社會層を指標しやうとする時は、せいぜいのところ『民衆』であつたし、文壇では『通俗』といふ用語で、その作用する範圍を示唆してゐたものであつた。ところがその民衆や俗流が『大衆』に變つた。それも極く最近のことであり、既成政治社會では、こんどの普選を契機として、それがやゝ一般的となつたと言つてよいであらう。

巽の説明でも分る通り、『大衆』といふ新らしい?言葉になつたところで、既成政治家だちや大衆文學者だちの場合では、民衆や俗流と言つた意味と少しも變らないのであるから、何もわざわざ耳慣れない言葉を持ち出す必要はなささうなものである。だが、やはり彼等としてからが『大衆』でないと納らないもの、乃至は納らなくなつたものがある。

それは言ふまでもなく、勞働大衆、勤勞大衆の社會的進出である。元來、大衆と言ふ言葉が、初めて多少の政治的意味、社會的意味を與へられて使用されたのは、無産者運動の内部においてである。最初は耳慣れない言葉であつたし、その響きも社會的に強くはなかつた。これは、やはり當時の勞働大衆、勤勞大衆の社會的進出の度合を反映したものであつて、その進出の度合が高まつて來るにしたがつて、それが漸次に耳慣れて來、その響きが社會的に強くなつて來たのである。

かうなるとこの言葉を無視してをれない。否、その言葉の背後の社會的勢力を無視してをれない。しかもそれが普選のやうな場合、即ちその勢力が鮮明に前景へ歩き出て來る場合に、それを無視することは到底出來るものでない。そこで大衆と言ふ言葉が、たとへば既成政治家だちによつても取上げられる。だが、この場合注意しておかなければならぬことは、彼等によつて取上げられた『大衆』は、決して無産者運動が指標して來た大衆ではない、と言ふことである。勞働大衆、勤勞大衆を指標した言葉が、たゞ言葉として彼等に取上げられて、その社會的範疇がぼかされてしまつたのである。こゝに既成政治家の欺瞞がある。この欺瞞は、彼等が大衆の政治的要求を代表すると揚言する欺瞞に應ずるものであることは、説明するまでもないであらう。

言葉と言ふものは妙なもので、その意味する具體的內容が異つてゐても、その言葉そのものが明白な內容を持つてゐるものでもあるかのやうに、流通する。極端な保守主義者も、時として『自由』を口にすれば、進步主義者も乃至は革命主義者も、『自由』を口にする。だが、その『自由』の內容は明らかに變つてゐる。

そう言ふ具合に、今日では誰も彼も大衆を口にする。大衆を呼びかける。大衆に訴へる。それでなければ尠くとも進步的に見えないからである。『大衆』は今や、一種の魔術性を附與されたと言つてよいであらう。

だが、さう言ふ欺瞞を取りのぞき、そう云ふ魔術性を振り拂つて、あとに殘るものは何んであるか？ それは飽くまでも、勞働大衆であり、勤勞大衆である。これが眞の大衆なのである。

或はかう言ふ人があるかも知れない。大衆とは文字通りに大衆であつて、社會の最大可能の多數者であると。だが、その意味の大衆は、社會的に何等の統一體を形成するものではない。そこには明らかに利益の對立があり、意識の抗爭がある。その對立、抗爭のあるものを、その對立、抗爭をぼかしてしまつて、乃至は無視してしまつて、たゞ漠然と一緒に取扱つてしまつたのでは、取扱ふことは勝手ではあるが、社會的に言つて、無意味であり、政治的に言つて、欺瞞である。

搾取者大衆、遊食者大衆と、勞働大衆、勤勞大衆とは、對立してゐる。その利益に決して協同がないし、その意識には決して一致がない。大衆は、搾取者、遊食者のそれであるか、勞働者、勤勞者のそれであるか、でなければならない。

ところで搾取者の大衆、遊食者の大衆は、嚴密に言つて、これを大衆と呼ぶことは出來ない。細かい穿鑿はとにかくとして、その社會における數だけから考へても、それは少數者の範圍である。だから、本質においては、現實の社會には、勞働する大衆、勤勞の大衆と、搾取者、遊食者の社會的集團との對立があるばかりである。大衆は、勞働大衆、勤勞大衆を除いては、何處にもないのである。

既成政治家やその他が代表する利益は究極においての搾取者、遊食者の集團の利益であるが、彼等がその支配のために惹附けやうとする對象の範圍は、勞働大衆や、勤勞大衆にさへ延びてゐる。そこで彼等は、大衆を口にせざるを得ない。欺瞞のからくりはこゝに潜んでゐる。こんどの總選擧の結果に見ても、この欺瞞のからくりが、その所期の目的をどれだけ成功的に果したかゞ窺はれるであらう。

然らばこの勞働大衆、勤勞大衆の性質はどうであるか？　これはまだ階級的に組織されないものであつて、その現實の利益に協同があつたにしても、その意識に統一のない一つの大きな社會的集塊である。その意識に統一のある部分は、その大衆の中から、或は經濟上の組合として、或は政治上の政黨として組織されたものである。この部分は、いつの場合にも、比較的少數者である。組合や政黨が、勞働大衆や勤勞大衆の大部分を結合すると言ふ場合は、ほとんど絶對にあり得ないと言つてよい。大衆は常に存在する。

だが、その組織された部分、意識に統一のある部分が『大衆を動員』することは可能である。それは、大衆の意識の雜多性が背後に押し遣られて、その利益の協同が前面に強く押し出される時である。それは例へば戰爭の場合とか、經濟的急迫の場合とかである。この條件が生じた時、それは一種の××的形勢だと言つてよいのである。大衆の利益協同を、多かれ尠かれ呼び醒して、多かれ尠かれ、それを動員することは、すべての機において可能であるが、しかし眞に『大衆を動員』し得ることは、その形勢があつて始めて可能なのであつて、××を行ふものは、その意味において、常に大衆である。

大衆の批判に信頼するとか、大衆の審判に待つとか言つたことがよく言はれるが、大衆それ自身は、いまも言つた通り、意識に統一のない大きな集塊であつて、ある時期に、その利益協同によつて統一體を形成するに過ぎない。だから大衆は常に、意識に統一ある部分によつて、率ひられなければならない。少し六つかしく言ふと、大衆の自然生長性が、目的意識性によつて率ひられなければならない。その時初めて、大衆が大衆として働き出すのである。（三・七）

壇上から觀た現代の大衆

鶴見祐輔

「悄然なくして、大事を爲し遂げたるもの未だあることなし」

といつたエマーソンの言葉を、私は少年時代から愛誦して居る。個人にとつても大衆にとつても、最も大きい力は、燃ゆるが如き情熱を以て抱く確信から湧いて來る。ゆえに大衆を動かす力は情熱である。

それは利のみではない。理のみではない。徳のみではない。それ等のものと或時は一致し、或時は反撥する情熱だ。情熱は時として、安價なる感情と混同せられ易い。時としては沒理盲目なる感能の衝動と誤られ易い。時として群衆心理の所産なる野次馬氣分と穿き違へられ易い。しかしそれは情熱のみの陥る罪ではない。天下何物にも背中合せの陥し穴はある。たゞ純不純、誠不誠の判斷が本物と僞物とを區別する。個人にそれある如く、大衆にもその判斷はある筈だ。

ゆえに私は、大衆を最も力強く動かすものは情熱だと言ふ。

その情熱の表現の形式は、何たるやを一定しない。たゞ壇上の人と壇下の人との魂が、ぴつたりと相對すればそれでよいのだ。

それは辯論である時に限らない。文章に於ても同一である。我々は千年前の古人の文脈の中に流るゝ情熱に動かされて感憤し流涕する。故に壇上と壇下とに於て相對するときに於て、我我は不可逃避的なる情熱の感化を受けるのだ。

二

冷かなる推理を主とする科學者の文章すら、百代を動かしてゐるのはこの作者の胸中に燃ゆる確信である。況んや人間と人間との直接の接觸なる政治――殊に選擧運動の際に於ては、最も人の動き易きものは、眞率なる確信の力である。

たゞ直面してゐる際の大衆が一時の情熱によつて動くとしても、その感動が果して久しく腦裏に殘留するであらふかどうかといふ問題となると、これは更に第二の問題である。

壇上から受ける情熱の影響は、感情に訴へる場合と、理性に訴へる場合と、道德心に訴へる場合と、利害心に訴へる場合と、色々ある筈である。そのいづれが果して最も長く大衆の腦裏に殘留するであらふかは、その個人々々の性格と境遇とによつて異る。

理性を納得せしめ、道德心を鼓吹する如き情熱が、長く大衆の腦裏を支配するのであつたなら、それは大衆運動の上乘である。若し斯のごとくして民衆政治運動が遂行せられるとしたならば、それは理想的立憲國たるに庶幾い。

然し今日の日本の實狀は到底左樣に進んでゐない。私は遺憾ながら、利害心と感情とに訴へる場合が、効力に於て多いので

はないかと思ふ。此點に民衆運動の危機が包藏せられてゐる。

三

しかし從來の日本の選擧の際に、大衆を動かしたものは情熱では勿論なかつた。少くとも最近二十年間の日本の選擧の最重要なる動力は、言論ではなかつた。

それは、因縁情實と、買收と、官權の干渉とであつた。ことに因縁情實は日本の大衆を動かす最大なる力であつた。ある縁故を辿つて懇請し强迫することが、選擧大衆を動かす最有効な方法であつた。さうして、これと同時に買收といふことが、殆んど公然と行はれてきた。

この二つの現實なる事實を熟知する者は、言論による日本の大衆運動のごときは、小說中の空想事として嗤笑した。選擧の決定は、白兵戰又は實彈戰なる文字によつて代表せられる買收によつて決定するものと相場は定まつてゐたからである。

斯のごとき方法を最よく知悉せる人々を選擧界の玄人と稱し、かゝる玄人を村々町々に、網の目のごとく配置したる組織を稱して『地盤』と言つたのである。故にかゝる『地盤』を獲得さへすれば、候補者は如何なるものでも當選するといふことが從來の慣例であつた。さうして、かゝる『地盤』を讓受けて此處に立候補する者を公認候補者といつたのである。故に公認候補者たる資格の第一は、その選擧に堪へる金力ありやといふことで、これを政治的術語で『鞄の重味』と言つた。そこで選擧はカバンとヂバンがあればよいのだ、といふことが最終の審判であつたのだ。

かゝる『地盤』と『鞄』とを有する候補者が選まれて出て來るのを集めて所屬代議士何百何十名の大政黨といふものが出來上るのである。そこでその政黨所屬の代議士は、選擧の爲めにからぽになつた鞄を、次の選擧までに充塡しておく必要があるから、色々の利權漁りを初める。しかるに利權漁りをする爲めには、政府を取つてゐる時が最有利であるから、露骨な政權獲得運動をする。その結果は國利民福に反する政治が行はれて、國民が困る。

しかし國民は不平をこぼし乍らも依然として、選擧の時には、選擧玄人の指揮のまゝに從順に政黨所屬の代議士に投票する。

それが今迄の大多數の日本有權者の習慣であつた

四

そこで問題となるのは、今回の普選に於て、果してかゝる從

來の慣習が多少なりとも改善せられたかどうかである。少なくとも都市に於ては、明白に然りといふことが出來ると思ふ。

都市は農村のやうに道路學校橋梁などの利害問題が少い爲めに、官權の好餌による誘惑が從來とても乏しかつた、ゆえに農村の如き惡習に染みてゐない。また都市の住民は農村のある人々のやうに窮迫してゐない爲めに僅少の金錢では買收し難い事情がある。また都會の住民は密集して居住してゐる關係上、群衆心理が働き易い。その爲めに相互間の輿論の制裁が起り易い。また都會の人は新聞を讀む。從來とてもかゝる事情であつた處へ、今度は普選となつて、殆んど凡ての人が有權者になつた。そこで勢ひ大衆運動といふものが都會では起りよくなつた。

此の點から言つて、今回の選擧に於て、都市だけは一種の大衆政治運動といふ氣分が濃厚に現はれた。聽衆が情熱によつて動いた場合が頻々として見られた。又その情熱の命令する通りに投票した例が屢々あつた。都市に於ては買收と情熱と戰つて情熱の勝つた場合が決して少くなかつた。此點に於て私は、少くとも日本でも、都市では本當の大衆政治運動が起りかけてゐると思ふ。

五

然るに日本の政治的中心は、――選擧の關する限り――都會にあるのではなくして、農村にあるのである。その農村では然らば、大衆は如何にして動いたか

農村の青年の中には、明白に新しい大衆運動的氣分が濃厚に現はれてきた。乍併、二十五歳といふ年齡制限の爲め、實際は數へ年二十七才でなくしては、投票權が無く、又一年間の居住制限の爲め居所轉々し勝ちの未婚の青年は多く有權者でなかつた關係上、有權者は多く三十才以上の人々が多かつた。

三十才以上となれば、次第に情熱に感激し難くなる頃である。ことに今日の疲弊しきつた農村の狀態では、政府から受ける多少の保護と、現金の買收とが力强い誘惑として動き易い。且つ散在して住居する農村の人々は覗ひ打ちがきく。於玆、農村に於ては大衆運動といふものが頗る起り難い事情である。

故に今回の選擧を農村を中心として觀察した人々は、必らず失望したと思ふ。まだ日本には普選は早いといふ結論は、農村の選擧運動を見た人々に起り勝ちである。新有權者も舊有權者も變りはない、といふ議論は、この農村投票の光景を見た人々の抱いたところであつた。

併し仔細に觀察して見ると、かゝる一見舊態依然たる農村に於ても、時代の波は打ち込んでゐたのである。少く共投票割合に於ては、買收が以前程きかなくなつて居るといふことだけは確かである。又、無權者たる青年の空氣といふものが村の大勢を支配したところが決して鮮くない。

　殊に最も悦ぶべきことは、此等眼醒めたる青年達は、發達しゆく力である。この青年を囚へた人々が、明日の農村の支配者であり、又同時に明日の日本の支配者であるのだ。

六

　茲に我々の見拔してならぬことは、婦人の勢力の擡頭である。婦人は勿論有權者ではない。しかし婦人は非常に大勢演說會に聽きに來るやうになつた。從て婦人の贊否といふものが、町と村との輿論を動かした例は決して少くない。日本の婦人は決して政治に無關心ではない。これは婦人參政權の近き到來と關聯して、日本の政治上の重要なる一因子である。

七

　しかし日本の大衆を論じる場合には、これ等買收とか因緣情實とかの外に、日本特有の大衆心理の存立することを見拔してはならない。その一つは、判官贔屓とも言ふやうな一種の同情心である。ある男氣である。例へば、前に落選してゐるときつと强烈な同情が起る。また官權があまり非道な干涉をすると反對に大衆的同情が湧く。また候補者が貧乏であるとか不具であるとか大病であるとかすると、きつと勃然たる同情が生じて來る。この同情の波に乘つた人はきつと成功する。これは日本の大衆の同情癖とでもいふべき特有な心理である。

　その次に我々の常に感じることは、日本人の英雄崇拜癖である。この英雄崇拜癖は何も日本人に限つたことではないが、ことに我々の血潮のうちには英雄崇拜情調が多分にある。同情心の方は一時の現象であるが、英雄崇拜の方は永續的である。殊に農村などでは、殆んどお稻荷樣を信心するやうな力をもつて、その代表者を信仰する。であるから、これは金力でも權力でも辯力でも奪ふことが出來ない。學堂宗、木堂宗、原敬宗などが、此等の人々の地盤を金城鐵壁化してゐたのだ。何度も當選してゐる人々は、大てい鄕里にかうゆう信者の團體を持つてゐる。そこに日本國民性の片鱗がある。日本國民は指導者如何で隆替すると私は常に思つてゐる。

　その次に、今後の傾向としては、日本の大衆は次第に明白なるプログラムを要求し出すと思ふ。國民生活にぴつたり當て嵌

まるやうなプログラムを、情熱を以て民衆の良心に打ち込んでゆく人々が、明日の日本の支配者であると私は思ふ。

——（昭和三、三、六）——

文士の應援演說と大衆の反響

木村毅

今度の總選擧には、私とは謂はゆる「同業」の文學者諸君が可なり澤山演壇に立つて、應援演說を遣つた。それが大衆に如何なる反響を呼び起したかを、私の眼についた限りに於て報告する事も、現在の大衆を知る一資料にはなるであらう。

その前に斷つておくが、選擧の應援は必ずしも演說に限つた事は無いのである。ポスタア貼りでも、會場借入れの奔走でも、或は自分が地方に應援に出かけるのを思留つてその汽車賃だけを寄附するのでも、それ〴〵の効果は擧がるのである。

而も文士諸君がその方面の應援をしたのは極めて稀で、或は絕無で、みんながみんな競ふて演壇に立つた。これはやがて彼等文士諸君が、演說に於ては他の如何なる部面に於けるよりも、最も顯著に應援能力を發揮し得ると自信してゐた事の證明になる。

併し果して諸君の自信に適はしき結果が擧がつたかと言ふに、此れは眞反對であつた。出る辯士も出る辯士も政治演說と來たらカラツ下手で、何を言つたらいいのか見當さへ付いて居ないやうなのがあつた。

尤も菊池寬氏を應援した諸君の多くは平常から餘りに政治などに多く關心を持つてゐないやうに見受けられる上、陽氣に騷ぐことは大好きと來てゐるから、それが茶番か狂言のやうになり終つたとしても格別不思議はない。だが左翼文藝家の諸君は一昨年あたりから、文壇の政治的進出、文藝の政治鬪爭の一翼への參加——などと、賑やかに喇叭を吹き立ててゐたのだから、そしてその上今度は競ふて演壇に立ちたがり、この期に應援演說をしなければまるで時勢から落伍するかのやうな焦り方さへしてゐるのだから、誰しもその方面の準備は充分に出來てゐる事かと思つてゐた。政治方面の知識も心掛け、辯舌なども相當に練つてゐる事かと思つてゐた。

所が案に全く相違して、二三人を除く外、演說は糞ッ下手、內容はてんでなつてゐない。明らさまにさらけ出すのは氣の毒な話しだが、『何某の如き愚演說を聽かするは吾等聽衆を愚弄するの甚しきものである』とか、『何某の如きは却つて投票の妨害とならん』とか言ふやうな手紙が、毎日のやうに事務所へ舞ひこんだものだ。明記しておくが勿論私も決してその除外例ではあり能はなかつた。

そこで何時となく『文士の減票演說』なる言葉が生じて來た位だ。もしもその演說が無害ならまだしも上々の方で、『淸き、明るき一票』をかち得るに多少とも役立つた者と言つては、何十人か立つた文士の中、恐らく五人とは數へられまい。

それでゐながらその減票演說に散々味噌を付けた御當人が、選擧中は『今や政戰多忙』とか『××地政戰從軍記』だとか、一廉の功名を立てたやうに見榮を切り、選擧が濟むと『三旬の政戰に疲勞して、物を考へる力だにない』と、まるで既成政黨の大首領が全國遊說でも濟ました時のやうな事を書いてゐるのを見ると、ひたすら恐縮の外ない。

今後はいざ知らず、少くとも此の劃期的な第一回の普選に際しては、文士は先づ演壇から大衆のためにボイコットせられたものと言つてよい。

尤も、文士と云ふ文士が何故に、演說に於て最も應援能力を發揮し得ると自信して、壇上に立つたかと云ふに、私はその理由の一つをかう考へる。即ち文士程常に大衆と連絡、接觸してゐる者は他にない。そこで俺には大衆の氣持が充分分つてゐるから、俺の言ふことなら耳を傾けるだらうとの自惚れを、彼等は暗默の裡に持つてゐたのではないかと。

それが何故、美ン事裏切られて、大衆から演壇でボイコットせられたかと言ふに、そこには文士の目測錯誤があつたのだ。成程、彼等は常に大衆と接觸はしてゐる。しかしそれは出版物を通しての間接々觸なのだ。所が演說は面と面との直接々觸だからどうしたつて同じ手加減では、大衆の心を動かす事は出來ない。

隨つて同じ文士の中でも、前に勞働運動などして、大衆との直接々觸の經驗を豐富に持つてゐる人達は、概して成功してゐる。私自身で云ふならば、東京とか、信州とか、知識階級の比較的多い所は幾分か耳を傾けて吳れた人があるかも知れないが、群馬や、栃木、殊に足尾などは何の效果も擧げ得なかつたと思ふ。尤も足尾は、私も初めから行くことに氣が進まなかつたのだ。併し資本家の暴壓が甚だしく、もし無產黨に投票でもしやうものなら足尾の町に經濟的封鎖を行つて商家を絕滅し、電燈水道の供給を絕ち、坑夫は悉く馘首すると威嚇して、町民の氣持が萎縮し、町中陰慘な空氣に掩はれてゐた。そこで演說會でも開いて、自分から元氣を付ける事が必要であつたのだ。

而も麻生君は外での轉戰の都合上、急に行けないので、私に『却つて君等のやうな文士ののんきな話が陰慘な氣持を解いて

くれるから」との話だつたので、私は單身乘りこみはしたやうなものの、却つてそれは減票演說となり終つたであらうことを恐れてゐる。

　足尾を坑山勞働者に加へた代表的發展だと言ひ得べくば、香川のは農民に加へたそれだ。足尾を資本家側から來た代表的選擧妨害だとすれば、香川のは官憲から來たそれだ。此の二つの比較は色々な意味で興味があらう。

　香川で大山氏が落ちた。足尾で麻生君が落ちた。あの強固な農民組合、あの關繫の古い足尾を背景としながら、二人とも落ちたのかと思ふと、一見、大衆はたよりない氣がしないではない。併しそれは單に當落にのみ重點をおいて見過ぎてゐるためで、あの松方内閣以來の大暴壓に抗しながら、大山氏も麻生君もあれだけの票數を獲得した事を思ふと、私は寧ろ大衆の反撥的彈力の強固なのに、或る頼もしさを感ぜざるを得ない。

　或る當路者は言つた。無産政黨は都市に成績がよく、地方、特に農村に惡い。これ日本の人口の大部分を占める農民が無産政黨を信用しないためで、その限りに於て既成政黨の地位は安泰だ——と。

　もしも官憲の暴壓、投票の買收など少しもなく、フエア・プレイが行はれて、而も無産黨の候補が地方で全敗したのだつたら、彼の言に動かし難い眞理があらう。だが、文士が間接々觸と直接々觸との問題を論つた如く、この官僚の言にも大きな錯誤がある。彼はあの大暴壓にも屈しなかつた大衆の彈力を少しも認識してゐない。見よ、組織勞働者の間には、彈壓も、切崩しも、買收も殆んど効果を奏してゐないではないか。そして各地とも組織勞働者の數以上の票數を集めてゐるではないか。此の大衆の彈力は無産政黨の最も輝やかしき明日を約束するものだ。

　無産政黨の成績を離れて、政友、民政の對立を見ても、どうせ兩惡だが、より多く惡い政友が所期の頭數を集める事に失敗し、惡さの幾分かより少い民政があそこ迄漕ぎつけた事が私達には愉快だ。賛同廿名と云ふ武藤山治の豫想が五分の一に崩れたものも同樣！

　開設當時の初期議會はいさ知らず、政府與黨が勝つと相場の定まつてゐる日本の總選擧に、狂ひの來たのは清浦内閣の時が最初で、あの時は直接國稅參圓にまで資格制限を擴大した時だつた。今度は與黨敗北の、二度目だが、これはたとへ曲りなりであるにもせよ普選のお蔭である。

　即ち大衆の參與を擴大すればする程、與黨必勝の鐵則が破れて來る傾向がある。腕の喜三郎、山岡警保局長、多くの札付き知事、怪文書、議會否認聲明書——色々と道具は揃えてみたが、頭數としては民政が有勢で、朦朧中立や賛同は思ひの外に數が少い。吾々無産黨が八個の議席を獲得し、その總得票數は優に既成政黨の脅威となつてゐる。

　繰返して言ふ。私には大衆のあの彈力が頼もしい。

經濟時評

公債非公募主義の抛棄

牧野輝智

我國財政の禍根は公債激増の狀勢が停止する所を知らないことである。大正三年末に二十五億六千萬圓であつたものが、昨年末には五十三億四千萬圓に增加してゐる。國庫の負擔は其の利拂だけでも年額、二億六千萬圓である。此の公債額に對し、減債基金の制度はあつても、一方で公債の新規發行が其の二倍三倍もあり、此の外に震災手形の肩代り公債とか、臺銀救濟公債などいふ巨額の交付公債が發行されるので、公債の增加はすさまじい勢であつて其の總額が六十億圓を突破するのはこゝ一年立つか立たないかの間であらうと憂慮されるやうな狀態である。

然るに政友會內閣はさういふ財政經濟の根幹的問題には頓着なく、頻りに公債日當の事業計畫を試みてゐるが、其の放漫なる公債政策の一端として今回いよ〳〵實現したのは、公債非公募主義の廢棄されたことである。公債非公募主義といふのは、加藤（友）內閣の大正十二年度豫算以來公債方針として標榜された主義であつて、公債の新規發行に際し、金融市場から公募することをなさず、（一）預金部にて公債を引受けること、（二）郵便局にて公債を賣出し、零細の資金を吸收することにより公債金を調達することである。正しい議論としては、近年の我財政經濟の實狀にては、一切の公債日當の新計畫を見合す可きであるが、財政整理を重要政綱とした加藤憲政內閣でも、それを徹底せしむる勇氣なく、公債日當の事業は一億五千萬圓を限度とし、其の調達の方法を一般金融市場から募集せず、預金部引受と郵便局賣出しに限定したのである。金融市場から募集しないといふのは、政府の公債政策によつて、產業資金を政府事業に吸收し、金融市場を壓迫するの弊を避けるためである。其が

即ち公債非公募主義なのである。此の主義が採用され、實行されたのは當時銀行家連が熱心に之を希望したことが、與つて力あること特にいふまでもない。

◇　　◇

爾來公債非公募主義は今日まで支持され、公債政策全般の問題としては甚だ微温的の政策に過ぎなかつたけれども、兎に角公債政策による金融市場の壓迫といふことだけは避けることが出來た。又前の政友會内閣當時のやうな公債激増の形勢を幾分緩和するだけの力はあつた。然るに今回の政府はいよ〳〵此の主義を廢棄して、昭和元年度に屬する未發行公債（震災善後公債）七千三百七十餘萬圓中、六千萬圓を金融市場から公募するに決し、東西シンジケート銀行團も多年の主張を一變し、歡んで此の公募に應ずることになつた。公債非公募主義を廢棄した理由として政府及び是に贊同した銀行家のいふ所は左の二點に存してゐるやうである。

一、近來金融が著しく緩漫となり、政府が新公債を公募しても何等金融市場の壓迫にならないこと。

二、震災手形法、特別融通法、臺銀救濟法等の實施の結果として、我國の通貨事情は頗る不健全の狀態となり、日本銀行は通貨の統制力を失はんとしてゐる。此の場合に政府が公債を發行して民間の通貨を吸收することは日銀の通貨統制力を回復する有力の一手段である。

此の辯明は一應道理あることのやう聞ゆるけれども、少し立ち入つて考へて見ると如何にもうはすべりの議論であつて、前後六ケ年も恪守して來た非公募主義を拋棄する理由にはならないことが了解せられる。試みに此點を反駁すると、第一の理由は金融の緩漫といふことであるが、金融恐慌に原因した今日の變態的金融緩漫が、果して公債非公募方針を一變するの理由となるであらうかそれが大なる疑問である。成る程大銀行には資金が集中してゐる。彼等は其の確實な放資手段に苦んでゐる。此の場合政府が公債方針を變更して、彼等の抱擁する資金を使つて與れることは、一時的に見て好都合に相違なからうが、元來我國目今の金融緩漫は極めて不健全な變態的の緩漫である。大銀行こそ資金の餘剩に潤ひ、堅實なる放資法に苦しみ其結果金融緩漫の現象を演出してゐるけれども、銀行預金の總額からいへば昨春の恐慌前に比し、寧ろ減少してゐる。即ち昭和元年末の全國普通銀行の預金總額は九十億三千萬圓であつたが、最近（昭和二年十二月末現在）では八十九億六百萬圓に減少してゐる。金融恐慌直後程の減少ではないにしても、兎に角一億三千萬圓は減少してゐることを示してゐる。是は金融界の

其調が未だ決して回復されてゐないことを語る一つの事實であると思ふ。然るに一方郵便貯金はどうかといふと、多數銀行破綻に基く銀行疑惧の結果として、金融恐慌以來著しく激增してゐる。是を數字にて示すと、金融恐慌前の郵便貯金は十一億圓であつたものが、昨今は十六億圓臺となり、四億圓の增加になつてゐる。從つてそれ相當に預金部の會計は大きくなり、公債引受の資力は增加してゐる道理である。斯の如くに金融市場の資源たる銀行預金は減少し、預金部資金は激增してゐる場合に、預金部引受による公債資金調達の方針を改め、特に公募方針となすは、甚だ矛盾した處置であるといはねばならぬ。

それればかりでなく、公債非公募主義の拋棄は、公債の濫發に對する一つの制限の撤廢であるから、政友會放漫內閣の公債政策をして、いよ／＼益々放漫ならしむるの端を開くものであつて、此の點は特に私等の憂慮に堪えないことである。

◇　　◇

非公募主義廢棄の第二の理由たる日銀統制力の問題は、之亦私の了解に苦しむ申譯である。いふまでもなく日銀統制力の回復は重大問題である。此の點に就ては本誌前號に於て陳べた通りであるが、元來此の日銀の通貨統制機能の喪失なるものは、特別融通法其他の非常法律によつて巨額の固定貸をなしたことが主要原因である。それであるから統制力回復の手段としては、其の原因たり又は原因たる可き問題を除去することが肝要である。即ち特融の期限を斷じて延長しないこと（政友會では頻りに其延長を希望してゐる）。其貸出額を出來る限り小額に止めるため、今後の貸出を嚴重にすること、既に貸出したものに對しては其始末に徒らに永びかしめないこと等が必要である。而して公債による通貨收縮策としては、日銀手持の公債を賣出して、通貨を回收することは有效であるけれども、政府の事業費に充當するため、新に公債を發行するのでは、何等通貨收縮の實が舉らないばかりか、新發行の額だけ更に將來に於ける通貨膨脹の素因を作るものである。是により通貨縮小を實現させやうなどとは思はざるも亦甚しいことである。

要するに政府當局が發案し、銀行家が共鳴した公債非公募主義の拋棄は、銀行家が眼前の御都合主義のために放漫內閣の不眞面目な政策を助長するものであつて、主義方針が一度破られた以上、鐵道公債を始めとし、不急事業の公債が續々公募されて、金融市場の資金を引上げることゝなるは當然の歸結である。私は公債政策の問題として、又金融市場の問題として、今日の場合非公募主義が弊履の如く拋擲されたことを深く遺憾とする次第である。

小賣商問題と消費經濟

生活苦の現實問題と無關心の階級は別問題として、中産以下の人々の等しく體驗しつゝある苦痛は、我々の日常生活品の購入値段が、其の生産費に比較して餘りに高値であることである。一合二錢位で元卸されるといふ牛乳に對して我々は、十錢以上の金を拂はねばならぬ。生産者の手取金一顆二錢位のキヤベツが八百屋から我々の手に入る時には十二三錢の高値になつてゐる。北海道の産地で一尾三十錢位の鮭を東京の小賣店では三圓近くで賣つてゐる。牛乳や野菜、魚肉類などはやゝ極端の例であるかも知れないが、現に角商品の小賣値なるものは最初の生産費に比して其の開きが餘りに大き過ぎる。是を縮小することが我々の實生活を安易にする所以であり、又國民經濟を合理化する所以である。

然らば其の手段は如何にす可きかといへば、無論その效果を擧げるには色々の手段を講ぜねばならないが、私は其の幾多の手段中の重要なる一として中間商人を經由する回數を出來得る限り減少するの必要を痛感するものである。我が日本の現狀は小賣商の國である。市街といふのは小賣商が軒並に店を開いてゐる狀況の別名である。而して僅か一丁足らずの距離の間でも十軒にも近い菓子屋がある。數軒の八百屋がある。下駄屋がある。荒物屋がある。是等の多數の小商人の生活費は皆な最後の購入者に轉嫁されてゐる。小賣値が著しく高くなるは、當然のことである。斯樣の狀態であるから、購買組合の普及とか、公設市場の增設とか、種々の手段により、生産者と消費者との距離を接近せしむるとの必要は、識者を待たずとも諒解される譯であるが、實際の問題となると此の趣旨に反する經濟政策が頻りに行はれ、それが寧ろ歡迎されつゝあるのである。

◇　◇

現在の問題として我々の目につく一つの施設は小商人の金融保護の問題である。昨年の金融恐慌は中小商工業者の金融を著しく梗塞せしめた。政府では是を緩和する一手段として郵便貯金により增加した預金部資金にて、中小商工業者に低利資金を融通し、其生業の保護を努めてゐる。私は中小工業者の金融的救濟を必ずしも惡いといふのではない。これは當面の差迫つた問題としては此の種の救濟策も惡いといふ譯には行かないが、此の場合に我國の小賣商の制度は、現狀のまゝ之に保護を加へ存續せしむ可きものであるかといふ根本の問題に就ても考慮を試

みるの必要がある。私は金融恐慌、小商人の經營困難を機會に、國民經濟全般の福利を增進せしむる見地からして、多數の小賣商人を今少し有意義の生業に轉換せしむることをも考慮す可きとであらうと信ずるのである。小賣商の多いのはそれだけ消費者の負擔を增すばかりである。消費者は居ながらにして種種の日用品を入手することが出來るが、それだけ彼等の生活苦は加重される譯である。私は今頃フヒジオクラツトのやうに田畑を耕作し、農產物を收獲するやうな原始的の仕事ばかりが生產業だといふのではない。小賣商人の仕事も亦一つの生產業には相違ないけれども、我國のやうに小賣商人の多いのは確かに經濟組織の缺陷である。從つて今日は當座の問題たる小賣商の保護よりも、寧ろ如何にして小賣商を今少し有意義の生業に轉換せしむ可きかの具體案を攻究することが、根本の問題であり、又重要の問題なのである。

◇　◇

小賣商保護か消費者保護かの問題に密接の關係ある問題として百貨店對小賣商の問題がある。近來百貨店の經營が著しく民衆化し、特に大都市にありては頻りに小賣商の顧客を吸收し、小賣商の營業難を惹起する一つの原因をなしてゐる。此の現象に對し社會政策上看過してならない問題だなどと憂慮するものもあり、一種の救濟運動さへ起らんとする形勢である。併しながら此問題も所謂社會政策論者の言の如くさう單純に觀察し斷定す可きものではない。關係は單なる大資本對小資本の問題ではなく、寧ろ小商人對消費者の問題である。若し百貨店が大資本を擁して暴利を恣にし、微力なる小商人の營業を强奪するといふたゞそれだけの事實であるとすれば、それは經濟問題としても社會問題としても看過し難い不當な問題であるけれども、問題は更に複雜である。大規模の百貨店の商品は總べて大量的に取扱はれるため概して價格は低廉であり、品質は確實である(例外はあるにしても。)果して小賣値を低廉ならしむるには中間商人の減少が必要だといふことが正しいとすれば、百貨店の普及は確に此の趣旨に適するものである。私は大資本保護の趣旨からではなく、消費者の利益保護の見地からして、百貨店對小賣商の問題は小賣商擁護者の主張に同感を表しかねる次第である。尤も今日の百貨店にも幾多の不備はある。其營業振りに非難する點も尠くない。又奢侈の風習をそゝるの弊あることも看過する譯には行かない。併しながら消費者の過重の負擔を輕減し、消費經濟の缺陷を根本的に改むるには、消費經濟を大量的の販賣施設と直接に接觸せしむることが肝要である。而して百貨店の出現及び其經營の民衆化は此の趣旨に合するものであ

る。此の外公設市場の普及も、購買組合の發展も、小賣商人の立場からいへば呪はしい現象に相違ないけれども、是等は經濟生活の改善の爲めに、消費經濟の合理化の爲めに、今後更に大に普及せしめ改善せしめねばならぬことである。

◇

電車が普及し自動車が增加し都市に於ける人力車の存在餘地は著しく狹められた。是は人力車夫の失業問題として見れば、大に同情す可きものがあるけれども、我々は人力車夫に同情して電車敷設、自動車の普及に反對する譯には行かない。交通運搬の設備を整へ、社會的經濟的の生活を、より幸福にすることは、人力車夫の失業問題よりも更に重要であるからである。小賣商人整理の問題も趣旨は之と同一である。一般消費者の利益保護のために、是を犧牲とすることは事情已むを得ないことではあるまいか。私は小商人の金融保護の問題は最近具體化し、百貨店對小賣商の問題は一種の社會問題として重大視すべきの聲を聞くに反し、消費經濟の見地からして、小賣商人の問題を根本的に論究せんとする者の、殆ど存しないことを頗る不思議に考ふるものである。

文藝時評

故　片上　伸

(絶筆) 小島勗君の『遙なる眺望』に於ける表現主義

世間で新らしい作者の部類に入れてゐるもの必ずしも悉く新しくはない。文壇も人間の集まりであるのだから、交友の關係や先輩の好意などで、過分に新人として認められてゐる場合もないとは言へない。いつか讀んだ池谷信三郎といふ人のものなどは、文章も何も隨分古くさい氣取りに充ちてゐて、甚だいやみなものだつた。あの人などが新らしいと思はれたのは、一時的にもせよどういふ點からであつたらうか。世間の評判と言つても、その實文壇一部の人たちの間の評判に過ぎないかも知れないが、さういふ評判も存外よい加減なものである。ふやけた仲間の空氣の中では大目に見られてゐても、讀者は不斷に動いてゐて、次から次へと新らしい圈を作つて行く。ふやけた仲間の大目に見た評判などといふものは眞に浮雲の如しである。

新進作家の數も近年夥しく殖えたが、その中には、不當に名聲を得てゐる人も少なくはない。その點から言へば、小島勗君の如き作家は、もつとひろく世間から認められてもよい筈である。

『遙かなる眺望』の中に收められてゐる二篇の作品(一つは戲曲『遙かなる眺望』、今一つは小說『地平に現はれるもの』)を、これと同じ文壇新人叢書中の黑島、里村、林三君などのものと讀み比べて見ると、小島君の手法の確かさは容易に分る。これを譬へて言つて見れば、前記三君のものには、板が薄手で危なつかしいところがあつたり、荒削りであつたり、ふし穴があつたりするやうなところがあるが、小島君のものにはさういふところが殆どないと言つてよい。手法は手堅くて、木目が細かくて、荒削りのまゝで殘してをいたやうなところがなく、カッチ

りと組み立てられてゐて、危なげがない。下つ端の弟子の稽古仕事ではなくて、とにかく棟梁師匠株の仕事だといふところがある。辭句の隅々にまで作者の神經が行き屆いてゐて、それでゐて氣取つたやうな、變に技巧的な感じはない。どこまでも眞ともに、眞正直に出てゐる。小島君はまだ幾らも世間に作品を出してゐない。一體に寡作の人らしいが、早く既に老手の風格を有してゐると稱してよい。この點では安心して迎へることの出來る作者である。『地平に現れるもの』は、この作者の處女作で、これによつて一部の人々から認められるに至つたものだと聞いてゐるが、今日これを讀んで見ても堅實な明確な現實の表現の間に、作者の主觀をたくみに綯ひまぜて行く技巧は、侮りがたき手堅さである。凡そさういふ方面の手堅さ確かさといふ點では——落ち着きのある、地味な、それでゐて一種の明快な清新さをもつてゐる點では、ハンディキャップなしに、この作者を信頼させるに足りる。

しかし、さういふ手法の上の堅實な特兆のほかに、この作者に著しい、別の重要な特兆がある。そしてそれがこの作者の作風の根本的な特兆を成してゐる。それはこの作者の作風が表現主義的だといふ點である。この特兆は、手法技巧の上にも勿論あらはれてゐるのであるが、殊にこの作者の根本的な世界觀の上に、一貫して鮮やかにあらはれてゐるのである。

戯曲『遥かなる眺望』の生活の舞臺は、作者の斷り書きによると「二十世紀初頭のヨーロッパ」といふことになつてゐるが、この地方的制限はぼんやりしてゐて、實際はドイツの生活のやうであるが、作者はそれに頓着してゐない。この時處の制限の明確でないといふ點も、夢幻的な場面の頻出する點も、何れも表現主義的手法の格式に從つてゐるものである。この作で、作者は明らかに戰爭に反對してゐる。ブルジョワジーの支配に反對してゐる。戰爭がいかに多くの不合理な殺戮と苦痛と不幸との原因になつてゐるかを繰り返して說いてゐる。そしてさういふ一切の苦痛を殘虐と不幸との責任が何人に在るか、それ等から脫するためにはどうすればよいかといふ問題に對して、作者はルドキッヒの母の口をかりてかう言つてゐる——

……私は貴方たちにお願ひする。貴方たち自身をとり返しなさい。さうです、貴方たち自身をです。貴方たちの自由をです。なぜなら自由な行爲は、自分自身を解放するでせうから！……

私たちは祖國のために、自分自身を失つてゐたのです。この古い、新しい神に自分自身を捧げるために！私たちは、祖國の名に於いて殺戮する……私たちは祖國の名に於いて殺戮

する……私たちは祖國の名に於いて法則を蹂躙する……私たちは罪を犯してゐたのです。なぜなら、神は人間ではなく、祖國は私たち自身ではないから！……

私たちは自分自身を失つてゐたのです。私たちの眞の故鄕である私たち自身を失つてゐたのです。お聞きなさい！私たちのうちにある私たちの故鄕以外には、私たちには祖國はない。私たち自身のうちにある協同社會以外には、私たちには祖國はない！……

聽け、私は懇願し、要求する――貴方たちの祖國をとり戾しなさい！貴方たち自身の「人間」をとり戾しなさい！

このルドヰッヒの母の言葉とともに、「吹雪が歇み、平野の上が明るくなる。空が神秘な――丁度波斯の繪にあるやうな――深い色に變つて行く。星が――環をつけた土星が大きく輪を描いた軌道の上に、その他の星がその周圍に――現れて來る」と作者は言つてゐる。

戰爭に伴ふ一切の殘虐と不幸と苦痛との由つて來るところは、人が――この場合に於いては戰爭の渦中に否應なしに投げ込まれてゐた兵士が、「自分自身を失つてゐた」といふ點にある。自分自身の中にあるところの眞の故鄕、眞の祖國、即ち自分自身といふものを失つてゐたところに、戰爭に伴ふ一切の殘虐と不幸と苦痛とが原因する。――これが作者の最後に與へてゐる解決である。この解決は、いかにも表現主義的である。純正な表現主義の立ち場からの解決のしかたである。

『遙かなる眺望』に於いて、讀者は戰爭の殘虐と不幸と苦痛とを明らかに見せられる。また從つてそれに對する憤りの感じを起こさずにはゐられなくなる。

（編者曰く）……片上伸氏は本年一月號より本誌の「文藝時評」欄を擔當せられて、我文壇のために大いに平素の蘊蓄を傾け、辛辣儁鋭の筆を揮はれんとして、不幸病魔の冒すところとなり、我文藝時評も休載を重ねるのほかなかつたが、終に去る三月六日卒然として逝去せられた。本篇は氏が病苦と闘ひながら本誌のために執筆せられたものであつて、素より豫定の何分の一にも達しないものであり、之を未定稿のまゝ發表することは氏の意志でないかも知れない事を虞れるが、今は貴き絶筆となり果つた本稿を此儘棄てるに忍びず、玆に登載して氏から讀者への最後の約束を果して貰ふことにした。

片上伸君を憶ふ

吉江喬松

片上君の思想的變遷については何人かゞ評論せらるゝ事と思ふが故に、今日は取急ぎ友人としての印象だけを御話することにします。

片上君が再度ロシヤから歸つてからは、日常生活の意識も態度も以前とは際立つて變つてゐたやうである。少くも自分から變つて行かうと斷えず努めてゐた事は歴々として見えた。以前とても世話好きでないことはなかつたが、世話をしてやるんだといふ風な點が目立つてゐた。最近はどんなうるさい事でも、事務的な事でも我から進んで悦んで引受けてやるやうになつてゐた。他の人として考へれば何でもない當然のことだが、以前の片上君のことを思ふと、全く際立つた變化である。自分の日常生活の意識内容から變つてかゝらなければならないと覺悟して努めてゐた事は、微細な點に亘つてまでよく現はれてゐた、

第三回目のロシヤ行きを企てゝ、その話も折々してゐたが、それが實現されたらば、單に同君の日常生活意識といふ方面からのみ考へて見ることゝしても、それは既に變化を示しだして來た同君の生活意識態度を十分完成せしむる機縁になつたことであらうと思はれる。そして同君の生活意識に初めて内容ある革命が遂行せられたことであらうと思はるゝ。少

くもさうしたいがために企てられてゐた二回目のロシヤ行きまであつたやうである。

一體片上君といふ人は最初は、抒情詩人としての要素を十分に見せてゐた人であつたが、自然主義隆盛時代頃から、その主情的な方面を極力否定して、卒直に自分の心持の變化を表示することを極端に輕蔑してゐた。それ故、自分の心持の變化を示す場合は、自分を示さないで他へ打當つて行つた。己れを鞭打つ手を同時に他に向けて行つた。片上君が學生を叱りつけたり小言をいつたりしてゐるのを見ると、いかにも同君自身が身に加へてゐる自責の聲であつた。論理化した抒情詩人といふ氣がいつもさせられた。それ故この自責の鞭を十分に加へた後は、晴々して笑ひ出すといふ方であつた。

併し、この點で、小言をいはるゝ方からすれば何故の小言であるか、解らなかつた場合も時にはあつたであらう、無理だと思はるゝ場合もあつたであらう。其處に誤解の生ずる場合もあつたであらう。と最一つは、片上君が自分の心持の大きな變化を卒直にそのまゝ書き現はさなかつたといふので、如何に變化して來たつたか、その經路が判らないといふ批評もあるやうであるが、それを自白するやうに書くことは、片上君の潔癖がゆるさなかつた。いかにも主情的で、センティメンタルな事のやうに思はれてならなかつたらしい

けれど、對坐してゐる場合、特に最近になつては、自分の心持をよく卒直に話してゐた。ことに自分の書いたものに對する批評は細かに求める方であり、書こうとする事の内容をも相當に前もつて話す場合が多かつた。何よりも感知性の鋭い人、それを説明することの細かさに於ては比類がなかつた。併しその鋭い感知性で自分でも知らず〱の間に自分の意識が動いて來てゐることは、或る具體的な現象に對して説明し表白してゐることによつて、その自己の動搖變化を示してゐるので、自分の心的經過そのものを端的に表現するといふことはしなかつた。或は出來なかつたかも知れぬ。自分ではかう思ふといふよりは、その事はあゝだ、これはかうだと説明してゐるなかに、その動搖變化を示してゐるのであつた。それ故、その説明は細かで、行き屆いてゐて、いかにも理智的で、論理整然としてゐるが、要するに説明であつて、根本は感知性の極めて鋭い、飽まで主觀的な人であつた。少くも現在までのところでは。

若し十年、廿年の歳月を與へて、片上君が自叙傳でも書くやうな場合があつたならば、それだけの餘裕が心に持てるやうになつたならば、それこそ行き屆いた理智で十分な滿足の行く心的變化の説明をしたことであつたであらう。現在では特にそれが出來なかつた。自分に對する注文が多ければ多いだけ、それを他に向つて投げかけるといふ行き方が多かつた。急速な自己淸算が不斷に行はれてゐた。それが敏感に行はれてゐる期間であつた。一瞬間でもだらけた氣分はいけぬ、といふ張り詰めた生活で、行かうとしてゐた。

片上君が自己に鞭打つ念は隨分嚴しかつた。私一個としては、片上君が自責の念から涙にくづをれる姿に打當つたことは二三度あつた。まつたく涙にひたるといふ姿である。それだけ他を叱責しても涙にまで溶かさずには置かない嚴しさがあつた。片上君の批評のなかで、人物批評であれ、或る學説の批評であれ、最も強くひゞくのは否定的な部分である。眞劍に自己を責むる如く他にも迫つて行つた。片上君のこの快い否定は今も私の胸に生きて動いてゐる。

恐らくこの否定が肯定に向ふ時機が除々に來つゝあつたのではないか。最近はその過渡期にあつたので、苦惱もあつたらう、強い希望もあつたらう、同時にまた一種の寂寞もあつたらう、張り詰めた氣分と、意想外な暢氣さを見せた調子とが取り混じてゐたやうである。

せめて最少しの歳月がほしかつた。片上君が第一回のロシヤ行きの前後は、まだ新理想主義的な態度を脱しなかつた。二回目のロシヤからの歸還は、大衆の一人として文藝を取扱ひ、大衆運動の機關の一つたらしむる了解に努めしめた。最少しの年月と努力とは、片上君をして新しきイデオロジーの開花にまつしぐらに、積極的に肯定的に向はしめたことであらう。それに伴ふ片上君一個としての生活意識内容が積極的に肯定的に變化を起したことであつたらう。まことに惜しいことをしたといふ念に胸が痛くなる。

突然の死去と、葬儀と、納骨とで疲勞して振返つて考をまとめてみることすら出來ない。私はたゞ友人としての印象を御話したゞけで、片上君が聞いたならば恐らく微笑してゐるだらうと思はれる。



推古の春

岡田信一郎

今年は、秋には昭和新帝の御即位の大禮が執行さるゝめでたい年なので、新春來瑞氣の充ちた心地がして特に長閑な年頭であつた。而して又戊辰と云ふ干支が、明治天皇の御代始めを回想させる。此の前の戊辰明治元年には、正月匆々伏見鳥羽の戰があつた。三月半には明治天皇天神地祇を祭つて、「五條の御誓文」を發せられた。江戶が東京となつたのは此の年の初秋であつた。明治天皇の御即位の大禮が執行されたのは此の年の仲秋であつた。而して其の十月には車駕東巡して、東京に皇居を定められた。而して此れから明治天皇の御偉業が年毎に日毎に具體化して、歷史の上に鴻きな跡を明瞭に印して行つた。明治天皇の御治世は神武建國以來我國勢の最も振興した時で、此の偉業は永遠に唉えらるゝであらう。

明治時代日本が歐米に直接接觸して、國運遂に振興して世界の有力國に成つた事は、寔に明治天皇の偉大なる御力に導かれたのであるが、此の如く他の大なる力と接觸して、日本の文化が躍進した事は、日本の建國國初から今に至る二千五百八十八年の恰度その中頃、推古天皇の御代に、曾てもあつた。支那大陸と接觸して其文化を攝取して、我國の文化が頓に整備した事がある。時の攝政聖德太子と共に推古天皇の御遺德は永く唉えらる可きである。推古朝の新文化吸收の狀態は、恰然明治大正の狀態とアナロガスにも見られやう。私の職とする建築の方面でも、今の歐米風の新建築と同じやうに、當時の支那風の建築が盛に流入し

たのである。其の推古天皇の千三百年の式年祭が、此の四月の十八日に當るのである。

昨年の師走の始めであつた。聖德太子奉贊會評議員會が開かれて、總裁久邇宮殿下の御賜餐があつた席上で、法隆寺の管長佐伯老師から、明年は推古天皇の千三百年の御遠忌に當る故、法隆寺では此の本願の大檀那たる天皇の御遠忌の御法事を營むが、一般にも天皇を御追想する事業があつたらばとの意を述べられた。而して三上參次博士からも、國史上推古天皇の御治世に如何に重大な意義があるかを說明された。其以後推古天皇奉贊の事業が如何う計畫されつつあるか、或は又全く行はれないかも私は聞知しない。然し職として私の關與する建築が、我國では此の推古の御治世から、始めて美術建築として發達して來た事を想ひ浮べると、推古時代は私にとつてはなほざりならぬ追想の種である。追憶回想の夢は時に樂しみでもあり、時に又要務でもある。夫故に私は新春玆に古史に親しむ機會を造つて、靜かに推古の御世を追想した。

私は休息のための小さい茅屋を鎌倉に有つて居る。其は大きな盤桓たる老松の下に建つて居る。私はいつも此松を仰いで、萬葉の中にある市原王の「一つ松幾代か經ぬる吹く風の聲の清めるは年深みかも」の歌を思ひ浮べる。實に梢頭いつも清颯の音を聞く事が出來る。而して仰いで古い昔を追想するよすがともなる。松の下には稻荷の小さい祠があつて、世俗宇都宮稻荷と呼んで居る。祠前の碑石には此地が昔て、賴朝歿後第二幕府の故地であると彫まれて居る。松は三抱へもある大木ではあるが、其樹齡は植物學者が科學的に驗たら、恐らくは德川時代の始を越すものでは無いだらう。然し其の盤桓危嶠の姿態によつて、私は直ちに鎌倉時代を想ひ浮べる。又或は靜かに萬葉の古い時代までを想ひ起すのである。私は此老松の下の名も無い小庵で、史書や歌書をわからぬながら見る事を樂んで居る。活字洋裝の新本は道樂に見るのには味が無さ過ぎる、さりとて古書は到底私達には近づく事が出來ない。復刻寫眞版の古書は、そのまゝには懷しい昔の香を持つては居ないが、それでも私達が平素の俗務から離れて一足飛びに昔らしい氣分になるには都合がよい。私は此處で古美術品の寫眞や、佐々木博士の復刻される萬葉の古寫本や、其他の復刻本等を見るのを樂んで居る、其小庵の建築も、名古屋風に全部漆造で塗つて、黝暗た古びたものにしてある。

新春私は此處で大阪每日新聞社刊行の秘籍大觀の古寫本日本書紀の推古紀を繙いた。之も元より中世の寫本の模刻ではあるが、其の古い色調や字體は、私達素人にとつては昔を想はせる

のに充分である。私は且つ讀み且つ想ふた。飛鳥のなだらかな丘陵の地を、秋の日を春中一ぱいに浴びて、田舍の人力車にとぼとぼと曳かれながら、橘寺や岡寺に詣でた事を想ひ出した。度度參詣する法隆寺の光景はありありと目に映つた。其處の推古の佛達の薄ら笑する尊顏も一つ一つ浮んで來る。中宮寺の觀音(彌勒)の懷かしい面ざし、酒買ひ觀音のなごやかな長身、はては飛鳥大佛と俗稱される安居院の佛の今は醜い姿など、見まじきものまでも想ひ出される。蘆の枯葉隱れに川千鳥が朝霜をしのぐ飛鳥の小川のあたり、今は霜柱に取圍れながら麥の若芽が生育の力强さを誇る畠から、秋の枯葉がうづ高く積重つて春の若葉の芽出しをかばう雜木林へかけて、一度は賑かな飛鳥の都が廣がつて、外國振の色鮮かな衣冠に威儀を正した朝臣や、見なれぬ服裝に、聞き慣れぬ言語の韓人達が行き交つた事もあるのだ。其當時の新知識の代表でお在した聖德太子の御姿を想像する事も出來る。

新に制定された衣冠を飛鳥風に吹きなぶらせて反り身になつて參朝する官人達の色とりどりの姿、傑構新に建造された寺々の梵音に去來する紫衣紅裳の僧尼の姿、飛鳥の都は美しかつた事であらう。物部守屋の一黨と蘇我の一族との、或は睨み或は嘲ける反目の容子も想像する。新知識を誇る韓人達と、醇朴な國人の行き交ふ時の目なざしも想ひやる事が出來る。飛鳥の朝は險しかつた事であらう。建築の技術を傳へて、遙々海を渡つて來た韓人達も又其下で新らしい技術を習得しようとて使はれて居る執心な國人達も想ひ浮べる事が出來る。或は佛像を刻むもの、或は法具を修するもの、寺塔朝に成り、壯嚴夕に備はつた。飛鳥の都は忙がしかつた事であらう。飛鳥の都にはカフエーやダンスホールこそ無かつたが、其當時相當のモダンボーイや、モダンガールも居て、我遲れじと衣裳を競つて、初心な里人を驚かしたり、又歷史上では、物部、中臣兩家が代表する「固陋」な人達の目を聳だゝした事であらう。韓風と泰西風との別こそあれ今の世態に引きくらべて、飛鳥の昔の有樣を偲ぶ事は困難ではない。而して今の東京と同じやうに、飛鳥の都には善惡共に新風潮が漲つた。

其の惡を捨て、善を採つて、今日までの日本文化の基礎を造つた推古朝の飛鳥人は實に嘆えらる可きである。而して私達は今泰西の文物を消化するのに此の祖先達の蹤を追ふて居るのではないか。

推古天皇御治世の大部分は聖德太子が攝政された、太子は人も知る我國史中、最も偉大なる、最も聰明なる人物の一人であらせらるゝ。其の日本文化に寄與せられた御功蹟は、恐らくは

何人と雖之を超すものはあるまい。其故に推古天皇の御治績は多く太子の功業に蔽はれた傾がある。しかし舊史を讀むと、時として天皇の赫奕たる光輝が、太子の豐かな彩炎を透して放射する事が、私達のやうな門外漢にも、ありありと見える事がある。

日本書紀卷第二十二は推古天皇の御治世を傳へて居る、其の劈頭に曰ふ、「豐御食炊屋姬天皇、天國排開廣庭天皇、（欽明天皇）中女也。橘豐日天皇（用明天皇）同母妹也。幼曰二額田部皇女一。姿色端麗。進止軌制。年十八立爲二渟中倉太珠敷天皇之皇后一。（敏達天皇）三十四歲渟中倉太珠敷天皇崩。三十九歲當二于泊瀨部天皇（崇峻天皇）五年十一月一。天皇爲二大臣馬子宿禰一見レ殺。嗣位既空。群臣請二渟中倉太珠敷天皇之皇后額田部皇女一。以將レ令二踐祚一。皇后辭讓之。百寮上表勸進至二于三一。乃從之。因以奉二天皇之璽印一。冬十二月壬申朔己卯。皇后即二天皇位於豐浦宮一。」とある。實に天皇の御即位は、我國史の最大汚點の一なる馬子弑逆の無道の後を受けて、物情騷然たる時であつた。且天皇は實に日本始ての女帝にましました。（神功皇后は永く攝政され給ひしも天位には即き給はず）、故に史家も之に就て多少の論議をするものもある。通證にも「今按守屋亡。而權歸二馬子一。於是外依二浮屠無二君父一之法上。而內眠二弑逆大惡之罪一猶立二女帝一。以柔二人極之大綱一。撓二亂神聖之倚法一。」云々とある。天皇の御母堅鹽媛は蘇我氏の出である。其故に天皇の御即位は馬子の擁立による事は想像に難くはない。然し天皇は決して蘇我氏の傀儡を以て甘じたまふお人好しの女性では無かつたやうである。續記する書紀の記載を見ても、萬事御信任あつた攝政聖德太子に對しても、又權勢並びなき馬子大臣に對しても、加へらる可き注意は加へ、許す可からざるものは許されなかつたやうである。現に天皇の御晩年ではあるが、其の三十二年に「冬十月癸卯朔。大臣遣二阿曇連阿倍臣摩侶二臣一。令レ奏二于天皇一曰。葛城縣者元臣之本居也。故因二其縣一爲二姓名一。是以冀之。常得二其縣一。以欲レ爲二臣之封縣一。於是天皇詔曰。今朕則自二蘇我一出之。大臣亦爲二朕舅一也。故大臣之言。夜言矣則夜不レ明。日言矣則日不レ晚。何辭不レ用。然今當二朕之世一。頓失二是縣一。後君曰。愚癡婦人臨二天下一。以頓亡二其縣一。豈獨朕不賢耶。大臣亦不忠。是後葉之惡名。則不聽。」とあつてかよわき女性ながら毅然として、馬子の不當の要求を斥ぞけられた御容子が見える。聰明な聖德太子ですら憚られた馬子の威權を、雄々しくも押へられた天皇は決して尋常一樣の女性では無かつたやうである。して見ると天皇の御即位は馬子一黨の擁護はあつたらうが、やはり衆望が歸したと見る可きであらう。

天皇の御記事は書紀に猶之より先に二三散見する。最初は書紀第十九巻の欽明天皇紀で次妃蘇我大臣稻目宿禰女曰二堅塩媛一生二七男六女一云々とあつて第四が豐御食炊屋姫尊即ち推古天皇である事を傳へて居る。第二は書紀第二十巻の敏達天皇の條で「五年春三月己卯朔戊子。有司請立皇后。詔立二豐御食炊屋姫尊一爲二皇后一。是生二二男五女一。云々」とあつて天皇が敏達天皇の皇后に立たれ、其第一の皇女菟道貝鮹皇女が聖徳太子の妃たる事も記載されて居る。第三は敏達天皇崩御後に起つた穴穗部皇子の事件である。書紀巻第二十一の用明天皇紀の始に「夏五月。穴穗部皇子欲レ奸二炊屋姫皇后一。而自强入二於殯宮一。寵臣三輪君逆。乃喚二兵衛一。重二璅宮門一。拒而勿レ入。穴穗部皇子問曰。何人在此。兵衛答曰。三輪君逆在焉。七呼レ開レ門。遂不二聽入一。於是穴穗部皇子。謂二大臣與二大連一曰。逆頻無レ禮矣。於二殯庭一誄曰。不レ荒二朝廷一。淨如二鏡面一。臣治平奉仕。即是無レ禮。方今天皇子弟多在。兩大臣侍。誰得二恣情一專言二奉仕一。又余觀二殯内一。拒不二聽入一。自呼レ開レ門。七廻不應。願欲レ斬レ之。兩大臣曰。隨レ命。」とある。かくて穴穗部の皇子は遂に物部の守屋を遣つて、三輪逆を斬らしめた事が記載されて居る。續いて事件は物部、蘇我兩氏の權勢争ひに刻々に進展して行くのである。斯る騷亂に際して、皇后（推古天皇）がよく果敢沈着にましまして、着眼快協の尋常の婦人で無かつた事は言外に窺ふ事が出來る。

用明天皇の崩御あるや、物部、蘇我兩代の争ひは從來陰であつたものが陽に勃發した。物部氏の一族は穴穗部の皇子を奉じて立ち蘇我氏の一黨は炊屋姫尊を奉じた。かくて穴穗部皇子と宅部皇子とは誅殺され、續いて物部氏一族の滅亡となつた。此間の記事は、書紀第二十一巻の崇峻天皇紀の頭初を占めて、書紀の面白い記述の一である。守屋大連が善戰した事や、厩戸皇子が四天皇の像を即席に作られ、頂髪に納めて、四天皇の爲に寺塔を建立する事を誓つて奮戰された事や、守屋の資人捕鳥部の萬の勇猛やら、其飼犬の忠節やらが具細に記載されて居る。而して此の亂納つて、「八月癸卯朔甲辰。炊屋姫尊與二群臣一。勸二進天皇一。即二天皇之位一。以二蘇我馬子宿禰一爲二大臣一如レ故。卿大夫之位亦如レ故。是月宮二於倉梯一。」とあるを見ても、炊屋姫尊が後宮に在しても隱然諸皇族の中心として重きを成され、如何に重要な地位を占めて居られたかゞ想見される。

崇峻天皇は蘇我稻目の女、堅塩姫（キタシヒメ）の妹小姉君の所産で、推古天皇と同じく蘇我氏の出で其の奉ずる所ではあつたが、英邁崇直なる御資性が災して、無道無慘云ふに忍びさる御最後を遂げられた、天皇の崩御に際して馬子が炊屋姫尊を奉じたのは其利害から當然であるが、當時の姫の位置から見て、假令へ權勢

並なき馬子の奉戴はなくとも、天下の欽崇と信望とは一に姫にかゝつて居た事は想像する事が出來る。從て推古天皇の御即位は馬子にとつて都合のよい事でもあつたらうが、當然の歸決と考へねばなるまい。天皇は時に寶算三十九才（之には史家の間に多少の異論がある）常識圓滿に具備されて、一見温和の內に毅然たる所があらせられ、所謂外柔內剛の雅はしき女性であられたらうと拜察される。

推古天皇は御即位後早速厩戸皇子即聖德太子を立てゝ皇太子と爲し玉ひ、攝政せしめられた。元年の條に「夏四月庚午朔己卯。立二厩戸豐聰耳皇子一爲二皇太子一。仍錄攝政。以二萬機一悉委焉。」とある。而して聖德太子の聰明と學識とは今更說く必要も無く、其の日本文化に對する功蹟は數へ切れない程である。かくて推古天皇の御治世の大部分は、要するに太子の御攝政であるので、此の文華燦然たる所謂推古時代の光彩は、太子の力による事多きは、言ふまでもない事だが、背後の推古天皇の御聖德も亦逸す可からざる功業である。

推古の御代は寔に多事であつた。佛教興隆に藝術の華が咲き、文化の質が熟した。任那の恢復に國威再び揚つた、冠位の制定に制度漸く整つた。大陸との交通に日本の視野が新しく拓かれた。其他太子憲法の制定、曆法の制定、風俗の變遷而して國民思想の進展と、大いなる事象が發生して、寔に劃時代の大進化を成就した。其急激な變遷發達の狀態は、明治時代の開化に髣髴たるものがある。其內でも其文化發展の中心は何と言つても佛教興隆にある、而して私の深い感懷を抱くのも此點に係る。然し他の事蹟と雖略脫するにはあまりに大事である。

神功皇后の征討以來歸屬した三韓は、日本の文化、產業の發達の主要な動機にはなつたが、其の常なき反覆は、引續き歷朝の煩であつた。任那は日本の統治の根據であつたが、夫れも欽明天皇の時新羅に滅されて仕舞つた。任那恢復は其後歷代の天皇の御宸襟の種であつた。崇峻天皇の朝にも、其の四年冬十一月に、紀男麻呂宿禰、巨勢臣比良夫、膳臣、大伴嚙連。葛城烏奈良臣等を大將軍として二萬餘の軍を領して筑紫に下向せしめ、吉士ノ磐金を新羅に、吉士ノ木蓮子を任那に遣して、任那恢復の事に着手されたが、翌年天皇弑逆にあひ給うた。然し筑紫の軍勢は依二於內亂一、莫二怠外事一との命で其の儘に留つて事に當つた。次いで推古の御代となつて、其の三年には前記の將軍等が筑紫より歸り、尋て五年、六年、七年と百濟や新羅の朝貢の事が書紀にも記載されて居る、八年の二月には又新羅が任那を攻めたので、境部臣を大將軍に、穗積臣を副將軍となし一萬餘の軍勢を率ゐて任那の爲に新羅を擊つた「於是直指新羅。以泛

海往之。乃到二于新羅一。攻二五城一而拔。」とあるから大勝利であつたのだ、新羅王は惶て白旗を掲げて六城を割いて降服を請うた。將軍等は之を許し猶、天皇は使を新羅と任那に遣して調査せしめられたが、結局新羅、任那二國は使を遣して朝貢した、其の表文には「天上有レ神、地有二天皇一。除二是二神一。何亦有レ畏乎。自今以後。不レ有二相攻一。且不レ乾二船柂一。毎歳必朝。」とあるが、將軍等を召還したら、又新羅は任那を侵した、九年に大伴連囓を高麗に、坂本臣糠手を百濟に遣して、急に任那を救はせた。十年春二月には來目皇子を征新羅將軍となし、二萬五千の軍衆を率ゐて筑紫に進發されたが、皇子病臥して征討の事が果されなかつた。十一年春二月來目皇子病に筑紫に薨ずるや、皇子の兄當麻皇子を征新羅將軍となし播磨まで進發されたが、妃舍人姫王が薨じたので、此の征討も遂げられなかつた。然し新羅は百濟高麗に準つて歸順し、幸に兵を勞する事がなくなつた。かくして推古の御代には三韓に對して一先づ我國威を張る事が出來た。

推古朝に比して現代を顧る時、明治時代には、支那に對し、朝鮮に對し、我が國威は正々堂々と輝く事が出來た。然し今の對支問題の絶えざる動搖と不安とは、國初歷朝の三韓の煩累を想はせるものがある。而して推古時代、又其れ以前の古い時代から、我等の祖先達が絶えず苦心した朝鮮の問題が、明治時代に至つて安定した事を心から喜ぶと同時に、支那の問題に至つては安定の曙光をも見ないばかりか、久しきに亘る紛糾が益々複雜するのを遺憾とする、而して之は直ちに日本の安定の問題に連關するので、國民が此重要至難な問題に對し、割合に無感覺になりつゝある近時の傾向を私かに不滿に思ふのである。

十一年の冬十月には皇居を豐浦から小墾田宮に遷され、其十二月新に冠位の制を敷かれた。「十二月戊辰朔壬申。始行二冠位一。大德。小德。大仁。小仁。大禮。小禮。大信。小信。大義。小義。大智。小智。並十二階。並以二當色絁一縫之。頂撮摠如レ嚢。而著レ縁焉。唯元日著二髻華一。十二年春正月戊戌朔。始賜二冠位於諸臣一。各有レ差。」とある。今迄は整然たる服制も無かつたのであらうが、此時新に所規の衣冠を着て、髻華を挿して小墾田宮に參候した人達は、今の金光の大禮服を着て御大禮の典儀に伺候する百官達以上に緊張した事であらう。此の衣冠の制は、大化以降度々改訂されたが、文武天皇の大寶令に至つて位階の制と改まつて、遂に今日に至つたのである。其秋九月には「改二朝禮一。因以詔之曰。凡出二入宮門一。以二兩手一押レ地。兩脚跪之越レ閫則立行。」と儀禮の形式が異國風に改變されたのである。十三年には「閏七月己未朔。皇太子命二諸王諸臣一俾レ著レ褶。」とある褶と

は如何なる形の服であるか明瞭ではないが、或は短身廣袖、袍の如く一番上に重ねたものとも言はれる。今は服裝も、學作も追々に韓風に移つて行く事が想はれる。かくて飛鳥の都は日增しに美しく異國風に彩られて行つた事であらう。而して江戸から東京へ和裝から洋服への變遷を以て、當時の飛鳥ぶりを察知する事も出來やう。

十二年の夏四月には聖徳太子親ら憲法十七條を作つて道徳上、處世上の規範を示された。此の有名な太子の憲法は漢文で著はされたが、其文旨溫健明哲、或は古典を引いて、其文章は堂々たる名文である。文を見れば、太子天性の聰明と、其の學識の博大とが、明瞭に察知される。之は憲法と名付けられてに居るが、必しも今の憲法の意義のものではない。明治天皇の下された教育勅語と同じく、要するに日本國民の據て以て範とす可き道徳上の方針である。其の日常行動を律す可き處世上の教典である。然かも其第十二には「國司國造。勿レ斂二百姓一。國無二二君一。民無二兩主一。率土兆民。以レ王爲レ主。所任官司。皆是王臣。何敢與レ公。賦二斂百姓一。」とあつて、日本國の萬古不易の精神を明かにして居らるゝ。後世、儒者、國學者の徒、太子が佛徒として佛教尊崇の著きに惡らずして、太子を責むるものも多い。太子憲法の第二に篤敬三三寶一とあつて崇佛を勸められ、しかも我國古來よりの敬神の思想に就ては遂に一言もされぬ事等を誹議するものも多い。或は平田篤胤などは「聖徳太子の新法を制し玉へるは、世の人意の狂れる故に、其を直さむと思ほして實義には非ず、生來ながらに、聰しく古き異國の道々を、好み玉ふ御性なりしかば、皇御祖神の御制におきて、其道々を弘め玉はむの御心より他なく」等と僻んだ曲論までして居る。公平に見て、太子が崇佛に偏した事はたしかであるが、一面儒學佛教の趣旨に基づき、多少未開であつた舊態から脫して新時代を開明せんとした太子の抱負と努力とは賞敬せねばならない。

日本が公に支那と交通したのは、やはり推古の御代に始まると言はれて居る。之より先漢若しくは魏の時代に、九州地方の豪族が私に支那に交通した事は、確かな事實らしいが、之は公ではなかつた。文書紀によれば、應神天皇の御代及び雄略天皇の時に使を呉に遣した事が見える。之も近來學者の研究によつて事實と推定され、推古以前に於て日本の中央政府から正式に支那に使を遣はした事があつたと信ぜられて來た。併し正式に連續的な交通は推古の御代、隋の時に始まると見ても宜しからう。推古天皇の十五年即隋の煬帝の大業三年、「秋七月戊申朔庚戌。大禮小野臣妹子遣二於大唐一。以二鞍作福利一爲二通事一。」此時の

事が隋書列傳に出て居て、其の時日本からの國書に「日出處天子、致二書日沒處天子一無レ恙云々」とあつて、隋帝之を覽て悅ばずして、鴻臚卿に蠻夷書無レ禮者、復勿二以聞一と云つたとある。聖德太子の崇佛や外國かぶれを誹謗する人達に對して、聖德太子の辯護派はいつも此の有名な句を引いて、太子が我國體の尊嚴、國家の體面に關して充分な考慮を持たれた事を辯證する。十六年夏妹子は隋から歸つて來た。「十六年夏四月。小野臣妹子至レ自二大唐一。唐國號二妹子臣一。曰二蘇因高一。即大唐使人裴世淸。下客十二人。從二妹子臣一。至二於筑紫一。遣二難波吉師雄成一。召二大唐客裴世淸等一。爲二唐客一更造二新館於難波高麗館之上一。六月壬寅朔丙辰。客等泊二于難波津一。是日。以二飾船三十艘一。迎二客等于江口一。安二置新館一。於是以二中臣宮地連烏磨呂。大河内直糠手。船史王平一。爲二掌客一。」之に續く記事でも朝廷が隋使を大に禮遇された事がわかる、八月壬子隋使朝廷に參向して國書捧呈の際には「是時皇子諸王諸臣。悉以二金髻華一著レ頭。亦衣服皆用二錦紫繡織及五色綾羅一。」とあつて小墾田の宮闕が陸離たる光彩で蔽はれた事を想像する事が出來る。此の時の隋の國書は「皇帝問二倭皇一。使人長吏大禮蘇因高等至具レ懷。朕欽承二寶命一。臨二仰區宇一。思下弘二德化一。覃中被含靈上。愛育之情。無レ隔二遐邇一。知皇介二居海表一。撫二寧民庶一。境内安樂。風俗融和。深氣至誠、遠修二朝貢一。丹款之美、朕有レ嘉焉。稍暄。比如レ常也。故遣二鴻臚寺掌客裴世淸等一。指二宣往意一。幷送レ物如レ別。」とある、此時、妹子も隋帝より國書を授けられて來たが歸路百濟を過ぎるとき、掠取されたと稱して國書を上つらなかつたので問題を起した。之が疑惑の種となつて、後に或は此の隋の國書に無禮の辭があつたので、聖德太子が妹子に諭して棄てさせたのではないか等との說が爲すものもある。而して書紀に揭げられた隋の國書中、倭皇とあるのももと王とあつたのを書き變へしめたのだ等とまで云ふものもある、此等は猶史家の公平な研究を俟つ可きである。

裴世淸等隋使の歸國に際し又妹子を大使とし、吉士難波雄成を副使として再び隋に遣した、此時は學生倭漢直福因。奈羅譯語(ヲサ)惠明。高向漢人玄理。新漢人大圀。學問僧。新漢人旻。南淵漢人請安。志賀漢人慧隱。新漢人廣齊等八人が隨行留學した、十七年秋九月、妹子は歸朝したが福利は歸らなかつた。二十二年六月犬上御田鍬、矢田部造等を隋に遣はし之は翌年歸朝した。然し支那では隋の煬帝の失政から、遂に李淵が唐を立つるに致つた、之は推古天皇の二十六年に當つて居る。三十一年の新羅大使奈末智洗爾等に從つて、先の留學生僧惠齊、惠光、及醫惠日、福因等が歸つて來て「共奏聞曰。留二于唐國一學者。皆學以成レ業、應レ喚。且其大唐國者、法式備定珍國也。常須レ達(カヨフ)」と上

奏したが、此時は二十九年の春聖德太子薨去後であつたためか、其後推古の御代には遣唐の事は無かつた。次ぎの舒明天皇の朝二年八月に御田鍬、藥師惠日來が唐に使した、字義から云へば之れが遣唐使の始りになるのである。妹子遣隋の目的については、先に擧げた隋書列傳中に「海西の菩薩天子重佛法を興すと聞く、故に朝拜せしめ、兼ねて沙門數十人來りて佛法を學ぶ」とあるので普通求法のため佛書を求めるためと了解されて居る、夫れもあらう然し、之は太子が新文化吸收に熱心な結果と見るのが至當ではあるまいか。幕末から明治にかけての新文化欲求の熱は推古時代の人にも同じく燃えたのではあるまいか。

聖德太子の博學多識は單り傳說ばかりでなく實際の事例で屢々例證される。十七條の憲法は其一である。法隆寺に傳はつた、太子自筆と稱さるゝ法華經義疏四卷は其二である。之は今は御物となつて秘藏せらるゝが、聖德太子奉贊會が先年復製した義疏一面は、此處の座右にあるが、其華麗な筆蹟は感歎の他はない。而して「此是大委上宮王私集非海彼本」との標註が一層の有難味を覺えさせる。かゝる攝政を戴く推古の御代は佛法以外にも學問の發展を見たのは寔に當然の事である。

推古天皇の十年に「冬十月。百濟僧觀勒來之。仍貢二曆本及天文地理書一。並遁甲方術之書一也。是時選二書生三四人一。以俾レ學二習於觀勒一矣。陽胡史祖玉陳習二曆法一。大友村主高聰學二天文遁甲一。山背臣日並立學二方術一。皆學以成レ業。」とある。かくて十二年に至つて始めて曆を用ひて年月を記したとも稱される。或は又此時曆法は弘く行はれないで、持統天皇の四年十二月に詔あつて始めて元嘉曆又次いで儀鳳曆が用ひられ天下に行はれ始めたのだとも日はれて居る

修史の事業も推古の御代に始まつた。其二十八年に「是歲。皇太子島大臣(蘇我馬子)共議之。錄二天皇記及國記。臣連伴造國造、百八十部並公民等本記。」とある、之が我國の國史撰修の始である。此記錄は蘇我氏が誅せられた時、蝦夷が他の珍寶と共に燒いてしまつて不幸にして今に傳はらない。船惠尺が火中より其の燼餘のものを取り出して中大兄皇子に獻じたと云ふ事である。今に流布する先代舊事本紀には其序に大臣蘇我馬子宿禰等奉レ勅撰とあるが之は曆とした僞書であるとの事だ。

推古の御代には猶諸工業も産業も顯著に發達した。佛教藝術に直接連關したものは勿論其他の諸工業も、産業も、或は製作の術も新に傳へたものもある。先代に傳つたものの、彌々發達したものもある。十八年には「春三月。高麗王貢二上僧曇徵。法定一。曇徵知二五經一。且能作二彩色及紙墨一。並造二碾磑一。蓋造二碾磑一始二于是時一。」其他年々百濟、高麗から來る僧侶達は能

えなかつたから、此等により、新に製法を知つたものがあり、舊法の發達したものもあつた。而して朝庭では歷廷の事ではあるが猶切りに農業の開發にも努力され、屢々灌漑用の土木工事を起された事なども記錄されて居る。十五年には「是歲冬。於二倭國一作二高市池。藤原池。肩岡池。菅原池。山背國堀二大溝於栗隈一。且河内國作二戶苅池。依網池一。亦每レ國置二屯倉一。」

斯くして推古の御代は、各種の方面に發達と整備との實功を擧げた。然し其最も顯著にして、特に華かな成蹟を擧げたのは、佛法の興隆と、其に連關する諸藝術の發達とである。日本書紀推古天皇の卷は佛寺の記事で始まつて居る。崇峻天皇が豐浦宮に即位された事を記し續いて直ちに「元年春正月壬寅朔丙辰。以二佛舍利一置二于法興寺刹柱礎中一。丁巳。建二刹柱一。」とある。法興寺は崇峻天皇の元年飛鳥衣縫造の祖樹葉之家を毀つて始めて法興寺を作り起して此時引續き工事中であつたのである。猶又「是歲。始造二四天王寺於難波荒陵一」とある四天王寺は先に用明天皇の二年聖德太子により攝津玉造に創められたが此時遷移すると同時に官寺となり大規模となつた而して二年には「二年春二月丙寅朔。詔二皇太子及大臣一令レ興二隆三寶一。是時諸臣連等。各爲二君親之恩一。競造二佛舍一。即是謂レ寺焉。」とある。聖德太子及馬子大臣共に熱心な崇佛黨で、諸臣之に從つて佛教が一時に盛になつたのは言ふ迄もない事である。三年には「夏五月戊午朔丁卯。高麗僧惠慈歸化。則皇太子師レ之。是歲百濟僧惠聰來之。此兩僧弘二演佛教一。並爲二三寶之棟梁一。」翌四年には法興寺が落成した。「四年冬十一月。法興寺造竟。則以二大臣男善德臣一拜二寺司一。是日。惠慈惠聰二僧。始住二於法興寺一。」十年には百濟より僧觀勒が來て、暦其他の書を獻じた事は前にも記した。其閏十月には高麗僧、僧隆、雲聰が歸化して居る。十一年十一月には太子の旨を受けて、秦造河勝が蜂岡寺(今ノ太秦廣隆寺)を造つた。十二年の聖德太子憲法には、其第二に「二曰。篤敬二三寶一。三寶者佛法僧也。則四生之終歸。萬國之極宗。何世何人。非レ貴二是法一。人鮮二尤惡一。能教從之。其不レ歸二三寶一。何以直レ枉。」とある。十三年には大佛像造營の事が始まつた。「十三年夏四月辛酉朔。天皇詔二皇太子大臣及諸王諸臣一。共同發二誓願一。以始造二銅繡丈六佛像各一軀一。乃命二鞍作鳥一。爲二造佛之工一。是時高麗國大興王。聞二日本國天皇造二佛像一。貢二上黄金三百兩一。」それから「十四年夏四月乙酉朔壬辰。銅繡丈六佛像並造竟。是日也。丈六銅像。坐二於元興寺金堂一。時佛像高二於金堂戶一。以不レ得レ納レ堂。於是諸工人等議曰。破二堂戶一而納之。然鞍作鳥之秀工。以不レ壞レ戶得レ入レ堂。即日設齋。於是會集人衆。不レ可二勝數一。自二是年一。初每レ寺四月八日七月十五日設齋。」五月には鞍作鳥に勅して、大に其功を賞し大仁ノ

位と水田を賜はつて居る。七月には天皇の命で、太子が勝鬘經を講ぜられ、又岡本宮で法華經をも講ぜられた。

處が十五年の春には反對に敬神の詔が出て居る。「戊子詔曰。朕聞之。曩者我皇祖天皇等宰レ世也。跼レ天蹐レ地。敦二禮神祇一。周二祠山川一。幽通二乾坤一。是以陰陽開和。造化共調。今當二朕世一。祭二祀神祇一。豈有レ怠乎。故群臣共爲竭レ心。宜レ拜二神祇一。甲午。皇太子及大臣率二百寮一。以祭二拜神祇一。」當時は太子大臣共に佛教に夢中であつた最中である。天皇とて決して不執心ではあられなかつた。現に十五年には天皇本願の法隆寺が落成して居る。然るに之は一見奇異の如くではあるが、想ふに敬神の念は古來一度も日本人の心を去らなかつたのである。平田篤胤は、「此詔は實に天皇の大御心より出たる事にて、此は太子と馬子と、餘りに佛を尊み、神を蔑如する事を御歎き坐して、詔ひたる御言にそ有けむ云々」と云つて居るが、太子、馬子は或は全く佛教に夢中であつたらうが、天皇の御心にはやはり固神崇教の念がひそんだのであらう。又臣僚中にも物部氏一族は亡んだが、敬神の念强きものも居たらう。崇佛一路に驅り過ぎた事を自ら戒められた詔と拜祭する事が出來やう。而して此後の世にも、崇佛と敬神とは、優れた佛徒の心をひそめた難問であつた。希臘でも羅馬でもオリンピヤの神々は遂に亡びた。然し敬神の念は一度も日本人の心を去らなかつた。日本では國と神と天皇とは一つであるからである

十七年には百濟の漂流人の中、留る事を欲した道人十一人を留めて元興寺に住しめた事がある。十八年には高麗から僧曇徵等が來た事は前に記した。二十二年の秋には馬子病臥して其爲に男女一千人が出家したとある。二十三年には高麗僧慈惠が歸國し、二十四年には新羅から佛像を貢獻した。二十九年には「春二月己丑朔癸巳。半夜。厩戸豐聰耳皇子命。薨二于斑鳩宮一。」とあつて是時天下の悲嘆惆悵の狀が記載されて居る。猶高麗の高僧惠慈の悲嘆と其に關する奇蹟なども記されて居る。三十一年には、「三十一年秋七月。新羅遣二大使奈末智洗爾一。任那遣二達率奈末智一。並來朝。仍貢二佛像一具及金塔一。並舍利且大灌頂幡一具。小幡十二條。即佛像居二於葛野秦寺一。以二餘舍利金塔灌頂幡等一。皆納二于四天王寺一。」とある。

三十二年には惡逆無道の僧があつて問題が起つた。「三十二年夏四月丙午朔戊申。有二一僧一。執レ斧毆二祖父一。時天皇聞之。召二大臣一詔之曰。夫出家者。頓歸二三寶一。具懷二戒法一。何無二懺忌一。輙犯二惡逆一。今朕聞。有僧以毆二祖父一。故悉聚二諸寺僧尼一。以推問之。若事實者。重罪之。於レ是集二諸僧尼一而推之。則惡逆僧及諸尼。並將レ罪。」とあつて諸僧尼まで罪せられんと

したが百濟より來朝した僧觀勒の諫を容れられ、獨り惡僧を誅して、其他の僧尼を赦された。然し天皇は猶「戊午詔曰。夫道人尙犯ㇾ法。何以誨二俗人一。故自今已後。任二僧正僧都一。仍應ㇾ檢二校僧尼一。壬戌。以二觀勒僧一爲二僧正一。以二鞍部德積一爲二僧都一。即日。以二阿曇連一爲二法頭一。秋九月甲戌朔丙子。校二寺及僧尼一。具錄二其寺所ㇾ造之緣。亦僧尼入道之緣。及度之年月日一也。當二是時一。有二寺四十六所。僧八百十六人。尼五百六十九人。并一千三百八十五人一。」佛法萬能の世の中に、僧と雖無道の者は用捨なく罰せられた此の事蹟は、天皇の御資性の尋常婦人ならざる事を證するものであらう。而して當時、佛敎傳來後未百年を出ざるに早くも寺數四六、僧尼併せて一千三百八十五人を算した事は、佛法興隆の盛且速を語るものであるが、一面整理監督の必要をも語るものであらう。三十三年には高麗から僧慧灌が來て、之れも僧正に任ぜられた。之れだけが日本書紀推古天皇紀に記された佛敎關係の記事であるが、然し推古時代の佛敎の事蹟は決して之れだけではない。

推古紀に記された寺は法興寺と四天王寺だけだが之は其の最大なものだけで、法隆寺の如き重要な大寺も逸して居る。此時代建立諸寺の重要なもの七つを、世に聖德太子建立の七寺と稱して居る。四天王寺、法隆寺、中宮寺、橘寺、蜂丘寺(廣隆寺)池後寺(法起寺)葛木寺(妙安寺)である、猶額安寺、久米寺、山田寺も當代の創立である。其他小寺に至つては無數で、先に僧正、僧都を制定された時の條に寺四十六所とあるのでも想像出來る。然し此等の寺塔の多くは、長い歲月の間に燒失亡滅して今は跡を留めない。其內に法隆寺の金堂、塔婆、中門、廻廊と法起、法輪二寺の塔婆とは、其當時の建築の儘で千三百數十年の星霜を經て今日に傳はり、實物で明瞭に推古の文化を物語ると云ふ事は、天祐と云ふか、奇蹟と云ふか、全く想像以上の事である。

法隆寺は聖德太子が居住された斑鳩(いかるが)にあるので、斑鳩寺とも鵤僧寺とも或は法隆學問寺とも稱される。金堂安置の藥師佛光背に刻まれた銘文によつて、其創立の事情は明かであるが、用明天皇の元年、天皇御不豫の爲に、皇后及び廐戶皇子に勅して、堂塔佛像を造營せしめられた、中道にして天皇崩御あらせられたので、推古天皇は先帝の御遺志を奉じて工を續けられ、推古天皇の十五年に完成したのである。之は所謂百濟風の七堂伽藍の制で、其の宏壯華麗な堂塔は一世の人目を驚かした事であらうが、猶今も人の膽を奪ふに充分である。法隆寺に參詣するいつでも、私は先づ第一に仰いで其の建築の美しさを嘆賞するが、續いて、かゝる古建築が戰禍にも會はず、今に遺る事は我

貴い國體がらであると感ずる。美しい藝術的な嘆賞は、愛國的な愉悦に續くのである。法隆寺の建築美觀については此處に再說しまい。唯此の古代建築が歷史よりも有力に、推古の文化と藝術とを實證する事は、推古時代の幸である。法隆寺再建、非再建の議論は未だに片付かない。今春も帝國大學の講堂で關野、喜田兩博士の論爭があつたが、やはり水掛論に終つたのは遺憾である。私達は引續き、虛心坦懷な學者的研究の進行を俟たねばならない。夫れにしても私達は、今は暫く推古式其儘の形式を傳へた此建築を、當初のものと信ずる事を禁じ得ない。飛鳥に建てられた寺々は其後奈良遷都と共に、奈良近くに遷されたものもある。又殘つたものも、後のものも、南北朝時代の打續く戰亂に、南朝方の越智氏が死守した地方とて、消滅して遺るもの〻全くないのは遺憾である。夫れにしても法隆寺が、大和から浪華に出づる要路に立ちながら戰禍も火難も免れ得たのは、愛出度い奇蹟である。嘗て大正十四年の秋、法隆寺へ詣たとき、折からの陸軍演習で其の一軍が法隆寺の門前一體に砲列を敷いたのを見て、私は實際の戰禍が一度も此寺を犯さなかつた悅びを痛切に感じた。私達は習慣的に、古いが故のみに、法隆寺の建築を愛するのではない。其藝術的價値を別にしても、日本の藝術的建築の最初の形式を其儘に傳へ、且つ推古時代を明白に實證する文明史的價値からでもある。

斯く文化の實證として建築の價値を重視するとき、私は明治時代の建築がもつと尊重されねばならぬ事を痛感する。支那文化に對する推古時代と、泰西文化に對する明治時代とは全く對比的に見る事が出來やう。後の數百年を經た人達が、遙かに明治の文化を想ふ時、私達が、法隆寺、法起寺、の建築を見得るやうに、其實證たる明治の建築を、今の儘に殘して置きたいと欲するのである。明治の初年、西歐文化の流入に際しては、推古の寺塔のやうに、明治の建築が多數出來上つた。建築は都市を中心として發達するが故に、其大半は東京に建つた。其故に其多くが、大正十二年九月の大震火災の厄難に潰滅に歸した事は、我國の建築史上寔に惜しむ可き事である。而して震災に遺つた建築を、僅かの損傷のため、破壞し去る事は猶々惜む可き事である。震災後、半ば損傷した大建築を爆發の音すさまじく破壞するのを見て、私は且つ惜しみ、且つ憾んだ。「爆破に戰く」の感懷を草したのも其時であつた。帝國大學で法文科の建築が爆破される時も、勇ましい光景を悲しく傍觀した。其時私は左程にも傷つかなかつたと見た工科大學本館の建物の、保存さる可き事を欲したが、夫れも近頃惜し氣も無く破却されたと聞くのは殘念である。其の建築は私達が三年の學業を積んだ懷

かしい學窓ではあるが、その私情からばかり惜しむのではない。明治文化の實物の記錄の重要な一頁を惜し氣もなく引きさく懷がするからである。赤い煉瓦の色美しい、中古末の佛蘭西シャトー風に意匠された、工科大學の本館は、明治建築の巨匠辰野博士の傑作の一とも算へられた。震災の損傷もあつたらう、然し夫は修補保存の出來ない事ではない。若し千年の後に遺る事が出來たなら、今私達が法隆寺其他の堂塔に推古の春を偲ぶやうに、明治文化の一端を、之の建築に讀む事が出來たらう。實用の便宜から言つて、舊建築破却、新建築建立は合理でもあらう、然し私は是が全般に見て、必しも眞の合理とは信じない。此の工科大學の勇斷は、私には暴斷とも見受けられる。辰野博士の愛作が、其の門下の大學建築家達によつて、勇敢に破却されたのに對して、博士の最大の傑作日本銀行の建築が、其處の總裁の愛惜によつて保存せらるゝを得るのは皮肉な對比である。井上日本銀行總裁は其建築が、堅實であり優秀である事を了解して、震災後先づ此建築を完全に舊通りに修補した。又增築計畫では、わざ〳〵辰野博士の門下長野博士を聘して、從來の舊建築を主とし、之を抑損せぬやう、調和を失せぬやう、周圍に建增を計畫した。私は此の態度を建築の爲に有り難い事と思ふ。かくして明治の一建築は將來何百年かは殘り得ないけれど兎に角後の世に文化の標徵として殘る事が出來るのである。

法隆寺堂塔の他、推古式建築の實物の遺るものに、法隆寺附近に、岡本の法起寺と、三井の法輪寺との三重塔がある。其の建立の年代等に關しては共に異說があるが、其の形式は法隆寺と同じく推古風である。法隆寺に詣する人達の、歸途には訪ぬべきものである。法隆寺金堂內の有名な玉蟲の厨子は、立派な工藝美術品であるが、夫れよりも推古式建築の模型として、より一層貴重な價値がある。四天王寺の今の堂塔の配置も、推古の古制を傳ふるものとして、學者に尊重されて居る。此等は用明天皇の二年に玉造に創められ、推古の元年難破の荒陵、即ち今の處に遷された。物部守屋の一族の滅亡後、其邸宅、田地を沒收して、其費に宛てゝ作られたとあるが、斯くて其工事は十五年に涉り、大規模の伽藍を現出した。而して施藥院、悲田院療病院が附屬して、今の所謂社會事業を營んだとも言はれる。今の四天王寺の堂塔の建築は、傳へ傳はつて文化九年に建つたものであるが、たゞ其諸堂の配置は全く古制によつて、今も推古の伽藍の概觀を髣髴させる。

法隆寺の建築が今に無難に傳つたと同時に、其處の佛像や、法具や、其他の工藝品も滿足に保存されて、今に推古美術の餘光を傳へて居る。而して、再建非再建の論議決せぬ建築とは異

つて、正史の記録にも、佛像の銘にも、明かに作者名を遺した鳥佛師の如き、生前と共に死後も永く大きな榮光を輝かすものもある。推古の佛像は其建築の如く、同じく美しい。而して此等の佛像の優れたものは、獨り法隆寺のみならず、廣隆寺にも、其他の寺々にも、又帝室の秘庫にも（法隆寺傳來）私人の寶藏にも傳はるものが少くない。米人ラングドン・ワルナーは此等の寫影を集めて Japanese Sculture of the Suiko Period の大冊一卷を刊行したが、其は推古の美術を外國人に紹介するのには都合のよい本である。其等の佛像には或は百濟、新羅から將來されたものも多い。國内で造られたものもある。國人の手になるものも、韓人の手になるものもあらう。何れにしても夫れ〴〵推古の世態を證する事が出來る。而して其とり〴〵の美しさは、推古の藝術世界を直ちに我等の眼前に展げて呉れる。一體藝術上推古時代が尊重さるゝ第一は、其作品の藝術的價値にある。第二は其劃期的な發達である。従來日本民族特有の工藝もあつたらうし、又此御代以前から少しづゝは三韓からの移入もあつたが、此時劃期的に發達した勢は盛である。日本の藝術史は此處に始まるの觀がある。古來美術でも建築でも、ある樣式の成立する活動は存外に短時間で成就する。推古からの發達も是を例證するものがある。私達は推古時代から、白鳳天平を、藝術、文化、國運が榮へたやうに、明治大正から今の世、又次ぎ次ぎへと藝術、文化、國運の隆盛を祈らねばならない。

諸佛像と同じく、法隆寺金堂の天蓋や、玉虫厨子に見せた、推古巧藝家の手腕も、永く映えられて居る、而して其他の佛具、器具の細かいものでも、其意匠と製作の優秀にはいつも清新な誇を見せて居る。

飛鳥の小墾田で、此の光輝ある時代を統治された推古天皇は、其統治の第三十六年に當り御不豫に陷られた。書紀には「三十六年春二月戊寅朔甲辰。天皇臥病。三月丁未朔戊申。日有蝕盡之。壬子。天皇痛甚之不可諱。」又「癸丑。天皇崩之。時年七十五。即殯於南庭。夏四月丁丑朔辛卯。雹零。大如桃子。壬辰。雹零。大如李子。自春至夏旱之。秋九月乙巳朔戊午。始起天皇喪禮。是時群臣各誄於殯宮。先是天皇遺詔於群臣曰。比年五穀不登。百姓大飢。其爲朕興陵。以勿厚葬。便宜葬于竹田皇子之陵。壬辰。葬竹田皇子之陵。」とある、其の崩御あつた三月癸丑から今年の四月十八日が一千三百年に當るのである。

鉢を翔ばす話

下店靜市

一

それは今から約千年も前のことであつた。

比叡山延暦寺にほど近い山中に淨藏と云ふ天台の僧が住んでゐた。

彼はかねてより高德の聞え高く、世に天慶の亂と云はれる平將門の叛逆のあつた當時、彼は叡山の楞嚴院に於て大威德明王の法を修した。歴史上將門は平貞盛、藤原秀鄕等によつて誅されたことに成つてゐるが、實は此の淨藏の大威德明王の修法の効驗によつて祈り殺されたものだとの傳說さへある。

さう云ふ彼ではあつたが、少しく感ずるところあつて衆僧と離れて獨り山中深く住ふてゐた。彼は洛中に下りてゆく樣子もなく、托鉢に出るでもなく、ひたすら草堂の深い靜寂のなかに結伽趺座をのみ事としてゐたのであつた。

しかし如何に高德の彼にしろ幾日も食物を攝らずに生活すると云ふことは不可能であつた。と云つて延暦寺の厨房に食を乞ひに行くかと云ふと決してさうでもなかつた。それにもかゝはらず、彼は何時に成つても飢じさうな樣子もなく彼は平然と構へてゐた。頗るおかしな話だが、それには深い理由があつたのだ。

淨藏は飛鉢の法と云ふ不思議な密教の秘法を行つて自由に食物を取り寄せてながいあひだ隱逸の生活を送つてゐたのであつた。飛鉢の法と云ふのは托鉢に用ふる鐵鉢を飛ばせてやると鉢は何處とも知れない遠い空間に飛び去つて終ふ。やがて程經てから鉢はその中に好むところの食物を齎して飛び歸つて來ると云ふ至極便利な秘法であつた。淨藏が山中深く閉ぢこもつて幾十日を經ても平然としてゐたのは實は恁う云ふ理由によるので

あつた。熊公のやうに親類縁者からひそかに糧食を運ばれてゐたのとは餘程譯が異ふ。

二

然るところ浄藏には此の二三日來、少し困つたことが出來てゐた。深い修業を積んだ彼の顏に不安の色さへ仄見えてゐた。と云ふのは此の日ごろは飛ばせてやつた鉢が會怡とどうした風の吹きまわしか空つぽのままで歸つて來るのであつた。さう云ふことは絶えてなかつたのに――

浄藏は不審に堪へず四日目と云ふ日に鉢を飛ばせてやつてから、やがて飛び歸つて來るであらう時刻を見計らつて鉢の歸來する山の峰に立つてぢつとはるかに望みつゝ待ちつゞけてた。

果して鉢は王城の彼方より悠々と飛び歸つて來るさまが見られた。だんだん近づいて來るに從つてちやんと物がは入つてゐることが知られた。浄藏はやつと安堵の胸をなでおろして眺め入つてゐた。と、その瞬間浄藏の視野には異様なものが這いつて來た。突如北の方から彼の鉢をめがけてまつしぐらに飛んで來るも一つの別な鉢であつた。見る見るうちに二つの鉢は空中に相並んだ。と忽ち此の見知らぬ鉢は浄藏の鉢から物を移し取つてさつさと飛び去てしまつた。

浄藏はハッとした。呆れて口が利けなかつた。かはりにその手は速座に衣の尻をまくつてゐた。これはなかなか心やすからぬことだと思つたからである。彼は恁うした危急の場合にのぞんでも叡へあげられた天台の僧侶らしい態度を即妙に採ることが出來た。そしてみづからの鉢を加持し、飛び去つた他の鉢の方向へと北を指して山谷の雲霧をおかしつゝ進んだ。

すでに二三百町がほども歩いたと思ふころほひに彼は見知らぬ溪谷のほとりに自身を見出した。溪谷は深くなめらかな千古の蘚苔に覆はれ、清水は流れて如何にも好もしきところにわびしげな一軒の草庵が在つた。松風はすごく響きわたり何處とも知れず一種神靈の氣が四邊にみちてゐた。浄藏はその庵室に近づいて内の様子を窺つた。しかしそこには一人の老僧が脇息に倚り懸つて讀經してゐる様が見られたのである。事の様子を推ふにどうも凡間の人とは見えなかつた。浄藏は數ち我が鉢のものを掠め取つたのは此の人のしわざであつたなと直覺した。そのとき件の老僧が云つた。

「其のところに在るのは何人であるのか。おぼろげにては人の來ぬところだが――」

浄藏は直ちに答へた。

「叡山に住ふところの行者なのです。」そこで浄藏はしばし前栽

を断つた。しかしその瞬間、不思議な靜寂が彼の耳の根にしみ透るのを感じた。淨藏はやがて言葉をつゞけた。

「そして、別に活計の術もなきにより、此の間、鉢を飛ばせて罷りすぐるのところ、この兩三日のあひだ、斯く斯くの仔細により、愁ひ申し實はその鉢を知るべにてこのところへ參向したのです。」

「それはそれはまたお氣の毒のことです。一向に頓り知らぬところですが――」

と老僧は答へた。淨藏は聞き畢ると不安の念にかられて、喘喘に老僧の身近くにまで進みよつた。そのとき老僧は「兎も角相尋ねて」と微音に人を喚ぶのであつた。突然戸をあけて入つて來た者を見れば、唐裝束を着した異相の天童であつた。

「此の人の仰せられることは汝のしわざか、いと便なきことである。これより以後同く左樣のことがあつてはならぬ」と老僧は命令した。それと同時に天童はひどく恐れ恥ぢて退くのであつた。童子のしわざと知つて淨藏は駭き呆れた。

「今後はよもや左樣のことはない筈です」と老僧は淨藏を顧て云つた。その誓言をきゝ畢つて彼はきびすをめぐらせて歸路に就かんとした。老僧はそれを喚びとどめて、はるばると來られたのであるから定めしお苦しみのことゝお察しする。しばらく饗應し奉るべしと童をよんで御僧に然るべきものまゐらせよと命ずるのであつた。

天童は瑠璃の皿に唐梨子（からなし）のむきたるものを四菓盛りて榻の上に置いた。淨藏は云はれるまゝにまづその一菓を喫したところ、天の甘露もかくやとばかりおぼえてたちまち身心に爽快を覺え疲れも忘れる程であつた。

斯くて淨藏はみづからの房に歸つて來たが、その後彼の鉢の物が掠め取られることがなくなつたと云ふのである。

三

此の傳說は彼の搜神記にでもありさうな、神變驚怖の氣にみちてゐる。恁う云ふ神秘的な宗教上の說話は一體如何なる事實を象徵化したものかは知らない。恁うしたことが現實に行ふことが出來れば至極便利な譯ではあるが到底事實としては考へることの出來ないもののやうである。それにもかゝわらず、此の傳說の樣子ではある宗教上の事實の象徵化ではなしに、如何にも眞實らしい樣を示してゐる。これをもつて、自然を科學的に究めることの出來なかつた古代人の空に對する憧れの反映と云ふ風に見れば見られないこともないのであらうか、もしさうす

れば、鉢を飛ばせるよりも、粂の仙人や、役の行者たちのやうに自身で自在に天空を飛行した方がはるかに傳說としては適切な譯である。むかしギリシヤにあつたイカルスと云ふものは、蠟をもつて羽根を造り、太陽へ飛んで行かうとしたが、太陽に接近するに從つて、その强熱に逢ふて羽根に塗つた蠟は解け、むざんにも墜落してしまつたと云はれる。これも嘘か眞事かは兎も角として、空に對する古代人の憧れの心の反映と解することが出來る。粂の仙人が南都東大寺の建立のとき大和の山中から材木を空中輸送したと云ふやうなことも傳へられてゐる。フランスの童話のなかには日に千里空をゆくことの出來る靴のことを書いたものがある。役の行者はまた伊豆に流されたとき、毎夜富士山に伊豆から飛行してのぼつたと云はれる。少くとも、空中飛行の話は、世界各國に數へきれぬ程多くあるが、しかしこの淨藏の飛鉢の法のやうなのは少ない。

仙列傳や、搜神記や、ギリシヤ神話や其他等等の童話的な傳說は、ある程度迄は比較神話學的に事實としての解釋がつけられるやうであるが、更に以下に記さうとするやうな飛鉢の法の話しは餘りに眞實らしきにすぎて如何に解すべきかに苦しむ譯である。

四

次に記するものは時代が淨藏より大約二三十年以上前の出來事である。

昔し信濃の國に命蓮と云ふ法師があつた。恁う云ふ田舍で法師に成つたものだから都の者のやうに戒律を受けると云ふことも出來ずに居た。命蓮はつねづねそれを非常に殘念に思つてゐた。そこで或る日思ひたつて南都東大寺へ登つて來て受戒したのであつた。かねての念願を遂した彼は、さて本國へ歸らうと考へたが、秘かに思ひめぐらして見ると、故鄕は草深く佛法の行はれるさへ稀れで今更歸つて見ても仕方がないやうに考へられた。それよりはむしろ此處に止まつて東大寺の莊嚴な佛の御前に今少し行して後何處かでのどかに住んだ方がはるかに生き効があると考へて、歸國の事は斷念したのである。

斯くて命蓮は何處かのびやかに餘生を終へるべきところもがなと見廻して居たところが、東大寺の西南の方にあつて、名も知らぬ山がかすかに望まれた。彼はその山に籠つて住はんものと考へてはるかに道をたどつてその山の方に向つたのである。

やがて東の高い山の峯に登つて見ると、西の山の東面に副ふて五色の奇異なる雲の覆ふた小さな山のあるのを見出した。命蓮はこれを見て定めし彼處は靈驗殊に勝れたる地に相違ないと考へてその山の麓に至り登りかけて見たが更に樵夫の通るらしい道さへもなかつたのである。しかし彼は草を分け木を傳ふてやうやくの思ひでその峯に達することが出來た。振り仰げば五彩の雲は尙も梢をすけて空低く認めることが出來るのであつた。

頂上より四圍を眺めれば東西南北はともにはるか深い谷合となつてゐた。雲のたちこめられた地上はしかし何等の異なることもなかつたにかゝわらず、異樣の薫香は四邊にみちおのずから靈驗の氣配が感ぜられるのであつた。命蓮は深い靈感に擊たれながらしきりと地上をたづね求めたけれども何ものをも見出すことが出來ず、ただ巨巖の處々に點在するのを見るのみであつたが、彼は尙も飽かずたづね求め落葉の堆積したものを掻き分け、石を採りのぞきやうやくのことで一つの石櫃を堀り出すことが出來た。櫃の有樣を見るに、世のつねのものにも似ず千古の色を湛へよく土をはらひ櫃の表面を見れば「護世大悲多聞天」なる銘のあることが知られた。

五彩のあやしき雲に覆はれ、異香を四邊に漂はせたものは、これなるかなと知られた。命蓮はかくて深い感激に心うたれ、涙とともに禮拜した。

「我年ごろ佛の道を修業して、此のごとく靈驗の地にゆきめぐることは、またとなき果報にめぐまれたものと云はなければならない。かくも稀有の瑞相を見ては、特に多聞天の利益を蒙れるものに相違ない。よしされば、いまは何處へも行かずに此のところにて佛道を修業して命を終らん」ものと考へ、たちまちに柴を折つて庵を造り兎も角永住の用意に取りかゝるのであつた。また山麓の人を催してその櫃の上にささやかなる堂をつくつてこれを覆ひ多聞天を祈つた。

此の山は何處かと云へば、今の河內と大和との國ざかひにある信貴山であり、堂とは現今關西人の絕大なる信仰の對象となつてゐるところの朝護國孫子寺であり、尙またその石櫃とは上古聖德太子が守屋征伐のとき多聞天の靈驗により奇勝を博し得た故に、後年大阪四天王寺草創のことにさきだち、こゝにその戰勝の後、祀り置かれたものであつた。

命蓮は久しく此の信貴山上にあつて、靜かに供養禮拜の生活をつゞけてゐた。しかし彼もまた淨藏の比叡山に於けるごとく山上にのみとぢこもり、近鄕の村落に托鉢する樣子もなかつた。彼もまたそして淨藏のごとく密宗の僧侶ではなかつたけれど

も、鉢を飛ばせてやつて、食物を取り寄せて生活してゐたのである。

五

それは西暦で云へば恰も九百年代のことであつた。支那ではすでに晩唐も哀帝の代でやうやく唐末より五代へ遷る亂世にあたつてゐた。

そのころ京洛中では時の帝、醍醐天皇が、あつき御惱にあらせられ、さまざまの御祈禱や、御修法、御讀經などを行はせられつゝあつて何處とはなしに哀愁の空氣がたゞよふてゐた。しかしさうした種々のこゝろみが行はれたけれども更に怠らせ給ふ様子も見えなかつたのである。極度に發達して一代の盛觀を呈した天台、眞言二宗の碩學高僧たちや、陰陽師たちさへも、いまはなすすべもなくたがひに力のない吐息を洩らし合ふのみであつた。

しかるにあるときどう聞き傳へたものか斯う云ふことを進言したものがあつた。

それは、河内の國の信貴と云ふところに、此の年ごろ籠つてゐて里へも出づることをせぬ一人の偉い聖が居る。これこそはいみじくも尊い靈驗を示し、また鉢を飛ばせてゐながらに食を取り、居ながらに種々と有難い功徳を行ふてゐる。その者を召し寄せて祈禱をさせられたならば必ず帝のあつき御惱も怠らせ給ふであらう——と。

その後幾日かして、信貴山なる命蓮の草庵についぞ見かけぬ美々しい風俗をした殿上人の一ト群が訪れた。それは禁廷から命蓮を召すべくさしつかはされた藏人大夫の一行であつた。

彼等は宣旨を命蓮につたへおへると同時に火急の御召なるにより疾く疾く參内致せよとせきたてた。だがしかし命蓮は何しに召すものぞと答へたのみで更に動ずる氣色とてはなかつたのである。

かやうかやうの次第にて御惱大事におはします、いそぎ參りて祈り參らせ給へと藏人大夫は慫慂した。

「これは參らずとも、此所ながら祈り參らせることにいたしませう」

と命蓮は飽く迄落つきはらつてこともなげに答へた。

彼等は命蓮がおかしがたいあるものをもつてゐることを充分感じた。彼等は命蓮を深く信じつゝも尚、つぎのごとく云はずには居られなかつた。

「さてこれによつて若し怠らせ給ふたとしても、どうしてこれが其の驗によるものであつたかと云ふことがお判れませう——

命蓮は言下に「いや」と彼等の言葉を打消した。

「それがたとへ何人の驗によるものであらうとも要するに帝の御惱が怠らせ給ふたならば萬事はそれでよいではないか。」

「それにしても、さきごろよりあまたの人々によつて、いろいろの御修法、御祈禱が數知れず行はれました。そのうちでも聖の驗によるものとあきらかに知れますことは心よいことです。」

と藏人太夫は推して答へた。

「さらば劒の護法と申すを祈り參らせることにいたしませう。おのずから夢にも、幻にも御覽ぜられたならば、それと知り給ふやう。それは劒を編みて衣に着たる護法である。私はさらに京へは出ることができない。」

命蓮の言葉を聞き畢つて彼等は心やすらかに京へと引き返した。

彼等が任を終へて歸つてのち三日目の晝つかたであつた。

醍醐帝はふとまどろませ給ふともないに、どうしたことか、キラキラと煌めくものがあつた。如何なるものかと御覽ぜ給ふに、それは命蓮の劒の護法によるものか、煌々たる利劍を編みなして衣のごとく纏ひ、轉寶輪をふむ大莊嚴の相貌すさまじき轉輪王の示現であつた。と覺え給ふと見る間にたちまち御心地はすがすがしくなり、聊さか心苦しき御事もなくつねのごとくならせ給ふたのであつた。

此の絕大な効驗によつて、果然藤原時代の上流貴族の信貴山信仰熱は一世を風靡した觀があつた。また命蓮は朝廷より庄園を給ふこと、僧正位に叙せらるること、別當を置かせられること等の御沙汰があつたが、彼はそれ等のすべてを辭し、たゞこのままにして置いてほしいと云ふ希望にまかせられたのであつた。

六

命蓮は恁う云ふ坊さんであつた。被選擧權を欲しがつてさわぎまわる生臭坊主どもとは譯がちがふ。もつとも、いまどき五色の雲の覆ふた靈山も見當らない。見當らないから從つて探しにゆくドンキホーテも居ない譯である。若し居るとしたら何か一ト儲けでもしやうと云ふふてぶてしい量見の男であらう。さう云ふ類は問題にはならない。

さて命蓮が鉢を飛ばせた話にうつらなければならない。

命蓮は信貴山にとぢこもるとゝもにいつさいの遊行を廢した。そして鉢を飛ばせて生活した。術數の坊さんでもない彼がどうして此の秘法を體得したものかは分らない。分らないが現

に角よく飛ばせた。それのみではない少し物すごい飛ばせ方さへした。

その話をはじめる。

この信貴山の麓の村落に、ある富裕なる一人の德人があつた。何と云ふ人だかもあきらかではない。山崎長者と云ふ者であつたと稱する人もあるが、何等確證がある譯ではない。

兎も角、命蓮が信貴山のてつぺんから飛ばせる鉢はどう思つたものか、よくこの男のところへ飛びおりて來ては、何か食物を入れてくれるのを待つてゐた。物が滿されると鉢はまたたちまち飛びだして命蓮のところへ歸つてゆくのをつねとした。

淨藏の鉢は一體どこへ飛んで行つたものか、尠くとも京都の街へ飛びおりたらしいことが解るだけで頗るはつきりしないが命蓮のはちやんと行くさきがきまつてゐた。

ある日のこと、それはまだ命蓮が轉輪王の加持をして盛名を天下に馳せるまへのことであつたが、鉢はいつものやうに、麓の德人のところへ飛んで來た、そのとき、此の男の家では、大きなあぜ倉をあけて頻りに中から穀物を取り出してゐる最中であつた。このあぜ倉と云ふのはいまどきどんなものだか知らない人がゐるかも知れない。しかし奈良の二月堂へゆけばその實物を見ることが出來る。二月堂の下に左右二タ棟の丹塗りの經藏が此のあぜ倉の型式である。また正倉院の建築も此の型式である。

命蓮の鉢はさう云ふごつたかへしたところへ飛んで來た。しかしさすがの德人であつた彼もその日はいそがしさにまぎれて鉢の飛んで來たのを見てムツとした。

「またあの鉢めがやつて來やがつた。飛んでもない業突張りな鉢めが――」

と彼はブツブツ云ひながらいきなりそれを取るが早いか倉の隅へ投げ出して、他の者たちと一緒に再び仕事をつゞけた。ところが鉢の方はそのうちに何か入れてくれるのであらうと思つて、ぢつとして待ちつゞけてゐた。しかし待てど暮せど何も入れてくれる氣配も見えないばかりか、そのうちにだんだん彼等は用をすませて、終ひには鉢のことなぞはケロリと忘れて、物も入れず、倉から取り出しもしないで、戸をしめて母屋の方へ行つてしまつたのである。鉢も今日に限つてどうした因果のまわり合せか お染 久松藏の中と云ふ怪體なことに成つてしまつた。

命蓮も鉢がそんなひどい目に遭つてゐるとは知らないから飢じさをこらえて待ちこがれてゐたにちがひない。

ところがしばらくするとどうしたと云ふのだらう。このあぜ倉が突然ゆさゆさとゆるぎだしたのである。

このすさまじい物音に駭いて母屋の方から人々はあわてゝ飛びだして來て、何だ何だとたち騒ぐほどに、倉はゆるぎゆるぎて土より一尺ばかりも空中に浮きあがつた。驚いたの驚かないの話しではなかつた。それはその筈だらう、怎んだ途方もない出來事があり得る筈のものではなかつたからである。このすさまじい騒動に近くの百姓共はいちどきに駈け集まり、旅行く人も足をとゞめると云ふ騒であつた。群集はかくてどうした譯であらうと怪しみ恐れて喚き叫ぶなかに藏の持ち主だけは、咄嗟にハツと胸を衝かれた。先程鉢を置き忘れた記憶を愕然として思ひ起したからである。

しかし彼がそれ思ひ出した一瞬間のこと、その鉢はコロコロとゆるぎ上つた倉の底から洩れて出て來た。ところが鉢は彼にほつとした安堵の隙を與へる暇もなしに、倉をのせてひたのぼりにスウツ！と空さまに一二丈がほども登り上つた。さすがに命蓮の鉢だけあつて倉のなかでぽかんと間抜けた面をしてはゐなかつた。また浄藏の鉢のやうに、中のものを横合から奇麗に浚はれておめおめと戻つて來るなぞと云ふとぼけた眞似はしなかつた。おなじ鉢でも此奴はなかなか喰へぬ奴でなかなかあざやかな手並を見せたものである。

さて一二丈がほども登つたと思ふと、ヤツ！と云ふ間もあらせず横飛びに飛んで、恰も空渡る雲の如く悠々として飛び去つた。少し話は大げさだがまさか嘘でもないらしい。藏の主もこれにはすつかり呆れてしまつた。よもや藏をさらつてゆかれやうとは思ひも及ばなかつたからである。而も根こそぎにして空中はるかに運ばれては手のつけやうがなかつたのであらう。あれよ、あれよと罵り喚くうちに倉は振り返りもせずに行き過ぎる。一體これがどうなるものかは解らない。兎に角後を追跡しなくてはならなかつた。その場に來合せた人々も、何と云ふことはなしにその後についてどんどん駈け出して行つた。

遂に彼等は鉢に運ばれて空中を飛行しつゝあつた倉がやうやう飛びつゞけて大和河内の國さかひに聳えたつ山のなかに達して、命蓮の坊のほとりにドシン！とばかり落ちたのを見た。

七

藏の持主はそれを見ると同時に非道いことをするものだと怨みがましい心にならずには居られなかつた。何故かなればそれには一年中の收獲を納めて置いた彼にとつては何ものにも換えることの出來ない大切な唯一の穀庫であつたからである。そこ

で彼は失望からやうやく身を起した。そして命運の住む倂房へはいつて行つた。

「どうしてまた斯くもあさましいことをなされたのでございませう。私は此の鉢が飛んで來れば、いつもかゝさずに物を入れて差しあげた筈でした。それに今日と云ふ日は、――實は今日は私のところではひどく取り込んでゐたのです。それで心にもなくうつかりと倉のなかへ置き忘れてしまつたのでありました。そゝつかしい私はそのまゝ錠をかけて置きましたところが、この倉は突然ひたゆるぎにゆるぎ出してとうとう此處へ飛んで來てしまつたのです。どうぞ是非とも此の倉をお返し下さるやうお願ひいたします。」

此の願を聞き畢つた命運は案外洒然と構へてゐた。そして云つたのである。

「どうもまことにあやしい出來事だが、飛んで來てしまつたからには今更返すと云ふことも出來ない。此處には斯やうなものもなかつたのだから幸ひ何かと物なども入れて置くにはまことに都合が宜い。中のものはその代りみんなもつて行つてくれ。」

彼はそれを聞いてホツと安堵の胸を撫でおろした。倉そのものは大したことでもなかつた。大切なのは中味にあつた。中味さへ返して貰へれば――いやいやこれは大ごとだぞと彼はみづから心に云ひきかせた。

「お仰せではございますが、どうして忽ちに運び取ることが出來ませう。中には米が千石ばかりも納めてございます。ひどい災難でございます。」

しかし命運は速座に「いやそれは雑作もないことぢや、私が運んで取らせる。」と事もなげに答へるのであつた。

彼等は倉のほとりに近づいた。

命運は此の鉢に倉のなかの米を一俵入れて飛ばせてやつた。ト突然おそろしいひゞきをたてゝ倉のなかの無數に積みあげられた俵は群ら雀などの飛びたつやうに、一どきにどつとそれに飛びつゞいた。山上より山下の村落なる彼の家の方へと、俵は雁のとびつらなるやうに世にも見事な空中輸送が開始されだしたのである。

倉の持主はこのときはげしい驚愕と、深い感激に心亂れ命運の前にひれ伏して云つた。

「どうぞ皆お遣しにはなりませぬやうに。どうぞ、どうぞ、米二三百石ばかりがほどは留め置かせられて御使ひ下されませ。」

「いらぬことぢや」

命運は言下に卻けた。

「それを此處へ置いたところで何事であらう。」
「では日ごろおいりやうの分だけとして十俵か二十俵も――」
「そんなにまでも入用のことはない」
命蓮と彼との問答はこれで絶えた。米は殘らず彼の家へと飛び去つてしまつたのである。

八

飛鉢の法が宗教上のある事實に於ける何等かの象徴と考へ難い理由は以上の傳説のなかのいかにもデリケエトないきさつが物語つてゐるやうに思はれる。しかし一面から考へると千石も藏することの出來る巨大な倉、そしてさう云ふ建造物を搬浚つて來る鉢も、どうも荒誕怪奇な支那の傳説めいてゐて容易に信用することが出來ないやうである。

藤原時代末期になつては此のあぜ倉に對する迷信が熾んに成つてその倉の古ぼけた柱や壁の材木の端を切り取つて來て、肌身につけてゐれば何等か福徳が授かるものと信じられたと云ふが、あるひはさうした氣狂ひ染みた信仰が係うした異様な傳説を捏ちあげてしまつたものかも知れない。

ところが面白いことには、命蓮が飛ばせてゐて此のあぜ倉を浚つて來たその問題の鉢が、どうも現在殘つてゐるらしいのである。

その鉢はいま奈良博物館におさめられてゐる。鐵鉢ではなしに銅鉢でその上に鍍金をほどこしてゐる。高さは五寸四分、口徑八寸、厚さは一分餘り、その目方は二百三十匁五分と云ふといかにも詳しいやうであるが實は日本金石史の記するところである。この鉢のぐるりの口縁に「聖徳君奉施×金御鉢一口施所上總講師寛運延長七年歳次己丑」と毛彫をもつて刻した文字がある。

延長七年とは西暦九百二十九年代のことで恰も醍醐天皇の御代に相當する。して見れば、上記の命蓮の劍の護法を修した當時とはさしてははなはだしくへだたるものではない。恐らくは命蓮の歿後、そのあとを受けてこの山に來つた寛運と云ふものが、信貴山朝護國孫子寺の草創の由緒に因んで、聖徳君と銘じて大切に保存したものではないだらうか。延長七年の文字がどうも似せものでないことを證據だてゝゐるやうに思はれるが餘り信用してもらつても困る。

淨藏の鉢とは異なつて絶大な威力を發揮した鉢ではあつたが、いま奈良博物館に陳列されてゐてはどれ程偉い坊さんが來てもなかなか飛んで見れさうな樣子も見せてゐない。昔、仙人に成つて空中を飛行しやうと熱心に修業した男が、今日は一つ空を飛んで見せるからと云つて近所の人を寄せ集め、さて屋根

へのぼつて、棟木の上から、そら飛ぶぞと空中に身を投げて、無ざんにも地上に叩き落ちたと云ふ話しがある。此の鉢が昔命蓮によつて見事に空中を飛ばされたと云つて、今時そんな眞似でもされては飛んでもないことが出來あがる。駿馬痴漢をのせて走ると云ふことがあるが、此の鉢ばかりはどんな非道いことを仕出かすか解らない。

九

鉢を飛ばせるいま一つの別な話がある。

むかし三河入道寂照と云ふ坊さんが居た。はつきり何時頃の人であつたかと云ふことはいま一寸解りかねるが、矢張り藤原時代の人ではないかと思ふ。本名は大江定基と云つて文章の上手であつた。彼は三河守に任ぜられたが、任國に赴いてゐるうちに妻に早く死に別れ無常を觀じて入道した。さうして寂照と云つたのである。有名な古今集の歌人の寂蓮と間違へるはづではない。

寂照は入道して後支那に渡つた。彼の鉢を飛ばせたのは此の唐土滯在中の出來ごとであつた。

彼は唐土に渡りつくと各地の名刹を巡錫して歩くと云ふやうなことはせずに都に止まつて熱心に修業してゐたのであつた。ところがあるとき時の天子と云つても唐の何帝であるか明らかでないから矢張り時の天子が、多くの高僧達を集めて、宮廷内の佛殿を飾り、僧膳を設けて、彼等に經を誦ぜさせたことがあつた。事がはてゝ後、集まるところの高僧達は齋を賜ふことに成つた、そのとき帝は彼等に左のごとく申し渡した

「今日の齋莚には手ながの役がないから、各自我が鉢を飛ばせてやつて物を受けることゝせられよ」――と。

此の日我が寂照も此の席に列してゐた。しかしこの意外な指圖を聞いて彼は吃驚仰天したのである。何故かと云ふに、各自我が鉢を飛ばせて物を受けよと云はれても、悲しいかな寂照には飛鉢の法と云ふ調法な秘法を心得て置かなかつたからである。手長の役とは江次第にも記するやうに饗膳のときに給仕役送するものを云ふのである

會する高僧達はうやうやしくその旨を承諾した。しかし寂照だけは異邦人のあひだに唯ひとりすつかり面喰つて、今は早や世の無常を觀ずる暇さへもなかつた。此の同じ時にあたつて彼等高僧達は寂照の慌て退つた顔附を眺めてひそかに滿足げな

ほゝえみを交はし合ふのであつた。何となれば、彼等は特に好んで日本の僧を試さんがために恁う云ふ段取りにしたからであつた。果して寂照はいまその窮地に陥れられたのである。高僧ともあらうものがけしからん申し合せをやつたものである。

一體飛鉢の法と云ふものはそれにつけても罪なことを仕出かすものと見える。淨藏の場合も、三日も日乾しにされた。命蓮の場合も百姓のあぜくらを浚つて來てしまつた。こゝではまた寂照がそれを心得て置かなかつたために支那三界迄出かけて赤恥をさらさなければならない仕儀になつてしまつた。

さて諸僧は、まづその第一座より次第に自身の鉢を飛ばせて物を受けた。三河入道寂照は末座に着いてゐた。順位は刻々に彼の方へと迫つて來た。寂照の顏はそれに從つて緊張してゆくが、それに引かへて堂內はにぎやかな談笑の聲に みたされてゐた。

遂に寂照の番にあたつた。

飛ぶことを知らない鉢よ呪はれてあれ、寂照は突如意を決して鉢を持つて立ちあがつた。滿堂の視線はいつせいに彼の上にそそがれた。根が士あがりの坊主で、おまけに大陸的に悠長な支那人とちがつて氣短かな日本人と來てゐるから彼は自身で取りに行かうとしたのであつた。どうせ旅の恥はかき捨てだと云ふやうな圖太い量見からではなしに萬策つきての決斷であつた。

そのとき彼等は騷々しく彼を制し止めた。

「何としたことです。鉢をやつて受けるのですよ、鉢をやつて。」

寂照は此の叱責の聲を耳にして思はず五體のこわばるのを覺えた。

「鉢を飛ばすことは、」と寂照は云つた。「特種な法を行つてするわざではございませうが、不幸にも寂照はいまだ此の法を傳へられては居なかつたのです。日本國に於てもこの法を行ふ人があると云ふことを聞き及んで居りますが、現實に行ふものを見たこともないやうな始末でありますのにどうしていま私が鉢を飛ばせることが出來ませう。」

衆僧はこの言葉を聞かないやうな態度をした。恐ろしく意地の惡い高僧があつたものである。場內はときめき渡り「日本の聖よ、あなたの鉢はおそいぞ、早く早く」といくつものちがつた聲がかまびすしく、方々から叫びたてた。

寂照はこゝに於て心中深く恥た。そして進退きはまつた末彼ははるかに故國日本の方に向ひ瞑目合掌して祈念しはじめた。

「どうぞ、どうぞ國家の三寶、神祇も助け給へ、寂照は異國のはてにあつていま窮地に墜ちて居ります。願はくば寂照に恥見

せ給ふな」

と繰り返し繰り返し念じ入つた。

ところが突如寂照の前にあつた鉢は、はらはらとくるめきいで、獨樂などのやうに佛堂内を三度繞り、唐土の僧達の鉢よりも早く飛びながら齋を受けて戻つて來た。

この突發的な豫想外の出來ごとは、帝をはじめとして、堂内に居並んだ僧たちをいたく驚嘆させた。彼等はかくて涙を垂れて寂照を拜したと云ふことである。

十

此の寂照が鉢を飛ばせた話によると、堂内にあつた大多數の高僧達はみな珍らしい此の飛鉢の法を修得してゐたやうである。また寂照のそのときの言葉によつて見ても、我が國に於ても此の法を行つたものが全然なかつたと云ふ譯ではなかつたやうである。また淨藏の場合を見ても大童がやつてゐるし、しかもその實力の點に於ては淨藏の方がこの名もなき童子に劣つてゐた。恁うして見ると啻に飛鉢の法と云ふものが上代の僧侶たちのあひだに尠からず行はれてゐたことが知られるのみならずその實際的な威力の點に於てもそれぞれ段階があつたことが知られる。

淨藏、命蓮、寂照等について此の秘法の實際をわれわれは見て來たが、それでは一體その秘法と云ふのはどう云ふものであらうかと云ふことがまづ疑問となつて來る。と云つて奇術師がやつてゐる譯ではないから、訊きにゆくことも出來ないのである。

しかし密教發達志は中唐のころ、飛鉢儀軌と云ふものが一卷あつた由を記してゐる。或はまた成就夢想法一卷もそれについて記するところがあると云ふことである。それには飛鉢の呪法も説かれてあると云ふがこの二書亦その請來をつまびらかにせず爲し疑ふべしと爲すと附記してあるからどの程度迄信じていいのかは分らない。

更にまた飛空大鉢法と云ふものが一卷あつて、釋尊の飛鉢法印呪を説くものであると云ふ。一印、三呪とあるが、その印法も、呪法もあきらかではない。

恁う書いて來ると、どれもこれも解らないだらけで甚だ恐縮するが、それが解るくらゐならば何にも紙を展べて斯くくだくだと書きたてるにもあたらないやうである。印を結んで呪を唱へたちどころにやつて見るところであるが、それが出來なければこそ此の氣まぐれな隨筆の稿も成つた次第である。乞ふ讀者諸君、これを諒とせられよ。

泰西創作版畫の蒐集

小島烏水

(一)

我が浮世繪を世界的に名高くしたのは、又初めて認めたのは、誰が、何處で、といふ問題は、宇治川の先陣爭ひのやうに、「物語」の領域に入つてしまつた、藝術品として認めたのは、或は佛蘭西の文豪ゾラが、乾酪を買つた包紙に、浮世繪を見つけて、騒ぎ出したのが、初めだとか、版畫家ブラックモンが、多大の犠牲を拂つて、その浮世繪を手に入れたとかいふやうな傳説はある、さう大して古い事でもないのに、傳説の霞で、美くしくぼかされてゐる、その霞を吹き拂つて、判然とした形象が殘つてゐるのは、ゴンクウル兄弟の、歌麿と北齋の評傳であり、ビングの藝術「日本」であり、ミレーが、浮世繪の保存慾から、親友と爭つた書翰の斷片であり、フェノロサの「マスタアス、オブ、ウキヨヱ」外、數種の名著であり、其他汗牛充棟の研究文献である、日本人側で、之に携はつた人々は、岩井銀三郎氏にしても、林忠正氏にしても、最後まで生き殘つた小林文七氏にしても、既に過去帳中の人となつた、古老の談話とか、口碑とかいふものが、正確なる歴史の材料として、便りになるにもせよ、然らざるにもせよ、實演の役者は、永久に黒幕に隠れてしまつた、傳説の霞は、濃くなる一方だ、浮世繪西漸史は、成るたけ早く起稿されねばなるまい。

併し、誰が初めて發見したにもせよ、逸早く研究したにもせよ、かういふ事だけは、言明し得られる、則ち泰西には、版畫を藝術品として蒐集し、珍重し、研究する歴史と、傳統は早くからあつたのだ、先づ蒐集家としては、英國のジョン、エヴヱリンの如きは、山積の所藏者たりし上に、遺言までして、ナン

タイル作の肖像版畫を、集めさせたといひ、獨逸のルーパート親王（一六一九――一六八二）の如きは、單に蒐集者たりしのみならず、自身が針を執つて、チシアンの肖像や、自畫像を、銅版に彫り、メゾチント版も、彼の發明であるとさへ言はれてゐる、佛蘭西ルイ王朝の、アツペ、ド、マヨール親王は、一六六六年に於て、既に十二萬三千點の版畫を所藏せられてゐたと傳へられてゐる、近代の蒐集家に至つては、算へる暇がない、又、典據とするに足るべき版畫の研究書には、維納に於て、有名なアダム、バアツテの「創作版畫家」二十一卷（一八〇三―一八二一年）の出板があり、ライプチに於ては、パツサヴアンの「創作版畫家」六冊（一八六〇――一八六四年）の刊行がある、その他、或一人の藝術家を對象とした版畫研究書は、枚擧に堪えないくらい多い、されば、泰西の美術館、博物館は素より、圖書館までも、版畫室の立派な設備がある、この雰圍氣の下に、浮世繪が、絕東異鄕の名花として、移植せられ、發育せられたのは、當然である、浮世繪は、泰西藝術家のためには、豚に投げられた眞珠ではなかつたのである、それを立場逆ひに言へば、浮世繪のおかげで、版畫國の光榮を有する日本に於ても、泰西の版畫を蒐集し、保存し、研究することに依つて、益す浮世繪の特長が理解せられ、併せて泰西版畫の特色が、吞み込めるのである、そして久しい間の、藝術史上の空白に、脫落したページが、貼り付けられて、完本となり得るのである。

それを私が、現實に味つたのは、一九一七年、私が米國ロスアンゼルスに在住してゐた頃、彼地の博物館、エキスポジション、パークの美術室に掲げられた「日本の繪畫」なるものが、明治の初年、輸出向きに、職人が製造した醜悪無類の繪畫（と言ひ得べくば）であつたゝめに、之に取つて代るべく、友人若尾氏と相談の上、二人の蒐集をあつめて、歌麿、北齋、廣重等の美人風俗の浮世繪を、出品したことがあつた、館では好意を表して、同室の、相對した壁間に、デユラアや、レムブラントやウイツスラアの版畫を掲げてくれた、歌麿の高島おひさは、ウイツスラアの少女、レデイ、ヘイデンと向き合ひ、廣重の江戸名所隅田川は、レムブラントの、和蘭低地の水車に向つて流れた、デユラアの十字架上の基督を見下して、北齋の富士は、高く聳へてゐる、浮世繪とエツチングの二元的系統を、同室に並行陳列することが、いゝかわるいかは、別として、エツチングの金屬的に固い線には、人體がある、人體の放つ體臭がある、浮世繪の古びて雅びやかな色彩は、人物その物までが、衣裳の模樣が、屈折にしかならないが、そこには、美しい自然の流動がある、不朽の人間と不死の自然とは、この狹い版畫室に、緊

拌されに、仲よくしてゐた、私の身邊を續ぐつて、浮世繪と泰西版畫とは、かくして第一交叉をした。

間もなく、私に泰西版畫蒐集のスタアトを切らせる「或日」が來た、その或日、ロスアンゼルス市に於ける、ブロードウヱイの額椽商の窓に、飾つてあつたウイツスラアの版畫を、のぞいたのが病みつきで、二階の「古今大家創作版畫展覽室」へ、フラフラと上つて行つた、前額の禿げ上つた、鷲の嘴のやうに、鼻が高いので、一見してそれと知られる猶太人の爺さんが、客を待ち受けてゐた、それに引つ掛つて、私はデユラアの、僞物ではないが、切り張りをしたローズ物を、しよひ込まされて、戾つたが、それは後で外の品と、引き替へてもらつた、ともかくも、それが緣で、この猶太人は、私に色々の版畫を見せてくれた、入門の手ほどきもしてくれた、私は無理強ひに、米人の銀行から買はされた自由公債を、この老人の手に渡して、ウイツスラアのドライポイント「暴風雨」一點と、ミレーの版畫での大作「編み物する牧羊女」一點を、手に入れた、忘れもしない雨の夕、私はミレーのほん物を手にした歡喜で、市中をうろつき廻つたことをおぼえてゐる、この猶太人の名は、頭文字を取つてHと言つて置く、Hは日本の浮世繪のことを、知りたいからと、私のロスアンゼルスの住宅へも訪ねて來た。私は廣重の東海道五十三次、保永堂板の蒲原を、彼の所有してゐたレムブランドのエツチング、婦人讀書と交換した、蒲原の由來を書いてくれと賴まれて、下手な英文で、極めをつけたが、恐らくこれは後に、日本浮世繪の蒐集家、小島某氏の自筆書狀添えとか、何とか言つて、錦繪の箔をつける材料にされたらうと思へば、くすぐつたくなる。何となれば、この猶太人は、私に書籍をくれたり、晩飯に呼んだりした親切を、償却すべく、私に賣りつけた版畫は、時價の二倍も三倍もしてゐたことを、後に知つた程だから、蒲原を寢かして置く筈がない。その後は、この手ほどきの老師を、すつぽかして、紐育、倫敦、巴里から、直接に版畫目錄を取り寄せ、それに依つて註文することにした。實のところ、さういふ專門の版畫商の在ることも、調法なカタログの出版されてゐることも、私は、初めは知らなかつたのであつた。その後、聞くとH老人は心臟痲痺で自宅で頓死したさうだが、廣重の蒲原はどうなつたか知らむ。それよりも、極め付きの手紙の運命が氣にかゝるが、私を中心としての浮世繪と、泰西版畫の、第二交叉點は、この邊で一と先づ切斷する。

それから、泰西版畫の蒐集へと、一直線に進む。

（二）

このやうにして、一枚二枚と落葉寄せに掻き集めて行く內、いつの間にか、蒐集の峰が築かれて來た、その峰は三つに分岐してゐる、最初の一つは、デユラアとレムブランドを主にした、古典的作品（勿論版畫のみに就いて言ふ以下同じ）に、ゴヤを附屬させる、次はバルビゾンの村にかたまつてゐる高踏派で、森の精コロー、豚の親友ジヤツク、土にしがみ付いた農人ミレーの一群である、最後は、マネエを皮切りにした印象派から、後期印象派、點彩派、野獸派、立體畫家、等、等、等と更家の命名通りに、幾つかの支峰や、溪谷が、出來てゐる、この部落は、版畫復興の、黄金時代なる現代に、つゞいてゐるだけあつて、最も錯綜せる萬華鏡の燦爛美を極盡してゐる。

これから私に、一つ一つの峰を、案內させてもらひたい。

先づ泰西に於ける最初の創作版畫は、何年頃、何處の國に始まつたかといふことは、未解決の問題であるが、今までに知れてゐるところでは、案外にも、アルプスの雪で光つてゐる瑞西に、始まつてゐる、本名が知れないところから、俗に「カルタ遊び」の作家で通つてゐる人だ、その刀法は、直線を密集して、感じよく按排したところに、特色のある稚拙の作品で、一四〇〇年の初期であると信ぜられてゐる、それに次いでは、矢張り本名の知られてゐない「一四四六年の作家」「使徒ヨハネの作家」などを算へられるが、凡そ是等暗黒時代の作品は、アムステルダム、伯林、ドレスデン、維納等の美術館に珍藏せられて、我々の手に入る望みは殆と無い、恰も我が浮世繪に於ても、岩佐又兵衛勝以の作品が、容易に一私人の手に入り難いのと、同様である、名の知れてゐる限りの早い時代の大家は、マルチン、シヨンガウエル（一四四五——一四九一）であるが、甚だ高價なる故を以て、私の藏品中には、一枚も加へられてない、聊か遅れて、明星の爛々たる光輝を放つたのは、アルブレヒト、デユラア（一四七一——一五二八）である、デユラアは、敬虔なる基督教の信者であるから、彼の版畫には、エツチング及び木版を通じて、基督の一代記を取り扱つたものが多く、（その以前の失名大家の作、素よりさうであるが）日本の古い繪卷物や、起類や、又は摺佛、屏繪の一枚摺が、神佛、又は高僧を題材としたのと同じであるが、しかも特に注意すべきは、宗教關係と放れて、一個人の肖像版畫を、デユラアに於ては、比較的に多く作つたことで、日本の浮世繪では、寛政期以後の役者繪、歌麿の美人繪に見るやうな「大首」風の胸像を、エツチングに製作した點で、藝術の分野を延長させたのみならず、創作期は一五一三年から、一六年の間、日本の足利時代に該當してゐるから、日本浮世繪の肖像畫に比べると、遙かに早い、私の藏品

の中で「夢」と題する婦人の裸體畫は、肖像畫ではないけれど、デユラアの、比較的厳かつい筆觸が、豐滿なる肉體美に、水水しい若い力を波打たせてゐる、デユラアの名作版畫「四裸婦」を除いての傑作であると信じてゐる、その他は、基督受難の連作で、木版では「サムソンの獅子を裂く圖」と、エツチングでは「武士と死と惡魔」の二作は、私藏の中では、大作に屬する、デユラア逝いて約百年の後、ヴアンダイク（一五九九ー一六四一）が起つて、多量の肖像版畫を出したが、その中の一枚、コルネリウス、ヴオスの像で、製板者ルーカス、ヴオスタブマンの名を彫り加へない前の、第一ステートに屬するものを入手した。

次いで來るものは、太陽である、赫々たるレムブランド（一六〇六ー一六六九）がそれだ、レムブランドの版畫だけを、研究した大著が、今迄に、彼の版畫の總容積よりも、全貫目よりも、以上に出てゐるほど、版畫に於ても、レムブランドは重きを成してゐる、油繪と版畫と、天秤に掛けて均一の重量を有する作家は、恐らく前にレムブランド、後にミレーあるのみだらう、併し今でも恐らくさうであらうが、レムブランドの時代は、江戸の浮世繪全盛期と違つて、版畫では飯の食へなかつた時代であつた、稀に百ギルダア刷（一枚百ギルダアで賣り出したところから來た名だ）の如き、賣る目的の版畫を作らないでもなかつたが、多くは即興の作、感興に任せての作であつた、中にも「シツキスの橋」といふ小品風景のエツチングは、人を訪問して、待たされてゐる間に、銅版を取り出して、手すさみに、針で引ツ掻いたといふくらゐに、即興的であつた、併し彼は仕事をした、グングンと運んで行つた、彼がアムステルダムの市中を銅版で寫生したことは、北齋廣重の江戸名所に於ける如く、ピラネシの羅馬に於ける如く、近代シヤルル、メリヨンの巴里に於けるが如くであつた、殊に風景版畫は、前にデユラアに於ても、宗教畫の背景や、又大砲と題する作品を、獨立した風景版畫として認められることはあつても、之を風景畫として完成し、大成した點に於て、レムブランドは第一人者であつた、彼は又、自作の版畫に、銀刷、硫黄色刷（これは併し、浮世繪の雲母摺や、黄摺のやうに、バツタを濃く鮮明に塗り潰したものでなく、只だ線の上に、トーンを加へただけだ）も試みた、彼に至つて、完全に、伊太利文藝復興期以來の「正格」「古典」等の雕石から脱却して、自由と流動を見た、藝術は寺院や宮殿から街頭へと躍出した、人物版畫としては、當時和蘭に最も多く見られた流離落魄の乞食や、物もらひを、克明に描いた、殊に肖像版畫としては、彼の母、父及び彼自身を、妻サ

スキアを多く描いた、いづれも魂が生動してゐる、それは和蘭魂であつて、全人類に呼びかける魂である、その中には、劍に凭れる、或は劍を拔いたレムブランド自身、眞珠を飾れる妻サスキア等の、中判や、小品があるが、彼の名作たるを耻かしめないと考へる、その外、老人の寫生、裸體の習作、知人のスケッチなども、所藏の中に收めた。

彼の版畫の中で、最高の價格を呼んでゐるのは、恐らく「百ギルダア刷」の、基督が病人と小兒たちを迎へる圖であらう、紙幅に於ても可なりの大作である、私が香港のプリント、ルームで見た同圖の一枚は、保存も完全で、申し分がなかつたが、二萬弗と價格づけられてゐたので、寫樂歌麿の雲母摺も、遠く及ばずと、恐れて近寄る氣にならなかつたが、併し私自身の好みから言へば、さういふ構成的の、戲曲風の大作よりも、感興に充ち滿ちた、寸分の緩るみのない、寫生的の小品や、中判の方を取りたい、無論價格も、その方が遙かに安く、私などにも集めいゝのだ。

レムブランドの外で、蒐集中に特記したいのは、クリストフアノ、ロベツタ（一四六二年生—一五二二年頃まで製作）が、フイリピノ、リツピの名高い油繪に、ヒントを得て、創作した版畫、クニリトが東方賢人の供物を受くる圖や、アルブレヒト、アルトドルフア（一四八〇——一五三八）の「風景の聖母」、キヤラグリオ（一五〇〇——一五六五年頃）の基督降架などで、孰れも版畫の中では、古典的作品に屬する、そしてデユラアと、レムブランドの双峰を繞ぐつて、オスタアデ（一六一〇——一六八五）レイデン（一四九四——一五三三）以下の諸家の作をも、相應に加へ得たことを悦ぶ。

レムブランドから、一足飛びに、第二の高峰なるバルビゾン派に移らうとするには、その間に、仰ぐべき孤峰が、いくつもある、クロード、ローレン（一六〇〇——一六八二）もさうであるが、ゴヤ（一七四六——一八二八）は、尤も閑却出來難い第一山だ、ゴヤの版畫は、連作が多く、大盤に於て、囚人集全四枚、闘牛集全三十三枚、戰禍全八十二枚、移り氣の卷全八十枚、俚諺集全十八枚が、主要なるものだ、私は上述の諸集の中から、代表作を二三點づつ拾收したが、ゴヤの原板から、近代になつて摺刷した粗惡版が、世に流布してゐるのを避けて、保存の完全な、元摺を揃へたところに、骨を折つたのだ、併し繪の系統から言へば、ゴヤからバルビゾン派に移るべきものでなく、印象派のマネエこそ、ゴヤの繼承者と言つて可なりであらう、特に版畫の方面では。

（三）

パルビゾン村の入口で、言つて置きたいことがある、創作版畫といふと、自畫自刻自刷の上に、番號を打つたり、自署したりするやうに、取られるが、さうするのは、泰西に於てすら、最近代の事である、コロー、ミレー時代には、殆どそれが無かつた、ミレー（一八一四—一八七五）の版畫では、どうかすると、鉛筆自署のものを見受けるが、それは併し、友人へ贈呈した際に、敬意を表するしるしに、自署したまでで、近代の所謂、創作版畫に於けるやうな、商業意識からやつたのではない、殊にミレーとなると、繪は賣れず、エッチングや木版などが、賣り物になれやうとは思ひも寄らなかつた、故にミレーの版畫は、音樂家が退屈凌ぎに、試みに鍵盤に向つて、チユーニングを取るやうに、銅板をいぢつたに過ぎない、ふと頭を掠めた着想や、眼に浮んだ光景を、壁に樂書きでもするやうに、木板銅板に、スケッチしたまでだ、されば印刷も、肉汁用の匙の背中で、紙を擦つて見たり、厭氣（いやけ）がさすと、折角刷つた畫面を、惜し氣もなくルウラアで抹消したり、又興味が乘ると、克明に版畫に色づけをしたこともある（その一枚は、ボストン博物館に藏せられてゐる「手車を推す農夫」がそれである）凡そミレーのエッチング二十一點ある中に、八點は即興的スケッチに過ぎない、一枚の銅版木板を仕切つて、雜居的に、小畫を目白押しに、彫つたのもある、併し殘れる十三點の中には、油繪の大作の準備として、製版しながらも、立派に獨立した藝術版畫になつてゐるのもある、「牛乳を攪き搬す女」「夜なべ仕事」「羊毛を梳く女」「落穂拾ひ」「仕事に出かける農人たち」などはそれである、又、「小兒に乳を與へる女」は、ミレーの娘、マダム、ハイマンと、孫をモデルにしたものだ、貧乏なミレーは、モデルを雇ふどころではなかつた、ミレーの油繪が賣れなかつたやうに、版畫も隨分と、虐待された、音樂本の表紙畫かを依頼されて、石版に製作して屆けたら、氣に入らないと言つて、註文主から引取を拒絕された上、面當てがましく、戶をピッシャリ閉められて、指を怪我しそくねたといふ話は、たしか名高いサンシーアの、ミレー傳に出てゐたかと記憶してゐるが、ミレーの石版「種蒔き」は、一八五一年、石版の專門雜誌「ル、アーチスト」に寄せて沒書になり、一八七九年、即ちミレー歿後までは、日の目を見なかつた、それが實にミレー石版中の傑作のみならず、當時の石版中、最高の標準を示してゐるのだから驚ろく、又エッチングでも、カダアル監督の下にある版畫協會の囑に應じて、一八六二年に製作した「編み物する牧羊の女」

は、代表的製作と言つて、恥かしからぬものであるのに、協會はミレーに撤回を勸告し、ミレーは同協會を脫退するに至つた、前の「ル、アーチスト」と言ひ、カダアルの版畫協會といひ、孰れも創作版畫再興のために、設立されたもので、藝術に理解ある人々の集團であるのに、此始末だから呆れる。

ミレーは又、木板を製作したが、弟のピエルと、ジアンの兩人が、交る〳〵木を刻んで、ミレーの勞を省つた、純粹のミレー自畫自刻と傳へられてゐるのも、一點あるが、それは重きをなすもので無かつた、ともかくも、ミレー兄弟の木版は、簡淨素朴で、デュラア時代の木版隆昌期の、呼吸を吹き返した感がある、私は、幸ひにしてミレーのエッチング、石版、及び木版の、殆ど全部を蒐集し得たが、木板の一枚「水瓶に汲み込む農婦」は、ミレー自身、スケッチの吸紙を利用して、手摺りにしたもので、裏面に「鋤に足掛けた農夫」の粗末な鉛筆寫生がしてある、これは紐育の版畫商、フレデリック、ケッペルが、ミレーの遺族から購入したのを、私が買ひ取つたのである、その後、同じ原版から、刷師が限定枚數を印刷したのが、世に頒付されたが、比較のため、兩方を展覽會に出して置いた、尙ほミレーは、エッチングの試刷に當つて、古雜誌などを引きちぎり、餘白を利用して、一部分を試刷したのがある、そんなものは紙屑籠に捨てられたのだらうが、拾ひ出されて、却つて珍藏されてゐる、私の此種の所藏には、ミレーの版畫目錄を撰したルイ、ルブランの押印がある。

私のミレーの蒐集には、版畫以外に、素描を四點加へた、小形の手帖に「鋤を持てる農人」をスケッチしたのが一枚、森の景が一枚、これは頭痛持ちのミレーが、寢轉びによく入つた森の寫生であるらしい、「紡錘と皿を抱へた農婦」が一枚、古い暗い紙に、黑チョークで、力強い描線を奔らせてゐる、油繪やエッチングの「仕事に出かける農夫たち」のデッサンとして、描き放したのであらう、それから「羊毛を剪る人」のスケッチが一枚、これは古い紙に、鉛筆でスケッチした上に、婦人の輪郭は、黑チョークで強めてある、男とては、鉛筆で輪郭を取つただけで、男の方だけは略ぼ纏まつてゐるが、襟首や、肩根は、疎らに有耶無耶の線をのたくらせてあるだけだ、あとは頭の中に疊み込んであると言つた風である、素描で思ひ出したが、ミレーは比較的纏まつたエッチングを作る前には、大體の素描をやつて、それからエッチングに寫し、最後に油繪に取り掛つたと見えて（中にはその順序を前後したのもあらうが）エッチングと、油繪と、素描と、同題同構圖のものは、極めて多く、散見される、幸ひにエッチング用の素描は、悉くと言つても差支へ

ないほど、ボストン博物館に所藏されてゐるので、比較研究に便利がいゝ、私は是等素描の寫眞を、ボストン博物館から買ひ求めて來たから、エッチングと並んで、素描寫眞を添える答であつたが、間に合はないので、その方は中止した。

こゝで言ひ添えて置く、私の蒐集した泰西創作版畫の內から、三百五十餘點を選拔して、四月一日から十四日まで、東京朝日新聞社主催の下に、同社畫廊で、展覽會を開くことになつてゐる、文中展覽會云々は、この會のことを言ふのである。

ミレーのエッチングから、コロー（一七九六―一八七五）のそれに移ると、土の匂ひから、森の香に變る、大地にしつかりと立脚した農人の藝術から、木魂や、水の精の、幻想曲に暗轉する、コローのエッチングは、晩年五十歲に達した頃から、製作を始め、しかも友人版畫家、ブラックモン（一八三三―一九一四）の力を借りたりして、藥品いぢりまで手傳つてもらつたりして、辛くも十數點を完成したのであつた、伊太利好きのコローには、「トスカン記念」「伊太利記念」「伊太利風景」「羅馬の近傍」「カムパーンの森」「フロレンチンのドーム」などの作がある、その外「ヴイナスと娘」が二枚、ミレーの版畫の、人物畫であるばかりとは、反對に、人物の創作としては、この二點だけだ、他はコロー作地附近の風景などである、殊にコロー得意の森の風景となると、線と線とが、或はかすれ、或は入り亂れて、高く延び、低くうねり、大氣の如く惻々と人の肺腑へ流れ入る、リズムの律動に至つては、音樂好きのコローにして、始めて引き得る線である、老いても、美音は娘子のやうだと言はれたコローにして、始めて歌ひ得る紙上節奏である、「美くしきコローより、世に美くしき物なし」と稱へられたのは、ほんとうだ、エッチングを簡單に「黑と白の藝術」と言ふ勿れ、コロー好みの眞珠の灰、猫眼石の空の色、鮑の貝の水色は、眼も綾なるばかりに、彼の版畫のおもてに流動してゐる、コローのエッチングこそ、ユニークな、衒ひ氣のない、邪念を絕つた、八十歲の小兒にして、終生不犯の聖僧的生涯、そのものが產んだ自然の和讚である。

バルビゾン派の版畫としては、ルウソウ（一八一二―一八六七）チヤツク（一八一三―一八九四）と、ダウビニイ（一八一七―一八七八）の三人は、是非舉げなければならない、ルーソーは僅か、三四枚の製作しかないから、別として、チヤツクは寧ろミレーの前に立つ人であらう、ダウビニイは、コローの弟分である、兩人とも、コロー、ミレーよりも、版畫を多作したといふ意味に於て、專門の版畫家である、コロー、ミレーのは、餘技とも言へるが、この兩人に取つては、本技である、殊にチヤ

ツクには、傑作が多い、ディアス（一八〇七—一八七六）は挿繪風の、ジュプレ（一八一一—一八八九）は風景の、石版を製作してゐるが、是等は、偉大なるコロー、ミレーの版畫出現前の序曲として、見らるべきものである。

（四）

印象派以後となつてからは、何と言つても、版畫勃興時代である、先づ浮世繪を見つけ出したのが、誰であつても、浮世繪と切つても切れぬ親密なる關係を結んだのは、彼等である、マネヱは七色の色版を調合した彩色石版、ポリチネルを作つた（私の藏品に加へられてある）それは錦繪から思ひついたとも言はれてゐる、ドガも、ロートレツクも、錦繪の愛好者であつた、印象派と接觸したウイツスラアが、廣重の東都名所、兩國之宵月からヒントを得て、バタシア橋の油繪を製作して、ラスキンに惡評され、訴訟沙汰となつたのは、有名な話柄である、そのウイツスラアが、近代切つての版畫の巨匠になつたのも、偶然でない。

これから印象派及び以後の巨匠、マネヱ、シスレイ、ドガ、セザンヌ、ピザロ、ルヌアール、ゴツホ、ゴウギャン、マチス、ピカツソ、シニャツク、シャウアンヌ等、近代美術史に、大名を伺ふ作家が、言ひ合したやうに、可なりに多量なる版畫製作をしてゐる（セザンヌとゴツホは少ないが）是等の重なる版畫は、その目錄を擧げ、解說を書くだけでも、恐らく數十卷の、巨冊を要するであらうし、私の貧弱なる所藏品だけでも、遂一の記述は、容易でない、引つ括めて言へば、版畫の各樣式、エツチング、ドライポイント、アクアチント、ソフトグラウンド、石版、木版等、有らゆる種類は、彼等の手で復興せられ、大成された、幾世紀に亘つて連綿たる版畫藝術は、現代になつて、鋭利なる縱斷面を示した、と言つていゝ、何にしても、現代は版畫の黃金時代になつた。

その中で、特筆して然るべきは、ピザロ（一八三〇—一九〇三）であらう、ピザロの版畫は、專門家ですら、首をひねるほど、製作上の新技工を施してある、私のピザロ蒐集の中にはミレーの筆意に倣つた石版「種蒔き」「薪を負へる農婦」「染村晩歸」などの、詩趣饒かな作がある、逸品は蠟燭の微光のドに、祖母を寫したエツチング（一八八九年作）でピザロ自身、鉛筆で自署の上、ブルカアドに贈呈したのを、一枚、入手した、第七ステートまで改作した中の、第五ステートに屬するもので、從來世に存在を知られてゐなかつたのを、私の藏品から、始めて登錄され、ロイ、デルテイルの「創作版畫家目錄」にピザ

ロの部（一九二三年刊行）に掲出された。

ゴッホ（一八五三——一八九〇）の作では、「パイプをくはへた男」一點を藏してゐる、ゴッホに畫したことのあるドクトル、ガッシエの肖像で、一八九〇年五月の作であるが、その七月に、ゴッホは自殺したから、恐らく版畫の絶筆であつたらう、私藏のは、ガッシエの遺子、パウルから讓り受けたもので、ガッシエの押印があり、裏にペンで「一八九〇年五月、アウバアにて、ヴアンサン、ヴアン、ゴッホ作るところのエッチング、パウル、ガッシエ」と自署してある、ゴッホ自殺の年には、パウルは、十五歳の青年で、鮮やかにゴッホの風丰を記憶してゐると語つたと云ふ。

ルヌアール（一八四一——一九一〇）の作は、エッチング、ドライポイント、石版、ソフトグラウンド等、中々に多いが、大作として推すべきは、マダモーゼルD女の肖像石版で、豐頰曲眉の「ルヌアールの女」の特色が溢れてゐる、石版の線描で、ふくやかな肉體美が、かくもマッシイヴに盛り上げられた、技巧の冴えには、驚嘆の外はない、晩年の作で、不自由な指先に挾んだ鉛筆で、署名がしてある。

ガウギヤン（一八四八——一九〇三）は、木版が殊に多く、石版之に次ぎ、エッチングは至つて少ない、石版では「海の曲」、その他、好んで黄色の厚紙に刷つてあるが、他の作家には、同じ好みがないやうだ、エッチングには「無果花を賣る女」の大作があるが、間が延びて、おもしろいとは思はれない、木版は、タヒチ島での製作が多くを占めてゐる、「土人の火祭り」は、石版と見紛ふやうな技巧で、雅致が高い、ゴウギヤン自記の「ノア、ノア」の扉紙として、自畫自刷の上、手彩色を施こした一枚は、彼の木版の素朴味を自由に滲み出させたものとして、私の愛玩するところである。

ドガ（一八三四——一九一七）は、ゴヤ、マネエなどと、同じ好みを逐うて、エッチングに、アクアチントを利用した作が多く「舞臺裏の踊子」と題する一八七五年作の、エッチングは、ドガ自身、第八ステートまで改作した內の、第四ステートで、稀品である、「ルーブル考古館」と題する作は、マリー、キヤサット女史を、モデルに使用してある、日本紙刷で、兩方とも「ドガ、アトリエ」の朱印が押してある、ドガが、多くの版畫を製作秘藏してゐたことは、死んでから後、發見されたので、こんなに多く作つてゐたのかと、駭ろかれたといふ話である、ドガのリノタイプは、尤も珍重すべきであるが、あまりに高價で、私の手に入らなかつた

セザンヌ（一八三九——一九〇六）のエッチング、「少女」が

一枚と、「ギヨーマン肖像」が一枚ある、後者はピザロ、ギヨーマン、セザンヌと、三人の間で、自作版畫の交換をし合つた時の作で、セザンヌの「ギヨドマン肖像」は、左の上端に、絞首臺にブラ下つた、首吊りの戯畫を彫り加へてある。セザンヌの作「首縊りの家」と、何か關係があるらしいが、所謂樂屋落ちのたぐひで、當人同士には、微苦笑であらうが、私たちには解らない。

ロダン（一八四〇――一九一七）のは、ドライポイントが主で「春」と題する線描畫は、同樣の構圖を、ペン畫でも試み、又セーヴル陶器にも、ロダンが同樣の下繪を描いて、燒きつけたことがある。その外に、プテウストや、ユドゴトの胸像を、ドライポイントに製作してゐるが、彫刻に見る如き、面の多角的表現がある、コロトのエッチングに、音樂の流動がある如くに、ロダンのドライポイントには、彫刻の面が、放射されてゐるのは、獨得と言ふ外はない。

シヤヴアンヌ（一八二四――一八九八）は、石版が殊に多いが、中にも「貧しき漁夫」の石版大作は、うす紫色の摺刷で、高名な同圖の、壁畫の下圖と見るべきもので、私はこの一枚を、重要視してゐる、彼のエッチングは、或る稀で、「天使」の小品一枚を殘してゐるに過ぎない。

その外、ユーゼヌ、キヤリエール（一八四九――一九〇六）の石版「默想」「笑へる人」リボー（一八三三――一八九二）のエッチング、料理人、ソアンタン、ラツトル（一八三六――一九〇四）の石版「牧歌」、シニヤツク（一八六三年生）の彩色版摺石版、シスレイ（一八三九――一八九九）の着色石版「河畔」、ギヨーマンの彩色石版「赤き岩」「精樂」、これにつゞいて、ロートレツク、マチス、ピカツソ、など、擧げたいものが多いが、今は一切省略する。

最後にマネエ（一八三二――一八八三）に戻つて、マネエの大作としては、前述のポリチネル石版七色刷りの外に、ヴエラスケスの油繪を、版畫に改作した「背像の群れ」がある、外光の下に、十三人の集團を構圖したもので、畫家ムルリヨ、及びヴエラスケス自身の、似顔が描き加へられてある、オリムピアの一枚は、一八六五年のサロンに出品して、問題を起した問時代的の名作を、エッチングに製作したもので、ゾラが、マネエを辯護した一八六七年展覽會の時の、小冊子に、口繪として挿入した分であるが、今は市場に痕を絶つた稀れな方の物として一は、小品「山」と、中判「盆を持てる小兒」の二作（孰れもエツチング）であらう、それに「シヤボン玉」の一枚は珍らしくも、色刷エッチングで、同じエッチングの單一色の刷り[illegible]

半截して、うしろの白紙を利用印刷したのであるが、色刷としては、恐らく試刷に類するのであらう。「喫煙」「マリア、マアゲリタ」「ギタを彈く男」など、孰れも今では、稀な古版で、紙は前の二つが緑色、後の一は、眞ン中に二つ折の痕が殘つてる、これは古帖の殘り紙でも、使用したらしく、第四ステートに屬する、摺は凡て、二つ折になつてゐるのも、おもしろい。

蒐集家の側から見る。

錦繪のコルレクションから、泰西創作版畫のコルレクションへと、延長されることは、自然でもあり、必要でもある、この二つの物は、渾然たる融合が出來たくとも、版畫藝術といふ大名目の下には、結合されなてはならないものだ、日本が錦繪を「錦繪」として、玩具扱ひにした過失は、今日では訂正されたゞ、この上は、泰西創作版畫をも、蒐集し、保存し、移殖することに依つて、版畫國としての、偏寄りを、匡正し、補充しなければなるまいと思ふ。

ロシアのベスプリゾールヌイ

黒川乙吉

一

それは昨年の夏、私が北氷洋から黒海へ歐露を縱斷旅行した時のことであつた。南露の或る驛で、一個十哥で大きな西瓜を買つたが、不味いので捨てやらうと思つて車窓を開けた。その時、私は寢台車の下から、レールとすれ〳〵に、人間の手が一本、ニユーツと出てゐるのを發見した。それは、まさしく生きた人間の手で、千切れたぼろの中から、垢じみた肘が露出しになつて、紫を摑んだやうな掌は、曇つた空模樣が、雨になつたのではないかを確めんとするものゝ如く擴げられてあつた。汽車は、全速力で走つてゐたのである。

私は窓際をドン〳〵たゝいて見た。――と、手が引こんで、今度は、どぶ溝の中から拾ひあげた喇叭みたいな頭が出て來て、垢の中から光る眼が、私を見あげた。十五六才と見ゆる、ベスプリゾールヌイの少年だ。彼は、私の手にある西瓜に目を移すと、いきなり、また掌を出した。

「オイ、どこへ行くんだい？」

「クリミヤへ」

西瓜は、私の手から、彼の掌に飛んだ。

「クリミヤへ何をしに行くんかい？」

「…………」

「どこから來た？」

「…………」

頭も、手も引こんで、返辭のかわりに、西瓜の皮が投げ出されるのみだ。私の聲をきゝつけて、乘り合客は、窓ぎわにつめかけて大さわぎしたが、奴さん、もう車の下からは姿を見せなかつた。

所が、どこをどう傳はつて行つたものか、十分間の後には、

彼がすぐ前の車輛の車蓋の上に、破れた衣類を脱いで、頭をとつてゐるのを乘客達は發見した。その時は、同類三人であつた。

「ベスプリゾールヌイ」とは「世話をする人のない」子供をいふ。「放浪兒」と翻譯する人もあるが「放浪兒」は適譯でないので、本文には原名をそのまゝ用ゐて置くことにする。

さて、停車場が近くなつて來る。汽車が驛構內に這入る時、もう車蓋には誰も居ない。樣子如何と見あげると、彼等は汽車から離れ、構內を出ると、先まわりして、まだ除行しつゝある汽車に飛びついてしまふのだ。冬は零下數十度の嚴寒になるロシアのことだから、これ等陸際守たちが、汽車の油鑵になつて、ひろいソヴイエト聯邦をせましとばかり、いたる所に變幻出沒するのは夏季に多いが、冬にだつて、汽車を家とするベスプリゾールヌイを見ないわけではない。否、度々見うけることがある。

二

昨年十一月十五日、私はモスクワをたつて歸國の途についた。例年にない寒さで、まだ十一月なのに、西伯利の或る驛では寒暖計が零下二十七度を示してゐた。

汽車が烏拉爾山地にさしかゝつた或る晩、私は、食堂車から寢台車へ歸へらうとして、昇降口の戸を閉めて、三四人のベスプリゾールヌイが、破れた外套にふるへてゐるのを見た。私を見るなり、その一人が

「小父さん、パンお呉れないか」と手を出すのであつた。よろしい、話をきいてやらう！私は、車室に歸つて、ビスケットの幾摑かでポケットをふくらしながら、昇降口に出かけた。ベスプリゾールヌイ達は、ビスケットをがりがりかじりながら、さもうるさいやうに、私の問に答へる。

「……一番大きいのが十六才、次が十五才、小さい子は十三才。十六才が中央亞細亞の生れ、十五才がヴォルガ河沿岸の產、十三才は何處で生れたか自分でも知らぬ……」

十三才は、破れた靴から足の指を出してゐる。私は十六才に

「どこから、どこへ行くんだ」とたづねた。

「モスクワの××工場に仕事があるときいて出かけたが、駄目だつたので、スウエドロフスクへ行かうと思ふとる」

「道伴者、皆でスウエドロフスクに行くのか」ときけば「さうだ」といふ。スウエドロフスクは、ニコライ第二世皇帝最後の地、舊名「エカチエリンブルグ」だ。

「彼地に身寄りでも居るのかい？」

「居ない」

「仕事があるか？」

「ない」

「それで、どうするのかい？」

十六才の、ギョローッとした眼が「あゝうるさい」と云つた。そして彼は横を向いて仕舞つた。そこへ、列車ボーイが車輛のスチームをたきに來た。

「このお客さん達は、何處から乘つたのかい」

ときくと

「前の驛からです。この寒さでせう、憫然だから、こゝに乘せてやりました。まだ居ますよ、ほれ、こゝに」

と人のいゝボーイは、にこ〳〵しながら、隅の狹苦しい石炭入れ場の戸をあけて見せた。私がビスケットをつかみ出すと、その暗がりから、四人ほど出て來た。一人は女であつた。頭巾をして、古いものではあるが外套の形をしたものを纏ひ、靴もちやんと穿いてゐる。男の子供たちより、服裝がよい譯だ。最初の一瞥で、私のうたれたのは、眼つきのいかにもけわしくて、女性的の柔か味がその女の何所にもないことだつた。

二年ばかり前に、私が、ベスプリゾールヌイの救濟にあたつてゐる文部人民委員會のモスクワ支部「モノ」に行つて聞いた話を想出した「モノ」に民警に連れられて來るベスプリゾールヌイ百人のうち、女は六人内外で、女がベスプリゾールヌイとして民警の厄介になるものは、ひどい病身に限るといふのであつた。女にすたりはなく、身體さへ達者なら、よし親兄弟がなくとも、何とか身のふり方がつくものだといふこと、その時、おもしろく感じたのであつた。

この女、いゝ年をして、ベスプリゾールヌイの一團に這入つて、かうして放浪してゐるのはいさゝか變である。一體、幾才であらう、老婆のやうな顏はしてゐるが、何處となくシャンとしてゐるところは、中年增女のやうでもある。

「この老婆さんは幾才だらう？」と私はボーイをかへりみた。

「妾を老婆と云ふとる」――その女、大變なけん幕である。

「二十四才の老婆が、どこの世界にあるもんか」

「二十四才？　ロシア人は滿で數へるから、數へ年の二十五だ。廿五才といへば、これから、やつと女性としての花が咲かうといふ年齡ぢやないか。それだのに、この萎び方は、まあ何といふことか。私は「五十才か」と云はうとしてゐたのだつた。

「えゝ、私にも廿四才と云ひましたよ、まだほんのお嬢さんですよ、不幸な結婚して、離緣になつて、自棄ばちに、行路をふみはづしたらしいのです。恐ろしいもんですよ、生活がこんな姿にさせたのでせう」とボーイは、傍から註をつける。

汽車は間もなく或る小さな驛にとまつた。スウエドロフスクから二つばかり手前の驛だ。ボーイは、そこで、この際居守たちを下ろしてしまつた。車窓から透して見ると、小さな驛は、淋しさうに雪の中に取のこされて、そこには、カンテラを下げた驛員のほか、乗降の客もないやうであつた。私はボーイに、「彼奴等はこゝで下されて、どうするのだらう」ときくと、「次の汽車まで、こゝにまつてるでせう。そして列車ボーイに頼んで、また一二驛のせて貰ふのです。一切乗せぬボーイもゐますが、大抵、のせてくれますよ、この寒さや車の下や、車蓋ではやりきれませんからな」

三

私は、大正十四年七月十四日モスクワに着いた。その翌日は田中大使の信任狀捧呈式。大使がクレムリン宮殿から、ソフイスカヤ・ナーベレジナヤの貴賓館に歸へる時刻に私は大使を訪問することになつてゐた。天氣もよかつたし、それに八年見なかつたモスクワの貌をつくづく視たい心持も手傳つて、ブラブラ步くことにした。今、モスクワ・サウエトの一支廳になつてゐる、往昔の市廳舍のところから、赤色廣場へ出る間、昔にかわらぬ人混で、息がつまるやうに揉まれたが、フト氣がついた時は、前年、銀座の伊東屋で大枚十九圓なにがし奮發して買つた、私にとつては涅の子の萬年ペンが、胸から拔き盜られてゐた。ペンを失くしては早速家業に差閊へるので、モスクワ市中を探しまわつて、やつと一本の小型の「オノト」を發見、十五留かを支拂つたやうに思つてゐる。貧弱な「オノト」でも、モスクワでは、巾をきかしたかくこうで胸に差されてあつたが、二三日して、デパートメント・ストーアの「モストルグ」に買物に行つた時から、「オノト」がまた姿を消してしまつた。モスクワについて一週間もたゝぬ間にペンを二本も盜られて、自分のボンヤリさ加減に腹も立てば、馬鹿々々しくもたつた。が、しかし、これからは大に考へることにしやうと決心した。「これから」でも、おそくはなかつたことは後でわかつた。

懇意な一ロシヤ人にこの事を相談したところ、彼はいゝ知慧をかしてくれた。クレムリンの外城壁からニコリスカヤ街へ出る門のあたりに、泥棒ものゝペンを專門に賣る小僧が居る筈だから、そこへ行つたら盜られた分を買ひ戻せるだらう。それから、今度ペンを買つたら、鎖で胸にしばりつけることだ——と斯うだ。早速、敎へられた所へ行つて見ると十七八の子供が二三人、人を憚るやうにして立つてゐる。この連中だらうと思つて

「オイ、無いか？」とたづねて見た。子供たちは、各自、内ポケットから十本づつ位いろ〱のペンを出して見せたが、私の盗まれたのは、その中には這入つてゐなかつた。それで、ウオーターマンの中古品を七留に値切りをして買ひ取つて、その足で時計修繕屋に行つて、上衣の襟の裏からペンを鎖でしばりつけさせた。

それから二年半にわたるモスクワ生活に、私の萬年ペンは幾度か、引抜かれたが、鎖はその都度、掏摸を撃退した。或る時は、電車に乘らうとして、ペンを盗らんとする掏摸に胸の鎖を引つぱられたことがあつた。或る時は、賑やかな通りを歩行いて、誰かに行きあたられ、驚ろいて立とまると、行き當つた男は一散に駆け出して、私の胸には、鎖につながれたペンがブラブラと垂れ下つてゐたこともあつた。ところが、それ等ペンを狙ふ程度の掏摸は大抵子供であつた。しかも破衣跣足のベスプリゾールヌイが多かつた。

私の家の女中は、市場に買出しに行つて歸り路に、ベスプリゾールヌイから、その提げてゐた籠の中のレモンを盗つて、逃げられたことがあつた。私の知つた某婦人は、散歩の途中、手提袋を攫はれた。夏、クレミヤ半島で巣くふた彼等の土窟を見に行つて裸にされた男もあつた。

電車の車台の後には、よく、牛蝨のやうに附着いて、飛んでゐる子供を見うける。煙草をふかしながら、二十人ほども徒黨して、並木公園などを彷徨する無帽、破靴の灰色の群に會ふことは敢へて珍らしくない。夏は、大きな建物の軒下に、いかにも涼しさうに寝てゐる彼等の幾人かを、よく、見うけることがある。アスファルトの道路を修繕するために用ふ大釜の中からおこる時ならぬ人間の話聲に、道行く人が歩をとめることもよくある。もういゝかげんに寒く、雪が街路の釜の上に積まるといふ時候に、その釜の中には彼等が寝てるのだ。停車場の待合室は勿論のこと、その屋根裏など、彼等にとつてはあつらへ向きの巣である。

民警は、見あたり次第、彼等をそれ〲の收容所に拉することになつてゐる。後節に述べやうと思ふが、政府はその絶滅に大汗であるけれどもこの不幸な、灰色の群は、ソウエト聯邦からまだ姿を消して仕舞はない。

四

ベスプリゾールヌイが、變幻極りなく旅行し放浪する一方、一定の住所といふものがないので、正確な數はわからぬらしいが、概算、全ソウイエト聯邦に、今日ベスプリゾールヌイと名

のつくもの約五十萬と算せられ、そのうち「子供の家」その他に收容され、國家の保護の下におかれてゐるもの約三十萬といふ。即ち、あとの二十萬が、街上を彷徨してゐる譯だ。

然らばベスプリゾールヌイは、如何してロシアに發生したか。或る學者の調査によると歐洲戰爭の結果、一九一六年ごろ、既にモスクワとレーニングラドだけに、國家の扶助を要する兒童が約十萬に達したといふ。その後大革命勃發し、國內戰爭つゞき、大飢饉に見舞はれ、これ等「親兄弟のない子供」「親はあつても扶養の力なきもの〻子供」「放縱の生活に馴れて、眞面目な家庭にかへらうとしない子供」「乳呑子を抱いて路頭に迷ふ母親」等の數十萬が革命ロシアの街上を彷徨することゝなつたのである。赤ん坊も三年たてば三歲になる。「家なき子供」も、いつまでも子供ではあり得ない。未成年犯罪者であり、乞食少年である彼等が、街上に放り出されたまゝ成人することの、寒心すべきは改めて云ふまでもない。無產階級革命後十年、經濟狀態もだん〳〵恢復し、新らしい建設も追々緖につかうとする時、一方、街上にこの狀態を見ることはソウイエト國家として苦しい事に相違ない。全露ソウイエト大會、全露ベスプリゾールヌイ救濟大會等々、の宣言決議に見ても、いかにソウイエト聯邦がその救濟に頭痛鉢卷であるかゞ窺はれる。

私はこゝに、ロシア社會主義共和國の、ベスプリゾールヌイ救濟狀態について、簡單な說述を試みたい。ロシア共和國は、ソウイエト聯邦を形成する六共和國の一つであり、且つその盟主である。自餘の各共和國に於ける施設はこれによつて想像が出來るであらう。

ロシヤ社會主義共和國では、現在「子供の家」に收容して養育中の未成年者、二十萬以上にのぼり、街上を彷徨するもの十萬五千と稱せられる。政府當局としては、ロシア中央執行委員會に「ベスプリゾールヌイ救濟委員會」が組織され、內務人民委員ベロードフ氏がその會長になつてゐる。が、同事業の中心はむしろ文部人民委員會の「社會並に政治敎育局」であつて、內務人民委員會と、國民健康人民委員會が之に參劃してゐるやうである。

昨年度、政府は、右救濟の方法として次の諸件を決定した。

（一）子供の家に養育中の子供の中より製造工業方面、技術學校、農家並に家庭工業者、子供の近親者にそれ〲引き取らせる事。

（二）その後に街上の放浪兒を收容する事。

（三）子供の收容所を增設する事。但し病兒及未成年犯罪者の收容所をも含む。

（四）「子供の家」にては勞働の準備教育を盛にする事。

（五）乳兒を保護し身寄りなき母親のために共同宿泊所を設ける事。其他。

此の方針の下に三萬の子供は工場や、技術學校や、農家や家庭工業者の家庭にそれ〴〵ふり向けられ、二萬人の放浪兒が新に街上から狩り集められて「子供の家」に收容され、「子供の家」の教育方針もかわつたが折角「子供の家」を出た子供たちも、直にそのふり向け先に落つけず、再び街上にかへるものが續出して、政府當局を手こづらしてゐる。しかし、大體において、政府の努力は酬ひられてゐるので、今度は三年計畫で、その救済事業の徹底をはからうとしてゐる。新聞や、各種の社會團體でも大に政府に後援してゐることは特筆しておかねばなるまい。

しかし、いかなる設備をするにも、先だつものは金である。此の種の難事業を完成するにあたつて金以上に必要なのは國民の同情ある後援であらねばならぬ。此の意味に於いて、ソサイエト聯邦が、この不幸なる痛憫問題に最後の解決を與へ、ベスプリゾールヌイが、ロシアから全く姿を消す時機の何時であらうかは、非常に興味ある問題であらねばならぬ（完）

政界裏面 白眼樓夜話

刀吏公

◇……總選擧の蓋もあけて見たら、面白い形のものが出て來たじやあないか。民政黨の連中は有頂天になつてゐるのに引換え、政友會の連中は表面だけは强がりを言つてゐるが內心弱りぬいてゐる。負け戰となると、昔から陣中の內輪もめはお定りだが、政友會では、これは選擧指揮官の鈴木の責任問題だといふワケで、一時ゴタ／＼してゐたやうだが、いろ／＼仲に立つものがあつて臨時議會をすませる迄はこのまま收まらせることになつたやうだヨ。政友會が與黨であんなひどい負けをしたのは、鈴木がヘマをやつたのは何と言つても否めないやうだ。あの大袈裟な地方官の大更迭で好い加減國民の反感を買つてゐる矢先きに、選擧が始まつてからも干渉が手きびし過ぎたのが、實は逆の結果を生んだやうだ。鈴木は熱情の男でね、芝居や活動を見に行つても直ぐポロ／＼涙を流すといふわけで、好いところもあるが、普選內閣の內務大臣としてはどうも少し頭が古る過ぎるやうだ。投票日の前日に、あの議會中心主義反對のステートメントといふやつが、最もあざやかなへまだつたね。「あれで政友會の投票が二割や三割減つた」と田中のところへ怒鳴りこんで行つた政友會の相當な顏役の男が二人三人あるヨ。あれには流石の鈴木もヘコタレて、おれが直接知つてゐて出したものじやあないと言つてゐた樣だが、內務省の小役人がおれのところへ來て話したところでは、兎に角一通り眼を通して出したといふことだ。中には鈴木が保安課長の南波とかいふ男に口述して書かせたものを、山岡が眼を通してから新聞社へ出したといふのもあるがどつち道鈴木の責任さ。山岡はその前に「怪文書」で味噌をつけ、これで政府からも政友からもすつかり見限られてゐた矢先きなので、政友の頭株の中で先づ山岡を替えなくちやあと言ひ出した連中が相當に出て來た。

◇……山岡も人間は好過ぎるほど好い男だが、憲政會內閣で江木に首を馘られてからは反民政黨熱と江木に對する反抗氣分だけは燃え過ぎるほど燃えてるやうだ。そこを見拔いてこの內閣の警保局長にもしたんだらうが、鈴木同樣司法育ちで古型の司法行政以外の政治教育をうけてゐないので、政治的にモノを見る眼が開いてゐないのだネ。あのステートメントにしろ、たとひ武藤金吉でも眼を通したらよさそうたらうが、奴はあの頃自分

の選擧が案外危險なのでその方に沒頭して内務省に泣寄りつかす、官僚の古い頭許りが三つ四つ寄り集つてあんな馬鹿げたものを出して了つたのさ。ところで、山岡をやめさせろといふ聲が政友會で高くなり出し、一時はモノになりさうだつたが、山岡一人やめれば鈴木だつて何更ら居られなくなるので、義弟の鳩山あたりが、「まあ〱」といふので驅け廻つて火事をもみ消したものだ。鈴木もこれで政友會總裁の後任の評判に大分ヒビが入つたやうだ。尤も政友會總裁後任をねらつてゐるのが、今の閣僚の中に他にもまだ二三人居るから、この連中は鈴木が今度の選擧で落第になつたといふ評判をきいて、内心喜んでゐるのもそこいらに居るヨ。

◇……怪文書は誰の手から新聞に出たといふのかネ。たしか朝日新聞が眞先きに出したやうだが、内務省や警視廳では江木とにらんで、そんな事を新聞にも書かせたやうだが、先づ誰が眼にも江木か伊澤かといふところだらうじやないか。あれは府縣會議員の總選擧の後で警保局で作製した脫法行爲の實例集で、警察部長會議に全國から集つた部長等にも刷つたのを渡したものだ。あの時、ホラ、秘密に部長等を一人づつ別室に呼んだといふ新聞記事があつたが、あれはこのためだつたといふ事だ。だから怪文書一件が新聞に出た時、内務省の役人共はみんな顏を見合せたものだ。警保局の小役人の中で、總選擧の仕事で政友會に忠義立てをして知事にでもして貰ふつもりの男が手先きになつてやつたものだとかいふが、新聞に素破ぬかれた時は内務省でも政友會でもワケ知りの頭株は青くなつたものだよ。そこで、内々打合せをして選擧がすむ迄は、あの問題には一切觸れないことにしやうといふ事になつてゐたのださうだが、どうしたハヅミか肝心の山岡がペラペラしやべつて了つて「殆んど同一のものを警保局で作製したことがある」なんて言つて了つたからマヅイことになつて了つたのさ「怪文書」と鈴木のステートメントにはまゐつたヨと閣僚の○○がしみ〲乃公にこぼしたから、其の時乃公は言つてやつた――『まだ參つちや早いぞ、民政黨があれを告訴沙汰にしないのは、臨時議會でウンとやるタネにする決心だらうから、悲觀してゐないでその方の用意でもしてはどうだ』と、餘計なことだが教へて置いてやつたヨ。民政黨の方だつて怪文書は使つてゐるといふことだ。併し民政黨の方がズルイので尻尾を出さなかつたといふだけさ。

◇……總選擧でどの位ひ政黨が金を使つたかといふのかネ。さうだネ、世間では政友會が一千萬圓、民政が八百萬圓など、しきりに評判してゐる事、それほどの金は本部としては使つてゐ

ないョ。實際の金の使ひ高は目の子勘定でも大凡そ見當がつくじやないか。政友會も民政も本部で力を入れた候補者の數は双方二百五十人位づつだつたが、その中には自前でやつてゐるのも相當あるから、本部から金の出たのは、どつちも二百人見當だらう。この中でも藝者同様、「叩き分け」もあるし、「七分三分」も「四分六分」もあるから、平均したら本部から出た金は一萬五千から三萬圓の間だらう。だから、どつちも幾ら多くても五百萬以上の金は本部からは出てゐまいョ。一千萬圓だの、七百萬圓だのといふのは候補者の先生達が使つた總高のことだらう。それなら、もつと上で、政友會候補者だけでも一千四五百萬は使つてゐるだらう。

今度も實業界の連中が大分しぼられたやうだが、近頃のあの社會の連中も利口になつて、民政と政友と兩方へやるのも可成り多い。王子製紙の藤原銀次郎、東京海上の各務謙吉などいふ連中は二十萬位ひづつ兩方へ出してゐる。大川平三郎が政友會へ五十萬圓などは大口の方だらう。根津は民政へ三十萬圓はずんださうだ。富士製紙も前田か誰かを通じて政友へ應分の喜捨をしたやうだ。三菱と三井が矢張りいたぶられた兩大關だが、この兩會社にとり百五十萬や二百萬の奉納金は大して苦痛じやないョ。何しろ三井が今度の政友會内閣になつてから、その方の手づるでもうけた金だけでも五六百萬圓はあるさうだからネ……やれ政治家だの大政黨の最高幹部だのと、皆んな豪さうな顏をして人前へ出て、尤もさうなことをしやべり廻るが、軍用金の段になると、實業家先生達のところへ尻尾を振つて貰ひに行つてゐるのだから、總選擧といふのも實は實業家の總選擧で、一方からいふと三井と三菱の天下分け目の戰さ。可笑しかつたのは、議會解散となつたら砂糖會社の社長や主な重役連中が皆んな台灣へ旅行して了つたことだ。そして選擧がすんだ頃にボツボツ歸り出したから現金なものだ。他の政黨はどうして工面したかつて？　先づ實業同志會は武藤一人の才覺だから問題はないが、先生今度は八十萬圓近く注ぎこんだらうといふことだ。それで四十人近く候補者を出して、自分ともたつた四人の當選だから遣り切れまい。後は革新と無産だが、これは取りたてゝいふがものはないだらう。さう〳〵、無産黨の中で勞農黨はどうも○○から金が屆いたらしいといふ評判だ。それが○○○を通じて一月十七八日頃、東京で手渡されたといふのだね。無産黨各派がはじめ今度の總選擧に共同戰線を張るつもりで相談が出來かゝつたのが、急に勞農黨の反對でこはれたのも、この○○からの金が入つたせいだつたと、見て來たやうにいふ者もあるが、これは實は乃公にもほんとの事は分らない。

だが、これは閣議でも話題に上つたさうだが、實はこれに關係して○○大使の經歷のことで田中が頭痛に病んでゐる問題があるやうだ。今のところでは、どうにか問題は片付いたことになつてゐるが、まだすつかり安神は出來ないやうだ。これも「怪文書」になつて方々へ廻はされさうだから、何んのことはない、この前の怪文書の仇を又怪文書でお返へしするといふ形だね。

◇……後藤が總選擧のあとで田中に會つたり、伊東巳代治を訪ねたりするので新聞のタネになつたが、ナアにあれは政黨の用ぢやないのだヨ。後藤はロシアへ行つて、通商條約の下話を相當して來たのが一つの土産だが、も一つロシアの恢復の早いのは、あの國に國家資源局とか何んとかいふやうに特別な獨立官廳が出來てゐるといふところへ目をつけ、相當その調べもやつてゐるし、材料も持ち歸つたさうだから、何にかそうしたものを日本でも作れといふやうな、後藤一流の考えを出して田中に話したり、仲の好い伊東にも說明して聞かせたといふことらしいヨ。後藤の對露計畫の根本といふヤツをおれは一夕聞かされたことがあるが、それは要するにシベリアの開發を日本人の手で大にやり、それにより人口問題や食糧問題の解決も或る程度まで圖るといふ案で、シベリアでは森林を切り出したり、鑛山を經營したり、水田を作つたりするといふ、極東拓殖會社の創立目論見書まで二三年前から作つて持つて居るのだから熱心なものだ。おれも後藤のこの意氣には感心させられて大に激勵してやつたが、ヨッフエを呼んだりカラハンと文通したり、今度ロシアへ行つたりしたのも、みんな彼のこの大計畫遂行のためださうだ、感心なものだヨ。

◇……ヨッフエを呼んだ時の話は後藤が得意の一くさりで、これはかうなんだ。加藤友三郎内閣の時で、後藤はヨッフエといふロシアでは相當な男が北京から廣東の方へ行つてゐるのを聞いて、それがどうも日本とロシアの外交關係を開く使命を持つてゐるらしいといふ話をきいて、兎に角日本へ後藤個人の資格で呼び寄せる腹をきめたさうだ。これにしても加藤總理に前以て話して置かないと、入國も出來まいといふので、或る日件の「極東拓殖會社」目論見書か何かをカバンに入れて加藤を訪問して、先づシベリア問題の持論から說き出し、結論としてヨッフエを呼び度いが何うだと切り出したさうだ。後藤がいふには、加藤は軍人上りの素人政治家だから、こんな話に贊成させるのは、何んのことはない十六娘を口說くやうなもんで、一度では色好い返事をする筈があるめえ、まあ五度六度と通つて口說いてゐる中に、終いにはウンといふだらうと思つて、そのつ

おりでこの話をしたら、驚いたことには、加藤は乃公の話をぢつと聞いて居たが、直ぐに、「宜からう、君の名でヨッフェを呼んで吳れ」と直ぐ言つた。そこで、乃公は「外務大臣の內田と內務大臣の水野にも後でこのことを話して置かうか」と言つたら、加藤は又ちつと考へた末「それは自分の方から言つて置くから、構はずにヨッフェを直ぐにも呼んでくれ」と言つた。加藤は仲々度胸が好かつた』といふやうな話だ。それからヨッフェの上京となり、日露交渉となつたワケで、後藤がロシヤを一枚看板にするまでには仲々いろ／＼元手が入つてゐる。だが、惜しいことに、どうも健康がよくないやうだ。今度あの寒い最中に何んのこともなく歸れたのが不思議なやうなもので、近頃は會つて見れば分るが、少しどことなくヨボ／＼して來た。中間內閣を作るの、外務大臣になるのといふやうなことは最近の後藤に會つたことのない者のいふことで、頭も大分つかれて、昔のやうには働かないやうだ。併し、當人だけは元氣は相變らず好いので、永田だの前田だのといふまはりの連中が時々困らせられてゐる。

◆……この臨時議會で不信認案がどうなるかといふのか？民政黨では第一に鈴木內相不信認案を出すつもりであるやうだ。が、この方は政友會以外の代議士連中は選擧でみんなひどい目にあはされてゐるから、この意趣返へしに、出れば通るだらう。野黨はこれで先づ政府の一角を崩さうといふ魂膽さ。其の次に內閣不信認案だが、これは、實は出す方も內心ビク／＼ものだらう。出して、通過した時のことを考へれば、政友內閣としてはそのまゝだまつて總辭職して、冬の議會で民政黨內閣の手で總選擧をもう一度やり直させられるよりも、今直ぐに再解散と出るかも知れない。與黨で解散した方が金を集めるだけにも便利だからナ。ところで、今直ぐ又解散といふことは、どの代議士も蛇蝎を見るよりも嫌つてゐるヨ。無所屬の爺さん代議士七八人を除いて、後はみんな無理算段と小八ケ間しい普選法をくゞつて少くとも五萬圓から二十萬圓位ひづつ選擧で金を使ひ、今ホットして一息入れてゐるところだ。政友會の身になつて見ると、不信認案が通るとなると、田中の總裁お拂ひ箱問題だの、鈴木內相更迭だのといふ問題が起つて、それが動機になつて味方の陣中が割れ出す心配がある。だから、今必死になつて中立議員の抱き込みをやつてゐる。一人の中立議員の拔替え相場二十萬、不信認案上程の場合の欠席料五六萬圓なんといふのも、決して出鱈目じやないんだヨ。政友にしても民政にしても、今のところ眼の色を變へて臨時議會の對策といふヤツを準備してゐるからネ。

◇……田中も秋の御大典まで內閣を持たせれば大出來だョ……まあ、大抵さうなるだらうが、その後の議會でも解散は間違ひないから、この時が彼の危機だネ。一體、今まで日本の大政黨の總裁といふものは、與黨として總選擧を一度やつて、自分の手から軍用金をドシ〳〵出して、それではじめて貫錄がついて黨內外に威望を持つといふ段取りであつたものだ。死んだ原敬にしても、はじめて政友會の總裁になつた時は、少しも重味がなくてからきしイケなかつたものだが、一度總選擧をやつてから、グッと凄くなつて了つた。そこで、田中へもこの事を進言して早く總選擧をやれと乃公なども直接間接すゝめたものだ。實をいふと、民政黨が財界混亂で倒れた後を襲つた時直ぐ解散と出ればよかつたのだ。田中はこないだの選擧に、東京市內を演說してあるいた演說は「民政黨は財界を混亂させて、いはゞ火をつけ放して逃げ出したものだ。政友會がそれを後から消して、家の建て直しをやつてゐるのだ」といふのを方々でやつて廻つたさうだが、田中にしては大出來だ。事實さういふワケでもあるのだから、火つけが逃げ出した後にかけつけた時に、直ぐ解散をやれば國民の同情を火消しの方に向けるのは、仕事として仕易すかつたんだが、田中にその決心がつかなかつたのが、抑もの失敗だよ。

◇……田中が總裁をやめるのを待つてゐる連中では、中橋、鈴木、小川などといふのが主なるものだ。中橋は金は相當持つてゐるが今迄、巾着の紐を堅くして置いて仲々出さなかつたが、今度の選擧ではこの紐をゆるめてこれまでになく多勢の子分に出してやつたといふのも、この方の下心からだネ。鈴木も親分子分で行く男で、强氣一方で行く男だけに、次の總裁は乃公と思つてゐたが、この頃では少し消氣てゐるし、政友會でも一寸擯き惡くなつたらう。小川は、ほんとうに政友會出身の政治家は乃公一人ときめこんでゐるので、これも仲々總裁の野心を持つてゐる。何しろ總裁候補者が多過ぎて、村芝居に助平赤頭許り出るやうなものだョ。これだから內閣の芝居がドヂ許りふむことになるのだ。總選擧最中、本部へ詰めかけて留守居役をしてゐた岡崎の爺さんなども、官僚出のやることは見て居られないとしみ〴〵こぼしてゐた。

◇……民政黨の方かネ？ どうも濱口の病氣が思はしくないやうだ。田中でさへ、總理をして居乍ら、總選擧にはまづい演說でもあれだけ方々やつたのに、野黨第一黨の總帥は天下分け目の戰に、どこに居るのやら誰も忘れてゐたやうな始末じやないか。心臟狭窄症と、少しは肺も惡い人ぢやないかと思ふがあの面相に似合はずやゝこしい病氣ださうだ。選擧中でも成たけ

家の中で靜かにしてゐて、戰の情報も長距離電話で長話しをして亢奮しないやうに家の者が氣をつけてゐたやうだから、まるで病人扱ひだ。だから、濱口も兩加藤同樣、總理となるとあぶないぞと誰でも心配してゐる。だが、その心配と一しよに、後釜の心配をしたり、今からもう當にしたりしてゐるのも居るヨ。差し當り、濱口の後をねらつてゐるのは黨內では安達と床次だが、こんな關係で二人の仲はしつくり來て居ない。床次は大阪や福岡など地方に、「床次會」といふ講中を持つてゐるが、それが今度は東京へも出來た。その贊成人の中に、若槻や伊澤の名が出て居て「床次を政治家として大成せしむるを期す」とか何んとかいふビラを廻して居るのだから面白い。いづれ義理で名だけ出したものだらうが、それにしても安達の名は入つていないといふところが微妙なところサ。伊澤は一度內相をやつて見る下心があり、安達とソリが合はないので、床次の方に自然ついて來た。若槻は本黨を憲政へ引つぱつて來た時の義理もあるが、床次とは大學を一二年前後して出た關係で、元々仲は好かつたものださうだ。あの頃大學を前後して出た連中は奇妙に仲がいゝので、二年ほど前の議會に、若槻が首相の時床次と有名な妥協をやらかして世間を驚かしたのも、かくいふ私的關係が手傳つてゐたものだヨ。

倫敦の漱石先生について

（土井晩翠氏に呈す）

松岡譲

「漱石の思ひ出」の一節がお目にとまつて、大變御心配をおかけしたことを返へす返へすもすまないことに思つて居ります。實は中央公論二月號御登載の「漱石さんのロンドンに於けるエピソード」を、つひ漸く此頃になつて拜見したものですから、御返事が三月號に間に合はないで申譯がありません。

元來「漱石の思ひ出」は、御覽のとほり「妻の觀たる漱石」であり又大體に於いて「家庭に於ける漱石」でありまして、最も先生に近かつた人が亡き人のあとを偲びながら語られる絶好の文豪傳資料であります。殊には今迄世間に知られなかつた多くの資料が供給されてると同時に、或る意味に於いて人及び藝術家としての漱石先生を知る上に、極めて大切な一つの鍵をも用意して居るものだと思ひます。勿論この中には未亡人の間き違ひもありませうし、覺え違ひもありませう。又かなり古いことでもありますから、二つの異つた事件がいつか一つに結びついて居たり、話の始終の中でどつちかゞぬけて居たりしないものでもありません。が家事煩雜になつた中年以後はともかくとして、それ迄の未亡人の記憶にデテールに多少の混雜はあつても大體に於いて信賴していゝものと私は思つて居ります。

未亡人の健在のうちは、他からは得られないかういふ思ひ出話を書きとめて置きたいといふのは、私の長い間の念願であれました。ところが去年の秋、先生逝いて十二年、未亡人の心に漸くこれを語らうといふ念が萠して來たのは、ひとり私の喜びだけではなかららうかと思つて居ります。かうして私は毎月日を定めて未亡人の談話を聞き、それを綴つてから、更に一度目をとほして貰らつた上改造誌上に發表してゐるのですが、この雜誌に發表するといふことには勿論江湖の批正を待つ意も含まれて居るのです。とにかく語るからには、何もかも腹藏なく語らう。いゝことにせよ惡いことにせよ、美しいことにせよ醜いことにせよ、語るまゝ狹い自己選擇をやらないで、あつたまゝ、見たまゝ、聞いたまゝ、感じたまゝを其儘物語らうといふのが未亡人の意志であつて、隨分言ひづらいことも明白に語つて來られた其態度には敬服の外ないのです。けれどもその爲めにこれ迄でも親戚のものや其他の方々から、それ程迄にすつぱぬかなくともと抗議をうけたこともないではありません。又地下の先生も時には苦笑されてゐることもあるかも知れませんが、やゝともすれば近來偶像化されんとする文豪を、あく迄も人間漱石の赤裸々の一面を味ふには、これは又無い記錄であらうと信じます。例へば二月號所載の部分などは、語る人も淚で語り、聞く者も亦淚で聽きました。が、こゝに一點もなく大きい暗示があるやうに思はれるのです。が、かうした態度も結局は內々だけのことで、他へ對しては、到底一徃に行かず、勿論直接他人へ迷惑をかけ

るやうなことに愼しまなければならないと、其點については相當注意もして居たのですが、計らずも御迷惑を及ぼしたことは恐懼の至りに堪えません。

さて、御迷惑を蒙られた記事といふのは、漱石先生がロンドンの下宿にあつて強度の神經衰弱症にかゝられ、下宿の家人も狂氣になつたのではないかとおそれてゐるところへ、同じ英文學研究の留學生某氏が行き合はせる。樣子を見るとたゞ事でないので、てつきり發狂したに違ひない、萬一自殺でもすることがあつてはと三日ばかり附き添つてゐたが、とう〱文部省へ向け漱石發狂の電報を打つた。當の先生は後から電報一件のことを聞いたのであるが、別に大した症狀でもないのに大袈裟にふれまはつたのは、件の某氏が先生の失脚によつて、其地位が自然自分のところへ廻はつて來るといふのでたくんだものらしい。怪しからん奴だと憤慨の口調を洩らしてゐたことがあつたが、それが果して先生のいふ通りの事情があつたものか、それを聞いた未亡人には判斷がつかない、何しろ病氣なのだから——これが大體の要點です。某氏といつても名を秘して置いたのを私のことだと貴方が名乘つて出られた以上、最早隱くす必要はなくなつて了ひました、たゞこゝにお斷りして置きたいことは、話した先生は其時どういふ心算であつたかは知りませんが、何しろ先生の病氣には一番大きな苦い經驗をなめられた未亡人が、（改造二月號參照）それを信じて、話されたのではなく、又中傷的の意味のなかつたことは明かです。此點は幾重にも御諒解が願ひたい。しかし問題は先生の話を未亡人が信じ、その又話を私達が信じてゐるかどうかの問題ではなくて、實に先生自身がかういふことを假令一時でも思つてゐられたことがあつたとするその事に存してゐることは言ふ迄もありません。

『文學論』の名高い序に先生はいふ。「英國人は余を目して神經衰弱と云へり。ある日本人は書を本國に致して余を狂氣なりと云へる由。賢明なる人々の言ふ所には僞りなかるべし。たゞ不敏にして、是等の人人に對して感謝の意を表する能はざるを遺憾とするのみ。」

又先生及び芳賀矢一博士と一緒に留學を命じられて、同じ船で歐洲へ渡られた藤代禎輔博士の追憶記の一節にはかういふことがあります。「我々の留學は滿二年の期限があつた。其期の滿つる一ヶ月程前に『夏目ヲ保護シテ歸朝セラルベシ』といふ電命が僕に傳へられた。これは君の精神に異狀があるといふことが大袈裟に當局者の耳に響いた爲めである。それでなくとも僕は無論同船して歸朝する積りで其前に君と打合せを仕て置いた。所が倫敦へ着くなり郵船會社の支店へ行くと事務員が『夏目さんは一度乘船を申込んで置きながらお斷りになりました』とさも不平らしく訴へる。『若し乘船して歸ると云ふなら船室の都合は附きますか』と聞いたら、『それはどうにかなりませう』と云ふ返答だ。そこで夏目君に端書を出したら翌朝僕の下宿へ來て呉れた。君より前に來て居たＯ君は、例の電報を取次いだ關係で、是非一所に連れて歸れ、荷物の始末は跡でどうにでも付ける。あゝいふ電報のあつた以上若しもの事があつたら君は申譯はあるまいと熱心に同行を主張する……」（『藝文』第八年第二號所載）

とにかく以上引用した文によつて見ると、先生の神經衰弱はかなり強烈なものであつて、それを氣が狂つたと思つて當局卽ち文部省へ通知した人はたしかにあつたらしい。其誰人であつたかは芳賀さんも藤代さんも亡くなられた今となつては永久に謎として殘るより外はあるまいが、先生が一時それを貴方ではないかと少くも疑はれたらしいのは、さきの未亡人の話によつて窺はれます。これは貴方の御釋明の、留學生でもなければ、從つて本省へ電報を打ついはれもなし、又電報料金もなかつた。それどころか及ばずながら十日ばかり同宿してた噓さへしたと言はれる條を見ると、何の誤解か、全く飼狗に手を嚙まれたも同然で、飛んだ御難といふ外はなく、貴方が事の意外に驚かれてお困りになるのは無理はないと思はれます。又先生も其時は貴方から大變お世話になつたことも未亡人に言つてられたこともあるさうですから、さうなつて來ると何が何やらさつぱりわからないばかりでなく、某氏たるものどの道甚だ引きあはないわけであります。

一體先生は義理に堅い人でありましたが、しかもそれを離れて純粹の友情に厚い人であつて、又好惡のけじめのはつきりした人のやうでありました。さうして同時に自分を僞ることの大嫌ひな人でありました。漱石全集書簡集所載の貴方宛の自畫像の繪端書などを見ても、又貴方から先生へ宛てられた繪端書の今日保存されてるのを見ても、そこに私たちの汲みとることの出來るのは、底意のない溫く親しい友情ばかりであります。試みに貴方の繪端書（西洋美人のこの文句を寫して見ますと「此はがきは今日獨逸から屆いたから、何か君の小說の材料にたれかしと望んで早速送る、成らなくとも成る樣にするのがエライのだね。僕はさと大變だがハツタイイ。以下の前文（一八七圖）君なはじめた正月以來の『太陽』へ踏續出す都合だ。十二月六日倫敦より明治三十八年の消印あり）とあります。

かういふ生前の御關係を見、又貴方御自身の一々御記憶された話から察しますと、かつて未亡人に話されたといふ某氏打電云々の一件は、どう考へて見ても先生の病氣の發作がおこさせた猜疑心だらうといふことになる事であります。さうしてあの病氣の發作がおこると、最も側近のものに對して面白くない感情をもたれるのが常だつたと申しますから、其時最も近くに居られた貴方が、誠に不幸中の不幸な飛沫をうけられたものと解する外はなく、又考へやうによつては、奸策どころか其時は貴方が故人と一番親密な關係にあられたといふ反證にさへなるであらうと思はれるのであります。が私達はさう信じ、さうして發作時の一口吻をもつて非常識にも御人格を云爲する氣は元よりないのでありますが、惜しいことに當の先生はすでに亡く故人となつて居られて、死人に口はないのですから今更釋明を聞く由もなく、貴方が無念がられるのは無理もありません。が『改造』十一月號の追跡狂發作の條を御覽になつたら、或は慰められない迄もなる程とうなづかれる節があるでありませう。

いづれ『思ひ出』も完結したら單行本になることでありませうから、其時には貴方の御迷惑な冤罪をそゝぐやう出來るだけつとめるでありませう。未亡人に代つて私から御挨拶を申上げます。なほ其外にきく方もありませんから、何卒此の時代のことをいづれ詳しくお話し下さることを御願ひいたしたいと存じます。

敗戰記

此の事實は何を語るか？

藤森成吉

今度の戰ひについては、すでにあちこち書いたり話したりした。否、させられた。ここには斷片的にいろんな面を書いて見やう。

○

幾度も云つた事だが、言論戰ではわが黨（勞農黨）の絕對的勝利だつた。どこの演說會でも、他黨とは比較にならない辯士の質と數、又聽衆の數。

その一二のエピソオト——。

上伊那郡の赤穗と云ふ町の青年會が、各黨各候補者に立會演說會を申込んで來た。わが黨——私——はたゞちに快諾した。ところが、ほかの候補者（既成政黨の六名）は全部ことわつた。青年會連中は、憤慨するやら當惑するやらの騷ぎだ。そこへ又警察から、立會演說などと云ふ催しは甚だ喧騷を惹起し易く、治安を妨害する恐れがあるからやめろ、と云ふ命令だ。さア青年會はいよいよ途方にくれて、急遽わが黨の政見發表演說會にしたいと申し込んで來た。わが黨は即時承知して、私を合せて十人ばかりの鬪士を送つた。

會場は町第一の劇場だ。聽衆は、警察命令その他の事は知らずに定刻前すでに黑山のやうに押しかけて來た。劇場へ來て、彼等は初めて、內務省？の意嚮により立會演說は遺憾ながら中止、その代り勞農黨の政見發表とする旨の揭示を見た。が、誰も戾りはしない。土間から二階まで、人間の黑い身體でコンクリイトの壁を塗つたやうに詰つた。

その一千餘人の聽衆を前にして、わが黨の闘士達は代る〻〻熱辯をふるつた。拍手が湧きとどろいた。既成政黨連中の無誠意と、それに照應する露骨な官權の壓迫とを逆にヒネつた痛快さに、私達は思ふ存分味はつた。（當時南信第三區三郡聯合青年會でも、各郡中心地に立會演説會を催そうとし、やつぱり警察から中止命令を受けたが、彼等は構はずやつた。）これほどの私達の誠實親切にも係はらず、又あの聽衆の大拍手にも係はらず、赤穂の開票の結果は僅々數十票だつた。これは何を語るか？

○

やつぱり上伊那の高遠と云ふ古い町を、わが黨は特に重要視して三回も演説をやつた。その最後の演説會の晩、出る辯士も辯士もお定りの端から中止だ。で、すつかり豫定を狂はせられて、二十分ばかり時間が空いた。その日は、その郡だけでも三隊の辯士隊が廻つてゐたが、私達の組は町から一里半ばかり山の中の村で演説をしてゐた。その連中の一部分が、終り次第高遠へ馳けくだる事になつてゐたが、間に合はなくなつたのだ。やつと二十分して一人の辯士が着いた。それが済むと、次の私の出るまで又三十分ばかり空いて了つた。丁度時間は四時過ぎからまつて七時過と云ふ夕飯時だ。寒さは寒し、おまけに碌に火もない會場に、六百人ばかりの聽衆はギッシリ詰つてゐた。その人々が、私を待つて一人も歸らないのだ。私は大いそぎで驅けつけた。そして外套を脫ぎ捨てるより早く演壇へ登つて、一時間餘り演説をした。

おお、その人々の熱心さよ！　前後五十分間もただ待つてくれたばかりか、私が済んでも多くの聽衆は腰をあげやうとしなかつた。おと何か直接に話しかけたさうな、親しみに滿ちた眼ざしを私達へ送りながら、やうやくそろそろ立つた。私は――私達は、その人達に心から感謝した。感謝すると一緒に、これほどの場所なら壓倒的投票を獲られるにちがいないと信じた。（その豫想を裏書するモウ一つの事實があつた。その町の米穀商の人が、五百圓と云ふ金をいきなり我が黨の資金へ寄附してくれてゐた。）

ところが開票の結果はどうだつたか？　實に四十六票！――その點數を故郷の父の家で聞いた時、私はガツカリしてひとりで二階へあがつてねころがつた位だつた。此の事實は何を語るか？

○

高遠の場合には一の明白な事情もあつた。此の町は、近年稀

交便路（伊那電鐵）の開通その他によつて、著るしく繁榮を奪はれて來た古宿だつた。從つて一般町民の生活は、顯著な中產階級沒落的な刻印に捺されてゐた。にも係はらず、その意識は未だ無產大衆的であり得なかつた。おまけに、政友會と民政黨が古い固い地盤を張つてゐて、最も兩派の軋轢の激しい場所の一つだつた。現に選擧戰中にも、一旦廢止した警察署を、人氣取りの爲めに政友會が急に復活させたとか、させやうとしたとか云つて、大問題を惹き起してゐるやうな場所だつた。そう云ふ露骨な既成政黨ぶりによつて、如何に保守的な情實的な地方民達でもモウ今までの所謂政治家達に飽きてゐるだらう、と私達は思つた。のに、結果は正反對だつたのだ。

○

一事は萬事だ。自ら所謂選擧運動の衝に當つて見て、如何に一般地方民——就中農民、それも信州の如く自作農乃至半小作が多いやゝなところの——諸君が、まだ無自覺であるが、如何に既成政黨のあらゆる欺瞞と情實のなかに平氣で眠つてゐられるか、を痛感した。（今度の選擧戰の結果を見よ。無產黨の當選し得た個所は、皆大部分都會地又は特殊組合の存在地に限つてゐるのだ。）

あまりに長く壓されつづけた爲めに、彼等は既成政黨から壓される事はもう平氣になつてゐるのだ。それが普通と思ひ、どの政黨でもそうだと考へてゐるのだ。だから、切角わが黨の演說會へ來て聞いても、又感心しても、云ふ事があんまりうま過ぎると考へるのだ。私達が純粹であればあるだけ、戰術が純潔であればあるだけ、彼等は餘計不信を抱くのだ。

もし私達の今度の戰術に非難すべき物があるとしたら、それははなほ不熟練から來る組織の一部的不完全と、口說き下手と、同時にあまりに純であり過ぎた事だ。

○

就中私をおどろかせた物は買收だ。かくまでもそれがすばらしい威力を持つとは、私は全く思ひがけなかつた。わづか五十錢や一圓の、淫賣よりも安い金でザラにころぶのだ。手どわい所へは、投票間際の激戰の晩に十圓乃至十五圓が配られたと云はれる。此の場合にも、彼等既成政黨の連中の手口は巧妙を極めてゐる。即ち、特に一家三人もの有權者のあるやうな所を目指す。一人十五圓として、三人なら四十五圓だ。如何に何でも五十圓近くの金を貰つては投票せずにはゐられない、と選擧民は感じるのだ。

おどろいた事は、私達の選擧事務所へまで、何人となく賣り込み屋がやつて來た事だ。「おらの村ではこれこれの人數の投票がまとまつてゐるが、幾らで買つて貰へるか」だ。

下伊那郡の如き、棄權率八分一二厘と稱せられる。まことにすばらしい投票成績だ。これを表面どほり受けて、イギリスかどこかの大新聞は日本國民の政治思想の進歩に驚嘆してゐるそうだ。あはれな進歩よ！　此の偉大なる投票率は、所謂政治思想の進歩どころか、反つてその無自覺を儼として指し示すバロメーターでないと誰が云へやう？　私の見るところでは、此の成績を形づくつた原因は二つある。一は投票日の快晴。一は、これほどまでも買收と驅り出しが成功した事だ。

○

つづいて擧げたい敗戰の原因は、云ふまでもなく官權の壓迫だ。

演說會の「中止」濫用の如きは改めて云ふまでもない。單に「諸君！」と云へば「中止！」だ。「わが黨は、就中勞働者農民の爲めの政黨であります」と云へば、「中止！」だ。鬪士達は、そこで新しい戰法を考へ出した。新聞の論說をよむ事だ。たとへば朝日新聞の「既成政黨は、從來常に民衆を欺瞞し來つた……」をよみあげる。初め此の新戰法に面くらつた臨監も、二度目からは再び用捨なく「中止！」を食はせ出した。

これが果して選擧運動に對する官憲の公正か？　絕對不干涉か？　はた「言論の自由」か？　民政黨の候補者でさへ、日本に選擧運動初まつて以來かかる言論に對する干涉壓迫は見た事がない、と云つてゐる。普選の眼目が何か言論戰であるか？　單に會場に配置する臨監の數でさへ、既成政黨とわが勞農黨とのあいだにはあまりにも露骨な差別があるのだ。かうして、日本の所謂光榮ある第一回普選は、官權壓迫の大泥靴に完全に踏されたのだ。

その他の壓迫を擧げればキリがない。(何より枚數がない。)ただ此の官權の壓迫によつて、一方如何に既成政黨の買收が巧妙に充分におこなはれ得たか、を想像して貰へれば充分だ。

○

かくの如くして私は敗戰した。然しながら、此の敗戰を以てブルジョア政黨が相變らず苟安を盜み得るとなすなら、大きな見當ちがひであらう。此の、私達に取つては苦手た——むしろ苦手極まる戰ひを鬪ふ事によつて、今度こそ私達は立派に一般民衆のなかへ根をおろした。今まで南信第三區などでは、勞農

黨と云ふ名前さへも知らない者が爲からだつた。が、今度こそ、どんな隅々へまでもわが黨の名は徹底した。見よ、頑是ない子供でさへも、「菓子は私へ！　投票は藤森へ！」と歌つてゐるではないか。又或る中學の上級生徒へ對して、教師が「小川と藤森とどつちを信頼するか」の投票を入れさせて見たところ、二百人の各級中、小川（平吉）氏へ投じた者はたつた二人だつたと云はれる。實に五六年分の戰ひを、私達は此の二十日間に鬪ひ取つたのだ。

夜はなほ暗い。その認識を私は痛いほど體驗した。然し黎明は、民衆の眼は、まさに暗の中に初まらうとしてゐる。失望する事の深かつただけ、私は自分の鍛練と同時に此の事を確信する。

1928、3

戰半ばにして倒る

宮崎龍介

一月二十一日、僕は、芝協調會館での無産各派の地盤協定會議に出席して居つた時、解散を知つた。さ、保證金の問題から解決しなければならない。さすがの僕もこれには閉口した。だが幸な事には、二十三日の夜、同郷のK氏がやつて來て「保證金は俺が引受けた」といつて呉れたときには、非常に嬉しかつた。正直に白状すれば、まるで當選でもしたやうな氣持だつた。保證金はどうやらパスしたものゝまた選擧費の方で行き詰つた。

だが、戰ひに臨んで躊躇すべきでない。スタートは敏速に切るべきだと思つたので、二十五日には立候補屆出の手續を勇敢にすましました。

それからが大變だ、演説會場の借用やら、ポスターの準備、軍資金調達、の爲に文字通りの東奔西走をやり、二月一日夜六時から、本所の本横、茶場兩小學校で言論戰の火蓋を切つたのを導火線として、毎夜二ケ所、又は三ケ所の言論戰で、ひた押しに押して敵陣に肉迫して行つた。

どの演説會も大入滿員で、バラツクの校舍の會場も、新築校舍の大講堂も、いつも聽衆が溢れてゐた。

壇上に起つ辯士は多く、白面の青年鬪士だ。あかじみた作業服の青年が壇上に驅け上つた。

「俺は製氷會社の一職工だ。嚴冬の夜、諸君が炬燵にあたつて居る時、俺達は工場で働いてゐるのだ。働いても働いても飢と

寒さに俺達は苦んしでゐるんだ。フロツクコートを着て、八字髯を生やかした既成政黨の代議士連は、社會政策だ、國利民福だと、ホラを吹いてくれるだ、俺達の生活は爪のあか程も向上しないのだ。幸に普選は疾風の如く洪水の如くやつて來た。俺達の事を俺達自身でやる時は遂に來た……」荒けづりな悲壯な叫びを張り上れば、臨監は

「辯士中止！」と來る。

「……勤勞無産階級の親愛なる同志である警官諸君が薄給に苦しんで居る事に僕達は滿腔の同情を持つてゐる。我黨は下級官吏の俸給を政策に揭げてゐる……」とレーデー、メードの背廣服の辯士が說くと會場警備の警官達は耳を傾けて聽いてゐる。

無産政黨の演說會は、既成政黨のそれに見る事の出來ない悲痛な雰圍氣に包まれてゐる。

◇

演說會は聽衆が日に日に增して來た。五日、六日頃からの演說會は定刻前に、既に滿員の狀況を呈して僕達を面喰はした。

僕は毎度一時間餘りの政見發表をやり、大いにメートルを上げた。

地盤はなし、軍資金はなし、まだ無産黨に對する理解の少い土地、この三調子揃つて惡いコンデシヨンに置かれた僕には、出來るだけ多くの時間を費して我々の立場を微細に民衆諸君に訴へるのみが、殘された只一つの手段であつた。

だが連夜の僕の長時間に渉る言論戰の結果遂に八日に倒れてしまつた。政戰漸く緒に就いたばかりで、病床に臥さねばならなくなつた僕の胸中は、言ひ知れぬ無念さに充された。

民衆政治樹立の最初の機會！

無産階級解放運動で政治鬪爭戰線へ踏進した最初の日に倒れた事はかへすぐも遺憾である。

◇

僕が政戰に病んだ事が新聞で報導されたものだから全國の同志諸君から、澤山の慰問と激勵の電報や手紙が舞ひ込んだ。

「セイギノ　チカラ　カナラズ　エイカンヲ　ヱルベシ　ヤスラカニ　ドウシノ　ケントウヲ　シンライセヨ」――長崎K氏

病床の僕は感激の淚にむせびつゝそれを讀んだ。

遠く北海道の未知の一青年は、次のやうな手紙をよこした。

「無産階級の代表者として貴下が議政壇上に立たれる日を、北海道の寒村に働く青年勞働者である私は、どんなに期待して居

る事でせう。今日の新聞紙で貴下が壇上で倒れた事を知つた時、私はどんなに驚いた事でせう。どうか寸時も早く再び壇上に立つて、既成政黨を打破つて下さい。私達の政治を樹立して下さい。同封僅少ですが軍資金の一端にして下さい。」

又本所深川の有志諸君からも、盛に手紙が舞ひ込んだ。

「僕はメリヤス工場に居る一職工です。一日夜本横小學校で先生の御演說を拜聽して永い間僕の胸の中に蓄藏されて居つた鬱憤が初めて晴された氣持がしました。それから、毎夜、中和、本所、江東、太平と先生の後を追つて、五日間、演說會を廻りました。今宵もまた臨海へ行つたのですが、先生がお病氣の由を聽き、私は悲しみました。先生もう一度、御演說を聽かして下さい。僕は不幸にして選擧權がない二十三才の青年ですが、僕の工場に居る友人は、皆先生に投票すると言つてゐます。」

こんな涙ぐましい手紙が私の病室に積み重なつた時、僕は皮肉にも醫者から絕對安靜の宣告を受けた。

黨からは、安部先生を初め馬場、小山、松永、菊池、阿部、鈴木の諸氏が應援に來られた。

僕は病床に臥して居つても同志諸君の獻身的な運動によつて戰ひ有利に輾廻された。

一日三回の演說會は五回に、さらに六回七回と回數を增して、行つた。そうして何處の會場にも聽衆は潮の如く雪崩れこんで來た。

十六日本所公會堂の大演說會は空前の盛況で聽衆五千を算せられた。

◇

當選確實！　こんな情報が僕の病床に報じられたのも此の時だつた。だが十七日十八日と次第に投票日に迫つて來るにしたがつて、

「××派が○○市場を中心として肉彈戰を初めた！」

「△△候補　業平、押上、小梅方面に買收を開始したぞ！」

此んな、いまいましい情報が頻々として、傳つて來た。ブル政黨の常套手段である。黃金戰が初まつたことを聞いて僕は病床で悲憤の念に燃え立つた。

「買收戰術に對して徹宵して之を監視し摘發するんだ！」とは我が陣營内の闘士諸君の口から異口同音に叫ばれた聲であつた。

買收戰術が成功したかどうか僕はそれを知らない！　僕は美事に落選して居た。地盤なく、軍資金乏しく、加ふるに深川區に一歩も踏み込む機會を得ずに病床に臥した僕が落選したのは

當然の結果であつたかも知れない。

だが、情實によらず、金權の力を借りず、赤手空拳、勇敢に鬪爭した我陣營に三千六百の投票があつたとは僕が終生忘れる事の出來ない事實である。

「あと五百票で既成政黨の陣營を擊破することが出來たのに！」と或る同志は僕の手を堅く握りしめて泣いた。

三千六百票！　これこそあらゆる邪道と情實と誘惑とを排擊して投せられた涙と血の結晶だ。

三千六百の江東の同志諸君よ！　我々の行くべき道！　その大道の上を直進しやうではないか？　新しき日本！　民衆の理想は既に展開されつゝあるのだから。

山積せる幾多の經驗

麻生　久

一

記念すべき總選擧戰も終りをつげた。一つの大きな嵐が過ぎ去つたのである。我國の議會政治に向つて、始めて第一步を踏み出した無產黨にとつては、その前に山積せる幾多の經驗を將來に對する問題として呈出せられてゐる。

無產黨は一躍八人の代表者を議會に送り得た。一面より見れば成功の如くである。然し乍ら、今日の時代と無產黨夫れ自體の勢力とよりするならば著しき失敗と云はなければならない。何故ならば、若し各無產黨の選擧協定が完全に行はれてゐたと假定するならば更に現はれた數字よりのみ見るも六人の代表者を增加し得たからである。次ぎの表は明かに此事實を物語つてゐる。

○神奈川縣第一區		
神道寛治	(勞農)	六七六〇
岡崎憲	(社民)	一二五四八
○神奈川縣第二區		
片山哲	(社民)	五八四一
川島不二郎	(地方)	八三一四
○新潟縣第二區		
布施辰治	(勞農)	八八六八
須貝快天	(日農)	九五六二
○東京第五區		
加藤勘十	(日勞)	一〇二〇一
秋和松五郎	(勞農)	三八六二

小川清俊	(社民)	二七一一
○東京第六區		
松谷與二郎	(日勞)	一二四三八
南　喜一	(勞農)	五六六〇
鈴藤五郎	(社民)	五九二八
横田多門		二一四七
○大阪第四區		
大橋春房	(勞農)	七一二〇
阪本孝三郎	(日勞)	五一九九

若しも無産黨が合同するを得て、内部闘爭のために費しつゝある努力を外部に向つて發展せしめ得たならば、一擧二十人の代表者を議會に送り得たであらう事は明かなる事實と云はなければならない。

今回の對立上の苦き經驗は將來の無産黨の運動に對して重大なる影響を與ふべきは明かである。

次ぎに無産黨に對する官憲の態度である。今日支配階級が無産黨の進出に對して極度の恐怖を覺え、可及的彈壓を加へて其進出を妨ぐるは今回の選擧に於て明かに立證せられたところであるが、言論の抑壓は勿論、多岐多端にわたつて其解釋さへも一定せざる普選法は、此法規を盾にして取締の上に手心を加へ無産黨の運動に彈壓を加ふるためには寧ろ最適當なる武器と云はなければならなかつた。

買收は依然として行はれた。無産黨の選擧戰にとつて最も痛痒を感ずるは既成政黨の買收行爲である。大都會はしばらく別として、地方にして買收の行はれざるはない。一票五圓十圓、一圓或ひは五十錢、十七日頃より既成政黨は一切に之れを行つた。彼等は買收行爲を容易ならしむるためには、十七日頃より一夜に無數の演説會を開催し、辯士を二十人も並べ、だら〳〵と聽衆もなき演説會を引きのばして、不足勝ちな警察官を之れに集中し、其留守に大びらに行つたのである。地方に於ける多くの選擧民の心理は、此長く既成政黨によつてつちかはれ來つた慣習に對しては殆んど不可抗的であつた。甘き毒酒に吸ひ寄せらるゝ如く吸ひ寄せらるゝのである。昨日までは潑剌としてゐた部落も、一度買收の毒杯がまはれば、一夜にして其空氣を變へて仕舞ふのである。普選法は殿に買收を禁じてゐるけれ共、要するに夫れは底の拔けた法規に過ぎない。之れに對する對策を無産黨が完全しなければ、地方に於て既成政黨に勝を制する事は至難と云はなければならない。

二

以上の如きは極めて一般的な經驗であるが私共は更に深甚な

る經驗に逢着したのである。

その深酷なる經驗とは、無産黨の選擧戰は單純なる選擧戰と云ふ事が出來ないと云ふ事である。何故なれば、我々の選擧戰は、單に官憲の彈壓と戰ひ、既成政黨と戰ふに止まらない。更に選擧と關係なき資本家と戰はなければならないと云ふ事である。茲に於て、我々の選擧戰は實に純然たる階級戰と化し去るのである。それは全然ストライキと同じであり或る意味から云ふならば更に夫れよりも深刻であり陰惨である。

今度私は栃木縣第一區から立候補したのであるが、私の選擧戰は明かに一個の階級戰に外ならなかつた。

栃木縣第一區は足尾銅山の所在地であつて私の栃木縣第一區から立候補した所以も亦實にそこにあるのであつた。

足尾に鑛夫組合の支部が生れてから既に十年、我國の無産階級運動が政治運動に轉向して以來、足尾の勞働階級は率先して政治運動を開始し、今日では日勞黨足尾支部は七人の町會議員と一人の縣會議員とを有してゐるのである。

古川鑛業所は足尾に於ける勞働階級の此驚くべき政治的進出を見るや、心平かならず、昨年九月に行はれた縣會議員選擧に於ては、勞働者側と對立して候補者を擁立するに至つたが、鑛業所擁立の候補者は惨敗して日勞黨公認候補石山寅吉君は目出度當選の榮を得た。

茲に於て鑛業所は狼狽なすところを知らず縣議戰の後、既に私の今回立候補すべき事を慮つて必死の對策を講じつゝあつたのである。

鑛業所は、足尾町民の票を私から奪ふために、經濟封鎖を行つて町を威嚇した。即ち會社の購買會に品物を集中して勞働者に町の品物を買はしめず、其他あらゆる方面よりして經濟的に町を壓迫したのである。鑛業所と勞働者とに依つて衣食しつゝある足尾町民は此會社の經濟的威嚇のために、憐れにも萎縮して仕舞つた。更に彼等は勞働者から私の票を奪ふためには馘首を以て之れに臨んだ。掛員等は、一人宛勞働者を呼んで、晴生に入るゝか否かをたゞし、會社の言に從はざる者に對しては直ちに出勤停止を以て威嚇し去つたのである。ために出勤停止を蒙る者二十餘人の多きに及ぶに至つた。

鑛業所は、更に歩を進めてあらゆる演説會場を買收して我々の言論を封じ、おやとひ猪士をかゝへて夜となく日となく日勞黨攻撃の演説會を開かしめた。たまたま會場を得て我々が演説會を開けば、公然係員を派して演説會場を取りかこみ、入場する者の姓名を一々手帳に記入し一々馘首に出ぶる有様である。十八日夜開かれた演説會場の外は、ために、係員とこちらの幹

部との取組合が至るところに演出せらるゝ狀態であつた。斯くの如きは公然たる選擧妨害であるけれ共、足尾の警察は關せず焉として傍觀する狀態である。選擧運動と云ふよりも會社との經濟戰と云ふべきである。

足尾に於ては政民兩派の既成政黨は完全に提携して、古川鑛業所應援のもとに三位一體となつて日勞黨叩き落しに熱中した。黃金は湯水の如く撒かれ、其反面に於て經濟的威嚇は其凝手をふるつて地をはう始末である。

ために足尾の町は、『普通選擧程こわいものはない』と悲鳴をあぐるに至り、町は恰かも會社の役員を以て戒嚴令を敷いた如く、夜は町を通る人影もない樣になつたのである。鑛業所は新聞記者に對しても、『選擧違反位ひは止むを得ない』と公言した。玆に於て足尾は全然日本の中にありながら一個治外法權の地と化し去つたのである。

鑛業所は、此足尾の町から麻生に三百の投票が這入れば又御目にかゝると豪語したのであつたが、開票の結果は、此彈壓裡に六百人は首と共に麻生久の名を記したのである。併しながら、昨年の縣議戰に於ける日勞黨の有山君の一九〇〇票に比すれば、まさに一三〇〇票の減少である。以て如何に其彈壓の激しかつたかが窺はれるであらう。

私の選擧戰に於ける資本家との戰ひはたゞに足尾のみには止まらなかつた。河内郡城山村大谷石材に於ける戰ひも亦純然たる資本家との戰ひであつた。大谷石材の大資本家は、政友會栃木縣支部長渡邊珍平氏であつて、日勞黨の旗が此山に立てらるゝ最初に於て早くも會社側の暴力團は我等の同志を襲ひ、血を流したのであつた。今回私が立候補するや、未だ幾日ならざるに會社側の暴力團は私の運動員を襲ひ格鬪が演ぜられた。私の城山に於ける選擧立會人は、二十日近くを病院に過ごして未だホータイを外す事の出來なかつた名譽の負傷者であつた。

斯くの如くにして、私の選擧戰は、單に代議士を爭ふ選擧戰ではなかつた。夫れは、麻生が勝つか古川が勝つか。麻生が敗れるか渡邊が敗れるかの戰ひであつた。選擧戰は玆に至つて明かに激烈なる階級戰である。古川が候補者たるわけではない。渡邊が候補者たるわけではない。併しながら私の當の相手は政民の候補者と云ふよりも古川であり渡邊であつたのである。

三

斯くの如くして私の戰ひは敗れた。併しながら、私の根據を彼等資本家のためにくつがへされたに拘らず六千票に近き票を獲得した。一市四郡、私を見ざると聞かざるとに拘らず一ケ町村と

雖投票のないところはなかつた。私は選擧には敗れた。併しながら階級戰には明かに勝利を得たのである。私は光榮ある落選と云はざるを得ない。未だ時が至らないけれ共一市四郡、九十ケ町村に擡頭しつゝある同志は急速の勢ひを以て無産階級意識にめざめつゝある。是等の同志は來るべき總選擧に於ては私を單に戰ひに勝たしめるばかりでなく選擧にも勝たしめるであらう。

未來は我等のものである！

敗戰日記

澤田謙

敗軍の將兵を語らんとす。往時を追憶して、涙を新にせんがためにあらず。來るべき太陽をのぞんで、勇氣を百倍せんがためのみ。醜をして醜を盡し、陋をして陋を極めしめよ。醜骸を遺憾なく解剖することが、外科的醫術の進步である。

私はあまりに自信が強すぎるのか、僅かに三千餘票をもつて敗れながら、毫もこれを顧みて恥とするを得ない。私は戰ふべきに戰ひ、敗るべきに敗れたのだ。然り、私は全身と全力をもつて戰つた。そして敗れた。然らばわが敗戰の罪果して何れにありや。たとへその罪われにありとも、それ以上の力なかりし私としては、まことに止むを得ざりしもの。たとへ官犬これを咎むるとも、われこれに謝するの要何處にありや。

私は再び問ふ。敗れたるものは誰ぞ。三千餘票をえたるわれか。或は三千餘票だけしか惠みえざりし選擧民か。私はこの問に自ら答ふるを得ない。時日は或はこの問に答ふるであらう。いまはたゞ、敗戰日記の一部を發表して、後日のためにするのみである。

一月二十七日　午後一時。上州に向ふ汽車中。政戰開始の前日である。車室は幸にすいてゐた。或は窓に凭り、或は腰掛に横臥し、或はペンを執り、或は瞑目す。心は不思議に澄みきつてゐる。火蓋を切るまでの準備に奔命した前夜までのことが、列車の進行とともに薄紙をはいだやうに消えてゆく。そして新らしい活動世界が、車輪の一轉ごとに展けてゆくのだ。

私は東京と上州との間に三時間の汽車があることを、このときくらゐ感謝したことはない。

選擧演說の原稿を作り終つたとき、汽車は高崎に着いた。

二十八日　初陣の日である。宮田町の劇場、七八百を容るべ

きこの小屋が、午後二時といふに。すでに聴衆をもつて滿されてゐるのに驚いた。

「諸君、火蓋はすでに切られました。これが私の選擧演說の最初の演壇であります。」

破れるやうな拍手が、平土間の中央から起る。これは私の全く豫期せざりしところである。富田町は、私に全く緣故のない、しかも一度もお目にかかつたことのない聴衆である。私はこれに力をえた。

私はやがて用意してゐた豫定によつて、既成政黨の腐敗墮落を說き（十分）ついで政策問題に入る。蠶糸業の國家的組織（五分）政府出金部の資金運用と農村金融（十分）消費稅・關稅・專賣益金の大減廢（十分）より轉じて、既成政黨の政治が財閥政治に墮したること、『幸なるかなこゝに普通選擧となつて、この特權階級の擁護によつて立てる既成政黨の金城鐵壁の石垣が、一つ二つ三つ四つ、次から次へと崩れ落ちるときが來た』（五分）この邊から同志諸君のいはゆる「名調子」になつて、最後の結論（五分）に入る。合計四十五分にして終る。

（これを基礎として、私は百三十九回、同じ演說をしたわけである。途中で他の演說をしやうと試みたことがあつたが、もう頭も身體も疲れ果て、とても駄目だつた。）

この日演說回數五。

二十九日　みぞれ降る。陰慘の氣、上州の天地を蔽ふ。但し演說會は、いづれも滿員であつた。回數六。

三十日　三日目。聲まつたくつぶれて、談話を交ふるをえない。東京から電話がかゝつて來たが、まるで話が通じぬ。それでも、壇上に立つて、五分ぐらゐかすれ／＼の聲を出してゐると、ドラ聲だけはどうにか發する。終りには大分樂になつた。

何でも一度聲を「ふつきつて」、それから本當の聲になるのだといふ。

夜は燒酒の濕布をして寢、晝はサロメチールを常用する。

演說回數六

三十一日　聲大分樂になる。回數三。

二月一日　この日より、他の候補者、追々に演說會を開く。私はこれまでにすでに二十回を終へた。少なくとも回數だけでは敗けない。

「昨秋の縣會のときは、一度でも演說會を澤山やつた方が、成績がよかつたですよ。」

こんなことを言つてくれた人もある。

演說回數五。

二日　聲調全く整ふ。非常によくなつた。電話の間違で、第一會場と第二會場とをとつちがへ、そのため約一時間半、岩平といふ村の小學校で空しく待つ。南向の校舍の壁に凭りかゝつてゐると、春のやうに溫い。山中風があたらぬせいか、梅がすでに開き初めてゐる。陣中とはいへ、何となく悠々たる氣持になる。回數五。

三日　回數六。聽衆ます〱多し。油やうやく乘り來る。

四日　伊豆少將來援。少將は乃木大將の高級副官として、しかも上州には人氣高し。これ故に、今明日は、選擧區内の重なる町々をめぐる。回數五。

『澤田さん、あんまり身體を無理をしてはいけませんよ。私なども戰爭で經驗がありますが、五日や一週間は不眠不休でもやつてゆける。氣だけでも持つ。しかし身體はさうは續きません。氣だけはあせつても、身體がいふことを利かなくなります。ね。身體が大切ですよ。』

深夜旅館までお送りしたとき、少將は懇々と諭された。私はこの老將軍の親切に對して、暗涙を吞むより仕方なかつた。

『は、有難うございます。』

が、心のうちでは、私語くものがあつた。

『が、しかし僕はやります。全力をつくしてやります。これで若し倒れたら、そのとき止めます。』

五日　回數四。伊豆少將歸京。

六日　雪大いに降る。針の木峠にて、自働車全く動かず、皆降車しては除雪し、自働車を押し上げて山を超す。遂に第三會場は流會となる。それでも回數五。

七日　政友會と民政黨との包圍攻擊に陷れるの觀あり。殊に政友會のごときは、『こんどの解散は、政友會の政策是か非か、民政黨の政策是か非か。いづれが黑か白かを決すべき解散である。政友會に賛成できない人は、民政黨に投票してくれ』と演說してる由。

『なあに、それ丈けこつちの實力が、認められたわけなのさ』と、大いに收まる。

この夜、政友會の金城鐵壁といはるゝ某村にて、自働車で乘りつけた組織的野次隊あり。小生一生一代の雄辯を振ひ、やつと征服す。

『たつた一人の澤田謙を、天下の二大政黨が總がゝりになつて、かゝつてくるとは何のざまだ。不肖澤田謙、逃げもかくれもしない。こゝにかうして立つてゐる。』こんなたんかまで切つた。激しく胸をうつ。その音が講堂の隅まで聞えたといふ。

『先生、あんまり昂奮して、私は實際ハラ〱しましたよ。

と、會場係は言ふ。

（實際、選擧演說をしてゐると、言葉は自然に激越になる。チエスチユアは自づと大きくなる。壇上におけるムツソリニの寫眞を見ると、高く天を指して咆哮してるのがある。あんなチエスチユアは、日本人はしない筈だと思つたら、現に自分がやつてゐた。この大きなチエスチユアは、聲が疲れるから、これを補ふためにやるのださうだ。實のところ、全身で語らねば、とても百三十回の演說はつゞかない。）

十三日　そろ〳〵票数の計算はじまる。各方面の評判を聞くに、まづ第三位より第四位とのこと。しかしそのあとが悪い。

『高津さんは、まだ四五千しかないけれども、これはどうしたつて擧げるつて、警察で言つてるさうですよ。』

『どうしても擧げる』――干渉か買收か。何れにしても安心はできない。それに僕のやうに、人氣だけでとつた票は、一番危險い。政友會なら政友會、民政黨なら民政黨と、札付の票は動きにくい。僕のやうな演說と同情だけで集めた票數が、一番買收され易い。

『買收が奏功したら、それで僕は駄目だな。だけど普選だから――』と秘かに思ふ。普選が唯一の頼みだ。普選でも買收がきくんでは、僕ばかりではない。普選も落選だ。

十四日　五年に一度といふ大雪。つひに九十九谷に埋めつくさる。自動車は顚覆。やつと五里の路を、二尺五寸の雪を踏みつゝ、安中驛までたどりつく。電話も電報も不通。迎への自動車で、命からがら高崎の宅へ歸つたのが二時。

十五日　田澤義鋪氏來援。但し相會ひ相語るの暇なし。やつと自動車が擦れちがうとき、ドアから半身を出して堅い握手しただけ。

『もう一息だ。頑張りたまへ。』

『有難う』

それだけだ。時湊にむせぶ暇さへない。

十七日　この日から、買收いよ〳〵始まるべしとの噂。なるほど、氣をつけて見てゐると、村々町々の有力者を送り迎へするらしい自動車に、幾台となく會ふ。『あれは何さんの自動車、あれは誰さんの自動車』と、僕の運轉手は一々敎へる『××さんは六台でやつてきますね』といふ人もある。當選確實で、今年は買收しないと傳へられた××氏。そのために地盤割れを來してゐた××氏。それまでが買收をはじめたか。それでは私の運命もつきた。そして普選もまた。

十九日　最後の奮闘の日。昨日演壇に倒れたるも、今日は元氣旺盛。全力をあげて八會場をめぐる。他の候補者全部の聽衆

を集めても、僕一人の會場だけの聽衆に及ばないといふ盛況。一諾發するごとに、搖ぐやうな拍手。これがせめてもの信用だ。買收――當選――落選――敗れたるものは誰だ――私はなほ語りたいが、殘念ながら紙面がない。

買收に敗かされる記

高橋龜吉

一

今度の山梨縣に於ける私の普選第一回の戰ひは、投票では數で敗れたが、戰ひの實質に於ては明かに大勝利であつた。私共は、落選しながらも、本來は無產政黨のものだ、と云ふ確信をいよ〳〵強くしたが、之に反して、既成政黨は、今度の投票數には多數を占めながらも、明日の運命の急迫せるを痛感せざるを得なかつた。見よ、彼等は堅固な地盤を有すと稱しながら、その地盤を彼等のものにするためには、一票數圓で一々之を買收せねば動かない地盤である。民政黨の如き、一人半を出し得る地盤から只だ一人の候補を立て、悠々當選の事情に置かれながら、尚ほ買收費を出さねばならなかつた。政友會亦、その堅固な地盤に於て、一票數圓の買收費を必要としたのである！

然るにどうだ！私に與へられた票を見よ！なる程、農民組合の地盤から、正義の一票が私に集つたことは、之れは當然のことだと讀者は云はれるであらう。いかにも、私は今、之を茲に誇らうと云ふのではない。しかし見よ、私に與へられる票は、實に、山梨全縣下の各村に亙つてゐる。二三票から數十票の散票が、農民組合地盤以外の村々町々から私に與へられてゐる！就中、郡內地方（南都留北都留二郡）の如きは、從來、政友會の金城鐵壁であつて、農民組合地盤の如きは殆んどない所であつて、私共が此地方に乘込むや、政友會の面々は、此地方から百票以上も取れば首をやるとまで豪語した程であつた。だが、開票の結果は、南都留郡から四百六十票、北都留郡から三百數十票、合計約八百票の多數を算してゐる！更に見よ、甲府市民は約九百票を高橋に投じてゐる！

これ等の票は、その殆んどすべてが、農民組合以外からの得票である。一回の言論戰か乃至は一片の文書戰に由つて、私に與へられた、それこそ清き一票であり、正義の投票の集積である。醒めたる民衆の叫びを象徵する時代の黎明を示すものであ

る。これが、全縣下の村々、町々から、少きは一二三票より多きは百數十票と群がり集つたのである！。

一人の先覺者は數百人の自覺者を必ずや作る。今日の一人は實に明日の數百人に匹敵する！ いま、我等は彼様な有力な、しかし未だ面識もなき、貴重な同志に圍繞せられてゐるのだ！ 既成政黨が何十年の努力と何十萬圓の金力とを以てしても、漸く現在の勢力を支へ得るとき、われ等は赤手空拳、唯一の言論と社會に對する熱烈なる義憤とを武器にして、新に立つや、斯の如き全縣下の共鳴をかち得たのである。われ等は、落選しながらも、此の光明に輝く軍勢を手にして、未來はいよ〳〵我等のものだ！ と云ふ感激と歡びに溢れざるを得なかつた。

讀者は、われ等の此の感激と歡びの眞味を知るためには、山梨縣の選擧界が所謂甲州財閥のため、如何にスポイルされてゐるかを知らねばならない。「選擧即投票買收」と云ふことが公々然と行はれて、之を怪まないと云ふ惡風が如何に山梨全縣下を汚辱してゐるかの有様を先づ想見せねばならない。選擧毎に數十萬圓の惡錢が、山梨全縣下にフリマカれる結果、選擧は「福の神」と考へられてゐる程、それ程選擧界が腐敗し切つてゐたことを頭に記いて之を見ねばならない。しかして後ち、われ等の感激、われ等の歡びが何であるかの眞味は始めてそれと肯かれるであらう。

二

斯く、山梨全縣民は、今や、從來の既成政黨の腐敗に明かに醒めつゝある。われ等無産黨勝利の日は明かに黎明を告げつゝある。金権政治の弔鐘は誰が耳にもハツキリと響きつゝある。

だが、われ等の勝利を確信せしめるものは、それだけではない。それ以上、農民組合員の熱誠なる奮闘、青年諸君の純眞なる奮起、一般大衆の澎湃たる同情に由つて、われ等の選擧戰が常に軍資の欠乏に悩みながらも、尚ほ隊伍堂々と進軍し得たことである。

組合員は實によく、獻身的に奮戰した。粗末な食物で、雪の中を跋渉しながら、夜の目も寢ずに、不慣れな選擧戰を戰つて呉れた。これに關したエピソードも隨分ある。或る所では組合員が私をオンブして、積雪二尺餘の山道を突破して會場に運んで呉れた。ブルジョアー候補者が茶屋で休戰して、大旅館に暖衣飽食してゐるとき、われ等は、實に斯くの如くにして各地に轉戰したのであつた。又、應援の女流辯士（山梨郡部の農民の家庭より奮起した人々）は、積雪尺餘にして尚ほシン〳〵と降り積る夕べ、一里半餘を足袋洗足で會場に歩いて行つて呉れた。

その時彼女は云つた、『どうせ私どもの演說は高が知れてゐる、只だ熱誠に由つて人を動かす外にない、いま、此の大雪を冒して足袋洗足で歩いて行つたと云へば、聽衆はそれだけで私どもの熱誠を買つてくれませう』と。斯くて、屈强の若者すら躊躇する會場へ彼女は吹雪を冒して歩いた行つた！　私は、眼の中が熱くなるのを抑えることが出來なかつた！

各地に於ける青年の奮起も涙ぐましいものであつた。私どもの主張に共鳴して、未知の青年諸君が、親の政黨關係に斷然と反對して、幾多の家庭悲劇を演じつつ、私どものために奔走して與れた。田舍の家庭には、從來の政黨關係（或は政友或は民政）と云ふが如き傳統が意外に根强い力を持つてゐる。それを打ち切つて立つと云ふには、如何に大きな決心と勇氣が要るかは都會人の想像も及ばぬ所だ。にも拘らず、青年諸君の熱情は、よく、此の傳統に抗して、新しき時代のために奮鬪して與れたのである。單に奮鬪して與れたのみでなく、自ら、金を持ち寄つて、私のために働いて與れたのである。ここに「私」のためにと云つたのは無論一個の高橋私人のためではなく、無產大衆の代表者としての「私」に對してゞある。

以上と共に、一般社會の同情、後援亦實に涙ぐましい迄に感激そのものであつた。見よ！　山梨の言論戰鬪は、われ等の正義の戰ひのために、實に諸縣の聲援を惜しまなかつたのである。見よ、少なきは三錢切手十枚より、一圓、十圓、五十圓と云ふが如き寄附金が、選擧事務所を埋めたではないか。中にも一老婆が紙十帖と金三十錢を持つて來て、紙は女鬪士に、金は自由に使つて與れ、私は老先きないが、孫のために、金權の世の中をブッ倒して下さいと訴へる如き、最も全軍の士氣を鼓舞した一つであつた。

斯樣な雰圍氣と、後援と同志の奮起との下に激鬪したわれ等の言論戰が、既成政黨を壓倒したことは云ふ迄もない。實に、甲府市に於ける最後の演說會場に於ては、高橋の壇上に立つや「脫帽々々」の聲が聽衆より湧き立つた程に熱狂して來たのであつた。而して、われ等は、一月七日立候補以來、時日の不足と資金の欠乏に苦しみながら、不便の各地を轉戰して尙ほ八十三回の演說會を開きたるに對し既成政黨の候補者は、竹内三十七回、大崎三十六回、河西二十六回、穴水二十三回、田邊十二回に過ぎなかつた。既成政黨の候補者が、專ら、買收戰に全力を注ぎたる有樣を想見せよ！　斯くて、高橋候補者當選確實の聲は漸く全縣下に叫ばれるに至つた。

三

然るに、開票の結果は次點で落選であつた。何故であつたか？　要するに、既成政黨の「買收」と「戸別訪問」が公々然と行はれたからである。

敵は、高橋優勢と見るや、最後に農民組合員に向つて、買收の鋒先を集中した。さうすることが、最もよく高橋を敗る所以であるからだ。斯くて、それ迄は、專ら、組合員以外に延びてゐた「買收」の魔手は、組合員切崩しの誘惑に熱中せられた。農民組合員の一部が、不幸にして、一部切崩されて無産階級を裏切るが如き投票をなしたものあるに至つた所以は、主として、此の敵の誘惑戰に基くのである。

その上に、既成政黨は、戸別訪問を公行して、共同戰線を高橋に對して布いた。即ち、山梨縣の各新聞の報道に由れば、準政友の大崎濟作危しと見るや、鵜山及び若尾より電話にて、山梨政友會支部に大崎援助の依頼あり、こゝに於て、十九日朝に至り、政友會公認候補の票（買收によつて自己のものとしてゐる）を大崎に割けてやつたと云ふのである。十九日の朝に至つて、政友會某に約束濟みの投票を急據大崎濟作に變更さす!?　讀者は常識に由つて、その方法は戸別訪問以外にないことを認められるに違ひない。しかも、斯ることが、公然と、大崎派の選擧事務長談として新聞に傳へられ、政友會支部のそれとして新聞に掲げられてゐるのである！

「買收」と「戸別訪問」の公行。ブルジョアー候補者が無産者候補者に勝つた唯一の原因はこれである。記憶せよ！普選第一回の總選擧に於て、ブルジョアー代議士の當選したカラクリは「買收」と「戸別訪問」の公行に在ることを。之れを取締るべき責任者が之を放置したことに在ることを。實に、既成政黨は自らその墓穴を掘つたのだ！。自らその作つた法律を侮辱し、自ら之を踏みニヂツテ、社會公衆の前に之を大ピラに示しつゝある。彼等は彼等の作つた法律の適用が如何に「不公平」であり、如何に「御都合次第」のものであり、如何に民衆を「馬鹿」にしたものであるかを、實踐を以て、親しく之を大衆に教へてゐるのだ！若し、我が「尊重」すべき法律に對し、民衆が不信認を表するが如き不詳事起るが如きことあらんか、その責任者は、「買收」その他の選擧違反を公々然としてやつて當選したブルジョアー代議士そのものであると云はねばならぬ。

にも拘らず、官憲はいま、斯かる「非國民」代議士を「取締る」に無能力者である。民衆よ起て！起つて此の破廉恥罪人の代議士に、社會的制裁を加へよ！社會の裁判所から、彼等に法律の罪人、しかも破廉恥罪人たることの宣告を與へよ！而して私は斷言する、尠くとも、山梨縣より當選せるブルジョアー代

議士五人の殆んどすべては・皆、此の社會的制裁に價する罪人であると云ふことを！彼等は法網をクラマス事は出來るかも知れぬ。しかし、山梨縣民七十萬人の眼をクラマス事は出來ぬ。彼等が「買收」その他の法律違反を犯して當選したことは、宛も太陽の天に在るが如く、山梨縣民七十萬人の公知してゐることだ！

敗れて餘榮あり

加藤勘十

一

選擧の總決定の濟んだる後二月二十三日、私共は澁谷公會堂について選擧報告を兼ねての感謝演説會を催しました。其の夜の其の場内の光景は私をして全く感激の絶頂點に立たしめました。私はシミ〳〵と「敗れて餘榮あり」と感ずると同時に全民衆のために死を誓ふことができました。それほどに私をして感激の絶頂點に押しあげた其の夜の空氣は、決して渺たる一個の私の敗戰に對する單なる同情の現はれと見ることはできなかつたのであります。政治的に何等の根據を有せず、民衆の與りなき同情に價ひすべく何等の存在を有たない私は、これを私自身に對する同情と思ふことの餘りにもそら恐しさを感じました。これこそは、既成政治勢力たる政友會、民政黨の横作の横惰態に對する民衆の抑へ難き勃々たる反抗意識が、偶々私の敗戰に對する同情と云ふ形となつて爆發したものだと感じさせられました。同時にこのことは日本の將來の運命に對して一大示唆を與へるものでなければなりません。民衆の鬱屈したる反抗意識の爆發こそ一切のものを決定する力をもつものであるが故に。

二

選擧戰全體を通じて觀る時は、勝利の重なる要因として次の如きものを觀ることができます。即ち封建的習性から脱し切らない農民大衆の傳統的惰力、全體として内在してゐる事大思想、黄金の魔力、權力の壓力等々であります。けれども、これを個々的に觀るならば其の勝敗の原因は蓋し千態萬樣でありましやう。其の個人を圍む環境の條件、所屬せる黨派の關係、其の個人の人格、識見、手腕、閲歴、資金（法律の制限内におけ

る）の多寡、選擧戰術の巧拙等々數へ來れば十指を屈するに餘るほどであります。

私の選擧感想は當然に私を圍む特殊事情の陳述となります。さて、其の特殊條件を解剖して見ますならば、第一に私の所屬せる黨派は經濟的に政治的に一切の支配權を掌握せる大資本に對する反對勢力としての新興無產階級を其の存在の基調とせる無產政黨日本勞農黨であります。日本勞農黨は結黨以來僅かに一ケ年、歷史的には無產階級解放の必然的使命を負荷されてをりますが、平面的に未だ何等社會的に論ぜらるべき功罪を有ちません。のみならず、無產政黨の數的根據でなければならなかつた組織勞働者農民の多數が、無產政黨に對する正當な評價認識を欠いでゐた點は無產政黨の將來の發展の上に充分考慮されねばならぬことであると同時に、選擧の結果に無產政黨全體を通じての誤算となつて現はれたことは否定できません。

第二に私自身に關する限りにおいては、今まで（今後とてもさうであるが）被抑壓大衆の一人として水平線下のドン底生活を强制せられ、何等社會的に評價せらるる條件を有つてゐない、解放戰線に於ける一兵卒に過ぎません。從つて運動資金など固より有らう筈がなく、私が立候補當時の資金としては我が黨の城南荏原支部に屬する黨員諸君の臨時黨費の醵出と友誼團體である勞働組合總聯合の荏原地方所在の各組合所屬の有志諸君の寄附金と合せて約八百圓位が算へられただけであります。

選擧費用について幾何要したか私は全く與り知りません。私の手許から出したと云ふ金は原稿料として送られた二十七圓の爲替券だけであります。一切の支出はもとより寄附による收入も一切が事務長の河野密君が扱つてくれました。事務長の精算書によれば總費用は四一三八圓二七錢（自働車、サイドカー、立看板、ポスター、其他の現物寄附を現金に換算して）を要してゐるのでありますが、この費用は前記二十七圓を除いては全部が寄附金によつて支辨されて居ります。寄附者の總人員は工場などの關係で精確には判りませんが、略々一二〇〇名位になつてゐます。要するに、私は選擧事務には全然關與することなく委員の諸君から日本一の呑氣な候補者だなんて言はれるほどに全部が河野君によつて統制されました。

斯の如く、ブルジョアイデオロギーによる常識的社會的評價の對照としての何物をも有せず、乏しいと云ふよりも無一物と云ふ方が適切である資金をもつて、戰ひは開始されたのであります。それにも拘らず、一〇、二〇三票と云ふ投票を得られましたことは、全く同志諸君の獻身的活躍と、既成政治勢力たる政友會、民政黨等の横暴醜惡に憤激せる大衆諸君の義憤が凝つ

てこの結果となつて現はれたものとして私は心から感謝して居るものであります。多數の方々から『惜敗だ』と慰撫、激勵せられる毎に、私は私の責任の一層の重さを痛感するのであります。

選擧戰の最中及び選擧後に於いて、微力不肖なる私のために、或は慈父の如く溫かく、或は同志の如く熱烈に激勵慰撫の書翰を頂きました數は署名匿名取まぜて全部で二百八十六通（内はがき一六八通、手紙一一八通）の多きに達しました。其大多數は未知の方々からの來信でありました。寄附金を寄せられました中にも組合關係、黨關係、個人（候補者、選擧委員）關係などに全然關係のない未知の方々からの分が可なりに達しました。これぞ既成勢力に對する民衆義憤の結晶でなくして何んでありませう。

三

斯の民衆義憤の感激の中から私共はどのやうに戰つたか。某工場に働く同志管若佐太郎君は雨中を冒して演說會のビラ張りに活動したのが因となつて戰ひ半ばに再び歸らぬ永遠の旅路に旅立ちました。私の不德微力、この同志の尊い犧牲に對して何等報ゆるを得なかつたことを今もつて悲しみとしてゐます。多數の同志諸君が如何に其の持ち場持ち場において獻身的に活動されたことか。未知の方々からの同情と共に永遠に忘れ得ぬ私の感激の泉であります。かうした汲めども盡きぬ感激の泉をもち得た私は身にあまる光榮に幸ひされたものと云はねばなりません。

私共の演說會が到る處非常な盛會を見たのは、かうした民衆諸君の絕大なる同情と同志諸君の犧牲的活動の賜物にほかなりません。演說會の總數は、六十六回（内一回は落合における山崎光明氏主催の各黨立會演說會）でありまして、東京府五區に於いては最高のレコードをもつてゐます。最初一日五回平均約百回の豫定を立てましたが、交通機關を借り入れる資力をもたない私としては、電車が唯一の連絡機關であり、電車から會場まで徒步連絡せねばならない狀況に於いては、一日三回以上の開催は到底不可能たるを免かれませんでした。それに學校借入手續が煩瑣なために豫定の如く進行せしめることができず豫定の三分の一をしか實行することができなかつたのであります。演說會に動員し得た數は約四萬二千人であります。斯くも多數の聽衆を得たのは、前記の如く民衆諸君の同情、同志諸君の犧牲的活躍によることは勿論であるが、就中、文藝戰線同人諸君を中心とせる勞農黨員の諸君が奮つて熱烈に應援された點を

特筆せなければなりません。

文戰戰線社同人諸君の應援についても選擧協定の問題と關聯して當然に勞農黨內部に於いても論議されたければならぬ問題だと思ひます。而してこの文戰同人諸君の私に對する應援の問題即ち勞農黨員としての秋和君が同一地區から立候補してゐる場合に他黨の私への應援、このことが解決される時は即ち秋和君の協定破壞による立候補問題が階級道德の上からその是非が決せられる時であります。が、とにかく、文戰同人諸君の優秀なる辯士團に我が日本勞農黨としての優秀なる辯士團を編成し得たることが演說會を盛況に導き從つて戰ひ敗れたりと雖も一萬票以上の投票を集め得られた主因であると思ひます。

ポスター戰においては運動費の關係があつて當然のこととは云へ、五區十一名の立候補者中一番見劣りのしたのは已むを得ないことでした。今少しポスター戰に力を注ぎ得たらの感がないでもなかつたのですが、如何んとも致し方のなかつた處に、私の本質があります。

選擧戰術（演說會の編成をも含む）において二三の過失を冒しております。即ち主力と考ふる地點に對する力の欠乏、敵の主力とする地區に對する認識の不足等々を數へ得るのであります。けれども、このことは選擧後に至つて各自が氣附いた點であつて、選擧戰に對して全然素人である私共が、微細な點に亘つて戰術が立てられる筈がありません。

四

之を要するに、私共としては現はれたる儘の形において、民衆諸君の既成政治勢力に對する反抗意識を手掛りとして、意氣と情熱と全努力とを傾け盡してヒタ押し進んだと云ふのが適切な言葉でなからうかと思はれます。事務長河野密君の統制の下に見事なる結束を示しつゝ最後まで一日發りに其の意氣と情熱と努力とを昂揚せしめつゝ戰ひ續け得られたことは、選擧委員諸君の微動だもせない健康と階級運動によつて訓練されてゐられる節制とが、よくこの結果を贏ち得られたものと思ひます。

選擧委員諸君の類別は大工さん一人、ペンキ屋さん一人、運送店員一人、組合常任幹部三人、あとの四十三人は全部が現に工場に働いてゐられる組合の優秀なる幹部諸君のみであります。この尊い階級戰線の闘士諸君が僚友としての私のために犧牲的に働いて下さつたことが、限りなく吾々の戰闘力を增大せしめたのであります。

私はこの機會に於いて全民衆諸君の熱烈親愛懇切なる支持激勵に對して、と同時に、全選擧委員――階級運動の僚友――諸

君に對して深厚なる謝意を表すると共に、日常闘爭に出陣たる一兵卒としての責務を果すべく私の全努力を注ぐことを誓ふものであります。

(三、六日)

彈壓記

大山郁夫

○

わが勞働農民黨が、今度の總選擧に際して掲げた中心スローガンは、左の通りである。

勞働者に食と仕事を與へよ！
働く農民に土地を保證せよ！
總ての人民に自由を與へよ！
田中反動政府を倒せ！

これらのスローガンをひつさげて約四十名の黨員が、全國各地に立候補した。

○

全國に散在する我々の同志が、これらのスローガンを聲高く叫ばうとした時、そこには例外なしに彈壓の魔の手が伸ばされてゐた。既に諸君の知つておられる通りに、今度の全選擧戰を通じて、支配階級の攻撃力の最尖端は、常にわが勞働農民黨の上に向けられてゐたのである。それは、いふまでもなく、わが勞働農民黨が無產諸政黨中の選ばれたる黨としての地位の擔當者であるがために外ならないのだ。わが黨の全黨員は、全選擧戰を通じて、よく鐵火の試練に堪へ、最後の瞬間まで戰ひ拔くことによつて、黨のこの名譽ある地位を立派に保持した。

○

私は、幸にも、全國での最も激戰地として知られた香川縣の第二區から名乘りをあげることを許されたので、支配階級が如何に死力を盡してわが黨の陣營に肉迫して來たかを、まざまざと私自身の眼で見ることが出來た。彼等は狂暴にも、火の出る樣な彈壓と、陰險卑劣を極めた術策とをもつて、我々の上にのしかかつて來たのである。彼等の暴戾ぶりは、新聞紙によつて大體報道されたが、事實はより遙かに深刻のものであつた。し

かもそれは、この頃までもまだ繼續されてゐるのだ。最近香川の同志から本所へ來た報道はその片鱗を示してゐると考へられるから、左に掲げる。

○

（香川の同志からの來信、

選擧期間を通じての我が香川における彈壓は曾て何處にも見ない狂暴さであつた。

選擧は終つた。しかし彼等の彈壓は選擧と共に終りはしなかつた。

今兄弟は半殺しにされてゐる。

選擧直後に當局の不法なる檢束によつて監禁された十餘名の同志は、今なほ警察の豚小屋のやうな留置場をあちらこちらとタライ廻し一にされ、畜生あつかひをされてゐる。最も長いものはすでに二十日以上に及んでゐるし、短いものでさへ、すでに一週間以上だ。

（中略）

ことに同志朝倉、宮井、石原、杉澤、篠原君等に對する取扱ひは實に殘虐を極めたものであつて、非常半殺しにされてゐる。病弱な朝倉、宮井君等は死ぬかも知れない。

同志たちは、この警察の暴虐に反抗するために、四日からハンガー・ストライキをやつてゐる。

我々が外部にあつて應急策を講じやうとしても、家の附近にスパイが張り込んでゐて、手紙さへ出すことが容易に出來ない有樣だ。

兄弟よ！　諸君の力によつて香川の同志を救つて呉れ！

（六日）

○

薄暗い留置場の中で生命の脅威をさへ感じつつ呻吟してゐる同志の姿を思ひ浮べる時、だれが憤激せずに居られやうか！我々は彼等の暴虐に對しては、あくまで徹底的に闘はねばならないのだ。

○

彼等は屢々かういふ意味のことを言つてゐた。『勞働農民黨に對する我々の取締りは、危險思想の宣傳に對する取締りが主である』と。彼等のこの危險極まる言葉の蔭に何が爲されたか？わが黨員諸君の言論は勿論のこと、態々遠々と應援に來てくれ

られた河上、長谷川、森戸、細川の諸君等の言論が、一地方の一警察官——彼等は言ふまでもなく社會科學の門外漢である——によつて、何の雜さもなく「中止」を喰はされてゐたのだ。これこそ千九百二十八年に於ける我國の專政的法律の實質の姿を大衆の前に、まざまざとさらけ出したものでなくてなんであるか？

○

長谷川君は香川の暴壓ぶりに對して、同君一流の皮肉な調子でかう言つてゐる。——

『……最初の一回は、少しむづかしい事を黒板を使つて「これとこれとこれが」などとやつたので無事に濟んだが、其あとの分は悉く三分としやべらないうちに中止された。少しも中止されさうな事を云つた覺えがないから、何をいつたために中止されたのかよく判らない。一度などは、ちつとも不穩な事をいつた積りでなかつたのに「中止」と叫ばれて、思はず「オヤ」と大きな聲を出したので聽衆に笑はれた。

最後の日の丸龜では夥しい聽衆で、それが甚だ熱心らしく感じられたので、今夜こそは無事にやりたいと思つて「今晩は平常の學術演說と全く同じ内容のことをいふのだから警官も中止はされまい」といつたら、そこで「中止」された。聽衆が憤慨して私を圍んでわい／＼いつた。そこで私がその人達に何かしやべると「檢束」といふことをされるのだといふことをきいてゐたので、たゞその人々のいふことをきいて「ありがたう」といつた。

かういふ狀況の下に於ては、人間の言葉で演說するよりも、犬にでも吠へさせた方が餘程効果がある。それでも「中止」するなら、犬の皮で張つた太皷をかつぎ出してドン／＼叩いた方が、主意が徹底する。

日本人らしくはあるが、とても同胞とは思はれないやうな、その昔し九里濱に上陸したアメリカ人よりも傲慢な顏をした警察官といふものが、グル／＼廻つてゐた的に吹矢をあてる賭事のやうた調子で一言「中止」といふと、もう日本人が日本語をきけなくなるなどといふことが、日本の國家的根底のまださう深固でなかつたという仲哀天皇時代に於てさへ行はれたか何うか問題だ。

これで大山君が當選すれば、默つて突立てゐる、琴平神社の石燈籠でも當選するだらう。』（「我等」から抄錄）

○

今度の選擧戰のもつ最も重大なる意義の一つは、この選擧戰を通じて、我々の運動の中心スローガンである『政治的自由の獲得』の意義が、全無産階級に、彼等の直接の體驗によつて學びとられた事にあると思ふ。『政治的自由の獲得』をわが無産階級運動の戰略上の目標とするは正しいかどうかといふやうな事が、一時少數の人々の間に問題にされてゐたやうであるが、今度の選擧戰は、それの正しさを、疑ふ餘地のない程明白に證明したと思ふ。

我國のブルジョアジーは、今では、政治的自由の獲得のために興奮するどころか、民衆の政治的自由を剝奪することに狂奔してゐるのである。資本の攻勢によつて僅かに活路を求めてゐる彼等は、それの必然の結果として無産階級の政治的自由を剝奪することが彼等の支配階級としての生存のために絕對に必要であることを知り拔いてゐるのである。この事を反對の側から言へば、無産階級は今では生存のために政治的自由を必要としてゐるのである。無産階級の政治的自由の爲の鬪ひは、彼等の生のまゝの生活のための鬪ひである。それぞれの生存のためにする政治的自由の綱領と政治的自由の獲得、そこに血みどろの鬪ひが展開される。現在に於ける政治的自由獲得のための戰ひの特殊の意義はそこにある。この事を知ることなしには現在の政治的自由鬪爭の意義は理解し得られない。

華紅 米田祐太郎先生著

西太后・楊貴妃

四六判三七二頁 極美上製函入 定價参圓参拾錢 送料拾貳錢

本書に集まる五篇は悉く支那歷代の豔爛極りなき、後宮の秘密を白日の下に曝露せし著者會心の大創作だ。豔無比の著者獨特なる筆は淫蕩生活の肉的歡樂を、大膽露盲、精細赤裸々に活寫し、讀者をして酒池肉林の世界を眼前に髣髴たらしむるであらう。大衆讀物として好適、ぜひ御愛讀を祈る。

支那猥談集

四六判三二〇頁 極美上製函入 定價貳圓貳拾錢 送料拾貳錢

輕いユーモアに富んだ滑稽な猥談は、支那が何んと云つても世界一だ。一夫多妻が公然と許され、三妻四妾が當前の廣東、濃厚な料理と絕倫なる精力の所有者、支那男女がその道にかけて殘した猥談、萬物猥化主義の支邦人の奇想天外な猥妖、唯々眼を瞠るのみだ。正に世界的珍書中の珍書である。

平井堤六先生譯著

情郷禪

四六判三六〇頁 極美上製函入 定價参圓八拾錢 送料拾貳錢

本書は面白く愉快な支那の情事秘話集である。我國には未だ嘗て譯された事もなく、原書さへ仲々に手に入らぬ珍本だ。實に本書はそれ程得難い、戀愛の百科辭典であり、情道の聖典とも云ふべき稀有の珍籍なのだ。先づ一册を求めてその奧祕を知れ。

華紅 米田祐太郎先生譯著

繪入 紅緣記

四六判三八〇頁 極美上製函入 定價参圓五拾錢 送料拾貳錢

支那家庭、閨門のいきさつを細叙して、興趣盡きぬ濃艶な戀場面を展開し、花と競ふ愛の掠奪、戀の合戰に火花を散らした一篇の痴情物語だ。その他、閨門の秘術隨行に描寫されて、一讀卷を廢ふ能はざる程に、興趣深き秘册である。

繪圖 玉嬌梨

四六判三五四頁 極美上製函入 定價参圓五拾錢 送料拾貳錢

原書の「玉嬌梨」は「肉蒲團」「金瓶梅」等と共に、支那に於ける代表的珍書。艶情を描き、戀愛を叫つた一篇の描寫は、支那料理そのまゝにこつてりとして濃艶、然も深刻だ。繪卷物か寫眞を見るやうに讀者は思はずも烈しき昂奮を覺えるに違ひない。若き人々必讀の書だ。

桔梗山房主人譯著 **支那情艶秘錄** 定價参圓 送料拾貳錢

桔梗山房主人譯著 **枕中往來** 定價参圓 送料拾貳錢

米田祐太郎先生著 **新支那語會話捷徑** 定價貳圓五拾錢 送料拾貳錢

米田祐太郎先生譯著 **支那艶情小說集** 定價参圓二拾錢 送料拾貳錢

米田祐太郎先生譯篇 **支那珍籍全集** (內容見本進呈)

東京市赤坂區南町六丁目 **支那文獻刊行會** 振替口座東京五七八二六番

八ポイント欄

一、この「八ポイント欄」は有名無名を問はず、普く世の篤學者、趣味家、好事家、旅行家のために開放して隱れたる智識と湮れたる珠玉とを集めて之を天下に紹介しようと思ふ。故に「八ポイント欄」への投書を特に歡迎する。

一、原稿は出所責任を明かにするため筆者不明のものは採らない。紙上の變名も許さない。そして掲載した分には十圓以上の謝禮をするが、枚數は四百字詰五枚以內にコンデンスして頂きたいことを希望する。

メンデス・ピントー

林　若樹

フエルナンド・メンデス・ピントー（Fernand Mendez Pinto）は誰れも知るごとく凡四百年に近き古我九州の南端、種子嶋に漂着し、日本發見の名譽を贏ち得且つ我邦に初めて鐵砲を傳へたと云はるゝ葡人である、昨冬我邦駐劄の葡國公使は此功績を表彰せんが爲めに種子嶋に一基の紀念碑を建設された。

然るに此メンデス・ピントーの紀行に就いては其記事のあまりに荒唐無稽とも思はるるふしの多い爲めに古來一種の傳奇小說視されてあまりに信用を拂はれてはゐない。或人等はピントーは事實日本には行かず、友人其他の見聞談を書き綴つたものであらうとさへ疑られて居る、マルドック先生の名著日本歷史第二編の劈頭にも種々の疑點を擧げて、日本は葡人に依つて發見せられたには相違なからうが、ピントー其人に其名譽を捧げることは出來まいと記されてゐる。

ピントーが種子嶋に漂着して鳥銃を獻じた時の領主は種子嶋時堯である、今では時堯と鐵砲とは日本人にとつて離るべからざる關係を持つてゐること程普通の事柄になつてゐる。然るにピントーの紀行には時の領主をナウタキム（Nautaquim）としてゐる。疑へば之も又疑問の種子である。

然るに之に就いて大島富士太郎男は貴重なる發見をされた、それは故天囚西村時彥博士の著なる南嶋偉功傳――鐵砲傳來の顚末を敍し偏に種子嶋家をして授爵の恩典に浴せしめたと傳へらる――中、種子嶋家系圖時堯の條下に、時堯初名直時とあるのを見出されたのである。直時とナウタキム偕に同一人である。一六一四年初板のリスボン板によれば明にナウトキム（Nautoquim）とあるに於てをやである。かゝる正確なる人名等は事實其場に臨んだ者でなくば傳へることは出來ない次第と考へる。尙之に就いて時堯と改名の年月が判明すれば隨而渡來の年月も確にすることを得る譯である。

ピントーは、種子嶋より豐後國王の招請に應じ府內に赴き其處で國王の痼疾たる痛風を鐵木に浸したる水に依つて治したり、十七歲になる公子に鐵砲傳習を强ひられて銃獵を約し、公子は其早朝ピントーが未だ寢所にあつた時詰問し竊に鐵砲を持出して射擊を試みたが、火藥の分量を過つた爲めに其銃身は破裂し、公子は頭部と右の拇指を傷はる程の重傷を負ふたがピントーの素人療治

で幸にも恢復した等の記事があるが、之等も多少誇張された嫌はあらうがピント自身が遭遇した事實談でなければ、かく迄も精細に記述することは出來得まいと考へられる。

一面に於て古く彼のシヤル・ヴォアはピントーに就いて與論を執つた、即ち

「兎に角此記事の凡ての場合を予は保證する譯ではない、原著者は不可思議の事を愛する様に見えた、而して彼の質實に對して永い間世人は用心をしてゐた、然し彼が周遊した處を彼の後トで實地行つたものは彼の言が今日多の人がクセノホン（Xenophon）（紀元四百卅年前に生れた希臘の歴史家で、其著なる從軍紀行たるアナバシスの質實なることは近世の旅行家の實驗して證する所となつたい）を信ずる如く事實であると言つた、即ち質實を誇張し過ぎた傾はあるが全く事實を曲げたことはない、彼が爰で言つたことの凡てを全く造り話の挿話と見做すことは殊に困難であるかの如く見える、殊に彼が書いた時には多くの人が夫れを事實無根なりとすることが出來る時であつたことを思へば一場架空の談ではない云々」（大西鳴川譯 若樹掌記）

頃日 商大教授幸田成友君より聞くところによれば、現に外國語學校に教鞭を執らるゝ外國教師中に葡人ピントー先生がある、幸田君は一學生を介してピントーなる姓は葡國に於て澤山ある名字なるや否やを質せしに同先生の答に、此姓は葡國に於ても稀れである、日本に鐵砲を傳へたと云はるゝ彼の有名なるメンデス・ピントーは古來大ホラ吹のピントーと綽名されたがこれは嘘つきといふ葡語メンダス（Mendaz）と音の似て居るのから洒落れて大ホラ吹のピントーと呼ばれるのであるとのことであつた。

誠にピントーの紀行は荒唐無稽と思はるる記事に充されてゐる爲めに大に其信用を害されたには相違なからうがピントー先生の言はれたメンデスとメンダスの洒落も此聲價を墮すに預つて力があつたことであらう。

今や古くシヤル、ヴオアの言つた如く、ピントーの紀行はよし夫れが誇張された記事に充たされたとはいへ、全然根據の無いことではないことは、大島男の發見されたナウタキムと直時の如きでも證據立てられる。且つ此發見は確にピントーの紀行をして而からしむる一端をなすものである。

いさゝか南行の說を傳へて我れ人共に倘今後の研究を期待するのである。

春の花

秦　豐吉

一好色植物學者の曰く

好い時候に成りました。そこで早速手近の所から、僕の研究に移りませう。時節柄、春の花と題しまして。

金盞花

この花を一寸嗅いで御覧なさい。女の月のものの匂ひがします。又この花を嗅ぐと嚔が出さうになつて、喉が嫉妬の膽に惡い爲に、この花を嗅ぐ丈でも流産の原因になると言はれますから注意すべきです。南スラブでは男の足跡にこの花を植えるときつとその女に惚れてきて、男が言ひ寄つてこない内は、決して枯れないといふ感心な花です。

さふらん

これは既に希臘時代から女の肉慾を刺戟する花に成つてゐます。希臘神話に出てくる牡牛になつたオイロッパといふ女は、さふらんの匂ひをさせ乍らジユピタアに近寄つて、その戀人になつたと傳へられます。ジユピタアがヘラを初めて抱擁した刹那に、この戀を祝福して、大地から美事な花が咲き出した中にこのさふらんの花も飛び出したさうです。

櫻

爛漫たる櫻花には希臘には無かつたものですが、獨逸ではすでに第七世紀頃の言葉に現れてゐます。獨逸で「あの女は櫻の木に成つた」といふ意味は、あの女の腹は大い、といふ事です。女をはらましておいて、しかもその女をよその男に押付けた男の事を、かのマルチン、ルウテルは「あの男は櫻んぼを食つておいて、その種をよその男の首に懸けた」と言つてゐます。「櫻を手折る」といふ事は、「薔薇を折る」と同じに、處女の肉慾を樂む意味です。

櫻の花は南獨逸にはかなり多いのですが、然も西洋の櫻は矢張り花よりも櫻んぼが大事です。櫻んぼはその形の上からいろいろ好色的比較研究がされますが、例へば二つ繋がれた櫻んぼは、女の乳房にも見られ、男の大事な物にも考へられます。或は熟して眞赤になつて、先が稍細く、その先に一寸溝のある所なぞも男の何かに例へられます。

ロココ時代の頃には盛んに櫻が好色な場面に描かれてゐます。例へば可愛い男が梯子に上つて、櫻んぼを摘んでは落すと、下に田舍の可愛い娘が裾をまくり上げて前に擴げては受けてゐる圖です。或は田舍の戀人同志が一緒に座つて、男が女の口へ櫻んぼを入れてやつてゐる圖です。我が日本でも櫻と戀人の纏綿たる浮世繪を描いたのは、初代豐國あたりに澤山ありませう。

櫻んぼを女の乳房にたとへて、獨逸には「胸の櫻んぼ」といふ乳房の異名がありますが、下部エルサスでは男が女に向つて、お前の櫻んぼが欲しいかい、と言ひ乍ら、前を擴げて見せる悪戯があります。

櫻んぼも林檎や梨と同じやうに女の異名に使はれますが、黑い櫻んぼは髮のブリユツトの女、赤いのは金髮の女、と言ひます。「黑い櫻には赤い櫻よりも高く升れる」といふ文句も出來てゐます。情が濃く細い意味でせう。

鈴蘭

女學生諸君に大騒ぎされる通りに、可愛いい純潔な處女の花です。たつた二枚の花瓣なので、「肌着の處女」とも「眞白な裸の女」とも呼ばれます。

桃

その軟い薔薇色の桃の實の恰好は、獨逸でもゾオリンゲン邊では女の何かと比較します。然しこの點では日本の桃太郎の童話の方が遙に露骨です。桃から生れたとは實は女の腰その物ぢやありませんか。

女の胸にたとへる事は、十八世紀頃から行はれて、その美しい色と形から、桃の事を「ヴエヌスの胸」とも呼んだ事があります。

罌粟

けしの細い粒の夥しい實は、希臘時代に既に強い生殖力の表徴に用ひられてゐま

す。その花びらを折つて、強い音がすれば強烈な熱愛を、弱い音がすれば、生ぬるい戀をすると言ひます。その實を酒と一緒に呑むと、女のさはりを止めると言ひます。花びらを煎じて飲むと、流産をすると言ひ、けし粒を靴に入れておくと、子供が出來ないと言ひます。何れも獨逸の迷信です。

巴旦杏

巴旦杏の實を男の大事なもの、乃至男の生殖力の表象に見たのは、古代フリギア人です。フリギアの傳説によると、この時の天の神樣が遺精をして、その漏らした液が地上に垂れると、そこから兩性の人間アグヂスチスが生れたといひます。そこで神樣はこの人間の男の部分を切り取つて土の中に埋めるとそこから生へたのがこの巴旦杏ださうです。ですからその花はアグヂスチスの血を、その實はアグヂスチスの大事なもを意味してゐるのです。河の神サンガリウスの娘ナナは、この實を胸に抱いて姙み、アチスを生んだのであります。

巴旦杏の實が厚い肉の中に大切さうに包まれてゐる處から、汚れなき姙娠といふ意味に使はれて、獨逸の古い文句に「基督のマリアの胎に宿り給ひし樣、恰も傷なき肉の中に包まれし巴旦杏の實の如し」とあります。巴旦杏の實は女の乳をよく出すともいはれ、女の催淫劑に用ひられましたが、十九世のマチオリといふ人の處方にも、甘い巴旦杏は女の力を增すと、あるのが之です。

巴旦杏の實は恰好の上から、今日でも男の大事なものに比較されますが、男が胡桃を割るといふのと、女が巴旦杏を喰べる、といふのは、どちらも同じ色情的諷刺です。從つて「あの男はお前さんの巴旦杏が好きないよ」といふ文句は、お前さんの亭主には似合はないよといふ隱語です。

たんぽぽ

たんぽぽの莖から白い乳が出てくるのを採つて顔を洗ふと、美人にもなるし他人に可哀がられるといふ迷信が獨逸にあります。又この花を煎じて飲むと子宮病に利くといひますが、あの白い乳が莖から出る處から、猥褻な想像もし得れない獨逸の田舍

があります。

四つ葉のクロオバ

日本でも女學生の本に挾まれる葉です。男が摘んで思ふ女の靴に入れておくと、女が追ひかけてくるさうです。女が男の靴に入れると男は浮氣をしません。女が自分の靴に入れて歩いて、初めて逢つた男の名前は、自分の將來の夫と同じ名前ださうです。ヨハネの晩に枕に敷いて寢ると、將來の愛する男を夢に見ると、チロオル地方では言ひます。

菫

戀の神ヰナスの髮は、菫の花の如く黑い、と言ひますが、どちらにしても純潔と處女の花です。用はありません。

さすがにのどかな春の日永です。下らぬ講義に眠くなりました。やめませう。

髭德利

勝俣銓吉郎

近年——過去十五年許この方——和蘭物と稱する西洋趣味の骨董を蒐集することが一部好古家の間に流行しだした。これは西洋の學問をいぢくつた人が相當の年輩になり自分自體が既に一種の骨董になつて來ると極めて自然に起つてくる慾望で從來の日本物や支那趣味の古物丈では何だか物足りないやうな氣がしてこれに少しハイカラな骨董趣味を加味したいといふ所からかうした道樂が顯はれて來るのである。

僕もこの趣味にかぶれてもう永い間西洋に緣のある古物の蒐集をやつて來た。苟くも日本の歐化に關係のあるものなら紙のものであれ金のものであれ土のものであれ手當次第に買集めて一脈その間に通ずる日本歐化史の片影を窺知しようとしてゐるのである。この物の上から得る知識は斷片的ではあるが確實性に富んだもので文獻に依る知識と相俟つて眞相を摑む有力な援助となるのである。

僕の蒐集は主として西洋の影響を受けた日本の古物を漁つてゐるので西洋の古物は鎖國時代に日本に渡來したとかいふ風に特に日本の歷史に緣が深くなつてゐるものでないと手を出さないやうにしてゐる。で近頃外國から將來した骨董は餘り僕の所有慾をそゝらないのである。

この漫話の題目に選んだ髭德利も單に西洋物といふ丈であつたら僕は顧みなかつたかも知れないがこれがその最初の渡來等から言つて幾分日本の歷史に絡まつてゐるので面白く思ふのである。併も日本の歷史で最も興味の深い時代の一つであつて信長秀吉家康の三大英雄を中心にして政治的にも大波瀾があり吉利支丹といふ靈魂征服を旗印にした外來の新威力の活躍もありまた日本の國土に始めて西歐文化の花の咲いた如何にも華やかな歷史の舞臺でもありしたこの時代に幾分關係があるので髭德利はハイカラ骨董蒐集家としてその趣味を滿足せしめるに絕好の古物である。

一體髭德利といふのはどんな物であるか。その名はよく骨董屋の口から聞くのであるが實物は稀に見當る丈である。恐らく骨董屋の中にも名丈で實物を見たことのないものも多いことであらう。

簡短に解說すると髭德利は灰色又は茶色をした硬質陶器の德利で口が稍長く撫肩で腹が張り腰がこけ肩の所に微手稀に二本撚りの把手が附いてゐる。把手と反對の側に髭面が浮出しになつてゐる。外に飾として紋章を腹の一面乃至多面に出してある。一見備前燒かなにかのやうな堅い感じのする陶器である。

大きさは多少の違ひはあらうが大體一番大形のがカロン入で高さ十二吋これをガロニアといふ。次がポットルポットで高さ九吋半四パイント入次がポットで高さ八吋半一クオート入その次が六吋で一パイント入この一番小さいのをリトルポットといふのである。

髭德利は十五六世紀頃に獨逸のコローン市の近くのフレーヘンで初めて燒かれたやうに傳へられてゐる。その製法はストーンウエアと稱する密質堅牢なものでその釉藥がソールトグレーヅといふ窯法でやつてある。このソールトグレーヅを施すには窯が

最高溫度に達し中味が白熱した頃を見計つて窯の上部の間隙から鹽を撒込むので鹽に含まれたソーダが陶器の素地の成分たる珪酸に變化を起しこの二物がソーダとアルミナの珪酸化を誘し密質な極めて堅い釉藥となつて陶器の表面を被ふのである。

フレーヘンの窯は十七世紀頃迄繼續され其製品に英國和蘭スカンデイナヴイア等の諸國に盛んに使用された。その丈夫であるといふことと陶磁器の發達してゐない歐羅巴のことゝて非常に重寶がられたのであつた。

髭徳利は一體何に使用されたものであるといふに日本の白鳥同樣酒注として用ゐられたので十六七世紀頃英國等では酒屋で麥酒を入れてお客に出す容器として無くてならないものであつた。西洋書にこの髭徳利をテーブルの上に置いて友人と酒屋で浩然の氣を養つてゐる氣持の好い場面を描くのを見ることがあるが如何にも落付いた情心をこの風流な器に盛られた一盃の酒が醸出してゐるやうな感じがする。

英國での需要も仲々多いので十六世紀のことであつたが英國の商人ウヰリアムシムソンといふものがエリザベス女王に髭徳利輸入一手引受の請願をしたことがある。これ迄ある外國人が一手に買占め英國への同人の手で輸出されてゐたのであるがこれをシムソンが一手引受の事を許可されると從來より低廉に販賣し一般需要者に滿足を與へ輸入高も激増することゝなるので關税の收入も増し國家財政の興振といふことになるし又行く行くは衰微した英國の都市に髭徳利製造の事業を創設して貧民に職を授け土地繁榮に資することが出來るといふのが請願の趣意であつた。

そこで十七世紀には英國でも髭徳利の製造が始められた。その草分はフルハム窯でこれはジョンドワイトが經營してゐたものである。この窯で十九世紀の中頃迄は引續き製造されてゐたらしい。其後ケント州のアインスフアドやランベス、ブリストル、チエスタフイールド、ブラムプトン等の窯でも髭徳利を製作するやうになつた。

髭徳利といふ名は誰がつけたのであるかは知らぬが獨逸語ではバールトマンと謂ひ英語ではグレービアード又はベラミンと謂つてゐる。このグレービアードに就いて面白い話がある。事は一七七〇年頃英國フアイフ州のデンボッグであつたことである。この地方では三月と十月に半年分の麥酒を造つて家庭用に供するといふ習慣があるが或時バルフアーといふ人の妻君がこの麥酒の容れものに困つてゐる矢先知人のパタスンといふ男が訪れて來た。その智慧を借りやうとして相談するとこのパタスン仲々の剽輕もので「宜しいグレービアードを少し持つて來て上げよう」とばかり早呑込に呑込んで日迄指定した。

さて當日になるとパタスンはその界隈で左利の老人連を十人引率して乘込んで來た。これがグレービアードで御座いと食堂へづらり並べた。バルフアーの妻君も一時はアッと驚いたが洒落と解り一同笑崩れた。結局妻君が不良老人連の爲に饗宴を張ることになり呑助爺等は腹一杯ビールを振舞はれ大滿悦の體でその場を引取つた。罪のない話だ。暢んびりした英國田園生活が眼に見えるやうだ。

ベラミンに就ては言ひたいことも大分ある。ベラミンといふのはロベルト・ベラルミノと稱する伊太利のジエズイト派の長老で

どうしてこんな人の名を髭德利につけるやうになつたかといふにその由來はかうである。

新舊基督教徒の舌戰の盛んな頃である。新教徒の根據地であつた獨逸和蘭地方へベラミンが宣傳闘士として羅馬から派遣され革新派に對峙することになつた。ベラミンは舌の勇士として鳴響いてゐた學德共に高い教徒であつてその三寸不爛の舌には犯し難い威力があつた。

辯論では敵し難いと見て取つた新教徒等は少しく作戰計畫を變へて德利宣傳といふのをやり出した。即ち新教徒の地盤から盛んに造り出す不燒の酒注へ持つて行つてベラミンの髭面を出して敵手を嘲笑の槍玉に上げた。酒注の形が短軀肥滿のベラミンの姿に似通ひ浮出した髭面はどこまでもいかめしく長老の面影を彷彿たらしめた。これで新教徒は手强い教敵の氣勢を挫き得たやうに考へ大に得意であつたのである。その髭は當時「お寺髭」(キアシドラルビヤード)と稱された型で角刈である。ベラミンはガリレオの地動說事件にも關係して居り他の長老よりはこの眞理の忠僕に同情を持つてゐたやうにも思はれた。また羅馬に遊學してゐた日本留學生の元祖トマス荒木とも親しく交つてゐたといふことが文獻に載つてゐる。

人面を裝飾として酒注に出すことは決して新教徒の新案ではなくつてこの手法は十四十五十六世紀頃の流行であつたので偶ま教派の闘爭に利用されたのであつた。

髭德利の腹にある紋様は和蘭又は獨逸の都市の紋章だといふことであるが中には大分崩れて模様化せられたものもあるらしい。

髭德利にはどうかすると年號を記したのがあるがこれは必ずしも製作の年號を示してゐない。といふのはもともと型で造つたものであるから初めの型に刻んだ年號を數年に亘つて使つたからである。

日本ではこの髭德利を公開の博物館等で見ることは出來ない。個人の蒐集に就て見るより外に實物に寓目することは不可能である。髭德利蒐集家には大阪に岡田氏山田氏あり京都に杉浦氏あり名古屋に鈴木氏がある。東京方面では品川の山村氏他數氏の小コレクションがあるのみである。僕も大地震の前日淺草で買つたのを珍藏してゐる。日本に於ける重なる蒐集は親しく鑑賞するの機會を得たが岡田氏の分は未だ見ないのである。これ等の蒐集に就いても言ふべきことが多々あるのであるが今は控へる。

最後に髭德利の日本の寫しと値段に就て一言申添る。和製の髭德利は古くは讃岐と銘を打て高松の窯で燒いた道八の寫しがあり。新らしいのでは窯不明の灰白色のがある。先年大阪のエジプトやで伏見道八の髭德利といふのを見た。これには底に法螺貝の押印があつた。

値段は蒐集家に依り色々である。早くから集めたものは壹圓五十錢位から振出したのもあるが近年になつて始めたものは一個に何百圓といふ高價を拂つてゐる。倫敦邊では改築工事中土中から發掘したものが大分あるので普通のは十志から十二志位のものもあるし腹に紋章があるのは五六磅口に銀の蓋のあるのは刻印が明瞭であると大分高價に取引されてゐるさうである。併しこの相場は十年前のことであるから今は大分相場も上つてゐることであらう。

(昭和三、一一)

本草綱目の話

白井光太郎

本草綱目は明の萬曆中湖北省黃州府蘄州の人李時珍東璧の撰する所で、古本草に引用せる二百三十五家の他に新に醫書及經史百家の載籍七百拾部を參考して藥物に關する前代の智識を網羅し、之を集大成せるものにして、最も浩澣完備の書と稱せられ、三百餘年後の今日尙其聲價を失はず、學者間に尊重せらるゝものなり。本草綱目出現以前には、宋の唐愼微著はす所の經史證類備急本草最も大備の書と稱せらる。此書は嘉祐本書及圖經を合して一部の書と成し、此に古今の單方經史百家の書藥物に關する者を引用附益し、總數千七百十種を記載し、三十二卷とするものなり。時珍の本草綱目には前代本草に記載の藥品を删定し、藥品六百二十八種を增加し、更に三百七十四種の藥品を增加し、總數千八百九十二種を記載し五十二卷と成し、釋名、集解、修治、氣味、主治、發明、附方の七項に就て解說を施せり。時珍が此書を作る、嘉靖壬子（我天文二十一年）に初めて稿を起こし、編纂の勞を積む事二十七年にして萬曆戊寅（我天正六年）に至り竣功せり。其後拾三年を經て萬曆庚寅に至り、王正貞の序を加へて之を出版せり。本草綱目金陵版是なり。之を本草綱目の初版とす。萬曆癸卯（我慶長八年）江西省廳に於て刊行せるものを江西版本草綱目と曰ふ。是其第二版なり。初版と第二版と異るは初版には序は唯王正貞の序のみにて、圖は上下二卷として序と共に之を首卷とし、序の次に輯書氏名を列記し、圖卷の初にも畫者の氏名校閱者氏名を記せるの事なり。（寫眞第一、第二圖參照）第二版には卷首に王正貞の序の外に江西按察使張鼎思及江西巡撫夏良心の序、李時珍の男李建元の進本草綱目疏を載せ、輯書氏名無く。圖は之を別册とせずして各卷の首に置けり、又時珍の著奇經八脈附を刻せり、同年京版本草綱目刻成る。此書早川佐七氏所藏す。今之を初版及江西版に比較するを得ざるを遺憾とす。次に萬曆丙午刊本あり。次に崇禎庚辰錢蔚起重刻本あり。此書初版及江西版の畫圖の粗惡なるを慨み新に繪畫を作成し之に代ゆ。次に順治十五年館文擧の序ある重刻本出づ。以下重刻多く枚擧に遑あらず。

本草綱目の初版、江西版、京版崇禎版共に今時支那に於て之を求むるも得難く、順治版以後の者は間々坊間に出づといふ。近時歐米諸國の圖書館に於て初版を獲んと欲し千金を賭して百方探求すれども得る能はず、大に苦心す。此書の初版は歐米諸國にては僅に伯林王立圖書館に一本を藏するに過ぎす。是二百餘年前蘭人（Georg Eberhard Rumpf）が支那に於て購求せるものなりといふ。我邦には內閣文庫に一部あり、但五十一卷一册を缺く。慶長十九年曲直瀨玄朔（東井）手記を存せり。又理學博士伊藤篤太郎氏一部を藏し、京都御大典紀念植物園大森文庫亦一部を藏す。但第十九卷一本を缺けり。

和刻の本草綱目亦數本あり。寬永十四年初春吉日、京都魚屋町通信濃町野田彌次右衞門江西本草綱目を飜刻す。承應二年九月、版元野田彌次右衞門圖畫の粗惡なるを慨み、崇禎版本草綱目の圖を取り之を前版に挿入す。寬文十二年校正本草綱目刻成る。

三十九册に分綴す。此書は貝原益軒之を校正し、傍訓本草綱目品及附錄の一卷を添加し、且每卷末へ本草和名數頁を附加せり。正德四年稻若水崇禎版を刻せるものなり。此書は唐新校正本草綱目五十三卷刻成る。正德四年稻若水本屋濟兵衞萬屋作右衞門、稻生若水に請ひて字を正し訛を訂すの本にして、草部の茬草、果部の沒藜離の如き、舊本俱に脫漏するを今之を補入せり。之を若水本と稱す。大體江西本草の體裁に從ひ圖は崇禎版に從へり。此他に篆字本本草綱目あり、出版年月詳ならざれども、題簽を篆字を以て記するが故に此稱あり。

本草綱目を全譯せるもの古來未だ之を試みし者なし。然し今時本草講究の風潮起らんとするを見て書肆博文館其全譯を出すの企あり。本草綱目の品物を解釋せる書に本草綱目啓蒙四十八卷あり。小野蘭山の講義を文章體に筆記せるものなり。文化三年刻成る之を談話體に筆記せるものは本草記聞あり。蘭山講說の全豹を窺ふには記聞却へて啓蒙に優れり。文政十二年本草綱目啓蒙再刻成る。弘化元年梯南洋本草綱目啓蒙を增補し、活字を以て製版し、重修本草綱目啓蒙二十七册となし刊行す。弘化四年泉州岸和田侯本草綱目の刻本乏しきを患へ、侍醫井口望光をして訂正せしめ、藩費を以て之を刻す。重訂本草綱目啓蒙是なり。此書は今度古典全集本として刊行せらるといふ。

玄關の怪物

田邊尙雄

私の宅へ訪問される方の多くは、先づ玄關に置いてある巨大なる木像の動物を不思議そうに眺めて、之れは何であるかと問を發せらるるので、私の家内中の者は子供に至る迄、恰かも日光廟の案內者の如くに雄辯に其の說明に馴らされて居る。然し中には又「泥棒の要心に犬の像が置いてあるのですか」と言つたり、「大きな鼠がありますな」と感心したりされる方もある。そこで其の說明を聞いて先づ第一に、「それは臥したる虎である」といふことに驚かされるが、次で「之れは樂器である」といふに至つて再び驚かされる。而かも之れが「今より凡そ三千年の昔、周代に於ける古樂器で、後に春秋の世に至つて至聖孔子が禮樂として最も尊敬措く能はなかつたものである」と聞いて三たび驚かされるのである。然し此の樂器の名が敔といふものであるといふことは、一二回繰返して質問されても之を記憶して歸られる人は少ないようである。

然らば斯樣な三千年以前の古樂器が何うして私の手に入つたのであるかといふことに就ては玆に一寸面白い揷話がある。實は之れは今から三千年以前に製作されたものではない。其の製作は今より五百年の昔になる。そこで先づ其の製作のことを初めに一言しなければならない。

周の古樂は春秋の時既に殆ど滅びて居たことは、孔子が屢々之を嘆いたことでも判るが、春秋戰國の頃までは兎に角遺存して居た。然し秦を經て漢に至り西域の音樂が多く輸入され、之等の古樂は殆んど湮滅してしまつた。然るに南北朝に至り北魏に於て盛んに周の古樂の復興を試みたが、それは六朝を經て唐に至つて大成された。實に唐の音樂の古樂の中には周の古樂の復活要素が多く含まれて居る。然し惜しいかな支

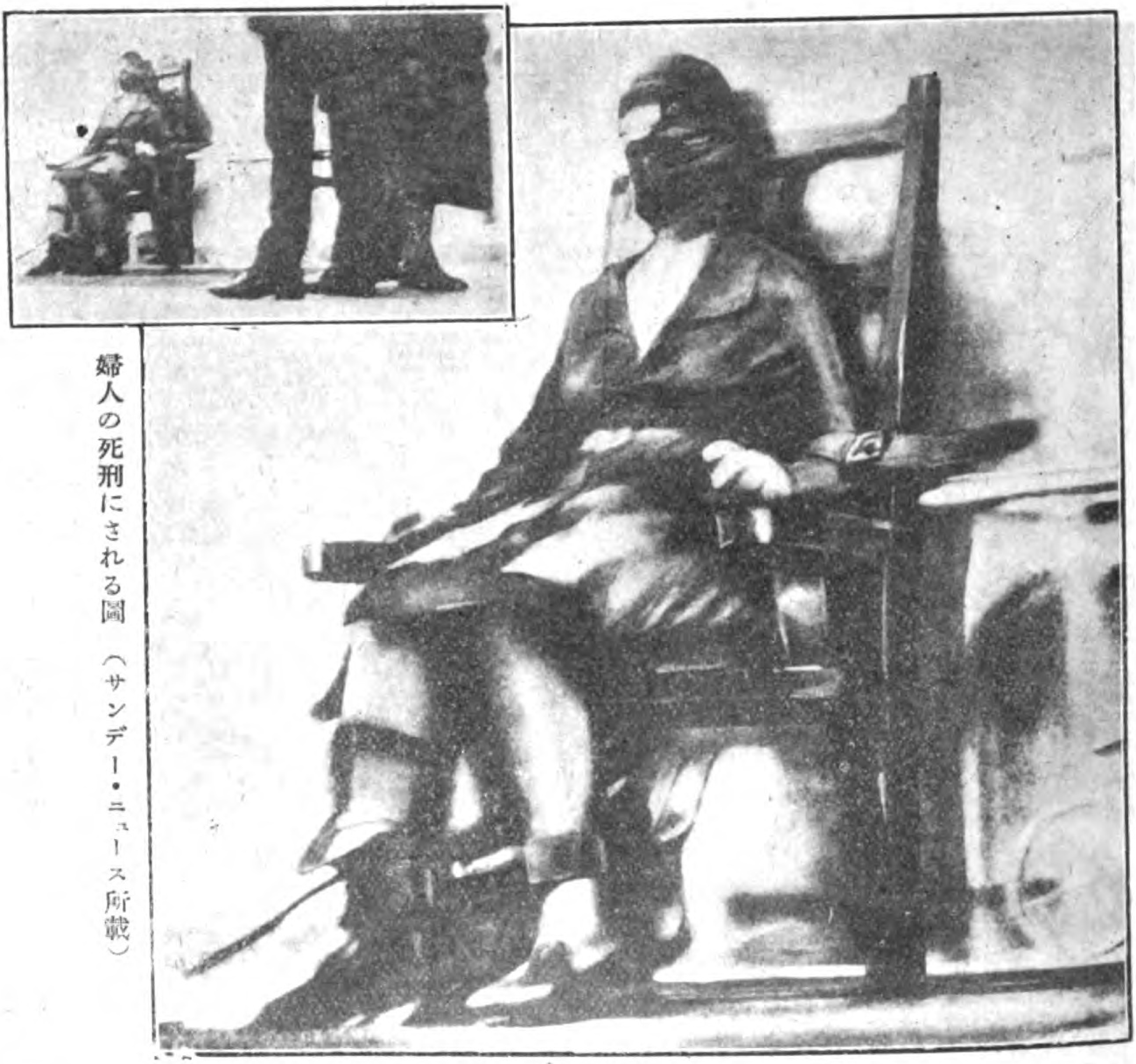
那に於ては唐代より近代を經て遂に此の古樂を失つてしまつた。今日支那の内地到る處を歩いて孔子廟を訪ねて見ても、之等の古樂は全く滅亡してしまつて之を見ることを得ない。唯殆んど笑ふに堪へたる玩具の樣な古樂器らしいものを作り、之に古樂と稱して實は似而非なる近代俗樂を不完全に奏して居るに過ぎない。此の樂器の中には即ち虎の伏したる敔もあるが、それは眞に古代樂器とは似てもつかない玩具である。臺南の聖廟に於ける樂器の如きは同じく此の玩具に過ぎない。斯かる樂器は多くは淸朝の乾隆帝頃に新作されたものである。然るに朝鮮に於ては高麗朝頃より此の古樂を輸入して之を尊重して傳へ、殊に李朝の初に於て有名なる朴堧といふ人は畢生の大事業として周の古樂の復活に力を盡し、遂に唐朝に於ける制度に從つて此の復活を完成した。之は今から五百年の昔である。其の時に古周の型を移して作つたのが、即ち今私の宅にある物である。

之れは李朝五百年間、朝鮮王宮に於ける神樂に用ひられて居た。然るに日韓併合の際に何物かの手に移つて十箇年の時効期限潜伏して居たものと見える。併合後滿十ケ年を過ぎた時に突然と京城の某古物店頭に出現した。然し當時誰れも之を樂器と知る者がなく、單に一個の骨董品と見做されたのである。私は其以前に李王家の雅樂を調査研究をした爲に此話を聞くと共に直ちにそれは古樂器であることを知つて、先づ第一にそれが外國人の手に買上げられて海外に持ち出されることを恐れて、直ちに電信爲替で送金して之を私の手許に引取つたのである。

之れが樂器であるといふことを聞かれる人は直ちに「何うして之を鳴らすか」と不思議に思はれる。之れには別に竹の籈(ササラ)があつて、それで虎の背上にある二十七片のギザギザを擦(コス)るのである。其音は單にシューシューといふに過ぎない。詩經及び禮記にも書いてある通り、古代の雅樂は柷を以て始め敔を以て終るとあるが、即ち此の敔は大合樂を終る合圖に用ひるのである。

一體此の古樂の大合奏は極めて强大な音を發する數十種の樂器を用ひ、全奏合員は百餘人乃至數百人の多數に上るので、其の響きは實に大きい。それ故其の中で皆に聞える樣に合圖をすることには中々の困難である。然し例へば今多くの人が喧しく喋いて居る時に之をシーシーと制すれば其聲はよく皆に聞えると同じことで、此の虎の背を籈(ササラ)で擦る音丈けはよく透つて聞えるのである。

尙ほ此の古代周の樂器の中に今日極めて珍らしいものは土製の球狀の笛で、壎(ケン)といふものである。我國古代の天磐笛も恐らく此の一種であつたらうと思はれる。然し支那のものは中々進歩して居て、上方に吹口がある外に、側面に五個又は七個の側孔があつて、之を兩手の指で閉ぢたり開いたりして奏するのである。之は私が李王家の雅樂師の一人からもらつたのである。



婦人の死刑にされる圖（サンデー・ニユース所載）

電氣椅子

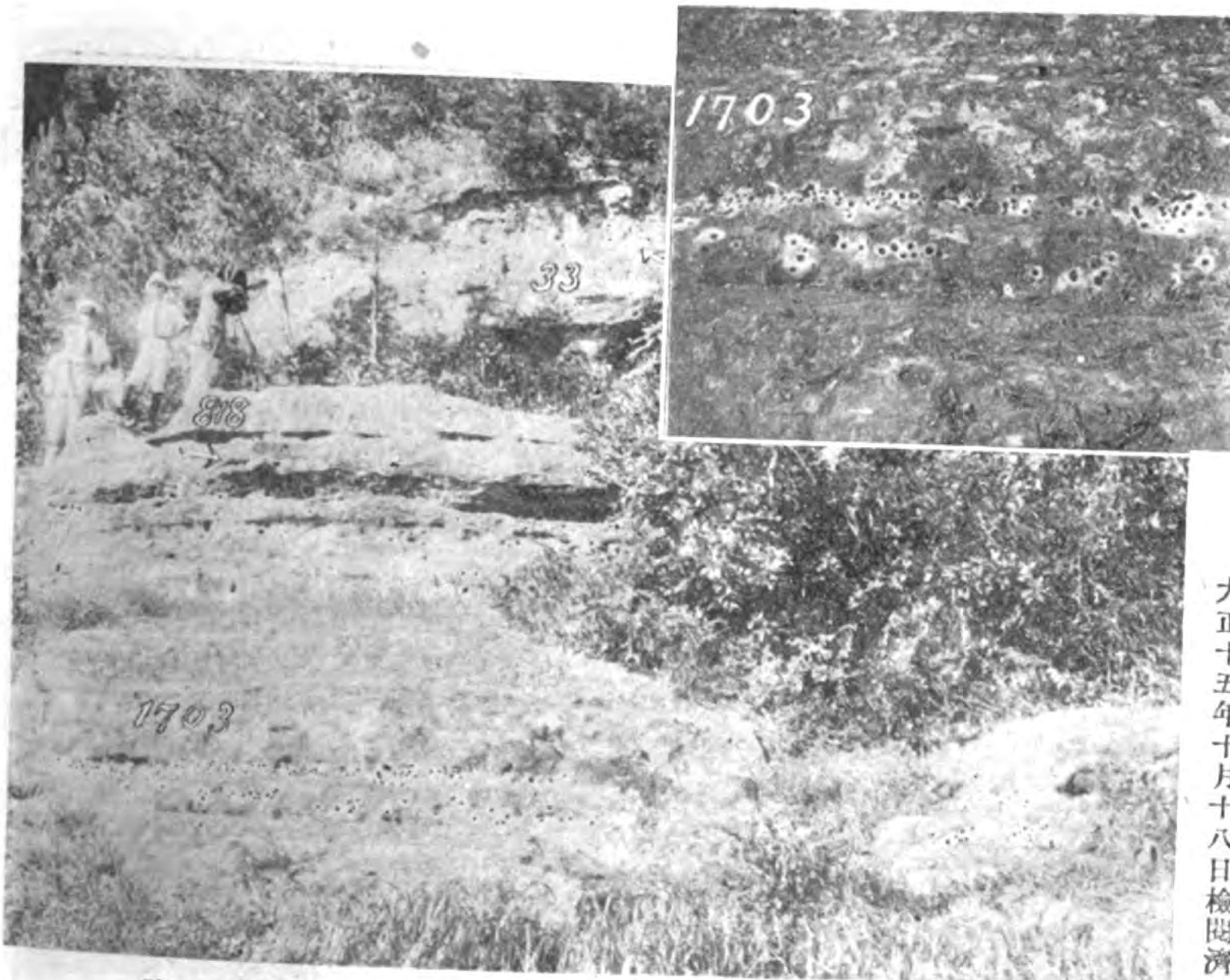
桝居伍六

最近、米國シン・シン刑務所の「電氣椅子」で死刑を執行せられたルス・スナイダー夫人が將に一萬ボルトの電流を彼女の頭部及び右の足よりかけられんとする瞬間に於けるテレ・フオトが紐育のサンデー・ニユースに掲載せられた。圖は、それを轉載したものである。左上圖は原畫であつて、二人の足は同刑務所々長及び婦人看守のものであるが、後者の足の方向は、この慘狀を見るに忍びず横を向いてゐる證據である。

スナイダー夫人は、姦夫ジユデ・グレーと共謀して彼女の夫を先づ九萬七千弗の生命保險に加入せしめた後鐵棒で毆り殺した。元來、米國では婦人は殺人罪を犯しても極刑に處せられることは極めて稀であるが、右の事件では殺し方が餘りに殘酷であるといふので、死刑の宣告を受けたのであつた。

電氣死刑を行ふ場合には、圖の如く、囚人の頭にヘルメツトを冠らせ、片足に電流を通ずるのであるが、兩腕及び兩足は電氣椅子に革帶で固く縛りつけて置く。日本では、電氣椅子と云へば電氣あんまや電氣こたつ位ひにしか考へないであらうが、米國で云ふ電氣椅子は死の椅子である。

附記　死刑執行の寫眞は米國でも勿論撮影は禁じられてゐるが、サンデー・ニユース紙は此の寫眞を次のごとき方法で撮つた。即ち、この死刑執行に立會つた同誌記者は、密かに小型寫眞器を彼の足首に結びつけて置いて、死刑執行の一刹那、そのズボンの裾を引上げて撮影したと傳へられてゐる。同紙は二日に亘り同じ寫眞を第一面に大きく出したゝめに大にセンセーシヨンを惹き起し、日ならずして廿八萬五千の讀者の增加をみた由。



（第二圖） 擴大せる穴

（第一圖） 相模三浦三崎諸磯灣字白洲に於ける穿孔貝（日不見貝）の跡

大地震に伴つた土地の變動を示す天然記念物

今村明恒

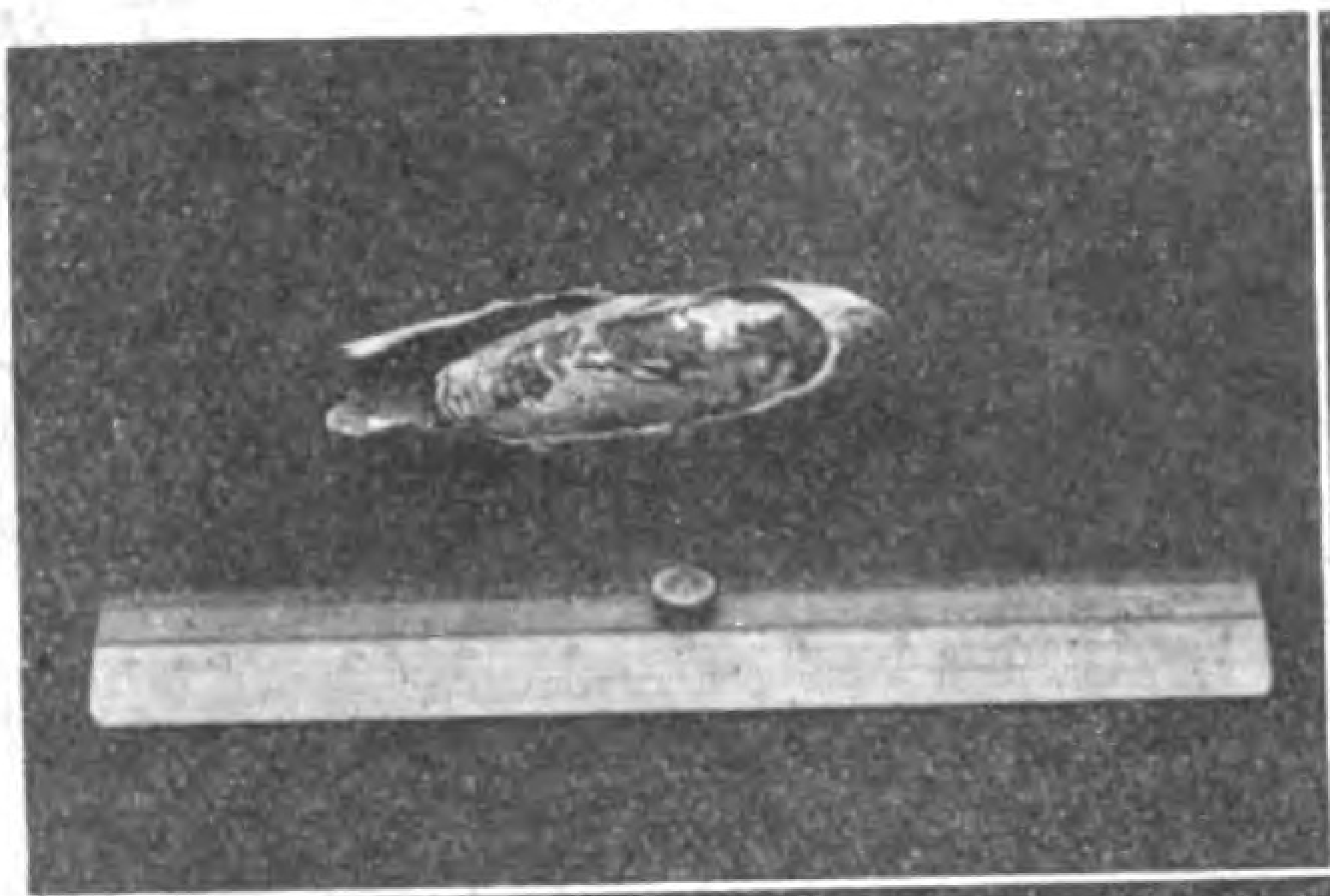
去る大正十二年九月一日の關東大地震に伴へる土地の變動に就いて東京帝國大學教授今村明恒博士が關東一帶に亘つて大調査を行ひ、其の結果の一として三浦三崎諸磯灣字白州（現在海岸より二町位離れた丘）に於て、以前に穿孔貝の棲息した遺跡を發見した。第一圖は其の場所及び貝の穿てる穴の配置狀況、第二圖は同じく其詳細を示すものである。總て此の海岸に見出される所の穿孔貝は第三圖乃至第五圖に示す樣な貝で、三崎地方では之を日不見貝（ヒミズ貝）と云ひ、訛つてシミズ貝と稱へて居る。貝は自分の生活をする住所として岩壁に自ら穴を穿ち、成長するに從つて其の穴を次第に奥に擴げて行つて終生同じ穴から他へ轉ずる事がないのである。此の貝は平均海水面の直下近くに棲息するものであるから大地震等に依つて、陸地が大隆起をした際に突然夫れ等の穴が空中に暴露されるが爲めに今迄棲息して居た貝は全部死滅し、そうして遺跡として岩壁に穴の水平行列を示す事第一圖及び第二圖に示す通りである。其處で現在棲息する日不見貝の穴と夫れ以前の汀線に屬する夫れ等の穴の深さとを測る事に依つて其の岩壁の磨滅の割合を測定し、それより遡つて計算すれば夫れ等の穴の隆起した年代を知る事が出來る譯である。第一圖に示す最下段の一列の穴が元祿十六年の大地震（西暦一七〇三年）に相當するものであるが、更に第一圖中段の一列の穴が弘仁九年の大地震（西暦八一八年）に關係したものである事が推定される。隨つて第一圖上段の一列の穴は西暦三十三年に空中に現はれたものと想像される事になる。之に依つて關東地方に於ては最近二千年の間に四回程斯樣な大規模の地震が繰返されたことが認められる。

此の種の穿孔貝は我が國以外にも分布されて居る。第六圖は今村明恒博士が昨年渡歐の際に撮影した有名な伊太利セラピスの殿堂であつて、之は以前に陸上に建築されたのが土地が沈下した爲めに一旦水中に沒した。然るに後年其の土地が反對に隆起した爲めに再び水上に現はれたので、其の柱の所々には第一圖に示す樣な穿孔貝に依つて穿たれた數列の穴が認められる。（神永幸三解說）

穿孔貝の殼と第二外殼



（第三圖）

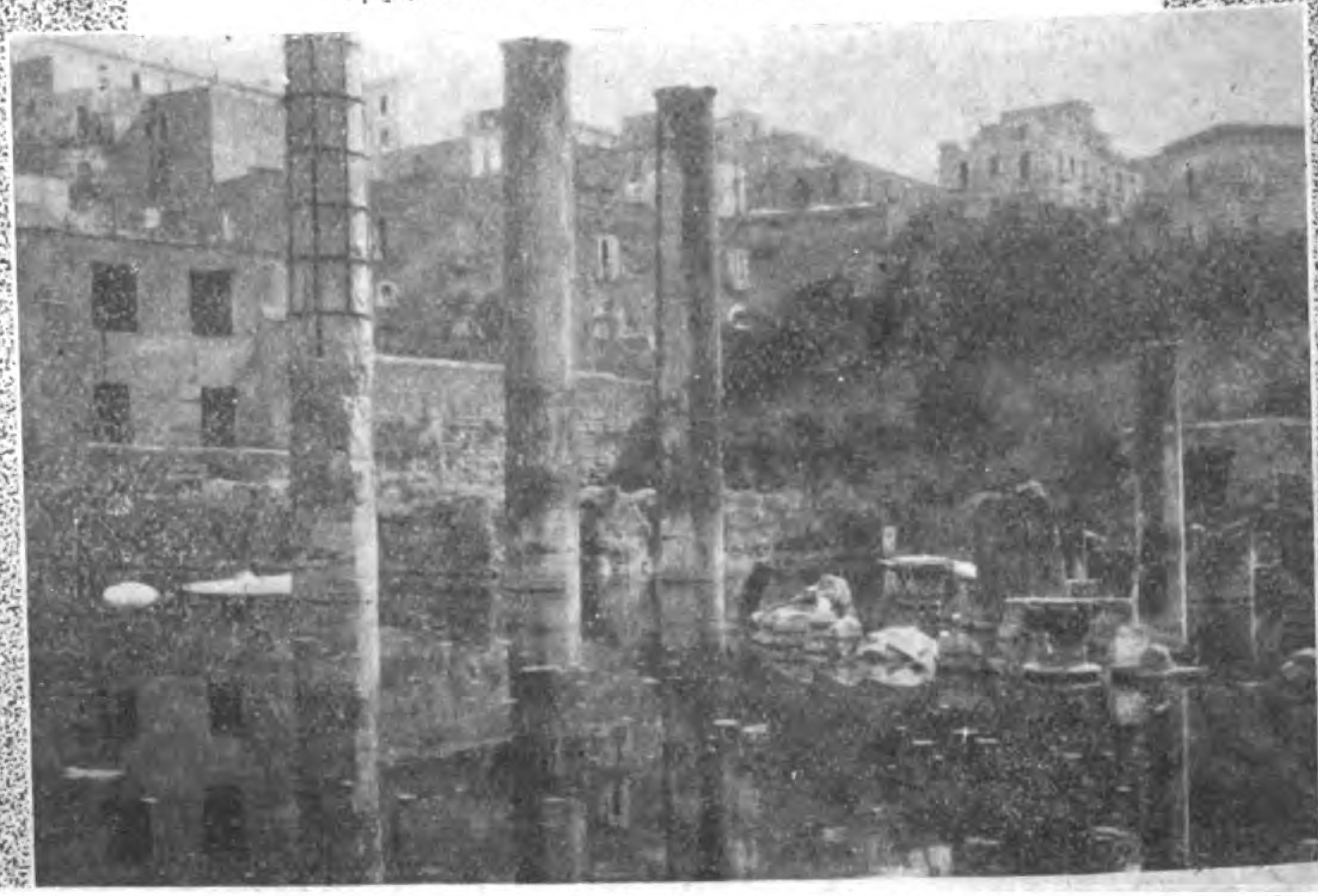


（第四圖）



（第五圖）岩壁に附着せる第二外殼及外殼の拔取られたる穴（圖中の尺は十糎）

今村明恒氏撮影



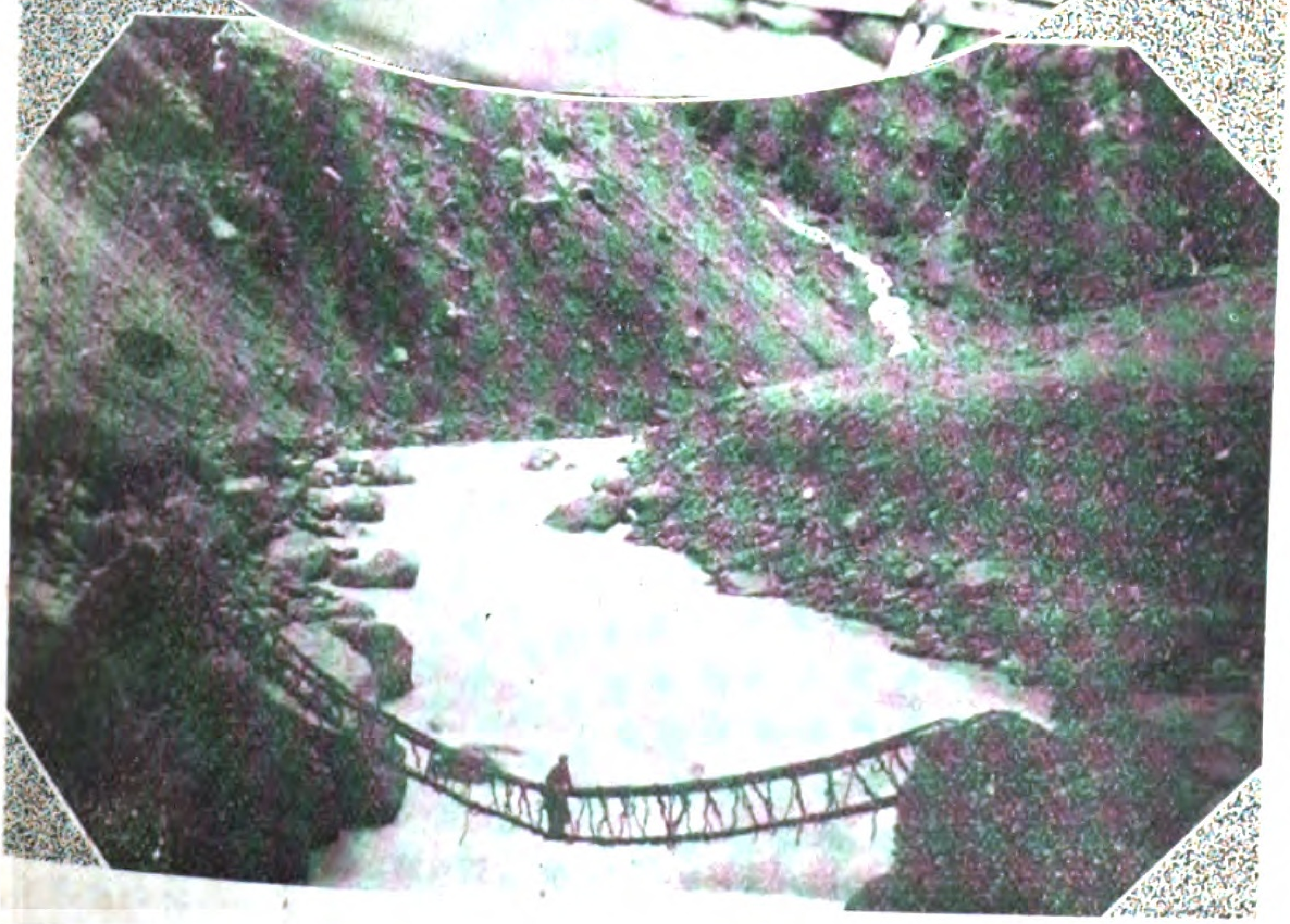
（第六圖）伊太利セラピスの殿堂

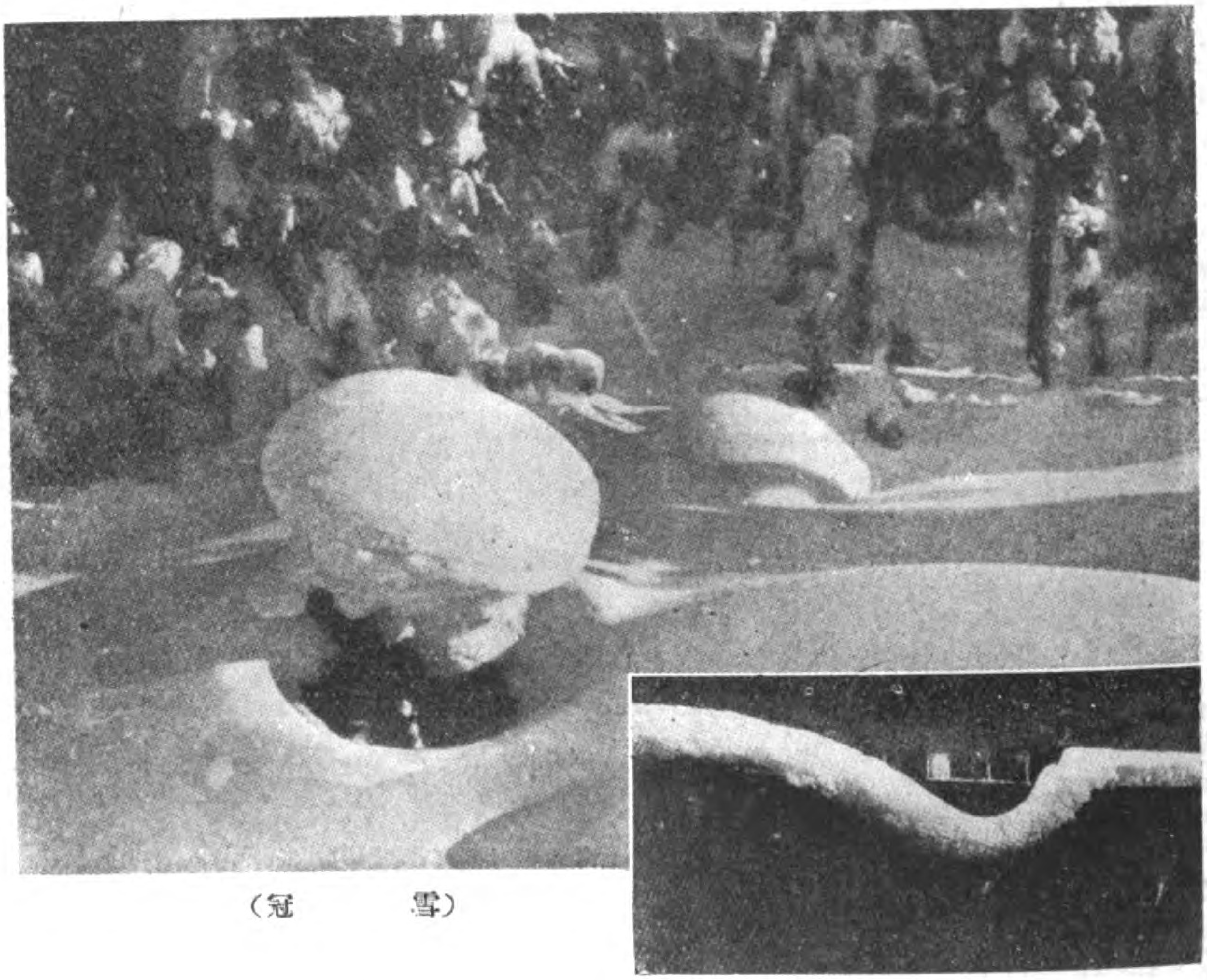
カシュミル國の筏と橋

伊東忠太

印度の北端ヒマラヤの本脈支脈の間に介在するカシュミル國の文物には今なほ太古の如きものが少くない。玆に見る珍奇なる筏はムスクスと稱し、豚の皮を丸剝ぎにして袋を作り、その中に空氣を充塡したもの十數個を連結し、その上に乘て谿流を渡るのである。下の繩橋は、靈峯アマルナートに通ふ路筋に當る谿流に架けたもので、蔦葛の類を以て作つた綱を兩岸の岩に結びつけ、危くもその上を渡るのである。卽ちこれ眞に命の綱である。







（雪　　冠）

（雪　紐）

雪冠と雪紐

國富信一

雪には乾いた雪と粘り氣のある雪とがあります。乾いた雪と云ふのは、非常に氣溫が低い時の雪で、雪が一つ一つの結晶體のまゝで降つて來るものです。從つて降つて居るときは粉の樣に微細であり、積つてもサラ〳〵として居て、スキーには好適ですが雪投げをするには適しません。

之れに反して粘り氣のある雪と云ふのは暖かい時に降る雪で、結晶がもう解けかゝつて居ますから、お互に密着し易く大きな雪片となつて降ります。斯うした雪が積ると、積つた後でも雪片同志が密着して居まして仲々面白い形を作ります。例へばこんな雪が切株の樣なものへ積りますと、頭上に積つたものは互に密着して居ますから崩れ落ちずに松茸の樣な形になります。之れを雪冠と名付けて居ます。

又夜分塀の上へ積つたものなどで、翌朝好晴の日に照らされますと塀に接して居る底部が先づ融け出し、遂には自身の重さで塀からずれ落ちます。然し此の時雪片同志密着して居ますと崩れ落ちることなく、紐の樣に垂れ下ります。之れを雪紐と云ひます。共に春先か　暖國の雪かで無くば見られぬもので珍らしい現象です。



三千年前(周代)の古樂器「キョ」

同じく「ケン」といふ古樂器

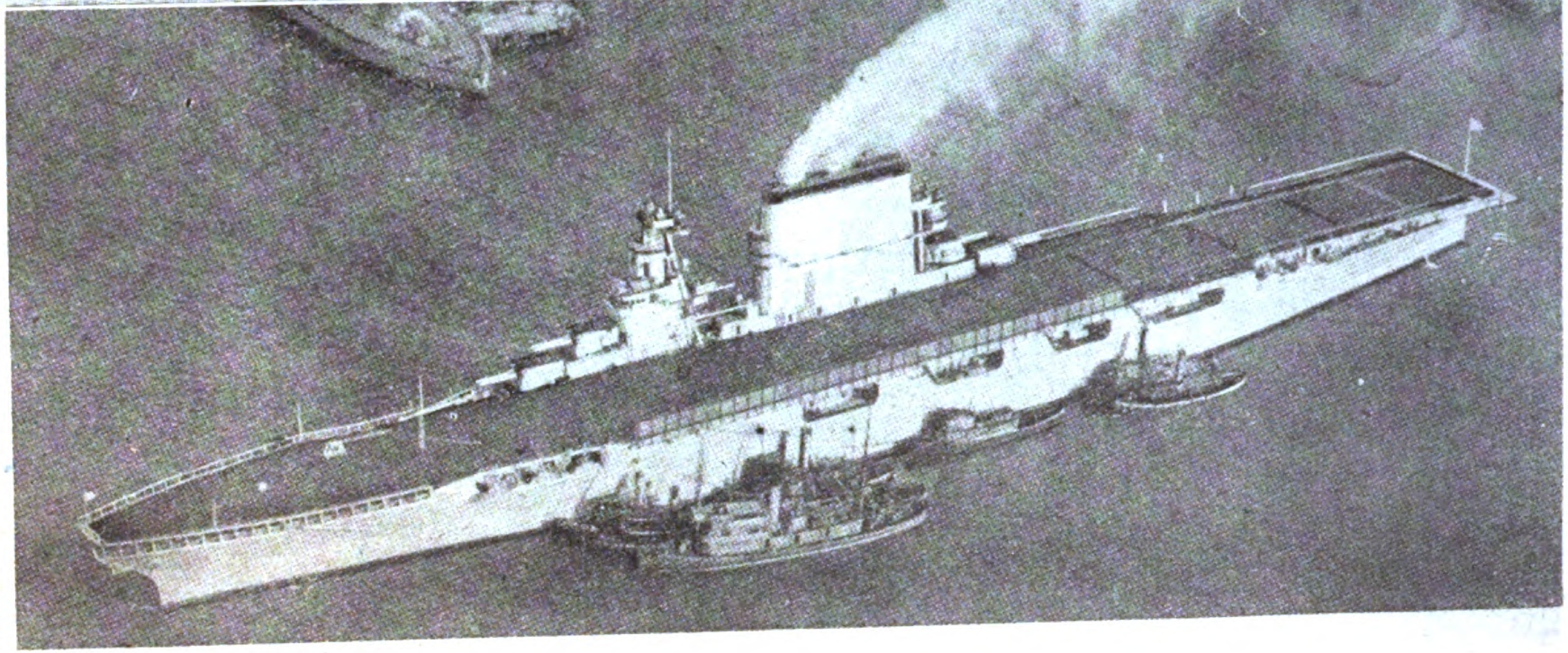
×印は「ケン」を吹奏するところ

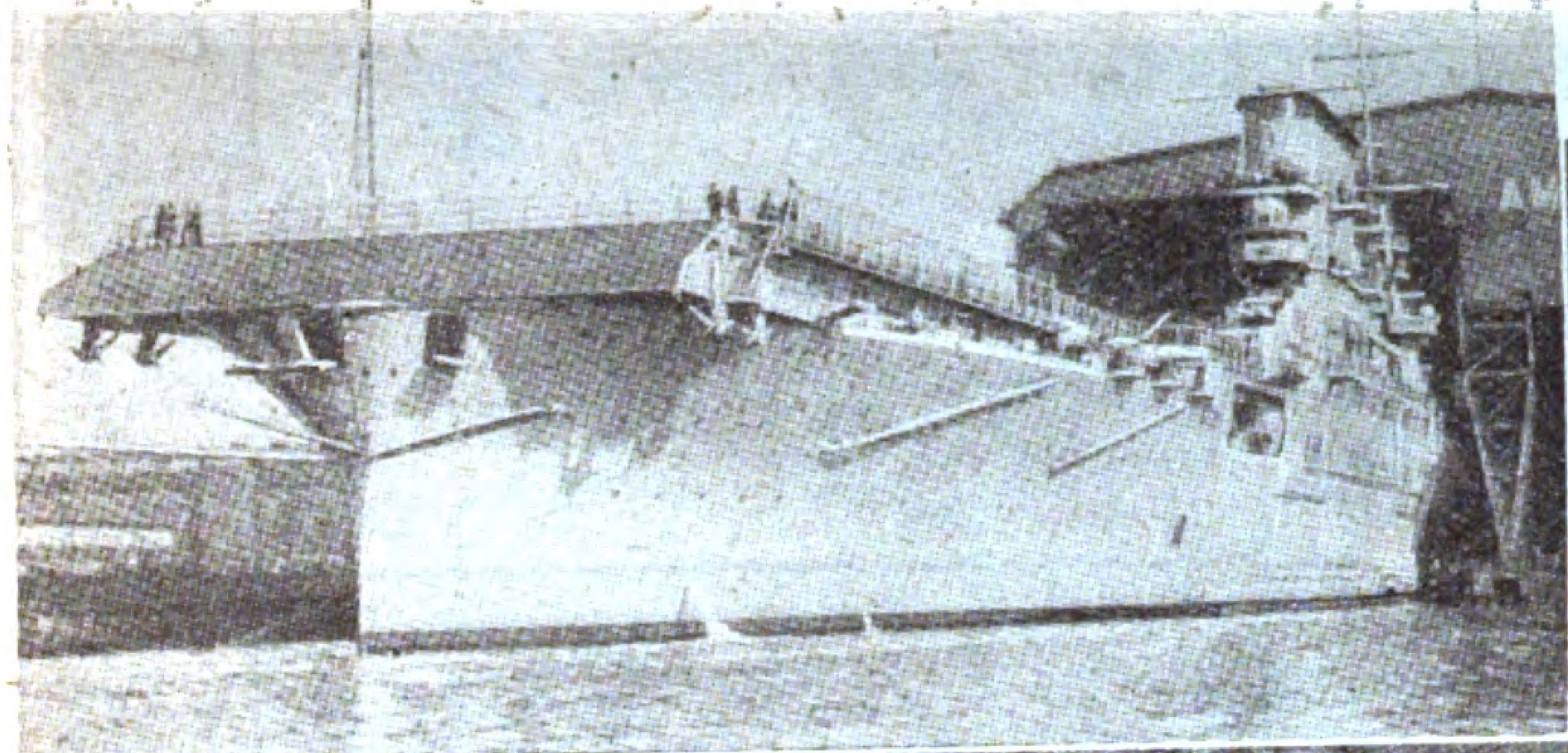
本號八ポイント欄「玄關の怪物」(田邊尚雄)參照

世界第一の航空母艦

記者

米國では華府會議の協約に基いて二隻の航空母艦を建造中であつたが、最近峻成した。圖は其の一である「サラトガ」號の全姿である。排水量三萬三千噸。八十八臺の飛行機、二千三十四人の乘組員を擁して、戰鬪艦をも兼ねてゐる。建造費約四千五百萬弗、凡ゆる點で「最新式」と「世界一」とを完備してゐる、第二圖は同艦尾、圖に見える四の錨によつて應急滑走場が出來る。



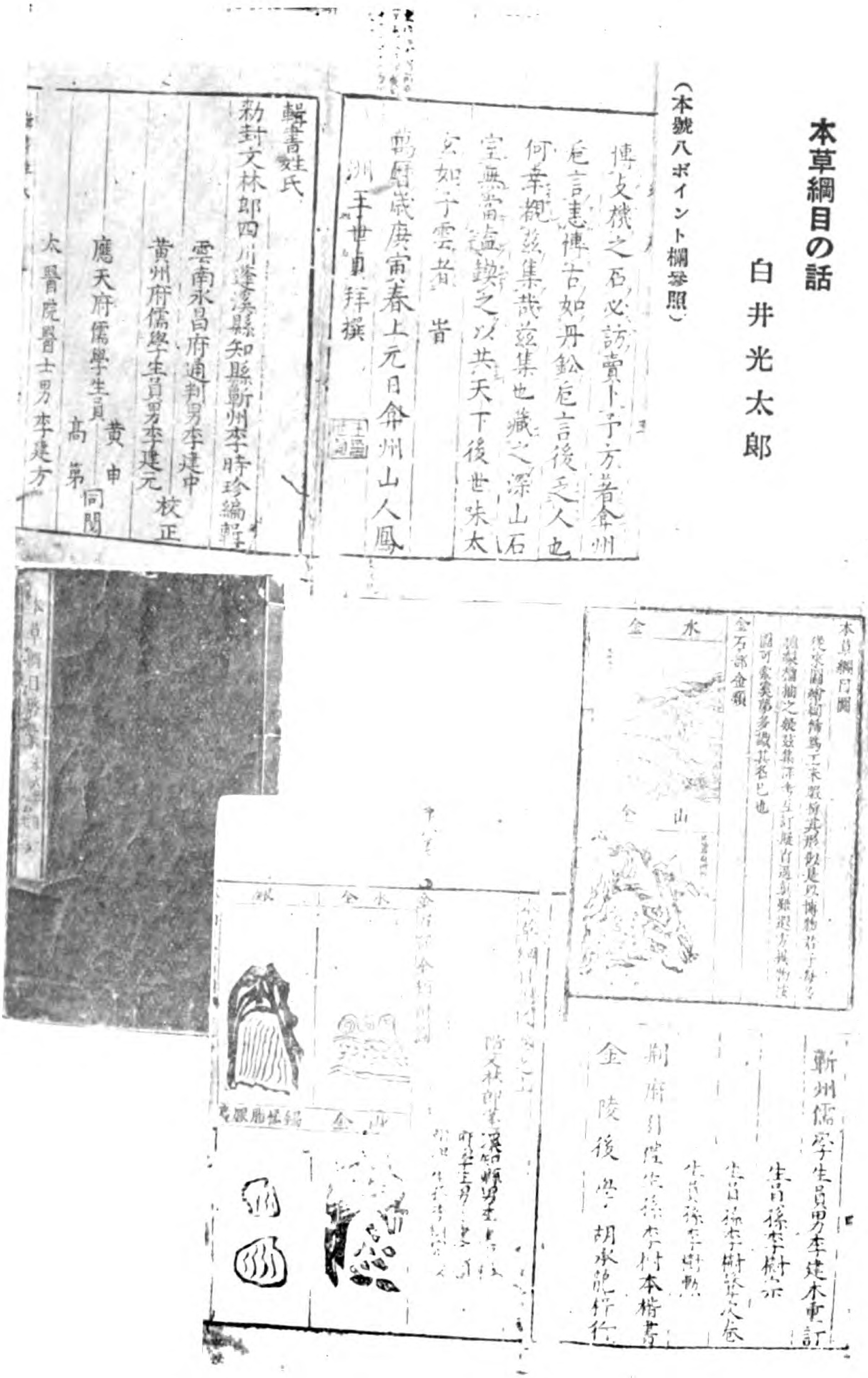


（第二圖）

本草綱目の話

白井光太郎

（本號八ポイント欄參照）


博文機之石、必訪賣卜予方著弇州巵言恚博古如丹鉛巵言後乏人也何幸覩茲集哉茲集也藏之深山石室無當盍鍥之以共天下後世味太玄如子雲者 旹

萬曆歲庚寅春上元日弇州山人鳳洲王世貞拜撰

輯書姓氏

勅封文林郎四川蓬溪縣知縣蘄州李時珍編輯

雲南永昌府通判男李建中

黃州府儒學生員男李建元 校正

應天府儒學生員 黃申 高第 同閱

太醫院醫士男李建方

蘄州儒學生員男李建木重訂

金陵後學胡承龍梓行

映畫時評

小山内薫
久米正雄
室生犀星

兒童と映畫

いつも新聞の宣傳記事になつては、宣傳記事になつただけで終つてしまふ兒童と映畫の問題が、最近になつて市の教育局から又新しく提出された。

仄聞するところ依れば、內務、文部、警視廳は勿論、興行者側からも代表者を招き、この二十日頃に懇談會を開いて、具體案を作るさうであるが、今度こそは宣傳だけでなく、何とか實行の目鼻がつけて貰ひたいものである。

十二歲以下の兒童にとつて、映畫が——殊に日本製映畫が——精神的にも肉體的にも有害無益であることは、もう問題ではなくなつた。

市の教育局でも、文部省でも、その方面の調査は相當出來てゐる筈である。先づその調査報告を掲げて、一般家庭に映畫が如何に兒童の視力を損傷し、如何に兒童の注意力記憶力を減退させ、如何に遊戯の上に恐ろしい影響を及ぼすかを、數字的に徹底させること、これが第一の急務である。

この徹底がないから、いつも問題になりかけて、つひその儘になつてしまふのである。教育家でも、一般家庭でも、興行者側でも（興行者も家庭は持つてゐる）、映畫の兒童に及ぼす害毒を、もつとはつきり知つたら、到底この儘にしては置けない筈である。「さうは言ふが、然程のことはあるまい。」これが一般の考へである。この一般的な考へが將來の國民を平氣でバチルスの内に置くのである。

やむを得ずんば法規によつて十二歲以下の兒童が映畫常設館に入ることを禁ずべきであるが、かういふ問題は、法規の束縛

を受けるまでもなく、兒童を持つ家庭が一齊に自覺すれば、直ぐと解決のつく問題である。

　要するに、まだその恐ろしさがはつきりと分からないでゐるのである。それをはつきりと分からせること、これが何よりも當局のしなければならないことである。

　いくら自分の商賣が酒屋でも、六つや七つの自分の子に酒を飲ませはしまい。映畫の興行者だつて、自分に子供がある以上、映畫が子供の害になるといふことがはつきり分かれば、法規を待たずして、常設館の扉を十二歳以下の兒童に閉づるだらう。

　小學校にも考へて貰はなければならない。一體、日本の小學校は餘りにも情操教育をおろそかにしてゐる。兒童の學校生活は餘りにも無味乾燥である。それ故、兒童は學校で得られない生活の潤ひを他に求める。それが映畫の見物となり、劍劇の愛好となり、終に流血的遊戯となるのである。

　好い指導者の下に學校劇をもつと盛にするのも一策である。學校で日をきめて兒童に向く好い映畫を、視力注意力などを弱らせない程度の時間見せるのも一策である。（映畫を教室で見せることは、既に一二の小學校で實行せられてゐるが、映寫時間についての科學的な考慮が足りないやうである。それから、興行者が餘り同情を持たないので、好い映畫を借るのに困難してゐるやうである）。

　學校に面白いことさへあれば、子供は決して學校以外に娛樂を求めるものではない。概して、子供は學校好きなものである。だが、いくら好きな學校でも、規則づくめ勉強づくめでは堪らない。子供達は他のものを求めに他のところへ行く。その他のものが學校にあれば、子供は何を好んで外へ出て行かう。

　私は劍劇或は劍劇映畫の總てを排斥するものではない。併し、現在日本で一般に行はれてゐるやうな劍劇映畫は、大人にとつても決して健康な食物ではない。況や消化力のまだ弱い兒童にとつては尙更のことである。何の爲に人を斬るのか、そこに理由らしい理由の全くないのがある。かういふのが最も危險な映畫である。人を斬る侍或は浪人の背後には必ず女性がゐる。そして、その關係は概してデカダンである。新聞に謂はゆる「ただれた戀」である。私は兒童の見るもの讀むものに必ずしも戀愛を排斥しようとするものではないが、一般の劍劇映畫に見るやうな戀愛は、兒童の情操を全く間違つた方向へ持つて行つてしまふものだと信ずる。

　劍劇映畫に身心を損はれた兒童の實例は澤山にある。現に私も一人、さういふのを預かつて、それが矯正に努力して見たが、その病根は思ひの外深くて、終に私の手には負へなかつた。

當局はこれらの恐ろしい實例を列擧して、一般家庭を覺醒させなければならない。一般が自覺せぬ限り、法規や協定が何の力にならう。

「ファウスト」斷想

ムルナウの映畫「ファウスト」を見た。

美しい寫眞である。マルテの家の後庭で、ファウストとグレエトヒエンが鬼ごつこをする場面などは、ゲエテ全集の銅版挿繪を見るやうだつた。エクマンの若いファウスト、カミラ・ホルンのグレエトヒエン、共に美しい。殊に、私を動かしたのはカミラの持つ處女美である。

カアル・ホフマンのカメラワアクが大分好評であるが、私は然程にも思はない。獨逸としては、この位のことは出來るのが當然だと思つてゐる。唯、思ひの外繪の明かるいのが好い。暗い場面でも、頭腦や眼を疲れさせない程度の明かるさが考へてあるのが好い。

ムルナウの監督も群集場面の外に新しく學ぶべき點はない。グレエトヒエンとファウストの戀の始まりをビオメカニックで表現したのは好い。マルテの媚藥はちとやり過ぎの形である。

ヤンニングスのメフイストは、最初の出だけである。(だがそれはクルチュツフの繰返しとも見れば見られた)。いつもの裝になつてからのメフイストは、二枚繪の境地を出ない。餘りにも低級な演技だつた。私は「オテロ」で見たヱルナア・クラウスのイヤゴオの方に遙にメフイスト式價値を認めるものである。

だが、何よりも問題なのはハンス・キイザアの脚色である。これはゲエテでもなければ（勿論、ゲエテの「ファウスト」は到底完全に映畫化せらるべき性質の作物ではないが）、傳說のドクトル、ファウスツスでもない。マアロオに近いと言つた人もあるが、私はそれにも與し難い。

結局、何をテエマにしたのか、それが分らない。最後の解決をLoveの一語にしたのも、今日の人間には餘りに甘過ぎる。

グレエトヒエンを「子殺し」にしないで、幼稚な看客の同情を集めようとしたのも、餘りにアメリカ式である。

「マノン・レスコオ」

ジョン・バリモアとドロレスコステロの「マノン・レスコオ」を見た。

原作の小說を思ひ浮べながら、この繪を見るものは失望するかも知れない。併し、原作を離れて見れば、「ドン・ファン」に優るとも劣らぬ映畫だと言ふことが出來る。

「ドン・フアン」では、ストオリイの前半が稍複雜に過ぎた。「マノン・レスコオ」では、最初からマノンとフアビアン・デ・グリユウの二人だけが筋を運んでゐるので、分かりが好い。

後半からスピイドの出て來るところは、「ドン・フアン」と同じである。フアビアンがマノンを賭けてルイ十五世（これも原作にはない人物だ）と骨牌の勝負をする。ルイがいんちきをやる。フアビアンが卓を叩いて猛然と立ち上がる。それからが息もつかさぬ面白さである。

女が賣笑婦として殖民地へ流しものにされる。それを留めやうとにして、男は警視總監に哀願するが、總監は女に對する怨みからこれを許さない。フアビアンは素早く總監の咽喉を刺し貫いて、今や出帆しやうといふ船に乘り込む。總監殺しの犯人を追つて騎馬の兵がそのあとを追ふ。船は出やうとする。このあたりのスピイドは監督撮影ともに遺憾なしである。

男は荷擔ぎを裝つて、無事に兵士の目を逃れる。船が出る。好色な船長がマノンを挑む。フアビアンが割つてはいる。船長は男を船中の牢獄へ叩き込む。

それからが、船長が欲を充たすか、男が牢獄を破るかのサスペンスである。

フアビアンはあらゆる侮辱の詞を連ねて、猿のやうに牢獄の格子を上下しながら、獰猛な囚人達をアジテイトするのである。鎖は終に切られる。牢獄の天井は終に破られる。船中が修羅の巷となる中を、男は女と唯二人ボオトを釣り下げて、荒浪の海に漂ふ。日が上がる。自由の國アメリカの大陸が二人を迎へる。繪は原作の砂漠を見せず、ハツピイエンヂングで終つてゐる。

マノンの人物が原作を離れてゐるので、原作が持つ程の深刻味を感ずることは出來ない。だが、原作には到底見出だすことの出來ないスピイドが、映畫としての「マノン・レスコオ」に立派な存在理由を與へてゐる。

「ドン・フアン」の經驗に教へられたか、ジョン・バリモアのフアビアンが、大寫しの場合ミジアムの場合を大抵ソフトフオオカスにして、いくら美しくても年は爭へない顏の皺を隱すやうにしてゐるのも好い。フア ビアンは確にドン・フアンより若く見えた。

「鴨」に就いて

田口商店へはひつた獨逸物の「鴨」を見た。イブセンの「鴨」を映畫化したものである。映畫の名題は「可哀さうな小さなへ

ドホツヒ」とある。

アグネス・シュトラウプ、ルチイ・ヘエフリツヒ、アルバアト・シユタインリユツク、エルナア・クラウス——出演俳優はいづれも獨逸劇壇の大立物である。

ロケイションとしては、父エルレが鴨をうつ場面が、ほんの少しあるだけである。映畫として當然あるべき山の生活もない。從つて、老エエクダルの過去も分からなければ、彼と父エルレとの關係も分からない。

殆ど總てがイプセンの戯曲にある場面だけで演ぜられる。即ち、エルレの家と寫眞屋ヤルマアル・エエクダルの家の各部である。

實に原作に忠實な映畫である。殆ど少しの入れ事もない。少しの筋の變換もない。それだけに繪のテムポは極めて緩い。グレゴオル・エルレなどは、殆どパウゼばかりの演技である。

クラウスのヤルマアル・エエクダル。

シユタインリユツクの父エルレ。

アグネス・シユトラウプのヘドホツヒ。

ルチイ・ヘエフリツヒのヤルマアルの妻。

これらは勿論である。その他、どんな端役でもが、恐くイプセン劇中の人物に成り切つてゐる。

それ故、吾々外國劇の研究者にとつては、實に貴重な映畫である。一本買つて、絶えず見てゐたいとさへ思ふ繪である。併し、本質的な映畫といふ立場から見たらどうだらうか。恐らく如何なる興行師も手を出すまいと思はれる作品である。なぜと言へば、原作を知らない觀客は、必ず退屈するに違ひないからである。

かういふ特殊な映畫をどうしたら好いか。それは私の常に考へてゐることである。一部の人にとつては實に貴重な映畫であるのにも關らず、それが大衆向でない爲に埋もれてしまふ。かうした映畫の救ひ方を誰か具體的に考へてくれる人はないだらうか。

映畫に「文學的價値」をのみ見ようとする人の多い日本の文壇などは、率先してかうした映畫の保存維持に盡すべきではなからうか。

(小山内 薫)

一場面の「聖畫」

「マザー・マクリー」は曾つて同樣の母性愛を說いた「オーバー・ゼ・ヒル」の如き効果を擧げてゐない。寧ろ通俗的悲劇界に近い作品であらう。併し自分はそのベル・ベネットの母親が或富豪の床の上を拭いてゐて、不圖赤兒の泣聲を聽いてそのドアの中へ這入り、床に坐り乍ら赤兒を宥め賺す場面を見て、忽ちにしてマンテニア風な大なるクラシツクを感じた。床拭きとして頬冠のやうな頭布をかむつたベル・ベネットはもはや自分には單なる現世の一女優としてのベル・ベネットではなかつた。優しいマンテニアの畫面に漲る恍惚、からだの白い柔しい聖畫的な母性の接觸、翼の生えた大なるクラシツクの母親だつた。

ジョン・フオードの手法も寧ろ弛んだものだつたが、床拭きの一場面だけは奈何なる映畫の中にもなかつた生新な好場面であつた。自分はかういふ聖畫風な或は天上から辷り落ちた一頁、ジョン・フオードも豫期しないであらう同時に生新で古風な一枚の生きてゐる繪畫が、自分の胸を閉し頭にあるマンテニアを生してくれたことは嬉しい限りだつた。ベル・ベネットの靜かで豐かな稍々間伸びのした演技も、手固さの窺はれるフオードの手法と共に渾一した氣持を自分に與へた。そして自分は凡ゆる映畫を見ないで輕蔑してはならぬ事、かういふ一場面の「聖畫」の現世に於て見られ得ることは、映畫それ自身のもつ世界の微妙な作用でなければならなかつた。漫然と見過すことのできない一場面の、その驚くべき効果は或意味に於て不易の「古代」を形づくるに充分だつたからである。

「ラ・ボエーム」

久振りでリリアン・ギツシュの姿を見て、その可憐の中に微かに苛立つた神經的な可憐を感じた。往年のあどけない淸楚なリリアンには澀みはあつたが、ミミに扮した彼女の消化的な巧さには、既に固さが端々の演技に生じ初めてゐた。咳嗽に手を翳す貧しい裁縫女として彼女の、咳嗽の溫かさに惹き入れられる手付や表情、その爽さにいぢけてゐる全身的なこなし方は、往年のギツシュのたはいない藝風ではなかつた。寧ろ東洋風な演技のデテエルスをさへ窺はされたくらゐだつた。併しその巧さには小手先の固さが既に自分の頭に影響して來た。それに自

分はかういふ弱々しい美婦の中にある神經的なものを、映畫とは別な問題としても考へても見た。

キング・ビーターの手法は古い持腐れのリリシズムだつた。ピクニツクの場面にも在來の繪葉書風な効果以上を一歩も踏み出してゐない。藝術家の放埒な生活を描くにしても其生活的な意力の表現は、地についたものではなかつた。何かそはそはと生活そのものすら映畫のために描いた生活に過ぎない「ラ・ボエーム」の主要な生活力は貧と戰ふ藝術の生活であるべきだのに、此處に現はされた諸藝術家達はゴム人形を操られるそれのやうに、地に足をつけてゐない感じだつた。

ジヨン・ギルバートは何といふ拙い役者であらう。表情の缺乏された腹藝の用意されてゐない棒のやうな土偶人形、眞實性のない面の惡さ、切角のリリアンも彼によつて壞されてゐると言つてよい。同時にこの映畫はキング・ビーダーの駄作中の駄作であり、その低級なリリシズムも自分には同感できない、陳套なありふれたリリシズムとしか思へないからである。

後の日の「バンクロフト」

「暗黑街」の惡漢に扮したバンクロフトの演技の幅は、「喧嘩機關車」の全篇に澎湃として流れ込んでゐる。喜劇中のバンクロフトは「暗黑街」で感銘した背景を負ふてゐる故か、自分には流暢な澱まない新しい出發的な「喜劇」を感じさせた。チェスター・コンクリンの相役、コンクリンとバンクロフトの時代的なテンポの相違、バンクロフトに於ける力强い肉體的な魅力は、喜劇がその前途に於ける眞實な生活面を拓り展いて行く、よき可能性を自分に首肯させた。

今までの喜劇は生活面から押し出されなくて、思ひ付きやお座なりの特異な現象から演ぜられてゐたことは、何よりも喜劇自身を行詰らせてゐた。喜劇がその第一義的な生活内容から再起することは何よりも肝心である。飽迄喜劇はそれ自身の眞摯な心理的な經過に於いて、微妙な運命的な喰違ひを發見することにより、その未來性を物語らなければならぬ。或意味に於いてバンクロフトの中にそれらの秀れた萠芽を見ないでもない。

コンクリンの演技は眞に老練ではあるが、錆びた鐵のやうなボロと屑とがバンクロフトといふ巨大な相役を得て、既に補促しがたい時代の相違を感ぜしめた。グレゴリー・ラカヴアの手法も難なくこなしてゐる。併し内容が機關車だけに此の喜劇には何か知ら「明治中期」の、新時代風な古風さが見えるのは題材が古いせいであらう。併もかういふ古さは一味の懷しい時代的な光澤を曳いてゐるのも不思議である。

「罪に立つ女」の「ネグリ」

ポーラ・ネグリは幅と大きさに於てエミイル・ヤニングス風なものを、その演技や風貌の中に持つてゐる。何よりも大寫しに効果のある肉顏の量積、カメラに大膽な瞬きをしない瞳孔、冷たい諷刺的な浮びやすい嘲笑、次第に蒼白になる表情の運動的なタイム、頬骨、割れてゐる巨大な眞白な背中、それらの中に粗大な美しい建築的な堂々たる容姿は鳥渡類のない「典型的」な、エミイル・ヤニングス風なものの多くを持つてゐる。

グロリア・スワンソンの厭味のある誇張はネグリには洗はれてゐる。スワンソンの癖や垢は彼女自身を益々あくどくしてゐるが、ネグリにはさういふあくどさが無い、唯その肉顏的容積が彼女を偶々グロテスクな感じにはさせてゐるが、その諷刺ある冷笑をあれ程辛辣に現はし得る女優は當今少ないと言つていいであらう。その背中に至つては曾つてのバムパイア女優ニタ・ナルデイを遙かに超えてゐる。しかもポーリン・フレデリックのやうなヒステリックの鋭角な線は未だ貫いてゐなくつて、その點彼女はまだ「中年女」になり切つてゐないと云つてよい。

ネグリ物はネグリの演技的存在と同時に、どういふ主役にも餘り失敗してゐない。ヤニングス物が度外れな失敗をしてゐないと同様な、濃厚な落着と危氣のない藝風によつて固められ表現されてゐるからである。「帝國ホテル」のネグリの厚みや、「鐵條網」の彼女、そして「罪に立つ女」のネグリの位置は、モーリス・ステラーの靜かな常識的なまで正確なリアルな手腕で、彼女をおさへ、彼女の癖を消し試めさうとし、その生地の中のヤサシイものを、母の愛情へ呼び出す努力によつて表現されてゐる。病人の額へまで夫の目前で接吻させるステラーは、監督的な位置をそれが當然であるところの手法を潔よく試みてゐる。殺しの場もよい。それらのネグリは殆完全なままで在來の藝風の集中的な、秀れた極致的な表現であつた。彼女をここまで纏め（よい意味で）上げたものは、やはり彼女自身の力倆ではあるが、モーリス・ステラーの中のものが彼女に働きかけたことは、云ふまでもないことである。凡ゆる監督の光輝ある位置も又此の最大を約束してゐるのだ。監督の握り方の厚みによつて露されるものそれ自身、役者に冴えて出る演技それ自身でもあるのだ。

「ドロレス・コステロ」

「人生サーカス」を見て監督とカメラ以外に、役者かどの程

までも生活力をもつてゐないことを知つた。ミハエル・クールティッツの統一のない繼ぎ繼ぎの手法ではあつたけれど、「耳」の大寫しやサーカスの撮影、ドロレス・コステロのアン・デリーが絶望的に自分の居間で二度までも戶棚のやうなものに行當るところ、其他簡潔なピッタリした用意ある手腕は、新味もありダレてはゐなかつた。これ程平凡な常套的な題材を消化したのも、クールティッツの中にあるものの表現的な生活力に根ざしたものであらう。拙劣な役者の上にどれだけの「高さ」を監督が持つてゐるかといふ證明を、單なる此「人生サーカス」の一映畫に於てさへ見られるではないか。

撮影はサーカスの場面がよかつた。ドロレス・コステロのサーカス娘アン・デリーは、餘りに初々しい匂ひを持ちすぎてゐたが、もう少し劍氣めいた野性がほしかつた。しかしコステロの茶色の眼の中には「可憐」の永い溜息があり、無表情のやうで無表情自らが物語るヤサシサをも、自分は珍しく寧ろ優雅に見とれた。

マダム・アリシアを扮したルイズ・ドレッサーの母親は、無難で、靜かな演技を終始することにより佳い効果を現してゐた。——筋の上でアリシアがジェフリーズの夫人になつてゐることが、不自然で了解が行かないところがある。

「コンラット・ファイト」

自分は「或男の過去」のジョージ・メルフォードに危氣は感じなかつたが、定石的な監督の布置には不滿足だつた。餘りに樂々とこなしもし、餘りに作り物の感じだつた。

コンラット・ファイトの立體的なポーズには、熱情も苦心も窺へなかつたけれど、ファイト特有の妙に演技的であり乍ら決して左うでない自然性、自然性の演技的同化ともいふべきものが何時も乍ら感じられた。彼は棒のやうに突つ立ち乍ら、澁い軟味を流暢に曳いてゐた。それは永い間スクリイン生活をした人でなければ、持ち合せない自然な軟味であつた。「カリガリ」以來、「プラーグの大學生」まで彼は依然として棒のやうに突つ立ち、すこし俯向きがちの脊後姿を見せた人である。伹、脊中、首すぢの歴史的な我々の記憶を辿るとしても、彼は依然たる「うしろ向き」のファイトであり、首を少し垂れた疲れを見せてゐるコンラットであつた。澁い藝風が彼の持味となつたのも當然であるかも知れない。

ヤニングスの豪邁はまだ澁さには達してゐないが、ファイトの一應「憂鬱」なそれ自身から出發してゐる藝風は特に「巧もう」とせず、演技的に執拗ではなく、又「熱」を見せてゐない

ところの餘りに沈着た、餘りに有りのままな普斷着の動作を生活をするファイトであつた。「我若し王者なりせば」の慘忍な王に扮した時の物凄い彼の形相の中にも、依然として彼らしい沈着が、その焦燥の王者の中にあつた。しかもその時は彼は彼の立體的なポーズから離脫してゐた。

自分はファイトの「うまさ」を見やうとしてゐたが、どういふ點でファイトであり得るかに就いて、自分は彼を刺し貫ぬく眼光をもたねばならぬ努力を敢てしてゐた。併し乍ら我コンラット・ファイトはゆつくりと大膽に、しかも妙に子供らしい憶憶しさのある歩調でスクリインの中を歩いてゐた。彼は決して監督を輕蔑も厭倒をもしなかつた。ゲルマン風な眞自面な努力的なもので押し通し、自分だけのものを自分らしく消化することによつて、すこし疲れた軟かい立體的なポーズを繰り返し、我々の歴史的な脊すぢを少し垂れたファイトであつた。自分はもう彼のうしろ向きの姿以外に、彼を見る必要はなかつた。プラーグの大學生」の中の彼、生活をしないスクリインの幽靈だといふに見た彼は、すくなくとも「或男の過去」の中ではともあれ生活的なものを生活することに存在してゐた。それはどう云ふ意味にもコンラット・ファイトの顏さへ見れば、彼の溫和い象徵し的分子を含む立體的な脊後姿さへ見れば、我々は特に作事も言ひたくない妥協的な、彼自身への好意を支拂ふことに據つて批評の筆を擱くであらう。それほど彼はスクリインの中の人、スクリインの中で衰へと老と疲れとを感じ併せてゐる人、もはや彼を烈しく鞭打つ必要のない人、そのファイト風な顏さへ見せれば相應の効果を擧げることによつて、決して失敗を操り返すことのない人であつた。彼自身古典的な演技的記錄の上の或標準であり、生きてゐる立體的なポーズの骨董品であつた。

「ベター・オール」の愚昧主義

徹底的な愚昧主義の骨髓、
一九二〇年代の三流映畫、
大衆的な進出觀照を加算しない、古今稀なる大愚映畫、
やくざな驚くべき忍耐を强要される映畫の一時間、
未來永劫にまで救へないシッド・チアップリン！

「デパート」のサム・テイラアとカメラに就いて

メエリー・ピックフォードは自分には全然興味がない。うまみの拔け切つた衰えた彼女は、その末枯れの演技の中にみ[illegible]な

寂さに震えてゐる「デパート娘大學」は殆全然サム・テイラアの手法とカメラのチャールス・ロッシャアの二部合奏以外に、徒らにピックフォードの凋落を物語るに過ぎなかつた。

デパートメント・ストアの內部の光景、及び雨の中のカメラは、サム・テイラアの呼吸とよく融け合ふて、鮮やかな効果をあげてゐた。雨の中の街もデパートの內部も美しいが、サム・テイラアは時々妙な象徵的人物を用したりして古いものも同時にその手法に持合せた失敗をしてゐる。

「婦人にお給仕」

アドルフ・マンジウ物であるが、マンジウの持味が充分に發揮されてゐない。彼自身は此の畫面では何等の研究的な新味をも、この初期に見た程の輕快な明るいニュアンスをも見せてゐない。乾燥された意味の無い擧止も、もう自分達を喜ばせない。ハリー・ダーラストの手腕も難はないが、一向に冴えた味を見せてゐない。或意味に於いてアドルフ・マンジウは締め付けることに依つて、その演技の隱れたものや擴はさないものの多くを持つてゐる人である。ハリー・ダーラストの手ぬるさを示してゐるといふより外はない。何故かといへばアドルフ・マンジウは單にこれだけの俳優として見るには、まだ天分を後方に持つてゐるからである。

「寫眞色」の黑と白

映畫と天然色に就いては最早我々はそれの必要を認めない。我々は寫眞色の黑と白との二色による映畫の原色を適當な「寫眞色」だと思ひ、長い間それに慣されてゐる故、稀に自然色の映畫を見ると何か模造品（つくりもの）のやうな氣がして、落着いた氣持で見てゐられないやうである。例令ば我々は綠の木々や肉顏的寫色を畫面に見出す時には、何か物珍らしい特異な顯象に對する小さい驚きを感じるやうで、却つて「黑と白」の寫眞色の世界からは尠くとも幾らかの「靜かさ」を破壞されるやうである。或は凡ての映畫が自然色になればともかく、その中の或二三の物がさうなつても依然として我々は「黑と白」の「寫眞色」を喜ぶであらう。

寫眞原色である「黑と白」の色彩教育と視覺的習慣とは、殆我々が映畫を見始めた以來の眼慣れた馴染深い色であつて、却つて寫眞に原色を用ゐた場合のものには「落着」を發見することができない。かういふ習慣を有つ我々の視覺の中に却つて自然色映畫に親しまれぬは當然である。自然色の或色彩の如き、例令へば光を含む赤や青の場合はそれが機械の媒介に據つて虹

の如く輝いて、却つてその原色を壞滅させる例も無いでもない。科學と機械の命令と習慣とは我々の自然を逆流させたことは、今日我々が「黑と白」に依る映畫に素直さ自然さを感じ、天然色映畫に却つて何か不自然な模造品的な氣特の新奇を感じるに至つたのは、何たる恐怖すべき珍らしい顚倒であらう。

天然色映畫、――或色彩を加へられた映畫表現は、殆その舞踊や手品、汽車旅行などを主題とした極めて幼稚な初期に於てさへ計劃され、千九百年代にすら既に表現されてゐたものであつた。唯それらは一場面乃一卷物の程度に停つてゐたこと、原色とは云へない光線による色彩だつたこと、今日の天然色と比較されない兒童的顯象だつたことは能く人々の識るところである。色が飽迄原色的でない限り自分は今のところ天然色映畫に好意をもたない。「黑と白」との世界での人生的描寫は、沈んだ落着いた在來からの引續いた氣持で見ることが出來るが、天然色映畫には却つて自分には親しみにくい窮屈さを感じるのだ。

雜

マルコム・セント・クレアーは「戀のかけひき」でルールルーに扮したアリス・ホワイトを發見し、ピエールのドン・アルバラドに手腕を振はしてゐる。アリス・ホワイトの顔の中には奇しくも若い東洋の觀音像の面容があつた。自分はその面のよさを感じ、二枚目の上に何時も居られる女優だと思ふた。ドン・アルバラドの初々しげな、柔かい非亞米利風な演技も素直でよかつた。主役のコンスタンス・タルマッヂの中にある「近代」は、既に此の畫面では漸くに衰弱しかけ、道にうまいと思ふても付味であり身體と表情とで動いてゐた。氣持で動作してはゐなかつた。

マルコム・セント・クレアーの手腕は、此の若い「觀音」の面をもつアリス・ホワイトを發見したことに、自分は興味を惹いたのである。クララ・バウの型でありクララ・バウよりも近代的であると言つてよい。かういふ女優を一人前に「拵へ纒める」ことは監督の力倆であり、監督次第で充分に「まとめられ」もするであらう。

「脚光の影」のエスター・ラルストンは、癖のない純粹さを行動することに於いて、完全なアカデミックなまでに演技されてゐる。厭味のないことは注目すべき佳いところだと思ふてゐる。別の意味でエスター・ラルストンの乏しい表情がその演技に榮えない空氣なさを見せてゐる。

「ポーゼスト」のニール・ハミルトンは美しかつたが、彼もし

う完全なる大根に爲り下つてゐた。その拙劣な變化のない定石のみを演技するだけで、自分はこの男の映畫を見ないことに決めた。ベン・ライオン、ジョン・ギルバート、ニール・ハミルトン、から數へてくると、自分は身體中に蛆が湧くやうな不愉快た氣持を抑へることが出來なかつた。リチャード・バーセルメスの名前を聞いたゞけで、自分は蟲封じになるやうな氣がした。これらの純亞米利加風な俳優の持味は悉く厭味を多量に持つてゐて、根本的に東洋流の我々に同感を與へないところ、風俗人事の習慣性が全然我々の中に缺如されてゐる點が、どういふ意味にも我々の好きになれない所以である。それに彼らは同様に我々が最も嫌厭するところの「型」を持合せ、それを組立てることによつて演技するからである。彼らの「型」は我々が往年新派悲劇の中に散見した多くの氣障と、多くの厭味と、多くの陳套をもつてゐたからである。事實に於いて純粋の演技的極致ともいふべきものは、烈しい東洋の匂ひと微妙さを持つてゐることは、演技の幅や奥行及びそれの本體に大して國土的關係のないことをも、證據づけてゐるのだ。

（室生犀星）

編輯者雜記

○

片上伸氏の逝去は全然豫期しなかつた事で、その驚きも亦大きかつた。氏が本誌に文藝時評の筆を執られたは纔に新年號一回だけで、其後は毎も〆切間際になつて生憎病臥せられてゐたゝめに休載の止むなきに至つたとは其度々に讀者に報告して置いた通りである。併し今月號は間違なく執筆して頂くつもりで居たし、氏も先月以來引つゞき臥床せられてはゐたが寄稿の約を果すつもりでゐられたのに突然の訃音に接して餘り事の意外に茫然とするより外なかつた。今回斃して氏が過去の業績の大いさを玆に改めて云ふ必要はあるまい。本當の仕事は今後にあると氏自身は信じてゐたであらうし、寧ろ其點に於いて氏を知る人々の遺憾の念は一層深い譯である。本誌に掲載された氏の親友吉江氏の言葉は切々胸を打つものがある。此一篇こそ片上氏に對するよき最後の告別の辭でなければならぬ。

何も彼も規則で縛りたがるのが日本の當局であり、何も彼も法規で縛られなければ實行出來ないのが日本人である。普選法でも、少年禁酒法でも、皆さうだ。之は縛るものの恥であり縛られるものの屈辱だ。近頃再燃した「兒童と映畫」の問題にだけでももう少し進歩的な協定をして貰ひたい。此問題に就ての小山内氏の批評は一般に味讀さるべきである。

□

世の純良な子弟に惡影響を與へたチャンバラ劇が惡いのではない。チャンバラ劇を生んだ現代が惡いのだ。泥棒を見て繩を綯ふのも綯はぬよりはいゝが、泥棒に入られぬ用心の方が肝腎だ。但し「思想善導」を鼓吹するのではない。「兒童と映畫」問題に關心する者はモ少し深い所に考を潜めて貰ひたい、折角の計畫がバラックに終らぬようにである。

◇

三旬に亘つた政戰の餘燼も漸く消えて、轉換期の政治に對する大衆の試練が終つた。そして、吾等は、大衆の政治的進出とか、又反對に、政治に對する大衆の無關心無自覺とかいふ語をさかんに耳にした。然し近來頻繁に濫用される大衆なる言葉に、深い疑ひを懷かざるを得ない。大衆とは何を指稱するものであるか、大衆の本質、大衆の動向を把握する事が吾等に課された時代的な命題であり、同時に現代文化の本質への解答であらねばならない。この意味で諸家の「大衆觀」は時代的な意味を持つものと信ず。

◇

本號小島烏水氏の「泰西創作版畫の蒐集」は、同氏苦心の蒐集にかゝる版畫を、昨年歸朝の際持ち歸られたが、數十萬の關稅云々で、當時多大の問題となり、其儘横濱埠頭に空しく置かれてあつた。それを今度東京朝日新聞で一般に展覽される事となつたもので、この一篇は、泰西版畫及版畫家を知る上にも、又今度の展覽會を觀るためにも、是非一讀すべきものと思ふ。

×

街路といはず、室といはず一面の紙屑で埋められた日本にも、春が回つてきた。此の二千萬磅の紙屑から四六六の選良が生れたのだ。續々と一円本が出る。多くの紙屑が撒かれる。文明は紙屑から生れるとも云ひ度くなる。リトレの辭書によれば、「書物」とは印刷せられた紙によつて作られたものであるさうだ。何と「書物」の多きことよ。

白鳥隨筆

正宗白鳥

菊池寛論「その他」

菊池寛君を論ずるのは現代を論ずることである。この雜多紛々の現代に於て、ある一人を以つて現代の標本とすることは困難であつて、範圍を文壇に限つても、現代を背負つた標本的人物はそこらに散在してゐるやうであつて、特に一人を選び出すことは困難である。

しかし、今日の私は、多く躊躇するところなく、菊池君をもつて好箇の現代の代表者としようと思つてゐる。私は彼れに於てよく現代の影を見てゐる。現代は絶えず動搖してゐる。明日はどういふ風が吹くか知れない。從つて、私の菊池君に對する評價は、明日の日どう變るかも知れないが、今日の彼れは、よく日本の現代を反映してゐる。どちらかと云へばいい意味で日本の現代を代表してゐると云つてゐゝ。よくも惡くも現代に無關心で生存してゐられない私は、菊池君についても無關心でゐられない譯である。

最近の文壇人のうちでは、故芥川と、久米菊池の兩氏とに、私は、いろ〳〵な意味で興味を寄せてゐた。私は、年齢の差違のためか、この三氏に對して、羨望嫉妬憎惡あるひは偏愛、仲間贔屓などの私情をまじへずして、その述作を味ひ、その行動を注視してゐられるのである。

他の二氏のことは暫く置く。菊池君は素直に現實を受入れる人である。現實に對して相應に敏感な人である。外形も精

神も今の日本に生きてゐると云つた感じが生々としてゐる人である。彼れの述作は、さういふ感じの率直な表白である。日常の行動も多分さうであらうと思はれるが、社會民衆黨（今度の選擧に際して、そんな名前の黨派のあることを私ははじめて知つたのであるが）の一員として、第一回の普選の代議士候補に立つたことも、氏の行動として、ふさはしく私に思はれる。氏が落選したことによつて、「現代の日本の代表者」たるに價ひしなかつたと見做すのは、最高點の投票數を得たと云はれる高木正年氏を、「現代の日本の最高の代表者」たるに價ひしてゐると見做すのと同樣に、無論皮相な考へである。菊池君は、民政黨にでも加入して選擧に立つてゐたなら、當選の榮譽を得たであらうし、彼自身の志してゐる出版法の改正や著作者擁護の法案成立のためにも、都合がよかつたであらうのに、氏は易きを去つて難きに就いた。しかし、そこに、現代的良心の保持者たる氏の面目が見られるのである。

安部磯雄先生が社會民衆黨の巨頭であることも、私は今度はじめて知つた。安部先生と私とは、この世に於て多少の因緣がつながつてゐないことはない。私は、年少の頃（明治二十七八年の頃）備前岡山の郊外にあつた薇陽學院といふ宣教師經營の私塾に半年ばかり通學して、傍ら縣立の病院へ通つてゐた。（當時の印象は「地獄」といふ短篇に書いたことがある）その學校の校長は、安部先生であつたが、神學研究の目的で米國に留學されてゐた。私の入學後何個月かして歸朝されたので、私達は多くの期待をもつて先生を、岡山の停留場に迎へた。私は、學校では先生の教授を受けなかつたが、市内の教會堂に於てをり／＼先生の說教や講演を聽いた。社會主義らしい意見を、私はその時はじめて耳に入れた筈であつたが、特別に記憶に留まるほどの感激は受けなかつた。

間もなく私は年少の憂鬱に困んで退學したが、一二年後にその學校も閉鎖されることになつたのであつた。校長たる安部先生が、在米中新神學にかぶれて、基督教の正統的信仰を失つたゝめに、宣教師と意見が合はなくなつたのが、學校閉鎖の一つの原因であると云はれてゐた。

私が上京して早稻田の學堂に通學してゐた間に、安部先生も上京された。一團の同志とユニテリアンの教旨を宣傳されだしたが、當時の私は、宗教が靈氣を失つてしまつたやうな神秘性を缺いだ、淡々水の如き常識的なユニテリアンを蔑視してゐた。(今思ふに、無產黨中の社會民衆黨は、宗教のうちのユニテリアンのやうなものではあるまいか)

先生は、私の在學中早稻田に教鞭を執られるやうになつて、私達のクラスにでも英語の一課目を受持たれたのであつたが、まだ先生の人格や學識を知らなかつた學生は、どういふ譯だつたか、先生を毛嫌ひして、最初の授業時間に、私など數名の外はその教室に入らなかつた。學生に嫌はれたことを知つた先生は、直ぐに教室を出て、それつきり受持教師は變更された。それで、後年安部先生が早稻田の學生間に旺盛なる人望を得られたことを知つて、私は意外に感じた。

爾來數十年。私は輕井澤避暑中に、彼方此方の途上で、幾度か行會つて、お辭儀をする外、先生に面接したことはなかつた。先生がいかなる社會主義行動をしてゐられたか、さういふことに興味のなかつた私は殆んど知らなかつた。たゞ、羽仁吉一氏ををり〳〵訪問した時世間ばなしのうちに、安部先生の家庭についても、多少耳にしたことがあつた。羽仁氏の令孃が、安部さんの子女××さんは、神樣は信じないけれど、お父さんを信じると云つてゐたと話したのが、私には奇異に感ぜられるとゝもに、先生の家庭ではさうだらうと思はれた。先生はかつて、ある雜誌に「私は妻君を尊敬する」と云つてゐられた。夫が妻を尊敬し、子が父を神の如く信じることは、私が日常目睹してゐる周圍の家庭では多く見られない現象である。

かういふ有德の人物が國民の代表者として議政壇上に立つことは喜ぶべきことである。選擧前後の先生の人氣の盛んな所以である。しかし、翻つて考ふるに、議會は現實の國人の生活に直ちに影響を及ぼすやうな言論行動の舞臺であるとすると、溫良有德の人物といふことは、必しも代表者として最高の條件であるとは云へないのではあるまいか。私は、先生の政治上の主義主張については、詳しくは知らないのであるが、雜誌上でをり〳〵瞥見したところに依ると、産兒制限論者であるとゝもに、財産の制限論者であるらしい。土地國有主義を抱いてゐるらしい。土地の私有禁止を說いたり、個人の

私有財産を幾千に止めようと說いてゐるのを、私は何處かで讀んだことがある。……ところで、他の無産黨候補者を選擧した人々は、どういふ人々であつたか知らないが、安部先生の應援者及び投票者は、必しも無産者ばかりではなかつたらしい。財産を有し土地を有し、また、出來ることなら自己の財産を殖やし、所有土地をも殖やしたいと、人類共通の慾心から脫却してはゐさうでない人々も、安部先生を自分達の代表者として昇上げたやうである。私は、そこに現代を見るのである。現代的良心を見るのである。安價淺薄なる人間的良心を見るのである。若し、安部磯雄先生の屬する黨派が政友派や民政派のやうに有力であつて、議員の過半數を占める恐れがあつて、安部先生も當選の曉には、自から內閣を組織し總理大臣となつて、その抱懷せる土地私有禁止などを、直ちに實行し得られるやうであつたなら、どうだらう？ さういふ右か左かに自己の運が左右される場合にでも、先生の投票者は擧つて先生を投票したであらうか。どうせ無産黨が議會に多數を占める恐れはないのだから、自分達は、新聞雜誌などで新しい進んだ思想らしく說かれて、現代の知識階級の流行となつてゐる主義の所有者たる先生に一票を投じて、現代的良心の滿足を得、先生の當選の報を新聞に讀んだ時、明日から土地私有禁止實行などの不安に襲はれる必要なく、普選第一回の進步せる選擧者であるといふ快感のみを味ひ得られるのではあるまいか。

全體無産者は有産者を打倒して自から有産者たる幸福を占領したいのか。人間性の至極である。人間は精神的にも物質的にも、他に優越してゐるといふことに於て自己の幸福を感じるので、婦女子でも、萬人が萬人同じ衣服を着るやうだつたら、それがどんな美服であつても幸福を感じないに違ひない。選擧でも、主義その者に即しなくつても、勝敗といふことだけで、大勢が興味を覺えるではないか。……

筆が橫道に外れたが、ここらで、本題の菊池寬論に返ることにする。

改めて云ふ。菊池君は素直に現實を受入れる人である。現代的良心の所有者である。帝國議會の一員となつて實際の政

治に參與したいといふ、在來の引込思案の文人氣質とは違つた勇猛心を起しても、民政黨へは加入しなかつた。そして、氏は、近き將來に於て、社會組織が急變して、生活が平等になつて、流行作家も贅澤が出來なくなるであらうと、素直に考へてゐるらしい。(私はさう考へてゐない。通俗的流行作家は、これからます〳〵榮えて、浮世の榮華を極めるやうになるのではあるまいか)

封建制度が崩壞しようとも、資本主義が滅亡しようとも、生きかはり死にかはり、人間の所有慾や愛慾が、蛇の執念の如く、何等かの形に於て、人類が地上に存在する限り威を揮はないで置くものか。周圍の事情によつて文學そのものが衰頽すれば兎に角、さうでない限りは、文學者の生活はます〳〵不平等になつて、時好に投じた作家は、ます〳〵贅澤を味ひ得られるであらう。

菊池君は、文壇人の所有慾滿足のために相應に力を盡した人である。文藝家協會を設立されたのも、最も多く氏の力によるのであらう。戲曲の上演料が得られるやうになつたのも、何年か前から、急激に原稿料が騰貴するやうになつたのも菊池君などがその道を拓いたのではないかと思はれる。そして、氏に對して惡聲を放つ人々も、原稿料が値上されたり、上演料が取れたりすることには反對しさうでない。この頃圓本發行書店が、頻りに藝術家の作品を極度に商品扱ひしてゐるが、商品扱ひされて豫想外の利益を得る作家は大して澁面をつくつてゐないらしい。それは、今日の作家が特に所有慾に目が眩みだしたのではなくつて、以前の作者は、環境が彼等をして強いて淸貧に安ぜさせるやうになつてゐたのである。

そして、菊池君は拘りなく現代に應じて行く。藝術的氣取りに捉はれないで、現代をありのまゝに享樂して行く。さういふ點では、育ちが育ちだけに說教者めいた安部先生よりも、現代の代表者として衆議院議員の適任者であるかも知れない。

菊池君は、人として現代の代表者であるとゝもに、作家としても現文壇の代表者である。この頃盛んに宣傳されてゐる新潮社の「長編小說集」でも、春陽堂の「戲曲全集」でも、先づその第一回配本に菊池寬集を撰んでゐるのによつて

も、氏が現代の代表的作家として世間から認められてゐることが察せられる。

私は、今度、氏の長編通俗小說「新珠」を通讀した。それから、大正九年輕井澤に避暑してゐた頃、日々新聞で何回かを走讀みした「眞珠夫人」と、先年「婦女界」で二三回だけ讀んだ「受難華」とを、飛び／＼に讀直した。そのうちで「新珠」が作者得意の作ではないかと思はれる。

しかし、現代の文壇に跋扈してゐる所謂通俗小說なるものを、殆んど一つも讀んだことのなかつた私は、「新珠」一卷を讀むにも苦しい忍耐を要した。老いて、少女愛玩の小說に親しむことゝの如何に難きかを知つた。

それでは、拙劣な作品であるかと云ふと、決してさうではない。私などは無論かういふものは、書かうたつて書けないだらうし、他の知名な通俗作家達の作品のうちにも、このくらゐなものは、さう手易く見つからないのではあるまいかと、私はまだ廣く讀まないさきから豫想してゐる。

通俗的見地から批判すると「新珠」は、用意周到を極めた作品である。日本畫の大家の未亡人が、子女の不名譽な姙娠について、さして心を勞しないで、相手の男を勝手に出入させたり、姉娘の行衛不明を一年もほつちらかして平氣でゐたり、ことに、良家の三人の姉妹が、藝者か娼妓かの如く、日常の仕事のやうに、互ひに色戀の競爭をしたり、色つぽい話を、姉妹同士で臆面もなくし合つたりするなんか、私には不可解な世界として映ずるのであるが、ここらが頭腦未發達な婦女子の讀物たる所以であらうと、讓歩して見ると、全篇の構圖、人物の配置、會話の呼吸など、用意周到を極めてゐる。三人の姉妹はそれ／＼に性格を異にして、中心の男性たる不良青年に對する態度が順々に變つて行くところなんか、思ひつき妙を得て、年少の讀者を釣つて行くのであらう。モウパツサンなんかは、かういふ世相の描寫は手に入つたもので、ある短篇では、伊太利か何處かへ旅した蕩兒が、最初娘のうちの年上の女を手に入れ、その次の旅には次の女を誘惑し、まだ一人若いのが殘つてゐると、ひそかに樂んでゐる氣持がスツキリと書かれてあつたが、「新珠」には、不良青年に

配するに、ある殉情の男を以つてしてゐる。婦女子の讀者はかうでなければ、滿足しないのであらう。

私は、讀みながら、數十年前に讀んだ「魔風戀風」や「青春」を思ひ出して、時代の相違を考へた。樂々と書きこなして、ギゴチないところのないのは「新珠」の方が如上の二長編に傑つてゐる。風葉の「青春」のうち「あなたは天才だわ」と、女に褒められて、「僕が天才？」と、男が目を見張るところなんか、私は若い頃に讀んでさへ、胸の惡くなるくらゐいや味に感じたのであつたが、「新珠」では、いや味になりさうなところが、割合にすつきりと書流されてゐる。

現代兒菊池君は、現代の若い女性の喜びさうなことをよく知つてゐて、よくそれを書現はしてゐる。しかし、空々しい筆や皮肉な筆を用ひないで、熱心に書いてゐる。「ぢや、つまりお姉さまのおつしやることは、女子教育家などが云つてゐることゝ同じね。つまり處女時代の貞操を尊重せよと云ふことね。ありがたう。お姉さまのお言葉を有難く聽いて置くわ。でも、妾の考へは少し違つてよ。妾、本當に愛する人が出來て、またその人が妾を、本當に愛してゐて呉れるのなら、妾凡てを捧げるつもりよ。妾、お姉さまにそれだけは云つて置きたいわ」

魔風戀風や青春には見つからなかつた臺詞であつて、現代の一部の若い婦女子の拍手喝采を得るところである。

「恥しいなんて、生涯の大事だわ。羞恥のために生涯の大事をあやまるなんて、そりや舊式の日本婦人のことよ」

「女性全體から選まれて、色魔的な男性を懲す選手になつたつもりでゐますの」

その他、さまぐ＼な、現代の若い女性の拍手を促すやうな臺詞が散亂してゐる。

しからば、私のやうな現代女性について知るところの少いものは、「新珠」を讀んで、大に啓發されたであらうかと考へるのに、「今の婦女子はかういふ小說を愛讀してゐる」といふ點で、現代の女性の心理が想像されるばかりで、女性そのものの本態や人生の眞相については、さして得るところがなかつた。こんなに長つたらしくなくつて、從つて時間を浪費しないで讀み得られた同じ作者の幾つかの短篇小說や戲曲ほどの感銘は得られなかつた。

「人間の業は、はてしなく廻轉するものである、人に負はせた苦しみは、いつの間にか自分の身に廻轉して來る」など、作者の人生に向つた觀察は、正しくつても、筆が皮相を撫でゝ深く抉つたところはなささうである。私をして倦怠を覺えさせるほどに長つたらしい辯に、姉妹の嫉妬煩悶が、少しも熱火を帶びて現はれてゐない。上すべりの綺麗事に過ぎぬ感じがある。これは、婦女子を喜ばせるためにわざとさういふ筆使ひをしたのではなくつて、作者自身の心境がさうなのではあるまいか。

しかし、現代の才人である菊池君の筆は、さすがに他の多くの作家の如く鈍味でない。「新珠」のうちにも、清新な形容語や清新な警句がところ／＼に目に觸れるのである。

「眞珠夫人」は熟讀しないから、充分な批評は出來ないが、この妖婦振りはひどく表面的のやうに感ぜられた。妖婦と云へば、有島君の「ある女」は壓力の強い作品である。私は、去年輕井澤でこの長編を讀耽つて感歎した。かくてこそ長編の長編たる價値があるのである。

昔、國木田獨歩が、「破戒」を讀んで、「おれならこんなものは、三四十枚で書く」と傲語した。これは例の客氣癖であつたが、小說でも何でも、短かくつて濟むものなら短いのに越したことはないのである。そこには議論の餘地のない譯である。……（私が「新珠」を讀んで、「おれならこんなものは、三四十枚のうちに書込んで見せる」と自惚れてゐるかの如く邪推する勿れ。私は、はじめから「新珠」のやうなものは書けないと降參してゐる）

何年か前、武林無想庵君が、最初の洋行から歸つて來て二ノ宮に假寓してゐた時分、一日私を訪ねて來て、歐洲の狀況を話して呉れたが、彼れは、フランスの現文壇の風潮は、性慾の極端な描寫とコンミユニズムの主張であると云つてゐた。そして、彼れは自分でその異國の流行にかぶれて、眞似をする氣になつたのか、頻りに、○○付きでなければ誌上に

掲載されないやうな小説を、得意になつて書きなぐり、かたはら、コンミュニズムの信者氣取りの雜文を書き散らしてゐた。ところが、再度の洋行によつて、現實の刺戟を實感してからは、態度が一變して、西洋の眞似事でない自己の眞實を吐露しなければならなくなつた。人間は聞き囓りの思想や流行の主義から脱却した時に、自己の持つてゐる人間本來の姿が力づよくあらはれるのである。

今「婦女界」三月號を開けて見ると、菊池君は、その戀愛觀のうちに「人生戀すれば憂患多し、戀ひせざるも亦憂患多し」と、それを痛切に感じてゐるらしく書いてゐる。どちらに轉んだつて憂患の多い人生である。それならば、戀愛に向つてでも戰鬪に向つてでも、その渦中に投じて、歡喜でも憂患でも、心にふりかゝつて來るものを味ふのが、男子の面目であるかも知れない。現日本の文學者のうちでは菊池君などに最も多くその意氣がありさうである。可成りの戰鬪性を有し、享樂慾に富み、親分肌もあり、樂天的分子も可成りに持つてゐる。先日選擧の際、第一回の政見發表演説の終つたあと、銀座のカフエー「エスキモー」で、私は菊池山本兩氏と座をまじへて紅茶を飲んだが、その時、山本有三君が傍からくよ〳〵氣をつかつて選擧の結果を悲觀してゐるのに引かへ、菊池君は悠然として安んじてゐた。これぼつちの度胸でも、今の文壇人には珍らしい。

代議士には落選しても、これだけの世間的聲望を保つてゐる菊池君には、何か目醒ましいことがやれさうである。またやるのは今のうちだ。世俗の聲望は朝夕を計られず、………

菊池君は、京都で上田博士の指導を受けた人であるに關はず、最初から純藝術の道を進むやうな素質は持つてゐなかつた。ショウの感化を受けたと、自から云つてゐるやうに、俗界に關心しないではゐられないのである。それが、過去十年、菊池君が世に出て以來の時世に適應してゐた。かういふ世間的興味を多く持つた文人が勢ひを得るやうな時代になつ

てゐたのだ。も少し早かつたなら、菊池君なども、他の多くの赤門出身文士のやうに、數年にして文筆を投じて學校の先生になつたかも知れなかつた。も少し遲かつたら、菊池君は初めから社會運動でもやるかも知れない。氏は運よくこの十年の時代の調子に乘つたがために、自己の文學的天分を過分に燃かすことが出來た。

時代を乘切るか、落伍するか。現代兒菊池寛の將來を、私は興味をもつて見てゐる（二月二十八日）

餘論

以上の雜感を書終つたあとで、餘暇があつたので、新潮社發行の「現代小說全集」中の「菊池寛集」を取出して、ところ〴〵讀んだ。一度讀んだことのあるものばかりであるが、氏の作品は、頭を疲らせないでスラ〳〵と讀める。現代に持囃された原因は、かういふ特徴があるためでもあらう。少くも、「新珠」や「受難華」を讀んだ時のやうな退屈を、私は感じないでゐられた。「無名作家の日記」「葬式に行かぬ譯」「友と友との間」など、文壇へ出るまでの苦心が如實に書かれてゐるので面白い。そして、かういふ初期の物には作者の人のよさがよく現はれてゐる。かういふ作品に有り勝ちないやみがない。

無論これ等の作品は、藝術としてさう傑れたものではないが、兎に角、事實の記錄であるから見飽がしないのである。「藝術品には非常に高い要求をしてゐるから、そこいら中にある小說は、此要求を充たすに足りない」と、森鷗外が云つてゐる通り、單なる自己の日常生活の記錄たるに留まつてゐる小說は、我々の藝術欲を滿たすに足りないのであるが、しかし、貧弱な空想で捏ち上げた小說よりは、遙かに讀むに價してゐる。私は、この頃ある社の依賴により、懸賞募集小說の撰拔をしてゐるが、實際の記錄らしい小說は、いかに筆が幼稚であつても、世の中にはかういふことがあるのかと、世相について一つ學んだ感じがされるのであるが、幼稚な頭で文章や趣向ばかり凝つたつもりの、所謂「創作」なるものは、讀むに堪へないのである。書く方も讀む方も時間潰して、かういふ創作は全く無用な存在のやうに思はれる。……私は投

書を讀んで、今更のやうにさう感じてゐるが、菊池君の如き現代最大の流行作家の作品を讀んでさへ、さういふ感じのしないことはない。

故上田敏氏のことが、菊池君の初期の作品には屢々現れてゐるが、「友と友との間」のある一節に、「あの人はほんとうに偉かつたでしようかね」との質問に對して、松木さん（夏目漱石氏）は暫く考へてから、

「さうだね。博く知つてゐた事は、確に博く知つてゐたね。が、その博く渡つて居るある部分を押して行くと、それがどれ位深いかは、一寸問題だがね」と云つてゐる。

漱石氏の評語ほどあつて、上田氏を評して要を得てゐる。間口の廣い人が奥行の淺いのは當然である。上田氏は學問の深い人ではなかつたであらう。しかし、今私はこの一節を讀みながら、ふと考へた。……漱石氏は敏氏よりも、藝術についてどれほど深く入つてゐたのであらうか。ある特殊の人物や時代について、一生を捧げるくらゐに深く研究することは、専門的學者の態度であらうが、自己の心で藝術を味得するのを最高の目的とするためには、一所に停滞し、部分的に拘泥する必要はないのである。上田氏だつて西歐の詩歌の鑑賞に於ては、夏目氏に負けなかつたであらう。

西洋の詩の味ひは、言語の關係から、日本人には分らないと、芥川君なども云つてゐるが、しかし、分る分らないは程度問題である。私などは西洋の詩を愛讀してゐる。日本の和歌や俳句にも勝つた興味を感じることもある。私はそれでいいと思つてゐる。私は、教壇に立つて外國の詩を講じようとする自信はない。しかし、一知半解にしろ、自分だけで興味を感じ、自分の心の糧としてゐるのは差支えないと思つてゐる。はじめから分らないと極めて、強いて外國の詩に目をつぶる必要はないと思つてゐる。

短くて取つつき易きためでもあるが、私は、この頃は、外國のいろ／＼な詩人のものをあれやこれやと讀みかじつて、寂寥たる心境の慰めとしてゐるので、かういふことに言及した。

西洋羇旅小品

齋藤茂吉

十五　翌日

間もなく柔い日の光が、水晶群のやうな山嶽の巔を照らした。沈む雲は追々と沈み、程ちかい白雲のうちには、湖上をうづめ盡した雲海の上に遊ぶやうにして動いてゐるのなどもある。

一方の峰巒群はいまだ日光を受けずに、鉛いろに靜まりかへつてゐるのは、脈搏のない、非人間的であり、非生命的であり、先經驗的であり、未生以前的である。救拔の感はここに本づいてゐるのではないか。けれどもこれらの雪山の群立は或時にはひどく人間的であり、迷惑的であり、悲哀沈痛を藏してゐる。セガンチニイの畫境の涙はこのへんに根據を置き、その涙がたまたま疲れた旅人などによつて顧られるのはこのためである。近いころ歿した獨逸のゲオルグ・ジムメルは、いつぞやアルプス山系のことを書いて menschlich といふ字を使つた。何かいらいらしてゐるところは、人間的だといふのであらう。

僕は妻とむかひあつて朝餐の珈琲を飲みながら、計らずもこんなことをおもひ、ふと妻の顏を見れば、取分けあやしいといふよりは、やはり人間的な親しみがそこにあらはれて來て居つた。二人が部屋に歸つて來たときには、もうすつかり掃除が出來て居り、二つの床の敷布なども、きのふ此處に著いて、はじめて見たときのやうに整然となつてゐた。

二人も、それからきのふ此處に宿つた五六組の旅人等も登山電車で山を降つた。途中で會ふ、小さい車を挽き、薪をおつめ、小停車場で高山の花を賣る娘たちを見れば、みな顏が風燒（かざやけ）して、粗い赤い兩の頰を持つてゐるのであつた。僕等の電車はある時には白雲のかたまつてゐるなかを通つた。山上では其處にあつた雲は沈み次第沈み、空は寒く澄みきつてゐたのであるが、山の途中に來ると白雲がいまだ其處に滯つてゐるのに逢著したのである。

Vitznau（ウイツナウ）といふところに朝の九時二十分に著いた。それであるから登山電車は道をば東南に取り、きのふ登つて來たのとは反對の方嚮を降りて來たのである。ここは湖畔の小村で、湖畔に立つてゐると靜かな浪が絕えず岸に打寄せてゐる。水は澄明で底の小砂利を凝視することが出來る。小さい浪に絕えず洗はれてゐる小砂利のなかには瀨戶のかけだの、水草の根を絕えたものだのが打交つてゐるが、魚の骸などは見つからない。併しその時直ぐ水邊の穢い上海長崎あたりを思ふのは必ずしも望鄉の念といふのでない。猶太の族が淚をながしてエルサレムをおもふのとはどうもちがふ。

ここに來る汽船を待つて、それから大湖を西へ航して Luzern（ルッエルン）に行かうといふのであるが、ここからゆうべ宿つた山上を見ると雲に全くとざされてゐるのである。さういふことも旅人には一つの氣持を起させるのであるけれども、業房にとぢ籠つて鬱悒として働いてゐた時分には、こんなことはつゆ思つたことがなかつたといつていゝ。併し旅も先から先へと行くのであり、逢遁から逢遁への渡合であるから、業房內の所見觀察から所見觀察への過渡ともまんざら似寄がないとはいはれない。たとへば、こゝの湖畔には、胡桃の木があり、栗の木があり、梨の木があり、林檎の木がある。それらは今までも絕えず目睹した樹木である。然るにそのそばに一本の柿の木があつて、色づきかけた柿が幾つかなつてゐる、それ

ばかりではなく、葉がもうもみぢしかけてゐる。柿の葉が赤くなり黄色になり斑らに色づいて、少しく地上にちりしいてゐるのを見ると、旅のあはれを僕は思ふ。足掛五年ぶりではじめてこの柿の落葉を見たときには僕はやはり望郷の念を否定することを得なかつた。特に、僕は生をこの瑞西の地に享けてる運命におかれたとするなら、僕は小さい庭に柿の木を植ゑ、公孫樹を植ゑ、牡丹のたぐひを植ゑようとするのではあるまいか。そんなら、僕はつひに猶太族のエルサレムのために灑ぐ涙をば嘲笑し得ず、そして、チオニズムスの文句のなかの幾つかの語彙に目をとめてもいゝのではあるまいか。

つまり、汽船が來て、客がどやどやと乘込んでしまつた後までそんなことをおもふこともあつた。船は Vierwaldstätter See の北岸に近い路を取つて進んだ。船中は、山上とはまた別の世界である。手洗に行つた妻は、『おほ繁昌でなかなかだつたわ』などと云ひながら歸つて來た。

兩岸に聳えてゐる山々は未だ白雲に閉ざされてゐるが、なかには鋭い嶺だけあらはしてゐる山などもある。午前十時二十分に Weggis といふ小港に著いた。ここで客の昇降があり、英吉利人らしい面長の夫婦一組ばかり乘込んだかとおもふと、それに續いて登山裝束の一隊が乘込んだ。ここまで暫くのなじみに過ぎないのであるが、上陸した人等は船の動き出すまで岸にゐて手巾などを振つた。

船はやはり路を西方に取つたが、このあたりから岸の草野や傾斜には放牧の牛が群れてゐて頸につけてある鈴の音が船まで聞えて來る。先ほど乘込んだ登山者の一隊は古風な樂を奏して歌をうたひ出した。小兒も媼もそのそばにたかつた。それから、歌のなかばで、一人の男が帽を持つてまはりにたかつた人々の前を廻つた。これは幾分の酒代を乞ふためである。が、その態度は恬然としてゐて、毫末もそこにこだはりはない。古い風習の名殘だとおもふと興醉めるやうなことはない。

午前十一時に船は Luzern に著いた。先ほど山の岬が兩方から突出でて、湖が急に狹くなつたと思つたが、それは此處

の港口のところに近づいたのであつた。

Luzern（ルツエルン） は、湖水に面し、山を負つた町で、いかにも瑞西らしい特色を持つたところである。夏分は困るとおもふが、秋口の今、一日二日でも滯在したいと思はせるところである。僕は妻を停車場の食堂に待たせておいて、大いそぎで街を歩いた。街の繪葉書を賣る店に耳の遠い老媼がゐて、僕に支那の國まで幾里ぐらゐあるかといふことをしきりに訊いた。僕はその店から湖水で船遊してゐる繪葉書などを買求めて歸つて來た。

それから十二時近くの汽車に乘つてこの地を離れた。僕らは今日のうち Interlaken（インテルラアケン） まで行き、そこに一泊して近くの高山に登らうと目論んだのである。汽車は南の方に向つて走つた。暫らく平地のやうなところを走つてゐたが、今度は二たび湖畔に出て眼界が急に廣くなつた。湖は午前に渡つて來た湖の一部で、その水際に建つた幾軒かの旅舍も見え、避暑客の殘りらしい一組二組の夫婦者が出入して居り、汀に網の懸けてあるのなども見えた。汽車はそれから西南の方へ走り、やうやく山地に差懸ると、驛毎に多少づつの昇降客があり、ある驛などからは近邊の高山に登る登山電車に連絡するところもあつた。汽車はある時は平地とその遙か向うに湖らしいものを左手にのぞんで走り、その平地には洪水でひどく荒された川原などがあり、あるところには小川に橋が掛かつて居て、その橋は屋根を持つてゐるところなどもあつた。汽車が、Kaiserstuhl（カイゼルスツール） や、Lungern（ルンゲルン） あたりを過ぐるころは、山が追々深くなり、見える家々はみな山家の趣で、ある峽間を通つた時などには汽笛の音が非常に長い反響をおこしたりした。このへんは草野でも、一寸した湖水でも牧牛でも村の寺院でも、すでに高山國の特徴を具へてゐると見て差支が無い。規模が未だ小さいと思つてゐるとその側に存外大きい山が聳えてゐたりするのであつた。

汽車が Brünig（ブリユニッヒ） といふ驛に著いたとき二十分間ばかり停車するといふことであつた。多くの客は車房から降り、停車場の小さい食店で麵麭を食ひ葡萄酒を飲み麥酒を飲み珈琲を飲み料理を食つた。

ここは山の中の小驛である。妻は物憂いやうな面持でゐるので妻をば車房内に殘し、僕は食店に行つて小料理一品をあつらへてそれで赤葡萄酒を飲んだ。それから其處を出て停車場のかげに廻ると一軒の小さい店がある。店では繪葉書だの木細工だの手巾だの頭巾だののステッキだのを雜然と賣つてゐる。僕はそこに入つて繪葉書をいぢりはじめた。繪葉書は大體アルプス山を中心としたものであるが、いろいろおもしろいものがあつた。山頂地の中の高原などにも欲しいのが幾枚もあつた。僕は、雪に光つてゐるがあんとした山嶺が直ぐ後ろに突立つてゐて、牧牛があちこちに居るのを一人の童子が見張つてゐる處だの、湖水の彼方に太陽のはひるところだの、峻峰の前面に雲が忙しく動いてゐるところだの、高山地方の農民の風俗だの、さういふものを幾枚か選り出して、さて三たび繪葉書の枚數を勘定しようとした刹那に、ものの動くやうな音の方をば僕はひよいと見た。すると、僕の乘る筈の汽車はもう動き出してしまつてゐる。汽車はすでに速度をはやめてゐる。こゝから汽車までには一町半もある。

僕は選り出した繪葉書をつかんだ。それから殆ど反射的にその繪葉書を置いて、蟇口から銀貨を出してそれを上さんに渡した。それからまた繪葉書を手につかんで、殆ど反射的に車を目がけて駈け出した。そして線路のうへを一目散に駈けた僕は、ぶらさがるやうにしてやつと汽車に飛乘つた。

そこに妻が直ぐやつて來た。そして『あたしほんとうにどうしようかと思つたわ』といつた。けれども僕は動悸がして何も云ふことが出來なかつたのである。僕はさしむき席に腰をおろした。そして、同じ車房にゐる外國人どもの手前もあり、今買つた繪葉書などを見はじめたが、實は繪葉書などはよく見えなかつた。しばらくすると妻は小ごゑで云つた。『あたし、車掌に wait a bit! wait a bit please! と云つたけれどちつとも通じないでせう。それから佛蘭西で attendez un moment と云つたけれどやつぱり駄目なのよ』こんどは妻は微笑した。それから『慌ててゐるから言葉も何も出ないのよ。』こんなことも云つた。

沈默が少しの間つづいた。さうすると妻はまた云つた。『お前さまは人並みはづれて神經質だけれど、また餘り呑氣過ぎることもあるわ。そら、いつか門司でも一汽車おくれたでせう。あの時だつてあたし隨分心配してよ。けふだつておんなじことだわ。』

大正八年の一月に、僕夫妻は東京を立つて長崎に向つた時のことである。海峽を汽船で渡り、九州線の急行列車に連絡するところを、僕はバナナ店をのぞき歩いてゐて、その急行に乘後れ、妻だけ先に行つたことがある。そのことをいふのである。僕はいま妻から云はれてはじめて過去のことを思ひ出した。そしてそのことを手繰つていろいろ追想すると、心のやはらいで來るのをおぼえた。そこで小ごゑで少しづつ話しかけた。

しかしけふは思へば不思議な日であつた。けふの行程は誠に平凡である筈であり、大湖をば汽船で渡るのが第一の眼目であつたのであるから、かういふ小驛でひどい目に會ふといふやうなことは實におもひまうけぬ事なのであつた。そして僕は妻の顏を見たが、けふの曉天に山上の日出に對しながら見た時の顏とはちがふやうに見えた。

それからも僕は沈默がちであつた。そして先ほどの行動をおもひ當つてゐた。あの刹那に僕は割に平氣だつたのではないか。それから何かに甘えたのではないか。同情のやうなもの、Sympathie に類するものを豫期したのではないか。それには稚幼の甘えに似たものがなかつたか。この汽車は一日一回きりの汽車であるが、丸一日後れるつもりなら、爲方がないからこの儘おくれてやれとは思はなかつたか。しかし、それではならぬ。やはり追ひすがらねばならぬ、どどのつまり、是非飛乘らねばならぬと思つたのではないか。まかりちがへば怪我するかも知れぬ、それでもかまはぬと思つたのではないか。そしてこれらの心の運轉は實に突嗟の間に取りきめられたのである。僕はその時こんなことをも思つた。ノオトルダムのてつぺんから落ちて自殺する人間も、遠い雲の上から墜落してくる飛行士も、はじめの一瞬間には極く平凡な甘いことでも意識し得るのではあるまいか。そして何か知ら切實な意識の中に移るか移らないかの次の瞬間にはもう死ん

でゐるのではあるまいか。病牀に於ける死の豫感などもやはりさうではあるまいか。いよいよ駄目だとおもふか思はないころにはもう死んでゐるのである。それの直前の刹那まではあたりまへの甘いことを思つてゐるのではないか。云々である。

汽車が Meiringen（マイリンゲン）を過ぐるころから、雨が可なり強く降り出した。大きな山が車窓を壓するやうに聳えて、ところどころに瀧が懸つてゐる。その瀧は決して平凡なものではなく、車中の客だちも首を延してそれを見た。汽車が可なり大きな湖水のほとりを走つたかとおもふと、間もなく Interlaken（インテルラアケン）の東停車場に著いた。それから馬車を傭つて旅舍に行つた。

小さい南向の部屋は、頑丈に板張で出來てゐるので、歐羅巴大都市の多くの旅舍に見るやうな煉瓦と石と土とから成つてゐる部屋よりも親しみがあつた。Jungfrau（ユングフラウ）の高峰はここから眞向だといふのだけれども、今は雲烟に蔽はれて見えない。

僕等は傘をさして町を見に行つた。此處は避暑地として名高いところであるが、もう秋であるから客は散じてしまつてゐた。立派な旅舍が、幾軒も幾軒も並んで居り、その間には幾軒も幾軒も賣店が並んで居る。賣店を覗くと、多くは高山地の名産を賣るのであつた。そのなかには、木彫の猿だの、熊だの、羚羊だのいろいろある。それから、小箱、封筒きり、墨汁壺、木製の匙、その他の細かい品物が澤山並べてある趣は、恰も箱根、伊香保の溫泉場の賣店に似てゐる。僕はふとそれらのなかから小さい木の男根を見つけて、內證にそのほかの品物と一しよに包んで貰つた。

そんな工合にして、雨のしよぼしよぼ降るなかを步いた。土地の者等は直ぐ僕の妻をかへりみて何かさゝやく。外國の客に馴れた土地でも東洋の女がやはり珍らしいに相違なかつた。段々場末の方に行くと、そこに小さい市のやうなものが立つてゐて、雨の降るなかに人がたかつてゐる。原始的な見世物などもある。これは外國人向のものではなく、やはり土

地の人には土地の人向のものがあるといふことなどを思ひながら僕等は其處を去つた。そこから間もなく大きな湖水が見える。これは Thunersee（トゥネルゼエ）の一部である。それに灑ぐ水であらうか。僕らの足もとを勢づいて流れてゐる小川は雨が降つても濁るやうなことはない。僕はかういふ豐かな水を見る毎に、いつも段々痩せて滅んでゆく東京の神田川や外濠のことなどを思ふのであつた。

旅舍に歸つて來て夕食を濟ましたころ、一人の日本人にあつた。この紳士は大阪の大きな商店の人で、Jungfrau（ユングフラウ）に登らうとしたが、連日晴れず、やうやく昨日登山してみると、やはりひどい吹雪であつたといふやうなことを話してくれたのだつた。けふは既に九月廿六日であるから山を閉づるのも間がない。そしてこんな風に雨天が續くなら、つひに山の姿も見ずに空しく此處を立つてしまはねばならぬかも知れぬ。こんなことを思つて部屋に入つたが、運よくば明日は晴れるかも知れんといふことを、能ふかぎり都合よくきめて床のうへに横になつた。

瑞西の住民は、一方は獨逸語を話し、一方は佛蘭西語を話してゐるほど、民族意識の尠い國民だと謂つてゐる。それであるから民族鬪爭に堪へられなかつた者は一時身をこの地に避けるのを常とした。また民族に因する悲劇なども間々この地で演ぜられた。かつて墺太利皇后の殺されたのなどもやはりこの瑞西の遊覽地に於てであつた。そんなら、民族否定の大運動の如きものがすぐさま瑞西で成就するかといふに、さうは行かない。また、逆にプロレタリアートは民族觀から遠離すべきであるなどといひ、さういふ旗じるしなども度々見せられたけれども、猶太族でない限り、獨逸・墺太利あたりの勞働者にはそれもむづかしからうか。維也納にゐるとき、デモンストラチオンをあれほど見せられたが、近頃また首相を襲ふ者があつたりして、墺太利などといふ國はどんな運命になつて行くものか知らん。專門の學者にたづねてもやはり簡單には片付けられぬものか知らん。

こんな斷片も頭の中を去來した。それにしてもけふは一寸不思議な日であつた。あそこで汽車に飛乗らなかつたとした

ら、今時分はあの驛の寂しい旅舍にゐたに相違ない。さうすればやはり飛乘つて好かつた。哲學者のテオドオル・チーヘンが維也納に來て『將帥の心理』について講じたことがある。そのときモルトケの語を引いて、『divinatorischer Charakter』といふことをいつたことがあると思ふが、僕のあの時の心理にかういふ勿體をつけてはいけまい。併しひとに附けてやるのではない、竊に自らに附けるのであるからかまふまい。

かういふ錯誤の連續では目が益々冴えるといふことはない。そして意識がだんだん朦朧となつて行つた。

十六　ユンクフラウ行

Jungfrau（ユンクフラウ）は處女の義である。この國に群立してゐる高山は實に數限りないと謂つていゝが、獨逸語方面では多くの旅人はこの處女峰に登つて意欲の滿足を覺えるのであつた。

朝五時ごろ、窓外の明けたばかりの空に意外な山が見えて、雲が西へ西へと流れてゐる。これが Jungfrau（ユンクフラウ）であつた。山は氷砂糖を碎いた樣に鋭く、雲の流の工合で前方に雄大にただれ落ちた谿谷が見えて、それが既に一面の雪でおほはれてゐる。その左の方もまた急に落込んで幾里かの大斷崖をなしてゐるやうである。それから幾つも前山を持ち、その山間を深い谿谷が流れて、ここの町の近くに至つて湖に灑ぐやうである。山の名は處女峰であるが、相貌は鋭くて先づ若い武士を聯想せしめる。併しいつのころよりの名であらうか、いまだ犯されない處女のきびしさを表示しようとしたものに相違ない。

僕等は急いで朝餐を濟まし、手荷物を停車場にあづけて、ユンクフラウ登山電車に連絡する小さい汽車に乘込んだ頃はもうかれこれ八時半を過ぎてゐた。未だ雪の降らない鋭い前山の間から雪が降つて既に白くなつた連峰の見えかくれするのを注意しながら、僕等は追々さういふ山峰に迫つて行く氣持である。汽車は小さいので僕等はゆられゆられて行く。

車窓の外には刻々に變る景色を現出する。運好く、けふは雨も晴れたのであるから、客等も威勢づいてゐるらしく、殆ど無間斷に話ごゑがしてゐる。獨逸語もきこえる。英語もきこえる。僕等の知らないいづれかの國語もきこえる。二人組の支那人もゐる。さういふ工合である。

急に瀬の音がしたりする。かとおもふと、谷間のやうなところに小鳥の群が飛立つたりする。或る時には汽車は平凡で靜かな草野の間などを通る。そこに野菜畑があつたりする。或ところでは頸に鈴をさげた牧牛が群れてゐる。一處に臥しながら草を食つてゐるかとおもふと、孤獨さうに向うの丘の鼻のところに立つてるのもゐる。或時には汽車が大きな岩山の間を通る。その山の膚は支那山水畫法にあるのとそつくりなので、支那畫論で讀んだことのある幾つかの皴法の熟語をおもひ起したりする。汽車は谿谷の中腹あたりを行つたころ、右手に大きな瀧の懸かつてゐるのが見え出す。皆がその方に目を向け、倫敦生れらしい男の子などは窓から體をのり出すやうにしてそれを眺めてゐる。

Lauterbrunnen（ラウテルブルンネン）で汽車を乘換へて、それからは登山電車になつた。ここは谿谷の驛で、さきほどの大きい瀧はこの驛の近くにあるのであつた。谿谷の名を Lauterbrunnenthal（ラウテルブルンネンタール）といふ。これが深く南方に入込んで、處女峰の方に極まつて居り、そこを流れて來る川も細い糸のやうにうねつて見える。この川のすゑが、今朝、旅舍の窓から見た谿谷になるので、やはりしまひが湖に灌ぐのであつた。

登山電車は徐行したから、だんだん高いところに行く。方嚮は北を向いて行き、それから東の方へ向いたらしい。電車が高みへ登るに從つて眼界が自然と展開して來て、谿谷を挾んでゐる山は實に大きく、そこは未だ雪が降らず、青いところがあり、牛が點のやうに見え、村落があり、寺の尖塔があり、その高原が日に照らされると、家が小さい陰影を作る。高原の奥から出た川が村のあたりを流れ、つひに瀧になつて谿谷に落ちるので、さういふ瀧は大小幾筋も見えてゐる。

電車の進行につれて、また大きい山はいよいよ大きく、高い山は無限に高いやうに見えるが、特に此處から見おろす谿

谷は、なぜこんなに深かつたかと思はれるほど、地球の雄大な創口として現出してゐる。ここには、もうあはれをば決して感じてゐなかつた。

隧道を一つくぐり、展望が新になつて來たやうにおもふと、また同じ谿谷の一部に逢着した。かういふことを繰返して電車は進んだ。そして Wengen（ウエンゲン）といふ山上の驛に著いたのは午前十時過ぎである。ここから支線があるらしく、ここでスキーの道具を荷つた幾人かが降りた。

この驛を過ぎてからは、風光が一時に峻嚴の度を加へて、白く光る山の鋭い頂が重りあつて直く眼前に出沒するやうになつた。雲烟の動運と日光の明翳とで、それがかがやき又はくらく一刻も常住とは云はれぬ氣持である。また、晴れた空に見えてゐる山嶺のその輪廓を凝視してゐるのが誠にいい氣持である。たださういふ氣持を何かの形式であらはしたい欲望もあり、靜かにその儘にしておきたいといふ念願のやうなものもある。觸れば亂れるといふやうな心持でもあらうか。

ここに來てからはじめて氷河を遠望することが出來る。氷河は豐かな水のながれのやうでもある。吹雪のしづまつた後の雪原のやうでもある。それを圍んで、とがつた山の頂が幾つも並んでゐるが、それが如何にも小さく低く見える。その全體が雲涯に据ゑられてゐるのであるから、實に寂しい、變なものである。

電車の軌道に近く、小屋などが見える。これは登山者のために建てられた Hütte でもあらうか。それから、そのあたりに小さい鴉が幾羽か舞つてゐるやうになり、鋭角に氷柱の列が見えるやうになつた。

さういふ雪中に羚羊が住んでゐるので、旅客の數人がしきりに望遠鏡で見きはめやうとしてゐる。「あらあら、小さいのもゐます」などといふ。その客から借りた望遠鏡はツアイス會社のものであつた。その視野の圓いなかに、羚羊が二つばかり動かずに此方を見てゐたりする光景は、嘗て下界の町で見た活動寫眞そのままである。僕はあの時に見たいとおもつ

てゐたアルプス山上に今ゐるのだと思ふとやはり妙な寂しい氣持である。しかし息を切らし切らし苦勞を重ねて此處に到り着いたのではない、電車に腰をおろしてひとりでに來たのであるから、活動寫眞を見てゐるのと大きい差別がないといふことに就いて、もはや僕も餘り語を費さうなどとはおもはぬ。さう思ひながら、山嶽の嚴しい現實が眼前にあるのであるから、それをまた奈何ともすることが出來ぬ。かういふ感情の交錯をも經驗しながら、山嶽の位置のゆるくかはつて行くのを見てゐるのである。

Scheidegg（シャイデック） といふ山上の驛でまた乘換へたところから、今まで空の一部が美しく澄んでゐたのに、雲の動きがあやしくなつて來、きのふの吹雪のときに降り積つたとおもはれる雪のうへに、また小つぶの雪が降つて來た。忽ちにして吹雪になり、前面の雪も巖も、遠くの山も盡く見えなくしてしまつた。それであるから、午前十一時十五分以後その驛を發してからは電車は吹雪の中を徐行していつた。

Eiger（アイゲル） の高峰を、その半腹あたりを電車が通ると、隧道が二つ三つある。その隧道の巖をくり拔き、玻璃をはめて山嶽國土の展望が出來るやうにしてゐる。客どもは電車から降りて慌しくその巖のところに行つた。玻璃窓にも思切り吹雪が突あたり、玻璃のない處からは雪が吹込んで來て波狀をなして積つてゐる。そこに近く寒暖計が据付けてあるのを見ると、零下二十度近くを示してゐる。

Jungfraujoch（ユングフラウヨッホ） に著いたのは十二時二十五分であつた。この停車場は巖窟に寄つて建てた一軒の家だと云つてゐる。欄のところに近づいて行つたけれども、ひどい吹雪のために前面には何物も見えない。ただ、濛々たる灰色の空に細かい雪片が無數に動き、欄のところから見おろし得る谿間のなだれには十羽ぐらゐの嶽鴉の群が飛翔してゐるのみである。

僕は二階の食堂に入つた。そこには同じ電車で來た英語を話す一組や、僕に分からぬ語を話す一組や、支那人などがゐた。僕は彼等の食べてゐる料理を瞥見し、何となし高さうであるから、一つも料理を注文せずにその食堂を出た。

階下をのぞくと、そこにも食堂があり、背嚢（ルツクサツク）を持つた一組がそこに這入つてゐる。僕ら夫婦はそこに這入つて腰をおろした。部屋は狭いが板も柱も新しく、木の香がぷんぷんとして居る。そこには一人の娘が甲斐々々しくたち働いて肉汁や料理を客のまへに運んでゐる。僕らは熱い肉汁と麵麭で食事を濟ました。肉汁は分量の多いどろどろしたもので、やはり墺太利あたりの山中で呉れるやうなものであつた。こゝの客達の多くは、熱い肉汁だけを注文し、麵麭もハムも腸詰も背嚢に入れて持つて來たのを食べた。僕はしばらくそこに休み、手帳を出して極く簡單に今までの日程を書きつけ、それから、谿間に飛んでゐる黑い鳥は何といふかと問うた。娘は器用でない獨逸文字で Bergdohle と書いて呉れた。

この停車場の一つの口からもつと上の方に登つて行くところがある。そこをひよいと覗くと雨おろひどい、駄目です、駄目です。』などといつて戻つてくる西洋婦人に會つたりした。

これが晴天であるなら、眼前に展開する。アルプス連峰は勿論、遙か彼方の大きい湖水、その間に散在する村落都邑、引いては南方獨逸の山の起伏さへ見きはめることが出來るので、案内記にはこまごまとその特色が記してある。僕は平面地圖を目のまへにしてしばらくその廣大なる風光を空想してゐた。

電車の出發は午後二時二十分である。僕らはこの山頂の繪葉書にスタンプなどを捺してもらひその一二枚に文句などを書いた。さうすると思ひがけぬ近くに山嶺の尖つた一角があらはれたりした。これは雪が小降になつたためである。併しそれがほんの一部で、全體は依然として朦朧のうちに沒してゐる。獨逸語に [illegible] といふのがあるのはかなひふことだらうなどと僕はその時おもつたりしたのである。けふの登山は、吹雪に逢つたために登山の本望を遂げたとはいひ難い。けれども曾て伊太利のヹスヸオに登つて濃霧に逢つたときのやうに殘念には僕はおもはない。あの時には氣がいらいらして殘念がつたことをいま思出してゐるのである。

欄によつて雪の小降になつた谿間を見おろしてゐると、山鴉等は翻轉しながら飛ぶ。新聞紙の片などが投げられて、

谿がそれに追すがるやうにむらがるといふ工合である。そのときスキイをやる一隊が食堂の裏のところから、一人一人谿間の底に辷りおちて行つた。なかに數人の女もゐる。女の一人二人は雪まぶれになつたりして轉がりおちて行つた。皆が背嚢を負ひ甲斐甲斐しい裝束をしてゐる。女らが流蘇の附いた帽子を冠つてゐるのは、決していやな容子ではない。皆が手に手にスキイを持つてゐる。

このやうにして二十餘人が辷りおちて行つた。そして其處でスキーを穿くのであるが、手早く出來るのもありなかなか愚圖愚圖してゐるのもある。さうしてゐるうちに、三人づゝ五人づつぐらゐになつて、雪のうへを辷つて行く。雪は谿間の底から幾つかのゆるいうねりを持つた山を越えて、遠い雄大な氷河の方に續くのである。僕らはさういふ光景を見てゐた。先發隊の一部は既に一山のかげになつた。それに續く一隊は朦朧と黑くなつて見えてゐる。いまだ出發しないのもある。この光景は普通の山間のやうなスキイ場では見られぬものであつた。彼等はあのやうにして雪のあるところまでは行き著くつもりであらう。

あの人々は勞働階級ではなからう。しかし富有の者では無論ない。一定の職業を有ち、一日一日勤勉に爲事をしてゐるものであらう。それが金を工面し、時間の工面をつけて、遠く獨逸墺太利あたりからも來るのであつた。

電車は、さういふ光景をそのままにして置いて出發した。Scheidegg に三時三十分著。それから別な途を取つた。Grindelwald に四時四十分著。雪がだんだん減つてつひに無くなつてしまふ。汽車に乘換へてそれから二たび大きな谿谷に沿うて走つた。この谿谷は Lütschenthal である。山は二たび青くなり、丘陵には牛が居り、窓外の野には赤く色づいた草もみぢなどが見えるやうになつた。

Interlaken には六時十分に著いた。それから慌しく荷物を受取り、三等切符を買つて、Bern 行の汽車に乘込んだ。汽車は暮色の到るころ、Thunersee の大湖畔を縫うて驀然として走つた。

いそがしい、倹約な旅を續けてゐて、つひに處女峰にも登つたら もの凄い汽車にまどろんだ後などには、さういふことをして何になるだらうかなどとおもふことがある。併し何かになるだらうとは僕もおもふ。そして容易にそれが可能なら、豪華な富者として、ペルヴニウとして旅したなら少しは愉快だらうともおもふ。organi ierta Oabata。などといつて威張つても、それは果敢ない感情の戯に過ぎない。すくなくとも今日は僕はさうおもふ。

午後八時十分汽車は Bern に著いた。

後記。このごろ、ユンクフラウ登山電車の案内圖のやうなものを見つけた。粗末な石版畫がついてゐるが、雪谿のところが印刷してある。

そこに立つてゐる人々は、男も女も極く現代風に畫いてあるのが僕にはおもしろい。例へば女などは巴里風と謂はうよりは紐育風と謂つた風俗である。そして雪のうへに立ち、望遠鏡などを持つて、雪谿を越えてそれに續く鋭い山を見てゐるところは、眞夏の時候を畫いたものらしい。一二の女は外套なしで立つてゐるからである。西暦一九二二年ごろなら、さういふ風俗の女が獨逸の地方の都市などを通ると、獨逸の土地の者どもは眼を瞠つて見たものである。名所の繪葉書、案内書などにかいてある男女の風俗はすでに時におくれたものの方が多い。僕が粗末なこの石版畫に興味を感じたのはそのためである。

それからその石版畫は、雪を色どるのに、薄紫と、青とを以てしてゐる。僕がユンクフラウに登つたとき、峡谷から見ると遊ひかぶさつてゐる雪は青く見えた。つまりそれである。

三省堂英和大辭典

各專門大家百余氏執筆

生みの努力四十年・愈々三月特價發賣

本書成って英語の國譯始めて完し

百冊の辭書も大英和一册に及ばず

英語辭典界の最高峯!!!

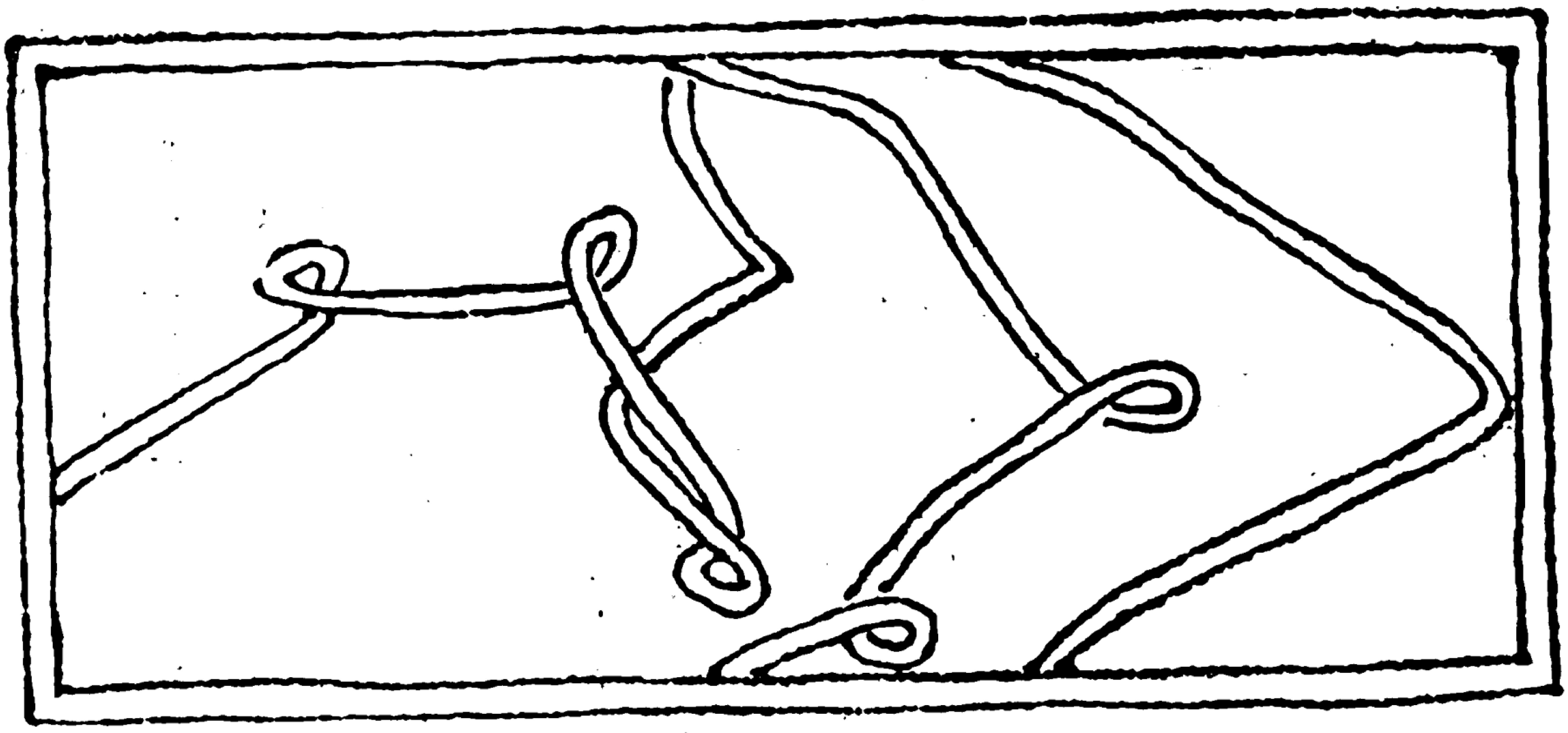
裝幀　新型四六版最上クロース製
總金箔押・箱入
頁數二・七〇〇　語數二六〇・〇〇〇
挿畫四・〇〇〇　熟語一一〇・〇〇〇

前例を破つた値段――特價五圓五拾錢（定價七圓）

三十萬部限提供　書留送料卅六錢

その内容――

1. 努することなく、直ちに求むる個所へ眼がとゞく最良唯一の工夫
2. 廣き範圍に亘り專門語を蒐集し正確なる譯語を附して區々に流れた在來の譯語を統一し、ここに我國の標準譯語を示す
3. 挿畫四〇〇〇、いづれも典據あるものに依り、明瞭適確に説明を補足する
4. 最新語のすべてを加へて空前なる語數を擁し、求めて得られない言葉は一つもない
5. 日常會話はもとより、文藝上のもの、各科專門的のものに至るまで、一切の熟語を網羅し、宛然一大熟語辭典の資格を兼ねる
6. 發音は一見明瞭・語原の重要なるものはこれを示す



溺るゝもの

豊島與志雄

一　或る圖書館員の話

堀割の橋のたもとで、いつも自動車を乘り捨てた。

眼の屆く限り眞直な疏水堀で、兩岸に道が通じ、所々に橋があつて、黑ずんだ木の欄干が水の上に重り合つて見える。右側は大きな陰鬱な工場、左側は小さな粗末な軒並……。その軒並の彼方、ぼーつとした明るみの底、入り組んだ小路の奧に、燐光を放つてる一點があつた——彼女がゐた。

燐光……そんな風に私は彼女を感じた。

彼女は眼が惡かつた。輕い斜視で、その上視力が鈍つてゐた。十六七の時に急に惡くなつたのだといふ。兄は盲目ださうだ。遺傳性黴毒からきた黑内障ではないか

と私は思つた。が彼女は角膜炎だと云つた、そして近眼で亂視だと……。近視十五度の私の眼鏡をかけて、よく見えると喜んだ。

「眼鏡を一つ持つてたけれど、轉んで壞しちやつて……それきりよ。眼醫者に行くと、長く通はなけりやならないから……
……。」

その眼が、黑目も白眼も美しかつた。眉墨で刷いた細い長い眉の下、くつきりとした二重眼瞼の方へ黑目を寄せて上目がちに、鏡の中を覗きこみながら、寢亂れた髮の毛をかき上げてる、輕い斜視の乏しい視力の眼付と眞白な細面の顏とを、傍から鏡の中に眺めるのを私は好んだ。

「また……。いやよ。惡口云はうと思つて……。」

鏡台を押しやつて彼女は笑つた。

淋しい靜かな笑ひを彼女は持つてゐた。薄い眉と二重眼瞼と細そり高い鼻とはそのまゝに、少しつき出し加減の薄い唇を中心としてる線のなだらかな細面の下半分に浮べる、その淋しい靜かな笑ひには、氣心を置かない時には、或る哀切な弱々しさが加はり、會つた初めに「いらつしやい」と形ばかりの挨拶の後の時には、或る一本氣な強さが加はつた。後になつて、その笑みが彼女の眼にまで擴がつてきた時、私は何だかそれに應じて微笑めないやうなものを感じた。

さうした彼女の方へ足繁く通ひながら、堀割の緣で、私は幾度か夢想に沈んだ。

堀割の水はいつも濁つてゐた。水面まで泥深く油ぎつて、どんよりと湛へてゐた。濁つた水といふよりも、一種の溶解液だつた。あらゆるものが、注入してるのではなく溶けこんで、腐敗醱酵のも一歩先に出てゐた。その重々しい表面はゆるぎもなく、晝間は太陽の光を吸ひこみ、夜分は街燈の光をはね返してゐた。

あちこちに、二三艘の荷足舟がもやつてゐた。けれども私は曾て、その舟の動いてるのを見たこともなければ、舟の中

に人影を認めたこともない。中程に何か積んで蓆を被せられて、流れのない汚水の上に舟緣低く繋ぎ捨てられてゐる。それでも時々位置は變つてゐた。

赤煉瓦と亞鉛板とで出來てる荒々しい幾棟かの工場が、堀割の上に大きな影を落してゐた。煙筒からは、煙が出てるが、建物は靜まり返つてゐた。機械の音も職工等の氣配も、その内部で窒息してしまつてるかのやうで、永遠に休業して立枯れしてるのか、或は死の工場でゝもあるやうだつた。

その工場の圍壁に沿つて、堀割の緣を、私は考へ込みながら歩いていつた。それから、橋を渡つて彼女の家の方へ折れこむあたりまで來ると、ひとりでに足が早くなつた。

彼女に近づくに從つて、新たらしい生活が私の胸にぴつたりきた。

實際、そこの堀割と工場とは、私の過去七年間の生活と何かしら似通つてゐるものを持つてゐた。

愈々圖書館生活に別れを告げることになつた時、私は坐り馴れた卓子に兩肱をついて、深い感慨に沈んだのだつた。二月初旬の淡い日脚が、窓から床まで斜に落ちてゐた。その明るい角塲を除いて、室の中には淋しい影が立罩めてゐた。影の中で、數人の同僚が、自働人形のやうに默々と働き續けてゐた。用があつて口を利く時にも、皆聲を低めた。時がたてば書物が埃に埋もれるやうに、彼等の聲も沈默のうちに埋もれる。私は自分の聲がだんだん低くなるのに氣付いて、びつくりしたことがあつた。扉の向ふには、更に薄暗い室に、書物が一杯並んでゐる。その表紙と目次とを調べて、カードを整理するのである。私の洋服の織目には、書物の埃がたまり、機械的に働かせる頭には、白い雲脂がたまつてゐる。毎日午前九時から午後四時まで、月給百圓……。そして家には、母と妻と娘、それから夕食後、生活のための飜譯の仕事……。せめて、多少の心醉か興味かを以て、その飜譯が出來たなら、或は多少の學術的研究心を以て、圖書館の仕事が出來たなら……と私は幾度思つたか知れない。然し、下つ端の圖書館員の仕事はいつも機械的であり、あてがはれるまゝを甘受

する飜譯はいつも機械的であつた。それも生活のためだ。だがそのために、生活そのものまで、いつしか機械的になつて、やがては油が切れやうとしてゐる――窓から床までの光の角度を、私は珍らしく眼を輝かして眺めた。

汚水の淀んでる堀割と寂しい工場とは、圖書館の中の侘びしい空氣を私に思はした。そしてそこの河岸縁で眼前に描き出す彼女の姿は、圖書館の中に落ちてる光の角度だつた。たゞ、太陽の光のではなく、一種の燐光の……。

先輩の好意で或る市立大學に英語教師の職を得て、圖書館員をやめることが出來た時、私は生れ變つたやうに喜んだ。一週に四日、それも自分の受持時間だけ出勤して、月給百五十圓餘、國許の少しの畑地を管理して伯父から送つてくる毎月の五十圓、それだけで生活は安心だ。これから自由に勉强しよう、自由な飜譯もしよう、物も書かう……。私はまた著述を斷念しかねてゐた。――妻が娘を連れて、郷里へ實母の病氣見舞に歸つたことが、私の氣持を更に自由にした。

私は籠から放たれた小鳥のやうなものだつた。殆んど毎日市内を彷徨した。そして古い停滯した生活の氣分を振ひ落さうとした。七年間の習慣の殼、頭と身體とにたまつてる雲脂、薄暗い圖書館と陰鬱な生活との影、それを一擧に拂ひのけようとした。退職手當として貰つた六百圓のうち、百圓を妻に送つて、殘り五百圓を七年間の生活の影と共に空中に撒き散らさうとした。古い殼や雲脂や影は、利用すべきものではない。私はその五百圓を、自分のためにも他人のためにも、有用に費すことを欲しなかつた。その上、圖書館生活のためか、或は苦しい生活のためか、私は甚しい性慾の減退を感じてゐて、それが今後の新たな生活に對する不安ともなつた。私は五百圓を懐にして、學生時代に可なり知つてた各種の花柳の巷のうちの、最も人間味の濃い陰慘な方面をさまよつた。そして偶然彼女を見出した。

種々の男の息吹がかゝつてる彼女の肉體、自分の肉體を資本に生きてる彼女の生活、さういふ風に抽象的に見た彼女のうちに、不快な五百圓を投じ去るのに最も好都合な場所があり、人生の現實の中にふみこむのに最も力强い戸口があつた。狭い入り組んだ小路、小さな硝子の小窓から至る處に覗いてる無數の女の顔、物に憑かれたやうに轉々とうろついてる

多くの男の影、その中にあつて、輕い斜視の……近視の……亂視の……彼女の眼は、一種の美を持つてゐた。

「先のことは、まるで眞暗よ。こゝを勤めあげてから……それからどうしようつて、當もないの。時々、お客さんが眠つてる間に、夜中に起き上つて、眼をつぶつて、ぢつとしてることがあるの、一時間も……。たゞ眞暗なものを、一心に見つめてるきり……なんにもありやあしないわ。」

壁に輕く背をもたして、唇の先で煙草の煙を吐きながら、そんなことを云ふ彼女の顔には、どこかつんとした意地つ張りたところがあつて、その眼には、鈍い視線の上に光が浮いてゐた。

彼女は今年二十三、丙午の歳だつた。

「大變な歳に生れついたもんだね。九族を殺すつていふよ。」

「九族……?」

「親子兄弟、一家眷屬を、みんな打殺してしまうんだ。」

「さう。やつぱりどこか强いのね。」

他人事のやうに彼女は云つて、淋しい笑ひをした。

私は杯を重ねた。

酒はごくいゝのを頼んで、それを二本か三本、つまみ物としてはたゞ海苔と鰯の類、初めから醉つてる時には砂糖水、そして彼女と一時間か二時間、取り留めもない話をした。

それだけで私には充分だつた。私は彼女の肉體を漁りに來てるのでもなければ、彼女を愛してるのでもなかつた。その愛慾の巷で時間を過すことによつて、新たな生活の出發の一歩を、實人生に根を下した力强い一歩を、見出さうとしてるのだつた。彼女はたゞ假りの相手に過ぎなかつた。——時によると、表を、新内の流が通つた。ヴアイオリンの俗謠が響

いた。夜分は、客を呼ぶ女の聲が聞えることもあつた。御詠歌をうたつて軒毎に寄進をこふ遍路姿の娘の、哀れな鈴の音が鳴ることもあつた。

三疊か四疊半の狹い室なので、夜は電燈の光で相當に明るかつた。が晝間は大抵、窓に重いカーテンが掛つてゐた。私はいつもそれを一杯あげさした。磨硝子に漉さるゝ日の光が、室の中を溫室のやうにした。窓を開くと、隣家の軒に遮られて僅かではあるが、蒼空が見えた。

「いゝ日だ。見てごらん、空が澄んでる、日の光が晴々としてる。」

彼女は眩しさうに外を眺めて、私の言葉に首肯いてみせた。

初春の空と、初春の外光……。たゞ、青いものは室の中の一鉢の萬年青きりだつた。

萬年青の上の方、壁に七福神の卑俗な額が掛つてゐた。それをぼんやり見てゐると、彼女は下手な節廻しで低く歌つてゐる――

戀でなし
情人でなほなし
たゞ何となう……

私が見返すと、彼女はぷつりと歌ひ止めて、私の視線にしがみついてくる。

「ねえ、いつもあんたの我儘を通してるんだから、今日はあたしの我儘を聞いて頂戴。」

「なんだい。」

「乾度ね。」

「云はない先に、そんな無茶な……。」

「だつてさ……。」

溫室のやうな明るい空氣の中に、彼女の顏が花のやうになる。その眼附が花瓣のやうに背いてゐる。――彼女の皮膚は、場所柄になく非常に細やかで綺麗だつた。

四五回に一度くらゐは、私も彼女の我儘を聞いてやつた。だがつまらなかつた。その後では淋しくなつた。

長襦袢一つで鏡台の前に坐つてる彼女の顏が、鮮に私の頭の中に刻みこまれた。後ろから見ると、布天神髷の赤い鹿子絞と、翼のやうに耳の上にかき上げられてる兩の鬢と、白い項筋とだけだが、一寸位置を變へると、深々と澄んでる鏡の面に、彼女の顏がくつきり浮出してるのが見えた。輕い斜視の兩の黑目が近寄つて、二重眼瞼の方へ上目にぢつと見据ゑられてるきりで、額からなだらかな線の頬や頤へかけて、一つの筋も皺もないたゞ眞白な顏が、能面のやうにして空に懸つてゐる。その面が、私の眼を鏡の底に見出すと、ふいに、だが如何にも自然に、淋しい笑みを頬に浮べる……。そして見返つた時にはもう、生々と血が通つてる顏だつた

「おかしいわ。あたし何んだか極りが惡くなつちやつて……。飮みませうか。」

私はまた、此度は彼女と交る代るに、杯を取上げた。彼女は多くは飮めなかつた。

私の心は落付かなかつた。

「馴染のお客さんが來たら、いつでも歸るから、さう云つてくれ。」

私はそんなことを繰返し云つた。

「僕はたゞ君とかうして酒を飮んでをればそれでいゝんだ。それだけだ。だが、君の方は、大事なお客をしくじつてはゐけない。ほんとにさう云つてくれ、馴染の人が來たら歸るから。」

いつのまにか眞劍な調子になつてゐた。

「それ誰に云ふこと、え、片岡さん。構やしない、あたしみんな話しちまうわ。こないだも……知らなかつたでせう……馴染の人が來たのよ、あんたがこゝで酒を飲んでる時……。向ふの室に通して、今丁度出かけるところで、迎ひの人が來て待つてるつて……下谷の伯母さんとこに行くんだつて……なにどうだつていゝのよ。分つて……。」

「だけど……。」

「いや、聞かない、聞かない。そんなこと、片岡さん、誰に向つて云ふの。」

「喜代ちやん！」

彼女は返事をしなかつた。

「喜代ちやん！」

こちらも怒つたふりを見せやうか、黙つてゝやらうか、擽つてやらうか、どうしてくれやうか……とそんなことを考へるだけの間を置いて、彼女はふいに、皺も筋もない白臘のやうな顏を振向けた。

「なあに、片岡さん……。」

その、彼女の口から出る自分の名前を、私は不思議な氣持で聞いた。

私の頭に映つてるのは、漠然と心機一轉を求めてる一人の男と、生に喘いでる一人の女とだつた。更に、新生の力強い世界を翹望してる者と、愛慾の世界を彷つてる者とであつた。その二人が、そこに眼前に小さく寄り添つて、片岡さん喜代ちやん、と呼び合つて ゐた。

片岡正夫、緒方喜代子……。その固有名詞を、長く忘れてゐた昔の人をでも思ひ起すやうな風に、私は口の中で繰返してみた。

酒に醉つてた時、彼女は私の名刺を見たのだつた。それから自分の名前も、箸の先に酒をつけて餉台の上に書いてみせ

た。喜代子といふのは本名で、緒方といふ姓だけを書いた。紫檀の木肌に酒で書かれたその文字が、深く私の眼の中に殘つた。――彼女は高崎の者で、もう兩親はなく、盲目の兄は按摩をしてをり、姉は救世軍にはいつてゐるとか……。

然しそんなことは、互の身の上のことなんかは、どうでもよかつた。たゞ取り留めもない雜談だけで充分だつた。

「あたし、あんたとかうしてるのが、一番樂しみよ。御免なさい。」

そして彼女は私の肩に頭をもたせかけたり、足を投げ出したりして、いろんなことを云つた。

私が一週間ばかり姿を見せなかつた時、ひどく心配して、ひそかに易者のところへ聽いていつたこと。夕方、私らしい者が微笑して通りすぎたので、裏からぬけ出して追つかけて行くと、人違ひで困つたこと。何だか無性に癪に障つて、コップで酒をあほつて寢たら、一日逢はねば千秋の……と何度も寢言を云つて、さんざん年寄りのお客にからかはれたこと。それから……。

嘘ともつかず本當ともつかない、煙草の煙のやうな話だつた。そして歸りには、彼女は私の袂に、敷島を一袋入れてくれた。

その一袋の敷島が、私の氣を惹いた。と共に、彼女の眼に涙を見出すやうになつた。

眼の視力の鈍い、どこかきかぬ氣らしい、白蠟の面のやうなその顏は、涙にふさはしくなかつた。けれどともすると、ふと言葉が途切れて長く默つてる折など、彼女はぼんやり空を見つめて、我を忘れたやうになつてゐた。そして殆んど無意識的に、眼をしばたゝき、肩をこまかく顫はせた。――彼女は泣いてゐた。

「おい、喜代子ちやん！」

彼女は放心の状態で、曖昧な微笑を頬に浮べかける……。がその時には、私の方で、もう眼に一杯涙をためてゐた。

「おばかさんだね。泣く奴があるものか。」

そして二人共涙を流した。それから接吻した。

彼女は時々輕い咳をしてゐた。唇の中程にはいつも濃く紅を塗つてゐた。その唇に私は自分の唇を、いつも自由に任せた。

「やたらに接吻しちやいけないよ。病氣なんか、接吻が一番あぶないから……。」

「分つてるわ。たゞ一人つきりよ。」

そして私達はまた長い隔てない抱擁をした。

私の膝の上に、私の腕の中に、惜しげもなく投げ出されてる彼女の肉體は、軟骨質の水母——もしさういふものがあれば——それのやうだつた。赤い錦紗の着物の下に、不隨意筋の運動めいた、柔かな中の固いくりくりした動きを持つてゐた。そして私の眼の前に、すぐ睫毛が屆きさうなところに、彼女の頸筋の眞白な細かな皮膚が、平らに、廣く、無限に伸び擴がつて、温い霧——といふものがあれば——それに蔽はれた大地の肌のやうに、靜に無際限に波動し初める。それが私を溺らしてゆく……。私は息苦しくなつて、非常な努力で目玉を一回轉させる。格恰のいゝ耳朶の端が、黒髮の下にふつくらと覗いてゐる。私はそれにつかまる。——彼女の耳はごく柔かだつた。

私が立上りかけると、彼女は無理に縋りついてきた。殆んど氣品を帶びてるとさへ云へるほどの張りのある表情で、幾度も頭を振つた。

「いや、いやよ。まだ歸さない。」

「だつて、困るぢやないか。僕にだつて用もあるし……。」

「何だかいや。歸したくない。かうして始終逢つてゝも……それでどうなるの。お金だつて……。これだけのお金があれば、間借りしてでも、立派にやつていけるわ。そりやあ、あんたには奥さんも子供もあるし、あたしはこんなとこの女だし、分つてるけれど……ねえ、片岡さん、どうしたらいゝの。

「だからさ、僕も考へてるんだ。今のことぢやなく、君の一生のこと、お婆さんになつた時のことまで考へてるんだ。二月か三月、半年か一年、それだけなら、今すぐにでもどうにでも出來る。然しそれから先がさ、さよならをするやうなら、つまらないぢやないか。僕は君の一生のことを考へてるんだ。分つたかい。喜代ちやん。」

私の語氣は全く眞劍になつてゐた。實際私は、彼女の一生のことを考へてゐた。

彼女は嘗て、横濱の海岸で身を投げようとしてるところを、見付かつて家に連れ戻された。それから、父の石塔の金をさらつて逃げ出した。それから世の中に孤立してきた。石塔の金を是非とも返してみせる、それが彼女の唯一の目的だつた。

「それから先は、もう眞の闇よ。」

話は嘘にせよ眞にせよ、その時の彼女の眼付には不氣味な光が籠つてゐた。

「あきれた女でせう。」

そして晴れやかな笑ひ方をした。

その頃である。私は夢の中で素敵な詩を拵へた。胸が躍つた。然し眼が覺めてみると、そのすばらしい詩の文句は、風に吹かるゝ落葉のやうに四方へ散亂してしまつて、たゞ一句が殘つてるきりだつた。

彼女を美しいとは云ふまいぞ、
彼女を美だと云はう。

實際彼女は美しい女とは云へなかつた。顏立は私の好みにかなつてゐたが、少しつき出し加減の口のあたりに、餘り怜利でない卑しさがあつた。私の心を惹いた眼も、普通の人にとつては一種の不具だつたらう。たゞ、その眼瞼の一重と耳の格恰だけは美事だつた。——その彼女の全體が、私にとつては、泥土の中に影の中に轉つてる美だつた。

それを、明るい日の光の中に移したい、彼女を朗かな生活の中に返らしたい、と私は考へた。

一度私は彼女を外に連れて出た。然しそれは夜だつた。日の光がなかつた。一寸芝居を觀て歸つた。一度は食事をしに外出した。彼女は長いコートを着て草履をはいて、子供のやうな足取りで歩いた。

さうしたことで、私の五百圓はわけなく無くなつていつた。初めは、自分の古い生活の影と共に一擧に溝に投ずるつもりのその金が、ひどく惜しまれた。金が無くなることは、彼女と別れることとである。私は愛慾的な未練は更に感じなかつたが、彼女のこと――彼女の生涯のことを考へてゐた。

自分の新生活、それから、愛慾の苦界を背負つてる賣笑婦、それがいつのまにか「片岡さん、喜代ちやん」と呼び交はす二人の男女になつてゐた。――能面のやうな鏡の中の彼女の顏が、私の眼の前にいつも浮んできた。

或る日、彼女は私の顏をぢつと見つめてゐたが、不意に私に飛びついてきた。その時私は、彼女の水荒れのした指先と可愛い爪とを弄んでゐた。その私の人差指を、彼女は默つて自分の口の中に持つていつた。下顎の糸切歯の隣りに、ぽかりと恐ろしい穴があいてゐた。私はそれを深い淵のやうに感じた。

「どうしたんだい。」

「むりやりに引拔いたの。」

その深い淵からくる一種の眩暈みたいなものに、私は心を打たれた……。

二　或る賣笑婦の話

何だか息苦しくつて、そして頭の遠い奥を金槌で打たれてるやうで、あたしは眼をさました。布團のはじつこに寢てゐて、身體半分がぞつと寒かつた。向き直つて、手さぐりに寄つていくと……逆つてゐた。あたしはあの人の夢をみてたや

うでもあつた。そのあの人と、手觸りがまるで違つてゐた。――あの人はいつも酒を飲むだけで、あそんではいなかつた。何かの調子であたしがそこまでもつていくことの出來た四度か五度、それくらゐのものだつた。あの人はそんなことに興味がないらしかつた。あたしは極り悪い思ひをしたことがあつた。だけどそんな風なので却つて、あの人の感じはあたしの氣持にはつきり殘つてゐた。――それが、まるで違つてゐた。あたしははつきり眼をさました。齒がづきんづきん痛んでゐた。

あたしはそつと起き上つた。着物をひつかけて、そこに坐りこんで、朝日を一本吸つた。男はよく眠つてるやうだつた。あたしはいつのまにか、煙草の方を忘れて、齒の痛みの方を見つめてゐた、あの人のことを考へてゐた。それがどつちだかよく分らなかつた。氣がむしやくしやしてきた。やたらに癪にさはつた。布團の襟から覗いてる男の頭が、鐵の丸のやうに見えた。

あたしは痛い齒を、下の糸切齒の次の齒を、やたらにゆすつてやつた。鏡台の方ににぢりよつて、鏡でのぞいてみたが……口を開いて指を一本くはへてる自分の顏が、ひどく醜かつた。あの人がよく私の後ろからそつと見た鏡の中の顏、さういふ時の顏が一番好きだとあの人は云つてゐた……。あの人はどうしてるんだらう。

ばか、ばか、とあたしは自分に云つてやつた。そしてなほ齒をゆすつた。痛かつた。痒いところをつねるやうな痛さから、もうそれを通りこして、頭のしんに響くやうな痛さになつてゐた。忘れよう忘れよう、と心の底であたしは云つた。そして齒をゆすつた。何だかしらんが無精に腹が立つた。そしてとうとう、力任せに齒をひつこぬいてしまつた。

あたしはびつくりした。冷い風が、齒のぬけた跡から吹きこんで、身體中を吹き廻つた。そのくせ、熱いきりきりした痛みが、顳顬のあたりまでのぼつてきた。上の平たい根の長い齒を、あたしは懐紙に包んで、鏡臺の抽出にしまつた。その時氣がつくと、口の中が血で眞赤になつてゐた。あたしは懐紙をくはへた。齒の跡が大きな空洞になつてゐた。身體に

も心にも、力の心棒がなくなつたやうだつた。あたしは泣きだした。

男の聲がした。言葉は分らなかつたが、はつきり聲が聞えた。あたしははつとした。振向いてみると、男はねぼけた顔付で、不思議さうにこちらを見てゐた。あたしは笑つてみせようとした。けれど、つぎほがわるく、またなさけなかつた。頬邊を押へて顔を伏せた。

男はのつそり腹這ひになつて、煙草を吸ひだした。

「何をしてるの、そんなところで……。」

「歯が痛いのよ。」

「歯が痛い……？」

「あんまり痛むから拔いちやつたわ。癪にさはつて……。」

云ひかけてあたしはまた泣き出した。そこら中に當りちらしてやりたかつた。どうにも我慢が出來なかつた。

「歯が痛むくらゐ……、」と男は云つてゐた。「一寸醫者に行つてくれば、ぢきになほる。……もう夜が明けてるよ。」

ほんとにもう夜が明けてゐた。窓のカーテンを開くと、室の中までぼーつと白み渡つて、電燈の光が薄くなつた。

「ぢやあ一寸行つてくるわ。その代り、ぢきに歸つてくるから、待つてゝね。寢て待つてるのよ。乾度ね。」

そしてあたしは、慌てゝ着物を着て、裏口から飛び出していつた。

薄曇りのどんよりした日だつた。何だか夢の中のやうな朝の明るみだつた。寒かつた。淋しかつた。いつまでも、どこまでも、そのまゝ歩き續けたかつた。あたりはまだ寢靜まつて、ぽつりぽつりと、朝歸りの男の影が、幻のやうに見えてゐた。あの人……といふたゞそんな氣持だけで、あたしは何もかも忘れてぼんやりしてゐた。

それでも、病院にいつて、看護婦にたのんで、歯のぬけたあとに藥をぬつて貰つた。

戻つてくると、男はもう歸つてゐた。姉ちやんの小言をきゝ流して、あたしは二階に上つた。これであのお客もしくじつちやつた、とそんなことを、三四度來たことのある男について、小氣味よく考へながら、着物のまゝ布團にもぐりこんだ。齒の痛みはけろりとなほつてゐた。あの人のこともぼーつとなつてゐた。あたしはぐつすり眠つた。

呼び起されるまでは眼を覺さなかつた。起上つてからもぐずぐずしてゐた。お湯や髮結にいつても、何だかぼんやりして、いつもより時間をつぶした。

今日は休んでやらうか、とも思つたが、あの人が來さうな氣がして、つとめてお店に出た。

お母ちやんから、ちくりちくりと皮肉な針をさゝれた。この頃どうかしてるとか、馴染のお客さんがずんと減つたとか、なまけ癖がついたとか、そんな風に遠廻しに云はれた。なんでもないのよ、とあたしは答へたが、そんたらお前さんの腹の中を云つてみようか、と云はれると、あたしは口を噤むより外はなかつた。お店では、まるで出たての娘のやうに、姉ちやんが付添つてくれた。

「ねえ、喜代ちやん、」と姉ちやんは低い聲で云つた。「もつとしつかりしなくちや駄目よ。あの人……大事にとりもつのはいゝが……見込むなんて、お前さんにも似合はない。こんなところに來て、酒ばかりのんで、あそんでもいかないでさ、どうしたつて場違ひよ。場違ひのお客なんか、長續きはしないからね。」

そんなことはあたしにも分つてゐた。またあたしは、あの人を思ひ込んでるのでもなかつた。たゞ、あの人と逢つてる時は一番氣樂だつた。樣子をつくることもいらないし、嘘をつくこともいらなかつた。といふよりも、あの人の前では、樣子がつくれなかつたし、嘘が云へなかつた。あたしは自由勝手に自分を投げ出すだけだつた。それかつて、あの人から愛されてるとも思つてゐなかつた。あの人はいつも、あたしのことよりか、かういふ商賣をしてるあたし達といふやうなことを、ぼんやり考へてるらしかつた。變に摑みどころがなかつた。——あの人はいつも明るいのが好きだつた。カーテ

ンをすつかりあけて、窓に日の光がさすのが好きだつた。夜分は電燈の光が薄暗いと云つた。

あたし達のやうな商買の女には、愛といふことゝ馴染といふことゝが、大抵の場合同じだつた。三度逢へば三度分の愛がもてたし、十度逢へば十度分の愛がもてた。だから、あの人が度重ねてしげしげやつてくるにつれて、あたしはそれだけの愛を持つたかも知れない。けれど……そればかりではなかつたかも知れない。初めのうちは、あたしはあの人のことをのろけ話の種にしたこともあつたが、後になると、あの人のことを少しも口に出さないやうにした。口に出せなかつた。

普通の色戀とはちがつた別なものがあつた。あの人にも、何だか足りないところと多すぎるところとがあつた。氣持がひどく内氣で臆病なやうだつたが、拵へ方がごく大膽で厚かましいやうだつた。世の中のことにうとくてぽかんとしてゐるやうだつたが、人情の深いところまで見通してゐるやうだつた。氣嫌がよくてにこにこしてる時もあれば、口を利くのもうるさいといつた風な時もあつた。身裝はさほどよくなかつたが、お金のことには至つて無頓着だつた。一體に無口の方だつたが、時々とつてつけたやうに、上手な皮肉や洒落を云つた。聲に出しては唄一つ歌はなかつたが、よく口の中で何かの節を歌つてゐた。顏色は惡いが、案外しんが丈夫らしかつた。いつも酒を飲んだが、本當に醉ふことはなささうだつた。あたしを相手にしてるが、別なことを見守つてるやうだつた。そしてたゞ、その邊の空氣を吸ひに來てるやうな調子だつた。あたしには息苦しい空氣だつたが、その空氣を吸はないではをられないといつたやうに、しきりに通つてきた。これから暫く來ないよと云つて歸りながら、またすぐにやつて來た。そしてあたしも、あの人の空氣を吸はないではをられなかつた。あの人の側にゐると、自由でのんびりして、心の中が明るくなつた。あの人が暫く姿を見せないと、あたしは暗いところへだんだん落ちこんでゆくやうな氣がした。あの人と別れぎわには、あたしは泣くことを覺えた。

「女は泣く時には本當のことを云はない。男は涙を流す時には決して嘘をつかないが、女はあべこべだ。女が本當のこと

を云ふのは、怒つた時だけだ。」

　そんなことをあの人は云つた。そして自分で涙ぐんでゐた。

　お店で、側についてる姉ちやんの言葉にいゝ加減な返事をしながら、あたしはやはりあの人のことをぼんやり考へてゐた。

　最初の時は夜だつた。いつもの通りお店に出てると、黒いマントを着た背の高い人が通りかゝつた。聲をかけると、ぢろりと見てから、すぐにはいつて來た。二階の室に案内して、あたしは何だか、いつもより丁寧に挨拶をした。その人はマントを着たまゝ坐つてゐたが、だいぶ醉つてるらしい眼付と顔付とを、面白さうににこにこさして、三四軒寄つてきたが愉快だつたと云つた。そして五十錢銀貨を四つ出した。お茶代をつけてとあたしが云ふと、笑つて頭を振つた。親切な女がゐて、あそばないでお茶だけならそれでいゝと敎へてくれたつて……。そしてその女の名刺を持つてゐた。知つてる女だつた。あたしは名刺をひつたくつた。それからお茶をくんでくると、その人は急に眞面目な顔で、先刻の名刺を返してくれと云つた。返すものかとあたしは思つた。そんなら眼の前で破いちまへ、といふのがあたしの氣に入つた。名刺を返すと、その人はそれを裂いて火鉢の火にくべた。あたしは胸がさつぱりした。

　翌日の晝間、やはりあたしがお店に出てる時、その人が、考へこんだやうに足先に眼を落して、ゆつくり通りかゝつた。あたしは聲をかけた。その人は立止つて、ぢつとあたしの方を見てゐたが、いきなり大きな聲で、あゝ君か、と云つた。そしてはいつてきた。何だか沈んでる樣子だつた。晝間はこゝは實につまらない、君がゐたんで助かつた、昨夜の約束の酒だ、とそんな風に一人で云つた……。

　それから……いろんなことが思ひ出された。こんなぢや今日は駄目だ、とあたしは思つた。姉ちやんがついてくれるのも無理はなかつた。あたしは眼が悪い。夕方なんか表がぼんやりする。それを一生懸命に、あの人が來るか來るかと、窓

から覗いてゐて、他（ほか）のことには一切氣が乘らない。駄目な人に聲をかけてみたり、物になりさうな人を通りすぎた後で氣付いたりする。その月はほんとに不景氣だつた。まだ足が續いてる馴染のお客で、やつて來さうな人もなかつた。

そしてその晩遅く、あたしは一人でそつと起き上つて、煙草を吸ひながら、また胸算用をやつてゐた。もうこゝの家にも借金は大して殘つてゐないだらう。それと、父の石塔の代の五十圓だけだ。それくらゐ、あの人がどうにかしてくれるだらう。いつまでかうしてゐたつて仕樣がない。もう嫌だ。あの人がかりに一度に二十圓使ふとして、あたしのものになるのはその四分の八圓、そのうちからまたいろんなものが差引かれる。その二十圓をそつくり貰つたら、月に三度か四度でいゝから、こんな商賣もせずに、一日ゆつくりあの人の側についてをられる……。

その時、あたしはふとあの人の言葉を思ひ出した。僕は君の一生のことを考へてゐるんだ、今のことぢやない、お婆さんになつた先のことまで考へてゐるんだ……。あたしは眼をつぶつた。眞暗なものが見えてくる……。石塔の代を盲目（めくら）の兄のところへ返して、それから、一生だつて……。どこまでも、はてもなく、眞暗な闇が續いてるやうだつた。あたしは笑つてやりたかつた、が笑へなかつた。泣いてやりたかつた、が泣けなかつた。歯のぬけたあとに冷い風が吹きこんだ。

長くたつてから、あたしはそつと階下（した）の台所にをりていつた。戸棚の中を探して、冷い酒をコップで二三杯飲んだ。

それから、どうしたのか、あたしは眠つてる男をゆすり起してゐた。

「あたしが起きてるのに、眠るつて法があるの。土龍（もぐらもち）みたいに、布團の中に頭からもぐりこんでさ……。お起きなさいたら。起きて頂戴よ。」

ふりの若いお客だつた。なまつ白い額に柔い髪の毛が垂れかゝつてゐた。それをかき上げながら、むつくり起き上つて、あたしの方を瘋狂な眼付で見てゐた。

「何かして遊びませう。あゝさう、何にも道具がないわ。お人形が一つ……。それと、あたしがかうしてると、お人形の

やうに見えなくつて……。これから、時々來るのよ。そしてあたしを騙して頂戴。あたし男を騙したことはあるけれど、男に騙されたことは一度もない。それが淋しいのよ。何もあんたの奥さんにならうてわけぢやない。たゞあたしを騙して頂戴、心まですつかり……。」

そんな風に、それからなほいろいろ、今覺えてゐないが、あたしはやたらに饒舌つた。醉がまわつて頭がふらふらしてゐた。そして臆病さうにしりごみしてる若い男の前に、あたしはつぶれてしまつた。

その翌日の午後、あの人がやつて來た。

あたしは眉をしかめて不機嫌な顔をしてゐたが、あの人の前に出ると、顔の皺がのびてしまつた。君の顔には妙に皺や筋が少い、あの人に云はれたその顔を、思ひきつてしかめてやらうとしたが、それが出來なかつた。そしてあの人のおほまかな捉へどころのない顏色をみてると、どうしていゝか、どう云つていゝか分らないで、あたしはいきなり飛びついていつて引拔いた齒のあとの洞穴へ、あの人の指をもつていつた。

あの人は眼色を變へた。あたしは甘へるやうな調子で、事もなげに齒の話をした。

その時、思ひがけなく、子供心があたしのうちに戻つてきて、それが胸一杯になつた。「片岡さん、ねえ、片岡さん、片岡正夫さん、」とあたしはあの人の名を呼んだ。それでもまだ足りなかつた。あたしは泣いた、笑つた。そしてあの人の名を呼び續けた。

あの人の樣子はおかしかつた。蒼い淺黒い顏をなほ蒼くして机に肱ついてる片手を縮れ亂れた長い髪の毛の中にさしこんで、口と頬邊とで笑ひ、きつい鋭い眼付をしてゐた。その手と頭と笑つてる口ときつい眼とが、こはれた人形のかけのやうに、ばらばらになつてあたしの眼にうつつた。そして別な聲が云つてゐた。

「喜代ちやん、もう泣いたり笑つたり、つまらないことは止さうぢやないか。そんな仲でもあるまい。何もかも成行に任

せるさ。そして酒だ。酒を飲まう。」

あたしは自分に返つた。心が落付いた。たゞわけもなくぼんやり微笑まれた。あの人も微笑んでゐた。

「そのうち、君と二人で一日ゆつくりどこかへ行かう。」

「えゝ、連れてつて頂戴。」

そして酒を飲みながら、とりとめもない話をした。來る途中でどんなことがあつたとか、知人にどういふ面白い男がゐるとか、どこそこに旅した時どんな目にあつたとか、そんなことをあの人は話した。酒もいつもより多く飲んだ。けれどあたしには二三杯きり飲ませなかつた。その上あの人は、うはべだけ面白さうに話をしてゐたが、何だかいつもと違つて、ぢつとあたしの方を覗ふやうな眼付をしてゐた。ちやんと坐つたきり、膝もくずさなかつた。あたしが寄り添つていつても、それを避けたがつてる風だつた。あたしは妙に冷いものを、それから淋しいものを感じた。あの人にに會ひたくなつても、處番地は知りながら訪ねて行くことも出來ず、手紙を出すことも出來ない、さうした自分の身がふつと頭にうつゝた。

「仕事にもいろいろあるけれど、働けば働くほど面白くなり愉快になる仕事は、よいものだ。働けば働くほど嫌な氣持になる仕事は、いけないものだ。」

何かのひようしにあの人がふと云つたその言葉が、變にあたしの心に殘つた。あたしは云ひたいことが山ほどあるやうでゐて、何一つ云へなかつた。そしていつもより冷い態度であの人を歸した。

そのことが、後になつてとても淋しくて仕樣がなかつた。あの人は一週間ばかり來なかつた。その間あたしは、出來るだけ口を噤んで、眼をつぶつて、ぢつともちこたへた。拔齒のあとの空洞が始終氣にかゝつた。けれど自棄は起さなかつた。

そして次にあの人に逢つた時、あたしは涙をおさへてあの人の肩に縋りついた。

「今日はあたし、あんたの側を一寸も離れない、離れたくない。」
「本當か。」とあの人は云つた。
その調子が餘り强かつたので、あたしは返事に迷つた。するとあの人は笑ひだした。
「喜代ちやん、これからどこかへ酒を飲みに行かう。君を醉つ拂はしてみたいんだ。」
あたしは何だか腑に落ちなくてあの人の顏を眺めた。あの人はほんとに晴々とした眼をしてゐた。

三　或る不良少年の話

三月の末近い頃のことだ。俺は向島の牛天神の方から、言問橋をぬけて、淺草の六區へ急いだ。もう夜の九時頃だつた。そして活動がはねるまでに向ふへ着かなくちやならなかつた。用があつた。
言問橋が出來たてのことで、橋の手前のガードになつてる下をぬけて、大川沿ひに作られてる廣い道は、高い柱に取りつけた電燈がぽつりぽつり光つてるだけで、殆んど通る人もなかつた。だが、向ふ岸の待乳山一帶の灯が川に映つて、華(はなや)かだつた。電柱の影にかくれてカフエーの中を覗きこむやうなものだ。
俺は急いでゐた。すると、向ふから、薄暗がりの中に、一組の人影が浮出してきた。マントを着た背の高い男と、コートを着た背の低い女だ。低いといふほどぢやないかも知れないが、男が高いので低く見えた。
向ふではゆつくり歩いてゐたが、俺の方は急いでゐたので、すぐに近づいた。一寸綺麗な女だつた。眉を長くひいた、眼瞼のくつきりした、細面(ほそおもて)のその顏が、素人(しろうと)ではなかつた。そして……。
おや！と俺は思つた。帽子を目深にかぶつてる近眼鏡の、その男の顏に見覺えがあつた。

チツ……俺は舌を鳴らして、物に躓いた風をして、道の端までよろけて、丁度そこにあつた電燈の柱につかまつて、屈みこんで下駄の緒を調べる様子をした。燈台と同じに、電燈も下暗しだ。その影から俺は、まともに光を受けてる男の顔を、横目ではつきり見て取つた。片岡さんだ。片岡正夫だ。

十日ばかり前に一度逢つたきりだつたが、俺はその顔とその名前とをよく覚えてゐた。人の顔や名前を記憶するのは大事な才能だ。

仲間の者二三人と、淺草の或るカフエーにはいつた時、へぼ文士のチブさんが、雀の巣のやうな頭をした男と酒を飲んでゐた。チブさんといふのは内緒の渾名で、雑文や批評や小説や戯曲や何でもかでも書きとばし、それを時々どこかにのせて貰ひ、三十すぎた獨身者で、始終市内をうろつき、公娼でも私娼でも女給でも、相手は構はないが決して一人に馴染まない、凡ての點に於て僕は天下のジプシーだと自稱してる、そこから來たのだつた。

俺は一寸挨拶したが、ジプさんは相手と何か議論してゐて、大して注意を向けなかつた。その隣りの卓子があいてゐたので、俺達はそこに、ジプさんの後ろに坐つた。

珈琲をのんでるうちに、ジプさんの方の話がちよいちよい俺の耳にはいつた。雀の巣の方は、聲は低かつたがきつい調子で、盛んに論じ立てゝジプさんをやりこめてるらしかつた。——原始人の遊牧的な生活は、樂しい生活ぢやなかつたに違ひない。彼等は淋しく悲しかつた筈だ。——男はいつも誰かに戀してるがいゝのだ。戀されることはどうでもいゝが、戀する事が大事だ。そこから生活の張りが出てくる。——魂ぬきの肉體だけを賣つて生活してる女がゐる。それが一番悲慘な生活だ。——物に拘泥するのはいけないが、何物にも拘泥しないのはなほいけない。——具象から抽象になつてゆくこともあるが、本當に物を戀する時には、抽象から具象になつてゆくものだ。——家の中にゐて女を思ふのは一種の情慾だが、外を歩いてゐてもその女のことを思ふやうになつた時には、本當の愛だ。——環境の中に個性を見ることも必要だ

が、環境を離れて個體を見ることはなほ必要だ。――其他いろんなことを俺は聞きかぢつた。ショペンハウエルとかベルグソンとかトルストイとかいふ名前も出て來た。それに對してジプさんはたゞ、時々冗談まぢりの弱々しい應酬をしてるきりだつた。そんな道徳の教科書みたいな言葉に、ジプさんがどうしてさう凹まされてるか、俺にははがゆくもあつたり可笑しくもあつた。

けれど、雀の巢の樣子も變だつた。淺黑い顏を輝かし、眼を光らして、强い調子で饒舌つてゐたが、その底に何だか今にも泣き出しさうなものが見えてゐた。心の落付を失つて喘いでるやうだつた。それがやはり俺には、はがゆくもあつたり可笑しくもあつた。

そのうちにどうしたのか、雀の巢は慌てゝ立上つて出ていつた。急な用でもあつたんだらう。ジプさんは一人で居殘つた。

俺は酒でも奢つて貰はうと思つて、ジプさんの方へ立上つていつた。

「大變やりこめられてたやうぢやありませんか。」

「うむ。」とジプさんはいつになく考へこんでゐた。「どうも彼奴この頃變だ。今日はまたむきになつて饒舌り立てた。敵意……僕に向つてぢやない、何かに敵意でも持つてるやうに、しきりに苛立つてゐた。平素は温厚な男だが……。」

「どういふ人ですか。」

「大變な學者だ。こんど紹介してやらう。圖書館に勤めてるが、古今東西の學問に通じてる。片岡……片岡正夫といふんだ。」

ほう……と俺は思つた。

その雀の巢の片岡正夫だつた。それが夜の大川端を女を連れて歩いてる……。

俺は二人をやり過して、その後を見送つた。

女は季節後れの厚ぼつたい長いコートを着て、薄いフエルトの草履で、ぼつたりぼつたり歩いてゐた。髮を大圓髷に結つてゐた。その襟足がばかに眞白だつたが、先刻ちらと見たところでは、顔は濃い白粉を脂で拭きとつたらしくつるりとしてゐた。それと並んでがつしりした高い男の姿が、妙に不似合だつた。駒下駄を一足一足ふみしめてる歩きつぷりが、身體から醉がさめて頭にまだ醉が殘つてる中途半端なものだつた。

夜、新らしい廣い道、大川端、水にうつゝてる向ふ岸の明るい灯、銘酒屋のらしい女、雀の巣の片岡さん……その全體がどうもしつくりいかないで、俺の注意を惹いた。

俺は遠くから、電燈柱の影にかくれて、なほ二人の樣子を窺つた。

二人は何か時々短い言葉を交しながら、肩を並べて、ごくゆつくり歩いてゐた。どこかへ行く風でもなく、また散歩ともつかなかつた。そして遠く、もう歩いてもゐないほどに見えた時、男と女との間が離れた。女は土手の端の川緣に立止つた。それを男は後ろから見やつてゐるらしかつた。そして……一分……二分……男はぢりぢりと女の方へ近寄つていつた。

俺ははつとした。男は手をマントの下から出して、女の背中の方へ……。一突で女は川の中に落ちる……。ではなかつた。男の手が女の肩にかゝると、二人はぴつたりくつついて一つの影となつた。女が身を投げるんでもなければ、男が女を突落すんでもなければ、二人で飛込むんでもなかつた。ぴつたりくつついたまゝ、そこに屈みんでしまつて、それきり動かなかつた。

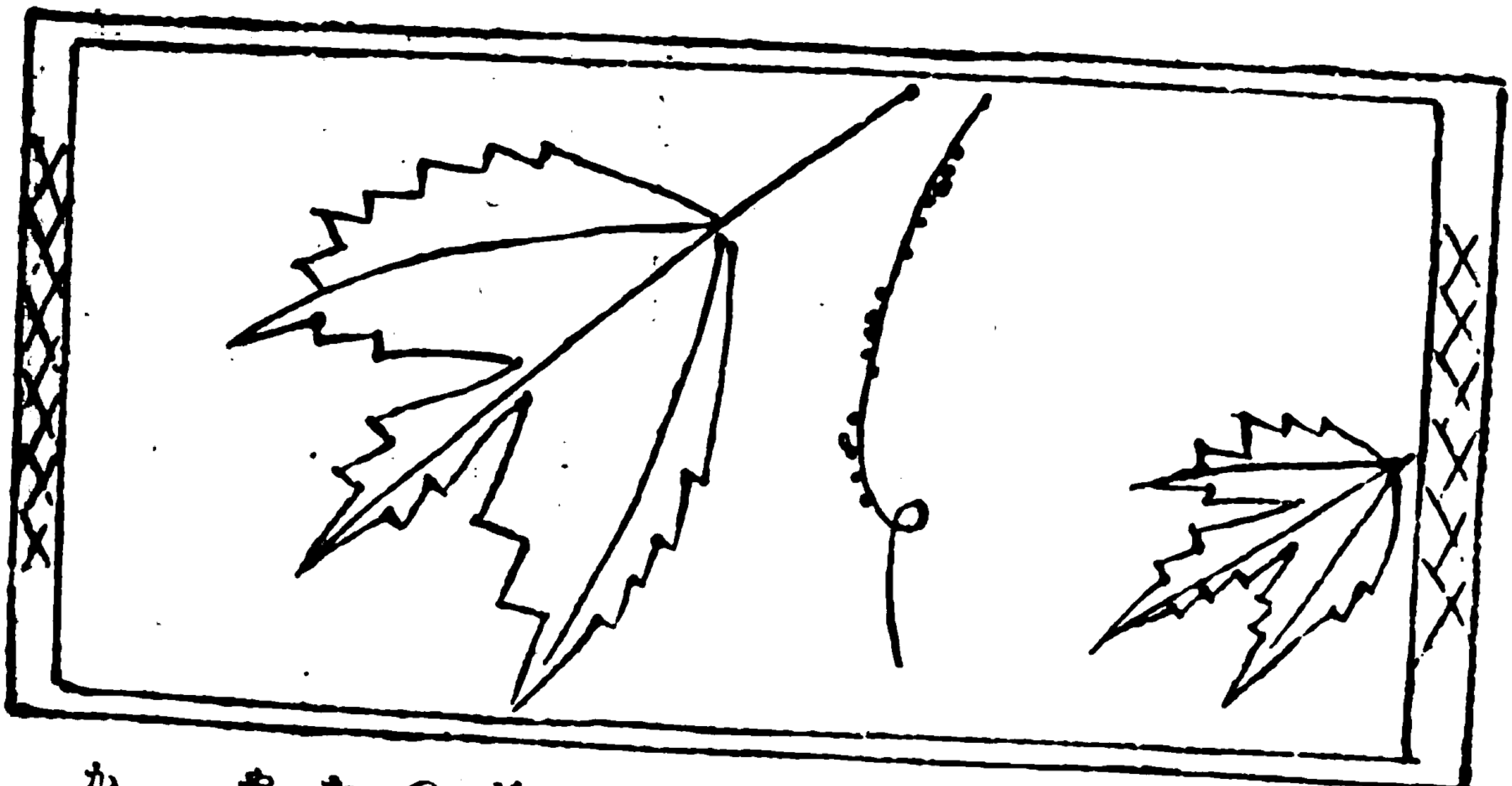
變に俺の氣持は平らでなかつた。なあーんだ、とは思つても、やはり氣にかゝつた。俺は長い間その方を窺つてゐた。が屈みこんで一つになつてる二人の影は、いつまでたつても身動きもしなかつた。

しまひに俺は根氣負けがして、杜の影から出て歩き出した。時々振返つてみたが、遠くにぽつりとしてる黑い姿は、やはりそのまゝで、もう二人の人間とも思へなかつた。

言問橋の上に出ると、急に寒くなつた。マントがほしいなと思つた。だが俺はその橋が好きだ。兩側に太鼓橋のやうな大きな鐵の骨があるきりで、橋の上は廣々としてゐて、がさつな鐵骨の組合せも何もなく、すぐ大空が感ぜられる。

俺は橋の上に佇んで、川の水を、水にうつてる灯を、左手の明るい街を眺めた。それから、たゞ電燈がぽつりぽつりついてるだけで、低く黑ずんでる右手の方、河岸傳ひの新道を眼で辿つた。川霧の交つた夜の霧がかけてゐて、遠くはぼーつとしてゐた。まだ川の縁に蹲つてる筈の男と女との姿も、霧の中に溺れて見分けられなかつた。

そんなことのために、俺は六區の川を――大した川ではなかつたが――すつかりはぐらかしちやつた。柄にもなく考へこんでしまつたんだ。



から騒ぎ

相馬泰三

一

I（字名）に在る諏訪間さん（川向ふのT村の地主）所有の二町歩ばかりの田地が賣りものに出たといふので、そこを耕つてゐる六兵衛どん外八名の小作人は、さつそく寄り合ひをした。それについて各自の意見を交換し合はうといふことであつたが、別に纏つた案があるわけでなし、まるで雲を掴むやうなはなしで、結局、うやむやに終つてしまつた。

翌る晩もまた引きつづき寄り合ひをした。しかし、矢張り、何の得るところがなかつた。前の晩同様と云ひたいが、一層活氣がなく、一層だらしがなかつた。

それにも懲りず、なか一日おいて四日目の晩に、また〳〵寄り合ひをした。さう

やつて相變らずの浮き立たない顔を並べてみたものの、さてどうしてみやうもなかつた。さうかと云つて、當面の問題をよそにして冗談や世間ばなし（それこそ、彼等の最も得意とするところであつたが）に花を咲かせるわけにもいかなかつた。そして、まだいくらも時間が經たないのに、早くもあちらこちらで欠伸を嚙み殺したり、こちらでしびれを切らしてもぞ〳〵やり出したりしてゐた。と、そこへ、遲ればせに孫平どんがやつて來て、座に着くか着かないに、そこにゐる限りの人々を均しく自分と同じやうに氣も轉倒せんばかりに昂奮させ、自分と同じやうに一遍に血相をかへさせた。それは、K（町名）のオケラが問題の田地を買ひにかかつて頻りに奔走してゐるといふ消息を、彼はどこからか小耳に挿んで來たからであつた。一瞬間、ある者は啣えてゐた煙管を離し、ある者は吹殼を叩きおとし、或る者は新たに煙草を吸ひつけ、或る者は飲みかけてゐたお茶の茶碗を下におき、また或る者は、揉み手をし、或る者は力をこめたまばたきをし、また或る者は鼻嵐を吹かせなどして、

「オケラが？」

「ケラ澤が？」

「あのケラ七の奴が！」

と異口同音に叫んで、一齊に膝を前へ乘出した。

オケラとあだ名されてゐるKの北澤甚七なる人物には、これと定まつた職業はなかつた。そのくせ、何の用があるのか、折鞄などを抱えこんでせつせと工場主や地主や議員などの間を訪ね廻り、そして、繁々とN（市名、縣廳のあるところ）へ出かけて行つた。かと思ふと、また、思ひ出したやうにひよつこり〳〵町役場や町の警察などへ姿を現した。或る人の云ふところによると、彼は日下部（同じKに住んでゐる土木の請負師、それは看板で、實は暴力團の團長）の片腕だ相だし、また或る人に云はせると、Y（村名）の矢崎（この界隈きつての大成金――石油で儲けた）の手先だ相である。しか

し、またほかの或る人に云はせると、それはどつちもあまり當てにはならないのだ相である。彼は表立つては何一つし出來さないが、そのかはり、この地方で何か事件が持ち上ればその裏にはきまつて彼が關係してゐた。それだけに薄氣味の惡い、油斷のならない怪物としてみんなから憎まれ、恐れられてゐた。ところで、あだ名の由來だが、これについては二樣の說が行はれてゐた。顏つきが似てゐるからといふのが一ッ、そして、もう一つは兩者の性質が似通つてゐるからといふのだが、どつちにしてもあまり當てになつたはなしではない。なぜなら、螻蛄の習性についてどれだけの研究をしてゐる人があるわけではないのだし、また螻蛄の顏つきにしたつて、それほど明瞭とは誰も知つてゐないのに違ひないから。それにもかかはらず螻蛄はみんなに必ずこの人のことを聯想させ、この人は彼等にとつて、どうしたつて、まがふことのないオケラなのである。

「――どんなことをしてでも、彼奴の手に渡すやうなことがあつてはならない。さうでなかつたら、あとできつと地だんだ踏んで口惜しがらなければならないやうなことが持ち上るにきまつてゐる。」かうした同じ考へが、一座の人々の頭の中に、同時に電光とはためき渡り、雷鳴とどろき渡つた。

やがて、ぽつり／＼と落ちて來た大粒の雨のやうな調子で、座長格の六兵衞どんが口を切つた。

「ここは一つ、みんなの、一生に一度の決心のしどころだ。どうだらう、あれを、おれたちが自分で讓りうけることにしては？」

するとそれにつづいてばら／＼とやつて來た。

「それがいい！」

「贊成だ。」

「そして、オケラの鼻をあかしてやるのはいい氣持だな。」

「さうだ。」
「どういふやり方で懸け合をするんだね？」
「てん〴〵ばら〴〵ぢや駄目だ。」
「そりやさうだな。」
「愚圖々々してはゐられないぞ！」
「しくじつたら大事だ。」
「しくじつたりなんかしてたまるもんか。」
「たまるもんかつたつて、こいつはなか〳〵、さう易々とはいかないて。何しろ、金と相談だからな。」
「そんなことは云はなくつたつて解りきつてゐるぢやないか。」
「どうすりやいいんだ？」
「さあ……。」
「さうさなあ……」
「何とかうまい考へはないもんかな。」

ぱたりと止んで、あとは氣味の惡いまでに、急にひつそりした。

この一味のなかに、以前、村の小學校の代用教員をつとめてゐたことがあるところから百姓なみでなしに「小林さん」と呼ばれてゐた青年があつたが、彼はとつさの間にふと、何かの中で讀んだ或る共産村落のことを思ひ出し、それに據つて一つのかなり合理的な提案をつくり上げた。——一、かりに九千圓（先方では、一萬圓が少しでも缺けたら絶對取り合はないと云つてゐるのである。）で買ひとることが出來るとすれば、（拜み倒すなり何なりして、しやにむにそれで先方を承

諸させなければいけない。）九人に割つて、みんなが同じに千圓づつ金の工面をすること。一、從つてそこからの收穫は全部一まとめにして、常にこれを九等分すること。一、耕作の割りあては、最初の年は從來のままとし、第二年目からは土地を目白押しに隣りへ隣りへと取替へてゆき、やがて十年目にはまたもとの場所へ戻つて來るといふやり方を採用すること。

いつもなら、何はさておき、ここでそれこそ驟雨のやうな喧々囂々が沛然としてやつて來るのであつたが、どうしたのか、一座は依然、ひつそりかんとしてゐた。

小林さんの話が終つた時に、二三人、何か云ひ出さうとして口をもぐ〱させたものがあつたにはあつたのだが、いづれも、嚴しくそれに反對するいくつかの眼に出會つて、そのままぢーつと壓へつけられてしまつたのである。

正直者であわて者の六兵衞どんは何と思つたものか、翌る朝早くK（町名）の銀行へ行つて自分の預金の中から三百圓だけ引き出し、それを持つてT（村名）の五郎助どん（諏訪間さんの差配人。——諏訪間さんでは、七八年前、先代が亡くなると間もなく、一家をあげて東京へ引き上げてしまつてゐた。）の家へと向つた。そして、そこで五郎助どんを前にしてさんざ泣きごとを並べたり、つる〱に禿げた頭をぺこ〱下げたり、しまひには本當に涙を流したりまでして、I（字名）の田地をオケラに渡さないやうに、自分たちに九千圓で讓つてくれるやうにと嘆願した。その實、はなしは案外あつさりと纏つてしまつたのであつたが。ただ、五郎助どんは「ほかにも望み手がないわけでないのだから、明日を切つて大急ぎで金をまとめて貰はなければ困るのだ。」と念を押した。そこで、六兵衞どんは懷中の三百圓を出してそれを手附金として受取つて貰ひ、向ふ十二日間（初め十日と云つて、あとで考へ直して、なぜか十二日と訂正した。）のうちに間違ひなくあとを屆けると約束した。

このことの報告をうけた時、Iの人達はひどくあつけにとられた。そして、なぜか（その理由については誰一人説明す

ることは出來なかつたのだが）なかには大聲で笑ひ出したものさへあつた。しかし、それは、それに不服があつた爲めでないことだけは確だ。その證據に、人々はそれと同時にめい〱「これで俺も地所持ちになることが出來るのだ！」と考へて、急にすつかり有頂點になつてしまつた。

二

作藏どんと久松どんは、さつそく、連れだつてH（字名、Iと隣り合つてゐる）の佐藤さん（地主で金持ち、金貸しもしてゐる）のところへ出かけた。

旦那は茶の間で新聞を讀んでゐたが、妙な時間（朝の十時頃であつた）に、思ひもかけない人物どもが揃ひも揃つて長着物などを着こんで姿を現したので、いかにも解し兼ねたといつた顏つきをして、眼鏡越し（老眼鏡をかけてゐた）に二人をぢつと見据ゑた。さうして置いて、それから眼鏡をはづして挨拶をうけた。

久松どんは吃で、うまく喋ることが出來ないので、作藏どんが代つて二人前のはなしをした。

旦那は玉露をすすりながら默つて聽いてゐたが、聽き終ると、待ちかまへてゐたやうに、急に筒拔けの大聲で「アッハッ、ハッ、ハッ、ハッ」と笑ひ出した。そして、そのあとで、それを說明するやうに云つた。

「九人だから九千圓か、その思ひつきは振つてゐるな。もう一人仲間があつたら、ちやうどでもつと勘定がしよかつたらうにね、惜しいことをしたものだ。けちをつけるわけぢやないが、あれは精々七千圓から七千五百圓といふところが相場だよ。」

「七千圓ですつて！」

「七、七、七……」

「あ、さうだとも。私なら、きつとそれで買つてみせるよ。」

「そんなことを云つたつて、そりや駄目でございますよ。」

「ところが、駄目でないね。」

「だ、だ、だつて、あ、あ、あれは確か八、八、八、……………」久松が云ひ出したのを、作藏どんが引きとつてあとを續けた。「二十年も前に、K（字名）の庄家が手離しなすつた時でさへ、八千圓はしてゐたんでございますからね」

「なるほど、あの頃から較べると、何だつてお話にならないほど騰貴くなつてゐないものはないさ。しかし、田地だけはさうはいかないね。つゐ五六年前までのことだつたら、いざ知らず、今はまるで時勢が變つて來てゐる。私だつてさうだが、口ぢや一反七百圓でなくてはとか八百圓でなくてはとか云つても、本當に買ひ手があるといふんなら、もつともつと割安にだつて、喜んでどし／＼賣つてしまふよ。そして、自分の所有地全部を金にして摑んでゐられたら、こんな安氣なことはないさ。確實で、面倒がなくて……」

「それはあなたがた旦那衆の考へかたでございますよ。私たちには、また、私たちでまるつきり違つた考がございます。つまり、田地さへ自分のものになつたら、それでもう、ほかに何の望みもないのでございますからね。」

「ま、ま、まつたく、で、で、田地さへあつたら……」

「しかし、今時、借金までして田地をとる馬鹿がどこの國にあるものか。割にあはないことは知れ切つてゐるぢやないか。自分の田地とあれば、そりや、年貢米をとられることはいらないさ。そのかはりに役銀を納めなければならない。ところで、これがまた附加税々々々と疊みかかつて來るんで、どうして生やさしいことでおつゝかないんだ。それに、借金をしてゐれば、その利子のことも考へてかゝらなければならないしさ。」と、旦那はこゝでやつと話を當面の問題へ運んで來た。

そのことを云はれると、作藏どんは待ちかまえてゐたやうに

「そのことでございましたら、」と急に勢こんで答へた。「そりや、もう、充分に覺悟はしてゐるんでございます。家の者どもとも相談したんでございますが、みんながその爲めならどんな辛棒でもこらえるつて云つてゐるんでございます。悴も（作藏どんの長男は佐藤さんのところで下男奉公をしてゐる）實は今年一ぱいで家へさげて嫁でも貰つてやらうと思つてゐたのでございましたが、さうなればあと二三年は延ばして矢張りこちらで使つて頂くことにしますし、さうなれば運次（作藏どんの次男）もはる（同じく長女）も來年から奉公に出します。それから、久松どんも、さうなれば、これまで通りに出入りをさせて頂くとしまして（久松どんは器用で屋根屋をやらせれば屋根屋の眞似事も出事るし、植木屋をやらせれば植木屋の眞似ごとも出來るし、木挽をやらせれば木挽きの眞似ごとも出來るし、泥もこねれば鉋も使へると云つたやうなわけで、みんなから調法がられてゐるうちに日傭とりがいつか自分の本職みたいになつてゐた。ところが、田舍の地主などではちやうどこの種の人手を借りなければならないやうな仕事がいつもうざ〳〵轉がつてゐるものである。さういふわけで、事實、久松どんは月のうち少くも十五日はいつも佐藤さんへ通ひつめてゐた。）その賃銀はそつくりそのまま返金の方へ廻して頂くことにしてもいいつて、さう云つてゐるんでございます。」

久松どんは、旦那へとも作藏どんへともわからない、曖昧なおぢぎを一つして、

「こ、こ、この秋、ぶ、ぶ、豚とあ、あ、家鴨を賣つて、そ、そ、その金を、さ、さ、さしあげます。そ、そ、それから、ら、ら、來春、こ、こ、仔を生んでしまつたら、あ、あ、あの親豚も賣つてしまひますで、ご、ご、ございます。」とつけ加へるのであつた。

旦那は、そんな話は聽きたくないと云つたやうに殊更らそつぽを向いてゐたが、放つて置いたら切りがないとでも思つたものか、急に正面に向き直つて、

「駄目なこつた。今度のことは諦めるがいい。私はいやだよ。君たちの爲めを思つてさう云ふのだ。」と、きつぱり云ひ放つた。

二人は默りこんでしまつた。しかし、さうかと云つて、そのまま素直に引き退るでもなかつた。

旦那は、それにはかまはず、眼鏡をかけて、また新聞をひろげた。

暫の間ぢつと首をかしげて考へこんでゐたか、作藏どんは、やがて追ひすがるやうな調子で云ひ出した。

「それがその、私たち二人つきりのことでございましたら何でございますが、さつきも申上げたやうに、みんなで相談してきめたことでございまして。……」

「どつちにしたつて同じことだ。出來ないものは出來ないんさ。」と、旦那は新聞から眼を離さずに答へた。

「せつかくのみんなの計畫が、私たち二人のためにふいになつてしまつたら……」

「そ、そ、それこそ、わ、わ、私たちは、……」

「そんな心配ならしないでもいいよ。いよいよ事がそこまで運んでしまつた曉には、默つてゐたつて私の方で放つては置かないから。」

「それぢや、何でございますね、今はいけないが、みんなの勢揃ひが出來たあとならいいつてわけなんで……」

「さう、さう。」

「ほ、ほ、ほんとでございますか。」

「きつと約束をして下さいますね？」

さう云つて、二人は思はず相手の顔をまともに見つめた。すると、その時、旦那はそれを迎へるやうに新聞をわきへ押しやり、眼鏡をはづして顔をあげながら云つた。

「あ、いいとも、いいとも。ほかならぬ君たちのことだもの。」そして、そのあとで、例の持ち前の間抜け聲で、再び「アッハッ、ハッ、ハッ、ハッ」と大笑ひした。

それを聴くと、また、二人は何だか心もとない氣がして、もう一度念を押さずにはゐられなかつた。

「冗談をいつてゐなさるんぢやございますまいね。」

「わ、わ、私たちは、ほ、ほ、本氣で……」

「私も本氣だよ。私は自分で約束したことはきつと守る。それとも、いつかさうでなかつたことでもあると云ふのかね。」

と、旦那は急に眞顔になつて答へた。「冗談にしてゐるわけではないが、正直を云ふと、ただ、君たちのその計畫(もくろみ)がどうしたつてうまく成功する筈がないと見越してゐるだけのことさ。」

「ど、ど、どうして……」

「それは、また、どうしてでございます？」

「どうしてもかうしてもないぢやないか。まあ、氣を落ちつけて考へてみるがいい、九千圓の一萬圓のといふ金が、十日や二十日の間に、君たちの手でさう易々(やすやす)とまとまつてたまるものか。それとも、I（字名）の衆の椽の下にはみんな金甕でも埋けてあるのかね。」

「どうしまして、決して、そんな、……」

「だからさ、悪いことは云はない、最後のところはこの私に任して置いて、君たちは平常(いつも)と同じやうに、また明日から仕事の方へ精を出すこつた。稼ぐに追ひつく貧乏なしさ。」

さう云はれてみれば、なるほど、盂蘭盆までの一仕切りをつけるのに、今は田の草取りや何やで忙しい最中であつたのだ。

作藏どんと久松どんは、何か云ひ出さうとしたが、なぜか互ひに顔を見合はせて黙つてしまつた。

三

佐藤さんの旦那が云つた通り、I（字名）の衆の椽の下にはどこにも金甕は埋けてなかつた。それでも、町の銀行に貯金がしてあつて、今度のことでてんてこ舞ひをしないですんだ家が二軒あつた。それは、耕作地の三分の一を自分で持つてゐる六兵衛どんと、長年旅稼ぎをして来た大工の孫平どんである。

それから、工面に窮して自分の持ちものを賣つた組が二人あつた。——勘左衛門どんは材木屋をよんで、裏の桐林と、屋敷内の立木を伐り倒す約束をし、太郎次どんは娘をN（市名）の遊廓へ連れて行つた。勘左衛門どんは、何でもこのあたりでの草分けだとかいふことで、今は落ちぶれてゐるが、屋敷うちには、さすがに、この界隈ではほかに見ることの出来ない大木老樹が鬱蒼と茂つてゐた。そして、今度の九人組の中で一番の貧乏人である太郎次どんは、運悪く年頃の娘を持つてゐた。そして、可哀さうに、その娘は父親につゐそんな下らないことを思ひつかせるやうな、田舎には珍らしい色白な綺麗よしであつた。

四

清助どんは、小林さんに頼んで、北海道にゐる叔父のところへ手紙を書いて貰つた。そして、それをあてにして、すつかり安心し切つてゐた。が、ひよつとかしてそれが期日に間に合はないかも知れないといふ懸念があつたので、それまでのほんのちよつとの間（どんなに長くなつてもせい／＼五六日間）のつなぎをして貰はうと思つて佐藤さんのところへ出かけた。

旦那は、作蔵どんたちの時と同じやうに、やはり、いきなり「アッハッ、ハッ、ヘッ、ヘッ」と間抜けの大聲で笑ひ出した。そして、相手が、「向ふからの手紙で見ますと、この頃ぢや、相當うまくやつてゐるらしう（こつちから移住して行つた者は、どういふわけか誰もみんなこんなやうなことを言つてよこすのであつた。）ございます。」とか、「それでなくとも、こつちとちがつて、向ふは大變金の工面のしいいところだつてことでございますから……」などと云ひ出したのをいいことにして、

「いまに電報爲替で送つて來るだらう。何も今からあわてて、そんな餘分な手數をかけることはないさ。」とあつさり片づけてしまつた。

四五日にして、小林さんも佐藤さんへ出かけて行つた。彼は初めから小刻みに幾口かに分け、それを自分の親類緣者に振りあてて頼み廻つた。そして、八百圓までは漕ぎつけたが、あとの二百圓がどうにもうまく行かなかつたのだ。

それに對して、今度は、旦那は笑はなかつた。そのかはりに、澁い顏をして、厭に改まつてしまつた。おまけに、急に、いつもにもない耳の遠いふりまでし出した。明かに蟲の居どころが惡かつたのだ。かうなつたら、もう、とても談が圓滑に運ぶ筈はなかつた。こんな時に下手にこぢらしてしまつたら、のち〳〵ほかの事にまで累を及ぼすにきまつてゐたので、小林さんは利巧に自分から會話を龍頭蛇尾に終らせた。

小林さんは旦那の前を逃げ出すと、そのまま歸つてしまはずに、奥の離れ座敷にゐる若旦那のところへ行つた。うまく談しこんで、加勢をして貰はうと思つたのである。

若旦那は、土地の共有共耕の制度に興味をひかれて云つた。

「それは面白い！　しかし、實際に於て、果してそんな事がうまくやつて行かれるだらうか。甚だ疑はしいもんだな。」

「現に、それでちやんと、うまくやつてゐるところがあるんです。」と、小林さんは得意になつて答へた。

「しかし、それは、無論、外國のはなしでせう。」
「ところが、日本のうちにさういふ村があるんです。」
「どこに？」
「私も書物で讀んだので、はつきりは覺えてゐませんが、たしか長野縣だつたかと思ひます。そこでは、私どもの場合とちがつて、初めから、村全體の田畑についてその方法が行はれてゐるんです。」
「それは、たしかに、一ぺん視察に出かける價値があるね。」
「なあに、それには及びませんよ。間もなく、居ながらにしてそれをご覽になることが出來ます。」
「いや、あなたはさういふ事を大變簡單に考へてゐられるやうだが、……」
「他のやつてゐることを、やつてやれない筈はないと思ひます。」
「それはちがふ。もしさうなら、何事も面倒はないんだからな。實際はそのあべこべで、寧ろあまりにさうでなさ過ぎるんぢやないでせうか。それとも、あなた方の間で、さうしたことに自信の持てる何かちやんとした根據でもあるんですか。」
「さあ、そんなふうに云はれると、ちよつと返答に窮する次第ですがな……」
小林さんはたぢ／＼とした。すると、それに勢ひを得て、今度は、若旦那が氣焰をあげ初めた
「僕は專門がちがふし（醫科大學の二年生である。暑中休暇で歸省してゐたのだ。）詳しいこともわからないが、素人考から云つても、今、ここで君たちが土地を買つたりするのは不得策だね。ましてそのために一同が揃ひも揃つて借金をしなければならないなんて、無分別を通り越して、ちつと馬鹿げてゐやしないかな。小作米の催促を受けるのと、金でいぢめられるのと、どつちが樂かね？　小作米の方は、いさとなれば爭議だ何だとあべこべに地方から文句の一つも並べられるが、

金の方ぢや、交渉があんまりはつきりし過ぎてゐて、さういふ呑氣なわけにいかないからね。それに、そんなことよりも、土地はこれから廉くなる一方だ。うちの親爺なんか、今でも、田地は持つてゐて割にあはないつていつも口癖のやうにしてこぼしてゐる。僕の口からこんなことを云ふのはをかしいが、君たちのやりやう一つで、機運をもつと急速に進めることだつて出來るんだからね。さうすれば、土地の値段はやがて今の半分にも、四分の一にもさがつて行くにきまつてゐる。君たちが手を出していいのはその時だ！」

それを聽いてゐて、小林さんは心の中で「ふん！」といふ氣がした。「そんな遠いことを夢みて呑氣に構えこんでゐられる位なら、誰が好きこのんで、こんな忙しいさなかに仕事を放り出しておいて、こんなに眼の色をかへて走け廻つたりするもんか。」しかし、口に出して云ふ場合には、それを次ぎのやうな言葉に飜譯し直した。

「ところが、そんなうまい工合に問屋が卸してくれないんだから仕方がありませんよ。」

「なぜ？」

「なぜつて、そりや、世の中に地主と小作とだけしか居ないんだつたら、それこそ何の面倒もないんですがね。たとへば、今度のことにしても、現に、あのオケラの奴が薄氣味の惡い手を横合ひからぬーつと突き出しかけてゐるぢやありませんか。彼奴等は、土地や百姓には初めから用がないんで、たゞ、それを種子に幾らかのかすりをとりさへすればそれでいいんです。その無法で土地が轉々とちがつた人の手に渡つてゆくうちに、どんなことが持ち上らないとも限りません。そして、とゞのつまり一番ひどい目にあはされるのは私たちにきまつてゐるんですからね。それには敵ひませんよ。」

「なるほど……」と、若旦那は初めて腕組みをして、ぢつと考へこんだ。

小林さんは、それから一時間半もオケラの惡口を云ひつゞけた。そして、最後に、そのオケラから自分たちを救つてくれるものは旦那の外にはないのだと結論した。

五

三吉どんのところでは、女房が自分で乘り出して、小金を貯めてゐる實家の主人を說きつけて來た。それで、三吉どんが折を見て金の受取りにゆくと、證文を入れることになり、抵當として今度の田地をと云ひ出されて（女房は、それに就いての詳しいことを話してなかつたのだ）急に面喰つた。破談になつた上、あべこべに「しつかりしなくつちやいけない！」と意見された。女房の父親さんに云はせると、仲間のなかに狡い奴がゐて、みんながそれにうまく欺されてゐるのでなければならなかつた。

三吉どんは、すつかり當てにしてゐたのが外れてぼんやりしてしまつた。そして、差し迫つてほかにどうしてみようもなかつたので、これも矢張り、佐藤さんのところへ出かけて行つた。

旦那は、三吉どんの顏をつく／＼と眺めながら、「やれ／＼！」と思つた。「この分だと、しまひまでには、あらかた自家へやつて來ることになつてしまふぞ。」かうなると、何だか少し馬鹿臭くもあるので、相手が例の話しを持ち出しても別に可笑しくもなければ、と云つて、また、むきになつてそれを非難攻撃する氣にもなれなかつた。

旦那は、三吉どんの云ふことをいい加減に聽き流し、そして何も知らないやうな顏つきをして訊ねてみた。

「それはそうと、ほかの衆はどうなんだね。」

「はい、それがその、」と、三吉どんは頭を掻き／＼答へた。「今ごろになつて、まごついてゐるのは私だけなんでございまして、はい……」

それを聽いて、旦那は、「こいつ、出鱈目を云つてゐるな。」と思つた。が、すぐそのあとから、また、「それとも、奴等、お互ひに嘘をつき合つてゐるんだな。」とも考へてみた。そして、三吉どんがこれをきつかけに、もう一度、初めから同じ

ことを繰り返して嘆願したのに對して、彼自身も亦、口から出まかせに、「最近に、大口を三件も引受けてしまつたので、盆の仕拂ひを目の前にして、實は私が自分でてんてこ舞をしてゐるやうな次第なんだから……」とか、「盆でもすんで、月でもかはつたら、また、何とか相談に乘つてあげられないこともあるまいがね……」などと並べたてるのであつた。

六

清助どんと小林さんと三吉どんとは、その後も度々、佐藤さんへ足を運んだ。そのくせ、彼等はなぜかお互ひにそれを内緒にし合つた。そのため、先方で鉢合はせをしないやうに、また、佐藤さんの屋敷へ出るところに架つてゐる用水堀の橋を渡るところを他に見られないやうに、めい〱相當念の入つた苦心をしなければならないのであつたが、それにもかかはらず、用件の方は何れも一向埒があかなかつた。

ある日、K（町名）の北澤がI（字名）を通つてH（字名）の方へ行つたのを見かけたものがあつた。あとでそのはなしを聽いて、人々は、例のことで彼が佐藤さんへ金を借りに行つたのに相違ないと云つて騷ぎ立てた。そして、その姿を見たといふ人に向つて、「なぜ、あとを尾けて行かなかつたのだ。」などと、今更どうにもならないことを云つて責めたりした。

六兵衛どんが五郎助どんに約束した期日が迫つてゐた。

清助どんは北海道へ返信づきの電報を打つたりしたのであつたが、先方からはうんともすんとも云つて來なかつた。そこで、彼は業を煮やして、たうとう、自分で向ふへ出かけて行く決心をした。それにしても、もう、先方へ行き着いて大急ぎで電報爲替で送つてよこしてやつと間に合ふ位な時間しか殘つてゐなかつた。その旅費を借りに、清助どんは佐藤さんへ行つた。ところが、旦那はその朝早くK（町名）へ用足しに出かけて留守であつた。家を出る時、清助どんは、その

足で直ぐにY（村名、汽車の停車場のあるところ）へ走けつけることが出來るやうに、すつかり旅の身仕度をして來たので、そのまま、旦那のあとを追つてK（町名）へ向つた。そして、心あたりを隅から隅まで探し歩いた。男を遣して、北澤の家へも訊ねてみた。が、その甲斐もなく、たうとう、旦那を捕へることが出來なかつた。そのうちに、日が暮れて、遅くなつて、やがて、遠い山の麓を走つてゆく終列車の響がきこえて來た。

七

三日の日延べをして貰つたのであつたが、I（字名）の人達の金は遂にまとまらずじまひであつた。その結果、田地は北澤の手を經て、Y（村名）の矢崎さんのものになつた。それについて、いろ／＼な噂が立つた。しばらくの間、どこへ行つても、その話で持ちきつてゐた。——

「たうとう、オケラにうまい汁を吸はれてしまつた。」

「あいつに見こまれたら最後、何だつて日茶苦茶さ。」

「七千五百圓に買つて、九千圓に賣りつけたつて云ふのは本當かねイ。」

「一萬圓だつてことでないか。」

「云ひ値がさうなんだ。」

「金の出どころは、やつぱり佐藤さんださうだ。」

「まさか、そんなことはあるまい。」

「いいや、それは確だ相だ。」

「清助どんのはなしだが、オケラの家へ行つた時、そこの玄關に旦那の下駄がぬいであつた相だ。その時はつゐうつかり

してゐたが、あとで考へ直してみると、さうにちがひないつてことだ。」

「何でも、オケラが七百圓とつて、佐藤さんへ五百圓のお禮をして、あとの三百圓を五郎助どんにやつたとかいふさうだ。」

「オケラは、自分の懐へ千圓ねぢこんだつて云ふものもある。」

「千圓！」

「おら、あの旦那だけはそんなことをなさるお方だとは思つてゐなかつた。」

「なあに、あの人のがつしりしてゐるのは今に初まつたことぢやないよ。」

「さうだとも。先だつてなんかも、何喰はない顔をして、Ｉ（字名）の衆は九人で千圓づつ持ちよつて九千圓にする勘定は知つてゐるが、三百圓を九で割り切る算術を知つてゐるかしら？　だなんて云つてゐなさるんだ。そして、そのあとで、いつものあの筒抜け聲で、アッハヽヽ、ハッ、ハッ、ハだとさ。」

「三百圓ッて、そりや、六兵衛どんが五郎助どんに渡した手附金のことだね。」

「さう、さう。」

「さういへば、あれは返へして貰へないのかね？」

「さうだらうよ。」

「そんなことはないだらう。」

「いいや、向ふには、何しろ、あのオケラが附いてゐるんだからな。」

「訴へたらどうなるんだ？」

「わからないな。」

「そりや、勝つだらう。」
「いや、負けになるだらう。」
「示談になつて、おなさけで、半分も戻して貰へればいいところだらう。」
「さういふもんかな。」
「馬鹿くさいはなしだ。」
「六兵衛どんがオケラに殴られたツて云ふのは本當か。」
「本當ださうだ。」
「殴られたんでなく、組み伏せられたんだ相だ。」
「どうしたんだ？」
「詳しいことは知らないが、何でも五郎助どんの家で二人で論判を初めたんだ相だ。そして六兵衛どんがかん／＼に怒り出して、自分から飛びかかつて行つたんだ相だ。」
「よぼ／＼のくせに、よせばいいのに……」
「何で論判したか知れないが、怒るのは無理はないさ。」
「可哀相に！」
「I（字名）の衆もへまな眞似をやつたものさな。ひまを缺いて、骨を折つて、金をつかつて……
「見るがいい、あの衆の田も畑も草だらけだ。」
「豪さうに共同事業だなんて、柄にないことを考へ出したのがそも／＼の間違ひさ。」
「それならそれで、初めからみんなで揃つて佐藤さんの旦那にでも相談したら、どうだつたんだ。」
「さうしりや、案外、すら／＼と成功してゐたかも知れなかつたんさ。」

「しかし、おれに云はせりや、やつぱり、あれで良かつたのさ。」
「なぜ?」
「なぜつて、つまり、われ〳〵の小作組合の方から云つて……」
「それもさうよな。」
「太郎次どんのおさよはどうなつた?」
「千二百圓で賣れた相だ。」
「もう、連れて行かれたのか。」
「とつくに。」
「いい値だな、千二百圓とは。」
「おれに云はせりや、廉すぎらあ。」
「そりや、さうだらうさ。」
「ハ、ハ、ハ、ハ、」
「お前、うけ出してやつたらどうだ。」
「金をくれ!」
「オケラのところへ借りに行け!」
「ハ、ハ、ハ、ハ、」
「太郎次どんは、それぢや、當分大ふく〳〵だな。」
「そんなこともあるまいよ。借金がうんとあるんだからな。あればあるで、そつちへとられてしまふにきまつてゐらあ。」
「破談にしようつて云つたんだ相だが、それが、さうはいかないんだ相だ。」

「なぜだ？」

「さうするには、破談料だとかつて、足し前をうんととられるんだ相だからな。」

「をかしなはなしだな。」

「それに、貰られて行くことを、本人がそれほど厭がつてもゐないんだ相だ。」

「いやな奴だな。」

「ハ、ハ、ハ、ハ、」

「あいつはさうに違ひない。」

「お前、何でそんなことがわかる？」

「おぼえがあるんだらうさ。」

「何も顔を赤くしないたつていいよ。」

「ハ、ハ、ハ、ハ、」

「なぐるよ。」

「この畜生奴！」

……さつとこんな按梅式に。

そして、それがそろ〳〵下火になりかけた時分、草分けの森とか欅屋敷（二抱えも三抱えもある大欅が何本も何本も生えてゐたので）とか云はれて村の名物の一つに数えられてゐる勘左エ門どんの庭へ、毎日、二三人から四五人の木挽が入りこんで仕事をしてゐた。

そこから、時々、バリバリバリ・ズドーンといふ凄じい物音が地響きを立てて起つて來た。（完）

——二年・二月稿——



吾輩は猫である

夏目漱石原作
金子洋文脚色

第一場

苦沙彌先生の客間、庭に面した障子に冬の陽が暖かくさし（周圍は暗い）枯枝に三羽の鳥がとまつてゐるさまがうつつてゐる。

間――。

風呂場から苦沙彌先生の鵞鳥が締殺されるやうな含嗽の聲が聞えてくる。

ぼうとした一つの影が障子にうつる。

猫。（散歩の心持ちでゆつくりと）吾輩は猫である。吾輩は猫である。名前はまだ

ない。吾輩は名なしの權兵衛である。

猫の姿がはつきり障子面うにつる。うんと一つのびをする。

そのさまを見て三羽の烏が長閑になき出す。

三羽の烏。阿呆、阿呆、阿呆。

猫。(おどろいて見あげる)おや、君等はなんだね。

三羽の烏(頸をふつて嘴で胸の邊をつつつく)

猫。おやそれが君等の御挨拶か…………ふゝん、かねて噂に聞き及ぶ烏勘左衛門とは君等のこつたね、しかし勘左衛門だらうと、次郎左衛門だらうと吾輩の運動用具たるその枯枝にとまつて、一言の挨拶もないといふのはけしからんぢやないか。何とか言ひ給へ。

三羽の烏。阿呆、阿呆、阿呆。

猫。阿呆?…………それが君等の初對面の挨拶かね、どうも甚だ感心出來ない言葉だ、…………挨拶はそれでまあいいからどいて呉れ給へ、その枯枝は吾輩の唯一の運動用具だ、吾輩にとつては苦沙彌先生のゼアスターゼにひとしいものだよ。

苦沙彌先生の含嗽の聲前より一さう高くひゞき渡る

三羽の烏その聲に驚いて飛び上る

猫。いや、ありがとう〳〵…………なに、そんなにおどろかなくていいよ、あの鵞鳥が絞め殺されるやうな野蠻な聲は、主人が風呂場で含嗽してゐる聲なんだ、御機嫌のいい時に限つて、元氣づいてあんな風に猫があ〳〵やるんだ。……

三羽の烏。(再び枯枝にとまる)

猫。おや、君等はまたそこへとまるのかい、……けしからん、君等は吾輩を侮辱する氣か…………

（怒つて背を丸くする）

三羽の烏。阿呆、阿呆、阿呆。

猫。又しても阿呆とぬかす、貴樣等のやうな愚物には、この靈妙な怒りの象徴詩が分らんと見えるな……よし、それならそれで非常手段に訴へるから覺悟しろ。

猫、内心びく／＼しながら、木に飛び上つて行く、三羽の烏羽搏きして一二尺飛び上つたとき、その風におどろいてはつと思ふ間に、木からすべり落ちる。三羽の烏阿呆／＼と冷笑しながら飛び去る。

猫。あゝ、おどろいた……あゝいふ圖太い奴等にかかつちやかなはない、そもそも彼等を猫同様に考へて取扱つたのが我輩の落度だ、あいつ等は西郷隆盛君の銅像にまで糞をひつかける程のいい度胸だから、始末が惡い、…………、これからはあんな愚物共を相手にしないことだ、…………（歩きまはる）吾輩は猫である、吾輩は猫である。……

……………。

車屋の黒の姿、ぼうと大きくうつる。

車屋の猫。おい名なしの權兵衛。

猫。（ふりかへつてみる）

車屋の猫。手めえ近頃ぢや乙に高く留つてゐるぢやねえか、いくら教師の飯を食つたつて、そんな高慢ちきな面あするねえ、人つけ面白くねえ。

猫。いや黒君お目出度う、相變らず元氣がいいね。

車屋の猫。何、お目出度え？　正月でお目出度けりや、おめえなんざあ年が年中お目出度え方だらう。氣をつけろい、こ

の吹子の向ふ面め。

猫。一寸伺ふが、吹子の向ふ面といふのはどういふ意味かね。

車屋の猫。へん、手めえが悪體をつかれてゐるくせに、その譯を聞けあ世話あねえ、だから正月野郎だつて事よ。

突然車屋のお神さんのどなる聲が聞えてくる。

お神さんの聲。おや、棚にあげて置いた鮭がないよ、大變だ、又あの黒の畜生がとつたんだ。ほんとうに憎らしい猫つたらありやしない、今に歸つて來たら、何うするか見てゐやがれ。…………

猫。君は不相變やつてるね。

車屋の猫。何がやつてるでえ、しやけ一切や二切で相變らずたあ何だ、人を見縊つた事をいふねえ、憚りながら車屋の黒だあ…………。

猫。君が黒君だといふことは始めつから知つてるさ。

車屋の猫。知つてるのに、相變らずやつてるたあ何だ、何だてえ事よ。(としきりに熱いのを吹きかけてこづきまはす。)

再びお神さんの聲聞えて來る。

お神さんの聲。ちよいと西川さん、用があるんだよ此人あ、牛肉を一片すぐ持つて來るんだよ、いいかい、分つたかい、牛肉の堅くないところを一片だよ。

車屋の猫。へん、年に一篇位ゐ牛肉を誂えると思つて、いやに大きな聲を出しやがらあ、牛肉一片が隣り近所へ自慢なんだから始末に終へない阿魔だ。(と言つて四つ足を踏ん張る)

猫。…………

車屋の猫。一片位ゐぢあ承知出來ないんだが、仕方がねえ、いゝから取つときや、今に食つてやらあ。

猫。今度は本當の御馳走だ、結構々々。

車屋の猫。御めつちの知つた事ぢやねえ、默つてろ、うるせえや（と云ひながら、突然うしろ足で砂を浴せかけて去る）

猫。（額を撫でながら）ぶツ、ぶツ、ぶツ、……ひどいことをしやがる、……ぶツ、ぶツ、ぶツ、……烏と言ひ、あいつと言ひ、黑い姿の奴はどいつもこいつも亂暴ものだ、吾輩はあいつ等とは交際出來ない、うちの主人や、迷亭や、寒月の方が、おだやかではるかに面白い、どれ一つ客間へ行つて見やうか。

障子から猫の姿消え、枯枝に小鳥が來て鳴き乍らたはむれる。

間。

障子の隅の穴から猫顔を出す。

猫。ニヤン――。

第二場

苦沙彌先生の客間、先生は猫のかたはらで、筆硯と原稿用紙を並べて腹匍ひになつてしきりに何かうなつてゐる。やがてすら／＼と筆を運んでから起上つてそれを讀みあげた。

苦沙彌。（天然居士は空間を研究し、論語を讀み、燒芋を食ひ、鼻汁を垂らすんである。）ハヽヽヽヽ、こりや面白い、……まてよ、鼻を垂らすのはちと酷だから消さう……。

そしてその后髯から文章をひねり出すと云ふ見幕で、猛然とねぢ上げてゐるところへ妻君登場、主人の前に座る。

妻君。（主人の前に座りながら）あなた一寸。

苦沙彌。なんだ。

妻君。あなた一寸。

苦沙彌。なんだよ。（今度は鼻穴へ指を入れて鼻毛をグツと拔く）

妻君。今月はちつと足りませんが………。

苦沙彌。足りん筈はない。醫者へも藥禮はすましたし、本屋へも先月拂つたぢやないか。今月は餘らなければならん。（ぬきとつた鼻毛を天下の奇觀の如く眺めてゐる。）

妻君。それでもあなたが御飯を召し上らんで麵麭をお食べになつたり、ジヤムをお舐めになるものですから、

苦沙彌。元來、ジヤムを何罐舐めたのかい。

妻君。今月は八つです。

苦沙彌。八つ？そんなに舐めた覺えはない。

妻君。あなた計りぢやありません子供も舐めます。

苦沙彌。お前も舐めたらう。

妻君。…………。

苦沙彌。いくら舐めたつて五六圓位ゐのものだ。（と、平氣でべらぼうに長い鼻毛一本々々丁寧に原稿用紙の上に植えつける。今度は吹き飛ばさうとするがなか〳〵飛ばない）いやに頑固だな。

妻君。ジヤムばかりぢやありません、外に買はなけやならないものもあります。

苦沙彌。あるかも知れない。（大いに驚いた樣子で拔いた鼻毛を妻君の顏の前に突き出す。）一寸、見ろ。

妻君。あら、いやだ。

苦沙彌。鼻毛の白髮だ。

妻君。それどころぢありません。(ぷんとして妻君退場。)

苦沙彌。(原稿にかへつて)焼芋を食ふも蛇足だ、割愛せう。……文章は御隨にして銘文にせうかな。夫から裏をかへして再び文章を書いてゐるところへ迷亭、寒月登場。

迷亭。やあ、今日は、……何をしてるんだ。

苦沙彌。天然居士の墓銘を撰して居る所だよ。

迷亭。(原稿をとり上げて讀む)何だ……空間に生れ、空間を究め、空間に死す、空たり間たり天然居士、噫……成程こりやいい。

苦沙彌。可いだらう。

迷亭。此墓銘を澤庵石に彫りつけて本堂の裏へ力石のやうに抛り出して置くんだね、雅でいいや、天然居士も浮ばれるだらう。

苦沙彌。僕もさう思つてゐるのさ。

迷亭。ところで今日はね、寒月君の演説稽古のためにここへやつて來たんだ。

苦沙彌。演説の稽古!

迷亭。理學協會でやるんださうだ。どうだきいて呉れるだらう。

苦沙彌。僕には物理學の演説なんかわからん。

迷亭。いやところが面白いんだ。首縊りの力學つてね、脫俗超凡な演題だから、傾聽する價値あるさ……寒月君それぢや早速願はう。

寒月。(立上つて)コップへ水を一杯頂戴しませう。

迷亭。いよ〳〵本式にやるのか……よし、よし、ついでに卓子も持つて來やう。

（次の室へ行つてそれ〴〵用意して來る。）

寒月。（内隱しから草稿を取り出して徐ろに）稽古ですから御遠慮なく御批評を願ひます。……罪人も絞罪の刑に處するといふことは重にアングロサクソン民族間に行はれた方法でありまして、夫より古代に溯つて考へますと首縊りは重に自殺の方法として、行れたものであります。猶太人中に在つては罪人に石を投げつけて殺す習慣であつたさうで御座います。舊約全書を研究して見ますと所謂、ハンギングなる語は罪人の死體をつるして、野獸または肉食鳥の餌食となる意義と認められます。ヘロドタスの說に從つて見ますと、猶太人はエヂプトを去る以前から夜中死骸を曝されることを痛く忌み嫌つた樣に思はれます。エヂプト人は罪人の首を斬つて胴だけを十字架に釘付けにして、夜中曝物にしたさうで御座います。波斯人は……。

迷亭。寒月君。首縊りと縁が段々遠くなるやうだが大丈夫かい。

寒月。これから本論に這入る所ですから少々御辛抱を願ひます……。波斯人はどうかと申しますと、是も矢張り處刑には磔を用ひたやうで御座います。但し生きてゐるうちに磔刑に致したものか、死んでから釘を打つたものか、その邊はちと分りかねます。

迷亭。そんなことは分らんでもいいさ。

苦沙彌。（大きな欠伸する）

寒月。まづ色々お話し致したい事も御座いますが、御迷惑であらつしやいませうから……。

迷亭。あらつしやいませうより、入らつしやいませうの方が聞きいいよ、ねえ苦沙彌君。

苦沙彌。どつちでも同じことだ。

寒月。さて愈々本題に入りまして辯じます。

迷亭。辯じますなんか講釋師の云ひ草だ、演説家はもつと上品な言葉をつかつて貰ひたいね。

寒月。（むつとする）それぢや何と言つたらいいんです。

苦沙彌。寒月君、そんな彌次馬にかまはずにさつさとやるがいい。

迷亭。（むつとして辯じましたる柳かな）かね。

寒月。眞に處刑として絞殺を用ゐましたのは、私の調べました結果に依りますると、オヂセーの二十二卷目に出て居ります、即ち彼のテレマカスがペネロピーの十二人の侍女を絞殺するといふ條りで御座います。希臘語で本文を朗讀しても宜しう御座いますが、ちと衒ふやうな氣持になりますから、やめに致します。四百六十五行から四百六十三行を御覽になると分ります。

迷亭。希臘語云々はよした方がいい、さも希臘語が出來ますと言はんばかりだ、ねえ苦沙彌君。

苦沙彌。それは僕も賛成だ。そんな物欲しさうなことは言はん方が奥床しくて好い。

寒月。それでは此兩三句は今晩拔く事に致しまして次を辯じ――――えゝ、申上げます。此絞殺を今から想像して見ますと、之を執行するに二つの方法があります、第一は彼のテレマカスがユーミアス及びフヒリーシヤスの援けを藉りて繩の一端を柱に括付けます、そして其繩の所々へ結び目を穴に開けて此穴へ女の頭を一つ宛入れて置いて、片方の端をグイと引張つて釣し上げたものと見えるのです。

迷亭。つまり西洋洗濯屋のシヤツのやうに女がぶら下つたと見れば好いんだらう。

寒月。その通りで、それから第二は繩の一端を始めから天井へ高く釣るのです、そして其高い繩から何本か別の繩を下げて、夫に結び目の輪になつたのを付けて、女の頭を入れて置いて、いざといふ時に女の足台を取りはづすと云ふ趣向

なのです。

迷亭。たとへて云ふと細暖簾の先へ提灯玉を釣るした様な景色と思へば間違ひあるまい。

寒月。提灯玉といふ玉は見た事がないから何とも申されませんが、もしあるとすればその邊の所かと思ひます――夫で是から力學的に第一の場合は到底成立すべきでないと云ふ事を證據立てゝ御覧に入れます。

迷亭。面白いな。

苦沙彌。うん面白い。

寒月。先づ女が同距離に釣られると假定します、又一番地面に近い二人の女の首と首を繋いでゐる繩はホリゾンタルと假定します。そこで a_1 a_2……a_6 を繩が地平線と形づくる角度とし、T_1 T_2……T_6 を繩の各部が受ける力と見做し、$T_7=X$ は繩の最も低い部分の受ける力とします、Wは勿論女の體量と御承知下さい、どうですお分りになりましたか……

迷　亭。（顔を見合はす）

苦沙彌。

迷亭。大抵分つたよ。

苦沙彌。うむ。

寒月。さて多角形に關する御存じの平均性理論に依りますと、下の如く十二の方程式が立ちます。$T_1 \cos a_1 = T_2 \cos a_2$……

(1) $T_2 \cos a_2 = T_3 \cos a_3$……(2)……

苦沙彌。方程式はその位ゐで澤山だらう。

寒月。實は此式が演說の首腦なんですが、

迷亭。夫ぢや首腦だけは逐つて伺ふ事にしやうぢやないか。

寒月。この式を略して仕舞ふと折角の力學的研究が丸で駄目になるのですが……。

苦沙彌。なにそんな遠慮はいらんからずん／＼略すさ。

寒月。それでは仰せに從つて、無理ですが略します。

迷亭。（手を拍ちながら）それがよからう。

寒月。それから英國へ移つて論じますと、ベオウルフの中に絞首架即ちガルガと申す字が見えますから、絞罪の刑は此時代から行はれたものに違ひないと思ひます。ブラックストーンの說に依ると若し絞罪に處せられる罪人が、萬一繩の具合で死に切れぬ時は、再度同樣の刑罰を受くべきものだとしてありますが、妙なことには、ピヤース・フローマンの中には、假令兇漢でも二度絞める法はないと云ふ句があるのです。まあどつちが本當か知りませんが、惡くすると一度で死ねない事が往々實例にあるので。千七百八十六年に有名なフイツゼラルドといふ惡漢を絞めた事がありました。所が妙なはづみで一度目には台から飛び降りるときに繩が切れてしまつたのです。又やり直すと今度は繩が長過ぎて足が地面に着いたので矢張り死ねなかつたのです。とう／＼三度目に見物人が手傳つて往生さしたといふ話です。

迷亭。やれ／＼。

苦沙彌。本當に死に損ひだな。

寒月。まだ面白い事があります。首を縊ると背が一寸ばかり延びるさうです。是はたしかに醫者が計つて見たのだから間違はありません。

迷亭。それは新工夫だね、どうだい、苦沙彌君などはちと釣つて貰つちやあ、一寸延びたら人間並みになるかも知れないぜ。

苦沙彌。寒月君、一寸骨が延びて生き返ることがあるだらうか。

寒月。それは駄目に極つてゐます。釣られて脊髄が延るからなんで、早く云ふと骨が延びるといふより壊れるんですからね。

苦沙彌。それぢや、まあ止めやう。

この時格子戸のベルが飛び上るほど鳴つて「御免なさい」と鋭い女の聲がする主人思はず顔を見合はせる。

妻君登場。

妻君。あなた、大變なお客さんですよ。

苦沙彌。誰だい。

妻君。近所に住んでゐる金田とか言つて、大きな鍵鼻のえらい見幕の奥さんですよ。

寒月。（狼狽てゝ）私は少し急ぐ用事がありますからこれで失禮致します。

迷亭。おやおや首縊りの力學も龍頭蛇尾か。

寒月。（前にある卓子を自ら持つて狼狽てゝ退場）

苦沙彌。私に會ひたいと言ふのか。

妻君。お目にかゝつて伺ひたいことがあるんですつて。

苦沙彌。それぢや案内しろ。

（妻君退場鼻子登場）

鼻子。ごめん下さい。初めてお眼にかゝります。

苦沙彌。私が苦沙彌です。

鼻子。どうも結構な御住居ですこと。(座敷中を眺め廻す。)

苦沙彌。(烟草をぷか〱ふかす)

迷亭。(天井を見ながら)君、ありゃ雨漏りか、板の木目か、妙なものが出てゐるぜ。

苦沙彌。無論雨の漏りさ。

迷亭。結構だな。

一寸間――――。

鼻子。ちと伺ひたい事があつて参つたのですが、

苦沙彌。はあ、

鼻子。實は私はつい御近所で――あの向ふ横丁の角屋敷なんですが。

苦沙彌。あの大きな西洋館の倉のある家ですか、道理であすこには金田といふ標札が出てゐますな。

鼻子。實は宿が出まして、御話を伺ふんですが、會社の方が大變忙しいもんですから、(と利かしたつもりだが主人は一向動じない、)會社も一つぢやないんです、二つも三つも兼ねてゐるんです、夫にどの會社でも重役なんで――多分は御存知でせうが

苦沙彌。(迷亭に)金田つて人を君は知つてゐるか。

迷亭。知つてゐるとも、金田さんは僕の叔父の友達だ。此間なんざ園遊會にお出でになつた。

苦沙彌。へえ、君の叔父さんて誰だい。

迷亭。牧山男爵さ。

鼻子。おやまああなたが牧山様の――――何で居らつしやいますか、些つとも存じませんで、甚だ失禮を致しました。牧山

様には始終お世話になると宿が徐々御噂を致して居ります、（ひどく叮嚀に御辭儀などする）

迷亭。へえ〻何、ハ、………。

鼻子。何か娘の縁邊の事につきましても色々牧山様へ御心配を願ひましたさうで……。

迷亭。へえ、――さうですか。

鼻子。實は方々から呉れ〳〵と申込みは御座いますが、こちらの身分もあるもので御座いますから、滅多なところへも片付けられませんので………。

鼻子。（主人の方に向つてぞんさいに）それについてあなたに伺はうと思つて上つたんですがね、あなたの所へ水島寒月といふ男が度々上るさうですが、あの人は全體どういふ風な人でせう。

苦沙彌。（苦々しく）寒月の事を聞いて何にするんです。

迷亭。やはり御令嬢の御婚儀上の關係で寒月君の性行の一斑を御承知になりたいといふ譯でせう。

鼻子。それが伺へれば大變都合が宜しいので御座いますが。

苦沙彌。それぢや、御令嬢を寒月に御遣りになりたいと仰つしやるんで。

鼻子。遣りたいなんてえんぢやないんです。外にも段々口があるんですから無理に貰つて頂かないだつて困りやしません。

苦沙彌。それぢや寒月の事なんか聞かんでもいいのでせう。（躍起となる）

鼻子。（喧嘩腰に）然しお隠しなさる譯はないでせう。

苦沙彌。ぢやあ寒月の方で是非貰ひたいとでも言つたのですか。

鼻子。話しはそんなに進んでゐるんぢやありませんが、――でも寒月さんだつて満更嬉しくない事もないでせう。

苦沙彌。寒月が何かその御令嬢に戀着したといふ樣な事でもあるんですか。
鼻子。まあそんな見當でせうね。
迷亭。寒月が御孃さんにつけ文でもしたんですか、…………是や愉快だ、今年になつて逸話が一つ殖えて話しの好材料になるよ。
鼻子。付け文ぢやないんです、もつと烈しいんでさあ、御二人とも御承知ぢやありませんか。
苦沙彌。君知つてゐるか。
迷亭。僕は知らん、知つてりや君だ。
鼻子。いえ御兩人とも寒月さんから聞いて御存知の事ですよ。
兩人。へえー。
鼻子。御忘れになつたら私から話しませう、去年の暮れ、向島の阿部さんのお屋敷で、演奏會があつて、寒月さんも出かけたでせう。
迷亭。あゝ、あの事ですか。…………
鼻子。その歸りに吾妻橋にさしかゝつて、ふと下を見ると…………
迷亭。黑い水がかたまつてゐる……花川戸の方から一台の人力車が駈けて來て橋を通り過ぎて札幌ビールの處でスウと消えると…………。
猫。ニヤンーーー。
鼻子。水島さんーーと川上で名を呼ぶ聲がするんです。
迷亭。はて今時分人に呼ばれる譯ないが、誰だらうと水の面をすかして見てゐると、暗くて何もわからない、氣のせいに違

ひない、早々歸らうとすると………。

鼻子。水島さん――。

迷亭。その聲はまぎれもない〇〇子さん、思はずはーいと返事したが、その聲が大きかつたものだから、びつくりして周圍を見渡すと人も犬も月も何も見えない、すると………。

鼻子。まだ水島さん――。

迷亭。いやまだ早い………するとこの「夜」の中に卷き込まれてあの聲の出るところへ行きたいなといふ氣がむらく と起つて來ると、また聞える………

鼻子。水島さん――。

迷亭。今直に行きますよ――と、だぶんと河に飛び込んだと思つたところが、前後を間違へて橋の眞中に飛び込んでゐたといふのでせう。

鼻子。えゝえ、その通り。

迷亭。

苦沙彌。（大きな聲で笑ひくずれる）

鼻子。（此際笑ふのは失禮だと兩人を睨みつける。）

迷亭。あれが御孃さんですか、成るほどこりやいい、仰るとほりだ、ねえ苦沙彌君、全く寒月は御孃さんを戀してゐるに相違ないね、………もう隱したつて仕方がない、白狀し樣ぢやないか。

苦沙彌。うゝん

迷亭。しかし不思議ですね、金田さん、どうして此秘密を御探知になつたんです。實に驚きますな。

鼻子。私の方だつてぬかりはありませんやね。

迷亭。ぬかりが無さ過ぎますね、一體誰に御聞きになつたんです。

鼻子。ぢきこの裏にゐる車屋の神さんからです。

迷亭。あの黒猫のゐる車屋ですか。

鼻子。えゝ、寒月さんの事ぢや餘程使ひましたよ。寒月さんがこゝへ來る度に、どんな話をするかと思つて、車屋の神さんを頼んで一々知らして貰ふんです。

苦沙彌。そりやひどい。

鼻子。なあに、あなたのこつちやありません、寒月さんの事だけですよ。

苦沙彌。寒月の事だつて誰の事だつて——全體あの車屋の神さんは氣に食はん奴だ。

鼻子。然しあなたの垣根の外へ來て立つてゐるのは向ふの勝手ぢやありませんか、話しが聞えて惡けりやもつと小さい聲で話すか、もつと大きな家へお這入りんなさるがいゝでせう。

苦沙彌。あなたは寒月の方からお孃さんに戀著した樣にばかり仰しやるが、私の聞いたんぢや少し違ひますぜ、ねえ迷亭君。

迷亭。あの時の話ぢや御孃さんの方が始め病氣になつて譫言のうちに寒月君の名が出たやうに聞いたね。

鼻子。なに、そんなことありません。

苦沙彌。それでも寒月は演奏會である博士夫人からさうきかされたんで、それが苦になつて吾妻橋でふら／＼と……

鼻子。それがこつちの手なんでさあ、博士の奥さんを頼んで寒月さんの氣を引いて見たんでさあね。

苦沙彌。博士の奥さんが夫を承知で引き受けたんですか。

鼻子。引き受けて貰ふたつて、只ぢや出來ませんやね、それやこれやで色々物を使つてゐるんですから。

迷亭。こりやかなはん………ね苦沙彌君。話したつて損の行くことでなし話さうぢやないか、………奥さん、私でも苦沙彌君でも、寒月君に關する事實で差支ない事は、みんな話しますからね——さう、順を立てゝ段々聞いて下さると都合がいゝですね。

鼻子。寒月さんも理學士ださうですが、全體どんな事を專門にしてゐるので御座います。

苦沙彌。大學院では地球の磁氣の研究をやつてゐます。

鼻子。へえ………それを勉強すると博士になれませうか。

苦沙彌。博士にならなければ遣れないと仰つしやるんですか。

鼻子。えゝ、只の學士ぢやね、いくらでもありますからね。

兩人。（いやな顏をする）

鼻子。すると近頃でもその地球の——何かを勉強してゐるんで御座いますか。

苦沙彌。いや目下は首縊りの力學を研究してゐます、その結果を理學協會で演說することになつてゐます。

鼻子。おやいやだ、首縊りだなんて、餘程變人ですね、そんな首縊りや何かやつたんぢやとても博士にはなれますまいね。

迷亭。本人が首を縊つちや六つ箇敷いですが、首縊りの力學なら成れないとも限らんです。

鼻子。さうでせうか。………その外に何か分り易いものを勉強して居りますまいか。

迷亭。さうですな、先達團栗（どんぐり）のスタビリチーを論じて併せて天體の運行に及ぶといふ論文を書いたことがあります。

鼻子。團栗なんぞでも大學校で勉強するものでせうか。

迷亭。さあ僕も素人だから能く分らんが、何しろ寒月君がやる位ゐなんだから研究する價値があると見えますな。

鼻子。何か御宅に手紙かなんぞ當人の書いたものでも御座いますなら一寸拜見したいもので御座いますが。
苦沙彌。端書なら澤山あります。
（書齋へ行つて三四十枚持つて來る）御覽なさい。
鼻子。そんなに澤山拜見しないでも――其内の二三枚だけ……。
迷亭。どれ〳〵僕が好いのを選つてやらう。（一枚を選つて）是なざあ面白いでせう。
鼻子。おや繪も書くんで御座いますか、中々器用ですね、どれ拜見しませう、……あらいやだ、狸だよ、何だつて選りに選つて狸なんぞ書くんでせうね、――それでも狸と見えるから不思議だよ。
苦沙彌。その文句を讀んで御覽なさい。
鼻子。（下女が新聞を讀むやうに）舊暦の歳の夜、山の狸が園遊會をやつて盛んに舞踏します、其歌に曰く（來いさ、としの夜で。御山婦美も來まいぞ。スッポポンノポン）……何ですこりや、人を馬鹿にしてゐるぢやあ御座いませんか。
迷亭。琵琶をひいてゐる此の天女は御氣に入りませんか、（一枚を出す）
鼻子。此天女の鼻が少し小さ過ぎるやうですが
迷亭。何、それが人並ですよ。鼻より文句を御覽なさい。
鼻子。昔しあるところに一人の天文學者がありました。ある夜いつものやうに高い台に登つて、一心に星を見てゐますと、美しい天女が現はれ、此世では聞かれぬ程の微妙な音樂を奏し出したので、天文學者は身に泌む寒さも忘れて聞き惚れて仕舞ひました。朝見ると其天文學者の死骸に霜が眞白に降つてゐました。是は本當の噺だと、あのうそつきの爺やが申しました。……何の事ですこりや、意味も何もないぢやありませんか、是でも理學士で通るんですかね、ちつと文藝倶樂部でも讀んだらよささうなもんですがねえ。

迷亭。この帆懸船はどうです。（三枚目を出す）

鼻子。よべの泊りの十六小女郎、親がないとて、荒磯（あらいそ）の千鳥、さよの寝覚の千鳥に泣いた。親は船乗り波の底……。うまいのねえ、感心な事、話せるぢやありませんか。

迷亭。話せますかな。

鼻子。えゝ、是なら三味線に乗りますよ。テン、トン、シヤン、よべの……

迷亭。三味線に乗りや本物だ、是や如何です。

鼻子。いえ、もう是丈拝見すれば、ほかのは澤山で、そんなに野暮でない人だと云ふ事は分りましたから……是は甚だ失禮致しました、どうか私の參つた事は寒月さんへは内々に願ひます。

兩人。はあ。

鼻子。いづれ其内御禮は致しますから……。（鼻子退場。兩人送つて歸つて來る。）

兩人。（同時に）ありや何だい。

妻君。（笑ふ聲）

苦沙彌。第一に鼻が氣に喰はん。

迷亭。鼻が顔の中央に陣取つて乙に構へてゐるなあ。

苦沙彌。然かも曲つてらあ。

迷亭。少し猫背だね、猫背の鼻はちと奇拔過ぎる。

苦沙彌。夫を剋（こく）する顔だ。

迷亭。十九世紀で賣れ殘つて、二十世紀で店曝しに逢ふと云ふ相だ。

妻君登場。

妻君。あまり惡口を仰ると又車屋の神さんにいひつけられますよ。

苦沙彌。ところで迷亭君、君に叔父さんがあると云ふ事は今日始めて聞いたが、牧山男爵といふのはありや本當かい。

迷亭。ありや出鱈目ですよ、僕に男爵の叔父がありや今頃は局長位になつて居ますさあ。

三人。(高々と笑ふ)

妻君。(ふと氣づいて障子をあけてみる)あら…………

迷亭。おや、もう金田の密偵が來てゐるんですか。

お神さん。やい、今の話みんな聞いたぞ。知らしてやるから覺えてゐろ……話が聞えて惡けりやもつと大きな家へ這入るがいいや。あはゝゝゝ。

三人。(無言)

(舞台まはる)

第三場

金田の勝手口。車屋の神さん、御飯炊き、車夫の三人が辯じてゐるのを頭の上で廂が聞いてゐる。

飯炊。するとあの教師あうちの旦那の名を知らないのかね。

車夫。知らねえ事があるもんか、此界隈で金田さんの御屋敷を知らなけりや眼も耳もねえ片輪だあな。

お神さん。なんとも云へないよ、あの教師と來たら本より外に何も知らない變人なんだからねえ、旦那の事を少しでも知つてりや恐れるかも知れないが、駄目だよ。

車夫。金田さんでも恐れねえかな、厄介な唐變木だ、構ふ事あねえ、みんなで威嚇かしてやらうぢやねえか。

お神さん。それがいいよ。奥様の鼻が大き過ぎるの顔が何とかの賣れ殘りだの――そりや酷い事を云ふんだよ。自分の面あ今戸燒の狸見た樣な癖に――あれで一人前だと思つて居るんだから遣り切れないぢやないか。

飯焚。顔ばかりぢやない、手拭を提げて湯に行く所からしていやに高慢ちきぢやないか。自分位えいい者は無い積りで居るんだよ。

車夫。何んでも大勢であいつの垣根の傍へ行つて惡口を散々いつてやるんだね。

飯焚。さうしたら乾度恐れ入るよ。

車夫。然しこつちの姿を見せちや面白くねえから、聲丈聞かして、勉強の邪魔をした上に、出來る丈ぢらして遣れつて、さつき奥様が云ひ付けて御出でなすつたぜ。

お神さん。そりや分つてゐるさ。

猫。ニヤン――

お神さん。おや、この野郎、あいつとこの猫だよ。

車夫。坊主憎けりや袈裟まで憎い、（石をひろつて）やいこん畜生ッ。

猫。ニヤン（とないて逃げ出す）

（舞臺まわる）

第四場

金田の屋敷――娘、富子が卓上の電話をかけてゐる。

富子。お前は大和かい、明日ね、行くんだからね、鶉の三つを取つて置いて御呉れ、いゝかえ、分つたかい。——なに分らない？　おやいやだ、鶉の三をとるんだよ、——なんだつて、——取れない、取れない筈はない、とるんだよ、——へゝゝゝ御冗談をだつて——何が御冗談なんだよ——いやに人を御ひやらかすよ。全體お前は誰だい、長吉だ？長吉なんぞぢや譯が分らない。お神さんに電話口へ出ろつて御云ひな——なに？、私何でも辨じます？、お前は失禮だよ、妾しを誰だか知つてるのかい。金田だよ——へゝゝゝ善く存じて居りますだつて。ほんとうに馬鹿だよ此人あ、——金田だつてえばさ——なに？——毎度御贔屓にあづかりまして有難う御座います？——何が有難いんだね。御禮なんか聞きたかあないやね——おや又笑つてるよ、お前は餘程愚物だね——仰せの通りだつて？——あんまり人を馬鹿にすると電話を切つて仕舞ふよ。いいのかい、困らないのかよ——默つてちや分らないぢやないか、何とか御云ひよ、（癇癪を起して電話をガチヤガチアさせたり、ベルをジヤラ〳〵まはす）

小間使登場。

小間使。御孃樣、旦那と奥樣が呼んで入らつしやいます。

富子。知らないよ。

小間使。一寸用があるから孃を呼んで來いと仰つしやいました。

富子。うるさいね、知らないてば。

小間使。水島寒月さんの事で御用があるんださうでございます。

富子。寒月でも、水月でも知らないんだよ——大嫌ひだわ、糸瓜が戸惑ひした樣な顔をして………おや、お前いつ束髮に結つたの。

小間使。今日。

富子。生意氣だねえ、小間使の癖に……そして新しい半襟を掛けたぢやないか。

小間使。へえ、先達て御嬢様から頂きましたので結構過ぎて勿體ないと思つて行李の中へ仕舞つて置きましたが、今迄のが餘り汚れましたからかけ易へました。

富子。いつそんなものを上げた事があるの。

小間使。此御正月白木屋へ入らつしやいまして、御求め遊ばしたので——蔦茶へ相撲の番附を染め出したので御座います。妾しには地味過ぎていやだからお前に上げようと仰つしやつた、あれで御座います。

富子。あら、いやだ、善く似合ふのね、にくらしいわ。

小間使。恐れ入ります。

富子。褒めたんぢやない、にくらしいんだよ。

小間使。へえ。

富子。そんなによく似合ふものを、何故だまつて貰つたんだい。

小間使。へえ。

富子。お前にさへ、其位似合ふなら、妾にだつて可笑しい事あないだらうぢやないか。

小間使。屹度よく御似合ひ遊ばします。

富子。似合ふのが分つてる癖に何故默つてゐるんだい、これから氣をつけなさい。

ぷいと立つて行く、小間使も退場。

猫緣の下からそつと出てくる。

金田つゞいて鼻子登場。

鼻子。（しきりに鼻をふきながら）貧乏教師の癖に生意氣ぢやありませんか。

金田。（禿頭を自分で叩くくせがある）うん生意氣な奴だ、ちと懲らしめの爲にいぢめてやらう、あの學校にや國のものも居るからな。

鼻子。誰が居るの。

金田。津木ピン助や、福地キヤシヤゴが居るから頼んでからかはしてやらう。………あいつは英語の教師かい。

鼻子。はあ、車屋の神さんの話では英語のリードルか何か專門に教へるんだつて云ひます。

金田。どうせ、碌な教師ぢやあるめえ。……此間ピン助に會つたら、私の學校にや妙な奴が居ります、生徒から先生に番茶は英語で何んと云ひますかと聞かれて番茶は Savage tea であると眞面目に答へたんで教員間の物笑ひとなつて居ります、と云つてたが大方あいつだらう。

鼻子。あいつに極つて居ますさあ、そんな事を云ひさうな面構へですよ。いやに髯なんか生して。

金田。怪しからん奴だ。

鼻子。それにあの迷亭とか、へべれけとか云ふ奴は、まあ何てえ、頓狂な跳返りなんでせう、叔父の牧山男爵だなんて、あんな顔に男爵の叔父なんざ有る筈がないと思つたんですもの。

金田。お前がどこの馬の骨だか分らんものの云ふことを眞に受けるのも悪い。

鼻子。悪いつて、眞面目くさつて云んだもの、眞に受けるのはあたり前ぢやありませんか。

金田。いくら眞面目くさつて云つたにせよ。貧乏教師の家などに、男爵の甥御様が出入する筈はないぢやないか。

鼻子。そんな事分るものですか。

金田。（禿頭をぴちや／＼叩きながら）その位のこと分らんでどうする。

鼎子。分りませんよ。
金田。(ますく叩きながら)分る。
鼎子。分りませんたら……
金川。分るつたら分る。
鼎子。まあお前さんは、あのへどれけと一つになつて妾を䐶める氣ですか………えッ、口惜しい(突然兩手で金川の胸ぐらをつかまえてこづきまわす)男なぞに負けてたまるもんかい。
金田。おいく何をするんだ、そ、そんな手荒なことをせんでもいいぢやないか。
鼎子。お默りなさい。……さあそんなこと分りますか、分りませんか。
金田。分らん、分らん、……お前の云ふ通りだ、分らないとも、分らんよ。
小間使鈴木を案內してくる。二人の樣子を見ておどろく。
小間使。あのー鈴木樣が御出になりました。
金田。(急に横風になつて)あ、鈴木君か、まあ、こつちに入り給へ。(小間使去る。)
鈴木。はい、御機嫌よろしう……只今、車屋のお神さんから大體のことは聞きましたが、どうもけしからんことで……あの男とは一所の下宿にゐた事があるのでよく知つてゐますが實に煮え切らない男で……奥さんはさぞ御困りで御座いましたらう。
鼎子。困るの、困らないのつてあなた、私しや此年になる迄人のうちへ行つてあんな取扱を受けた事はありやしません。
鈴木。そりやどうも、昔から頑固な性分で――何しろ十年一日の如くリードル專門の教師をして居るのでも大體御分りになりませう。

金田。いや、御話しにもならん位で、妻が何か聞くと丸で劍もほろゝの挨拶ださうで……

鈴木。それは怪しからん譯で――一體少し學問をしてゐると兎角慢心が萌すもので、其上貧乏をすると負け惜しみが出來ますから――いえ、世の中には隨分無法な奴が居りますよ、自分の働きのないのにや氣が付かないで、無暗に財產のあるものに喰つて掛るなんてえのが――丸で彼等の財產でも捲き上げた樣な氣分ですから驚きますよ、あは、、、。

金田。いや、まことに言語同斷で、あゝ云ふのは必竟世間見ずの我儘から起るのだから些と懲してやらなければならん。

鈴木。そりや結構なことで、全く本人の爲にもなることですから。

金田。さう、さう、そこで態々君にも來てもらつたんだが……

鈴木。私に出來ますことなら何でも御遠慮なくどうか――今度東京勤務と云ふ事になりましたのも色々御心配を掛けた結果に外ならん譯ですから……全く、本人の爲にもなることですから充分懲らしめてやりませう。

金田。いや、その方はこつちにいろ〳〵策戰もあるし、味方もゐることだから君の力をかりなくつて充分だが、それはそれとして一方緣談の方もこのまゝに放任しておくわけにはいかんだらう。

鈴木。御尤で。

金田。そこで君は學生時代から苦沙彌と同宿してゐて、今は兎も角、昔は親密な間柄であつたさうだから、當人に逢つてな、よく利害を論してこの緣談をまとめるやうにすゝめてもらひたいのだ。

鈴木。御尤で。

鼻子。第一ぐづ〳〵してゐると、富子にこがれてゐる水島さんが可哀さうですよ。

鈴木。御尤で。……水島と云ふ人には逢つた事は御座いませんが兎に角こちらと御緣組が出來れば生涯の幸福で本人は無論異存はないのでせう。

鼻子。えゝ水島さんは貰ひたがつてゐるんですが、あの變り者はきつと邪魔するにきまつてゐます。

鈴木。そりやよくない事で、相當の教育あるものにも似合はん所作ですな、よく私が苦沙彌の所へ參つて談じませう。

鼻子。それにおまけに迷亭と云ふ變挺な人間までついてゐるんですから。

鈴木。あ、迷亭にお會ひになりましたか。

鼻子。會つたどころか……牧山男爵は自分の叔父だなんて云ふんですよ。

鈴木。不相變法螺を吹くと見えますね。

鼻子。それが大眞面目でせう、嘘とは思へないぢやありませんか。

鈴木。御尤で。

鼻子。それなのに金田は、その位のこと分らんでどうする、なんて無理を云ふんですよ。

鈴木。はあ。

金田。（ぴしや〳〵禿頭を叩く）しかし、鈴木君、私の云ふのも一理あるだらう、あんな貧乏教師の家に牧山男爵の甥御が出入する筈はないぢやないか。

鈴木。はあ。

鼻子。そんなこと分るもんですか、ねえ鈴木さん。

鈴木。はあ。

金田。その位のこと分らんでどうする。

鼻子。分りませんよ。

金田。分る。

鼻子。分りませんたら。
金田。分るつたら分る。
鼻子。まあ、お前さんはまだ強情はるのね、また痛い目に會ひたいのですか。(再び胸ぐらをとる)
鈴木。(おどろいて)はい、はい、御尤で…………すぐにこれから苦沙彌の許へ談じに行つて參ります。
金田。あゝ苦しい〳〵…………あやまつた、あやまつた。
　　鈴木の狼狽てゝ出て行く後から
　猫も踊るやうな格好でついて行く(舞台まわる)

第五場

苦沙彌先生の客間、寒月、迷亭、苦沙彌の三人が話し合つてゐる、苦沙彌は手枕をしてゐる。
突然——垣根の方から合唱おこる。
　今戸燒の狸野郎
　今戸燒の狸野郎
今戸燒の狸野郎
高慢ちきの唐變木
高慢ちきの唐變木
高慢ちきの唐變木
サエジ、チー

サエジ、チー

サエジ、チー

ワハ、、、、

ワハ、、、、

ワハ、、、、

人々高々と笑ひながら逃げて去る。

寒月。なんですか、今の騒ぎは。

迷亭。あれかい、水底から聞える女性の聲さ。

苦沙彌。いや、毒々しい鼻聲さ。

寒月。へえ。

迷亭。寒月君、さつき君が歸つた後にさ、向ふ横丁の鼻がこゝへ押しかけて來たんだよ。僕等二人は實に驚いたよ、ねえ苦沙彌君。

苦沙彌。うむ。(寝ながらお茶をのむ)

寒月。鼻つて誰の事です。

迷亭。君の親愛なる久遠の女性の御母堂だ。

寒月。へえ。

苦沙彌。金田の妻といふ女が君の事を聞きに來たのさ、それで君は首縊りの力學を中途にして逃げ出したのだらう。

寒月。どうか私に、あの娘を貰つて與れとの依頼なんでせう。

迷亭。處が大違さ。其御母堂なるものが偉大なる鼻の所有主でね。その鼻の悪口を云つたのが聞えて、今返報に來たのだよ。

寒月。へえ。

迷亭。今戸燒の狸つて何だい。

苦沙彌。何だか分らん。

寒月。中々振つて居りますな。

苦沙彌。おい君、僕はさつきからあの鼻について俳體詩を考へてゐるんだがね。

妻君。（の笑ふ聲）

迷亭。隨分君も呑氣だなあ。出來たのかい。

苦沙彌。少し出來た。第一句が（この顔に鼻祭り）と云ふのだ。

迷亭。夫から。

苦沙彌。次は（此鼻に神酒供へ）と云ふのさ。

迷亭。次の句は？

苦沙彌。まだ、夫ぎりしか出來て居らん。

寒月。面白いですな。

迷亭。次へ（穴二つ幽かなり）と付けちやどうだ。

寒月。（奥深く毛も見えず）はいけますまいか。

迷亭。（急に立ち上つて演説口調で）吾輩は年來美學上の見地から此鼻に就いて研究いたしました事が御座いますから一班を披瀝して、御兩君の清聽を煩したいと思ひます。

寒月。是非承りたいものです。

迷亭。色々調べて見ましたが鼻の起源はどうも確と分りません。第一の不審はもし之を實用上の道具と假定すれば穴が二つで澤山である。何もこんなに横風に眞中から突き出して見る必用がないのである。所がどうして段々御覽の如く斯様にせり出して參つたか。（自分の鼻をつまんで見せる）

苦沙彌。あんまりせり出しても居らんぢやないか。

迷亭。兎に角引つ込んで居りませんからな。只二箇の孔が列んで居る狀態と混同なすつては、誤解を生ずるに至るかも計られませんから、豫め御注意をして置きます。――で愚見に依りますと鼻の發達は吾々人間が鼻汁をかむと申す微細なる行爲の結果が、自然と蓄積してかく著明なる現象を呈出したので御座います。

苦沙彌。佯（いつは）りのない愚見だ。

迷亭。御承知の通り鼻汁をかむ時は是非鼻を抓みます。鼻を抓んで、ことに此の局部丈に刺戟を與へますと、進化論の大原則によつて、此局部は此刺激に應ずる爲め他に比例して不相當な發達を致します。皮も自然堅くなります。肉も次第に硬くなります。遂に凝つて骨となります。

寒月。それは少し――さう自由に肉が骨に一足飛に變化出來ますまい。

迷亭。いや御不審は御尤ですが、論より證據此の通り骨があるから仕方ありません、既に骨が出來る、骨は出來ても鼻汁は出ますな。出ればかまはずに居られません。此の作用で骨の左右が削り取られて細い高い隆起と變化して參ります――實に恐しい作用です。點滴の石を穿つが如く、びんづるの頭が自ら光明を放つが如く、不思議薫（くん）不思議臭（しう）の喩の如し、斯様に鼻筋が通つて堅くなります。

苦沙彌。それでも君のなんさ、ぶく〳〵だぜ。

迷亭。演者自身の局部は回護の恐れがありますから——態と論じません。かの金田の御母堂の持たせらるる鼻の如きは尤も發達せる尤も偉大なる天下の珍品として御兩君に紹介して置きたいと思ひます。

寒月。ヒヤ〳〵。

迷亭。然し物も極度に達しますと偉觀には相違御座いませんが何となく怖しくて近づき難いのであります。あの鼻梁抔は素張しいには違ひ御座いませんが、少々峻嶮過ぎるかと思はれます。古人のうちにてもソクラチス、ゴールドスミス若くはサツカレーの鼻抔は構造の上から云ふと隨分申し分が御座いませうが、其申し分のある所に愛嬌が御座います。鼻高きが故に貴からず、奇なるが爲に貴しとは此故で御座いませうか。下世話にも鼻より團子と申しますれば美的價値から申しますと先づ迷亭位が適當かと存じます。(笑ふ)

兩人(も笑ふ)

迷亭。さて只今辯じましたのは——。

寒月。先生辯じましたは少し講釋師のやうで下品ですから、よして頂きませう。

迷亭。左樣而らば顏を洗つて出直しませうかな。——えゝ——是から鼻と顏の權衡に一言論及したいと思ひます。他に關係なく單獨に鼻論をやりますと、かの御母堂樣はどこへ出しても恥づかしからぬ鼻——鞍馬山で展覽會があつても恐らく一等賞だらうと思はれる位な鼻を所有して入らせられますが、悲しいかなあれは眼、口、其他の諸先生と何等の相談もなく出來上つた鼻であります。ジユリアス、シーザーの鼻は大したものに相違御座いません。然しシーザーの鼻を鋏でちよん切つて當家の猫の顏へ安置したら、どんな者で御座いませうか。

猫。ニヤーン。

迷亭。喩にも猫の額と云ふ位な地面へ、英雄の鼻柱が突兀として聳えたら、碁盤の上へ奈良の大佛を据えつけた樣なも

ので、少しく比例を失する極、其美的價値を落す事だらうと思ひます。御母堂の鼻はシーザーのそれの如く、正しく英姿颯爽たる隆起に相違御座いません。而して其周圍を圍繞する顔面的條件は如何なる者でありませう。無論當家の猫の如く劣等ではない。然し癲癇病みの御かめの如く眉の根に八字を刻んで、細い眼を釣るし上げらるゝのは事實であります。諸君此顔にして此鼻ありと歎ぜざるを得んではありませんか。

お神さんの聲。まだ鼻の話をしてゐるんだよ。何てえ剛突張りだらう。

車夫の聲。へどれけの大馬鹿野郎。

苦沙彌。また車屋さんのお神さんだな。

迷亭。（一段と聲をあげて）計らざる裏手にあたつて新たに異性の傍聽者のある事を發見したのは演者の深く名譽と思ふ所であります。殊に婉轉たる嬌音を以て乾燥なる講莚に一點の艶味を添へられたのは實に望外の幸福であります。成可通俗的に引き直して佳人淑女の眷顧に背かさらん事を期する譯でありますが、是からは少々力學上の問題に立ち入りますので勢御婦人方には御分りにくいかも知れません、どうか御辛抱を願ひます。

寒月。（にや〳〵する）

迷亭。私の證據立てやうとするのは此鼻と此顔とは到底調和しない。ツアイシングの黄金律を失して居ると云ふ事なんで、夫を嚴格に力學上の公式から演繹して御覽に入れ樣と云ふのであります。先づHを鼻の高さとします。aは鼻と顔の平面の交叉より生ずる角度であります。wは無論鼻の重量と御承知下さい。どうです大抵お分りになりましたか。

苦沙彌。分るものか。

迷亭。寒月君はどうだい。

寒月。私にもちと分りかねます。

迷亭。そりや困つたな。苦沙彌はとにかく、君は理學士だから分るだらうと思つたのに。此式が演說の首腦なんだから之を略しては今迄やつた甲斐がないのだが——まあ仕方がない。公式は略して結論丈話さう。

苦沙彌。結論があるのか。

迷亭。當り前さ、結論のない演舌はデザートのない西洋料理の樣なものだ——いゝか兩君能く聞き給へ、是からが結論だぜ——さて以上の公式にウイルヒョウ、ワイズマン諸家の說を參酌して考へて見ますと、先天的形體の遺傳は無論の事許されねばなりません。又此形體に追隨して起る心意的狀況は、たとひ後天性は遺傳するものにあらずとの有力なる說あるにも關せず、ある程度迄は必然の結果と認めねばなりません。從つて斯くの如く身分に不似合なる鼻の持主の生んだ子には、其鼻にも何か異狀のある事と察せられます。寒月君抔は、まだ年が御若いから金田令孃の鼻の構造に於て特別の異狀を認められんかも知れませんが、かゝる遺傳は潜伏期の長いものでありますから、いつ何時氣候の劇變と共に、急に發達して御母堂のそれの如く、咄嗟の間に膨脹するかも知れません。それ故此御婚儀は迷亭の學理的論證によりますと、今の中御斷念になつた方が安全かと思はれます。是には當家の御主人は無論の事、そこに寢てゐる猫又殿にも御異存は無からうと存じます。

猫。ニャーン、ニャーン。

苦沙彌（漸く起き返つて）そりや無論さ、あんなものの娘を誰が貰ふものか。寒月君貰つちやいかんよ。

寒月。先生方の御意向がさうなら、私は斷念してもいいんですが、もし當人がそれを氣にして病氣にでもなつたら罪ですから。

迷亭。ハヽヽヽヽ艷罪と云ふ譯だ。

苦沙彌。そんな馬鹿があるものか。あいつの娘なら碌な者でないに極つてらあ。初めて人の家へ來ておれを遣り込めに掛

つた奴だ。傲慢な奴だ………。

突然——再び垣の方で三四人が聲をあげて笑ふ。

——今戸燒の狸矢郎。

——高慢ちきの唐變木奴。

——もつと大きな家に這入りてえんだらう。

——御氣の毒だがいくら威張つたつて陰辨慶だ。

苦沙彌カッとして立上つて障子を開いてどなり返す。

苦沙彌。八釜しい、馬鹿野郎。金持の犬共奴。

人々合唱する。

今戸燒の狸矢郎

高慢ちきの唐變木

サヱジ、チー

サヱジ、チー

ワハヽヽヽヽ

ワハヽヽヽヽ

苦沙彌。この野郎（ステッキ持つて飛び出して行く）

迷亭。（手を拍つて）面白い、やれ／＼。

寒月（羽織の紐を捻つてにや／＼してゐる）

（舞台まはる）

第六場

苦沙彌先生の玄關先。

苦沙彌はステツキをふり〳〵鈴木に向つてどなつてゐる。

苦沙彌。……………駄目だ〳〵、舊友だらうと、金持の犬には會ひたくない、歸り給へ、歸り給へ、僕は實業家が大嫌ひだ、あんな奴等の娘と寒月とは絶對に結婚させない。歸つて鼻にさう報告し給へ。……………

鈴木が呆然としてゐる間に玄關の戸をピシヤリしめて持つてゐるステツキを心ばり棒に代用する——。

幕。

登場するもの。

猫。

三羽の鳥。

車屋の黑。

車屋の神さん。

小鳥。

苦沙彌。

妻君。

迷亭。
寒月。
鼻子。
車夫。
飯焚。
富子。
金田。
鈴木。

――（新劇協會上演脚本）――

以上は大體上巻に從つて脚色したのですが新劇協會では同時に全篇の脚色を上場することになつてゐます。

（脚色者追記）



遺言

近松秋江

お父さんは、お前達が、學校に行くやうになつて、自分で日記が書けるやうになる時分まで、お前達の日記を書いて置いてやらうと思つてゐたが、ついに、そのことを怠つてしまつた。でも、お前達が、もつと大きくなつて、本當の性根が附くまで、お父さんが生きてゐたら、お前達の記憶にない時分――丁度今時分のことを話して聽かせようと思つてゐるのだが、どうも今の有樣だと、私はもう此の先あんまり長く生きてゐられさうもない。

まさか、まだ、こゝ一年や二年で此の世を辭さなければならぬやうなこともあるまいとは思つてゐるけれど、それは、いづれも生きた者の欲目であつて、人は皆な明日は無いものと覺悟をきめて、死後のことを考へておかねばならぬと思つてゐる。私は以前、獨り身であつた時分には死ぬといふことをそんなに恐れはしなかつた。勿論少しくらゐの風邪や病氣など、大して意に介さなかつたが、子は三界の桎梏といつて、お前達といふものが出來てから、急に又生命が惜しくなつて、死とい

ふことがひどく恐ろしくなつて來た。ちよつとした風邪を引いたくらゐでも、いろんな忌はしいことを豫想して、今度はいよ／＼、これつきりになつてしまふのではあるまいかと思ふことが、めづらしくない。今、自分が死んでは、お前達が可愛さうだと思ふと、私はどうしても死ぬ氣になれぬ。これは、お前達が女學校を卒業するやうになつても、まだまだ本當の深い意味は解らぬことだが、日本一の作者に、昔近松門左衛門といふ人があつた。その人の傑作に「女殺油地獄」といふ恐ろしい戯曲があるが、その中に、二人の小い子供の親であるお吉さんといふ餘處のおばさんが、强盗に金を無心せられて、ついに殺されるところがある。お吉さんといふおばさんは、まだ二十七であつた。二人の幼い子供が可哀さうなので、殺されたくない。「……わたしが今死んでは、二人の子が流浪する。生命だけは助けて下され。」といつて、手を合はして拜むが、それでも殺されてしまふ。私は、このお吉さんといふおばさんの心が悲しい。

お父さんは、ちよつと何處か惡くつても、すぐ、死ぬんぢやあるまいかと思ふ。死んだらお前達を見ることが出來ぬ。お父さんは、此の世から消えて無くなるのだ。

今のお前達には、まだ死ぬといふことが、どんなことだか解つてゐないのだ。それでも、百合子の方は、明けてやつと六歳だし、それに神經質の、氣の弱い方だから、もし私が死んで、その死骸の顏でも見たら、氣味が惡くつて、恐くつて、きつと傍へは寄り得ないだらうと思ふが、道子の方はまだ四つだから、死んだも生きたも、そんなことは一切解らないで、死んだ者をみても、たゞ寢入つてゐるくらゐに思つてゐるだらう。そんな時分に親に死別れる例は、世間に決してめづらしいことではないが、どうかしてお前達には、そんな不幸な目を見さしたくないと思ふが、それも運命ならば、致方もない。

此の間も熱海で寢てゐて、いろんな惡いことを、あれかこれかと思ひ過してみた。醫者は、少し氣管を惡くして、咽喉カタルにかゝつてゐる普通の風邪だといつてゐるのであつたが、私には、ヒポコンドリイで、どうしても、これだけでな

く、もつと複雜な、惡性な、何かしらん運命的な病に冒されてゐるやうに思はれてならなかつた。このヒポコンドリイは、私が二十歳前後の頃まで頻りに私を惱ましたものであつたが、その後、いつとはなしに、さういふ神經的な狀態から脫却してしまつて、私は、前いつたとほりに、少しくらゐの病氣など恐れなくなつた。ところが、お前達が出來てから、又三十年前のヒポコンドリイが、又蘇つて起つて來たのだ。

しかし、今度のは、單にヒポコンドリイとして、氣樂に考へてはゐられない。何時それが本當のことになるかも知れないのだから。

近年、毎年の例として、冬の初になると、とかく健康が優れないのだが、ことに去年の十月の末眩暈がして起き上られなかつた時から、どうも本當の健康が回復しないやうな氣がしてならぬ。今のお前達には、お父さんがきい／＼が惡いのだといふことは、自分達が、又先生に、ぽん／＼が痛くつてチク／＼をされるのと同じことだといつて聞かすより、解らしやうはない。それほど今のお前達はまだ性根がないのだ。だから、今、こんなことを話して聞かせたところで、頻りのないことだが、その十月の二十二日の夜半だつた、ふと氣持ちが惡いので眼が覺めてみると、何か胸苦くつて、眼を瞑つてゐながら、くら／＼眩暈がしてゐるのがわかつた。もしガスのメートルのところでも閉め忘れてガスでも漏れてゐるのではないかと思つて、元氣を出して、そうつと起き出て、女中を呼び起して訊いてみたが、そんなことはないといふ。勿論ガスの臭ひもせぬので、やつぱり自分の身體のせいだと思つて、又そのまゝ寢床に入つて橫になり、それからすぐ又ぐつすり寢入るには、寢入つたが、翌朝七時頃今度眼の覺めた時には、とても苦くつて頭も持ち上げられない。そこら中のものが、ぐら／＼廻つてゐるやうで胸は吐氣がする。頭は痛む。私は寢床の中から精一ぱいの力を出して女中を呼んで、すぐ下の掛醫細田さんに驅けさした。いひ忘れたが、その時お前達は熱海にいつてゐて、お母さんはゐないし、こちらにはしいちやん（女中を子供達はさう呼んでゐた）一人だけか居なかつたのだ。間もなく、細田さんは、しいちやんと一所

に急いで來てくれて、廊下をどし〳〵踏み鳴して、私の寢てゐる奥の六疊に入つて來た。そして、仰向きに寢てゐる私の顏を、一と目見るなり、

「うむ、顏が眞青だ。腦貧血だ。」

といつて、注意して診察をして下すつた。

「ちよつとも頭を動かすことが出來ません。眼が廻はつて。」私は微かにいふことが出來た。

「動かしちやいけません。そうつと、これなりにして置いて下さい。」

そして又脈を握つてみながら、

「少し血壓も高いやうです。…………一本やつて置くかな。」細田氏は獨語をいひながら、針を取り出して、

「これは少し痛いですよ。」

「えゝ、痛いくらゐのことは構ひませんからどうぞやつて下さい。」

それから可なり疼痛を覺える注射を一本した。

「注意しないといけません。安靜にしてゐて下さい。何か書いてゐますか。」

「えゝ、それが切迫してゐるので、困つてゐるんです。」私は仰向けに細田氏の顏を見ながら力のない笑ひを浮べた。

「いくら急しくつても、決して仕事をしてはいけませんよ。」

「いや、かう胸苦しくつて眩暈がしてゐては、しようたつて出來ません。」

細田氏は笑つて、

「仕事ばかりぢやない、何か頭の中で考へてゐてもいけませんよ。寢ながらいろんな計劃を立てゝゐるのもいけませんよ。何にも考へようとしないで。」

「えゝ。」

と、私は素直に返事をしてゐた。が、退引ならぬ執筆の仕事は、本當なら既に明日を過ぎてしまつてゐて、雜誌社の方でこの上どんなに無理をしてもらつてもあと、もう三日の餘裕もなからうと思はれた。尙ほそのほかに、まだ困ることが二つあつた。一つは生命保險の半期分の拂込み期限が、二ケ月の猶豫期間をもう經過して、あと、もう五日の二十七日一ぱいで期限が切れてしまふのであつた。この保險のことについては、いつかも書いて遺しておいたことだが、保險の金だけは、どんなにしても、お前達に遺して置いてやらねばならぬと思つてゐるのだが、實のところ、その保險料の掛金にも半期々々に追はれてゐる始末だ。そして保險金のことについては、また後でいふが、そんな具合で保險の拂込みは迫つてゐる。もし明日までに拂はなかつたら、いふまでもない、保險契約を破棄したことになるので、私が腦貧血の爲に萬一それから五日過ぎて死んだなら、その日の保險金は受取れない。勿論、今まで二年間ばかり拂ひ込んだ金も損失になる。それで私は、じつと寢てゐながら思つた。どうぞ死ぬなら、猶豫期間の盡きない廿七日まで、この五日以内に死にたいものだと。

でも、その日一日安靜に寢てゐたので、翌日から、ずつと快くなつた。幸ひ熱はなかつたので、割合に簡單に癒つたが、醫者は、決して何にもしては可けないと來るたびに嚴命した。しかし、前いつたやうに、差迫つての一つの仕事だけは、どうにかして完結しなければならない。その方を片づければ、從つて保險の掛金も出來るのだ。それから、も一つは、十月の廿五日一ぱいに是非とも返却しなければならぬ、利子の入る借金がある。それは、一期の延期料を拂へば、もう六ケ月延期して出來ないこともないが、延期すればするほど高い利子が嵩むので、ぜひ今度の切り替へで皆濟にしてしまひたいと思つたが、それも自分が寢てゐる始末では又出來ないことになる。まあ、こんなことは、お前達にいひ遺したつて、四十度にも五十にもならぬと分らぬことだが、とにかく急ぎの仕事を一つどうあつても仕終うせねばならぬのに、お醫者さんは、絶對に仕事をしてはならぬといふ。それで、その雜誌社の方へは止むを得ず、醫者から診斷書を書いてもらつて、

翌日原稿を取りに來た使に原稿でない醫師の診斷書を封入して持たして歸した。さうして置いて二三日間靜養しゐたから、毎日午后一回來診してくれる細田氏に內證にして、仕掛けた仕事を、たゞ形ばかりに片づけてしまつた。そして自分で原稿を屆け、ついでに稿料を受取つて保險の猶豫期間の盡きる廿七日の午后、やつと五阡圓の口の半期分百參拾五圓を拂つて、ほつとした。さあ、これでもう今死んでも構はないと思つた。

その時、もしこれきりになるやうなことがあつたら、お前達にも、お母さんにも會はないで死んでしまふのだと思ふと、お父さんは堪らなくたよりなく悲しくなつて、その時も、これはぜひとも遺言を書いて置かねばならぬと思つたのだが、さて、病氣が良くなると、咽喉元過ぐれば熱さを忘るの譬へで、まだ／＼そんなことの手續はしをしないでも大丈夫だと思つて、それよりも眼の前の急しさに追はれて、つい／＼忘れてしまつてゐる。

「子供も家內も留守で、ゐませんので……」と、私が心ぼそさうにいふと、

「すつかり病氣の良くなるまで、子供達は傍に置かない方が却つて靜養になりますから、やつぱり熱海に置いといた方がいゝでせう。」

と、お醫者さんは、いつてゐた。しかし、さうして何うかかうか差迫つた用事を片づけてしまふと、もうすぐにもお前達を見に行きたくなつたので、家を出る時から、もしかしたら、丸の內の用事を果してすぐ熱海に行くかも知れぬといひ置いて出て來たのであつた。昨日デンポウで明日迎へに行くと知らして置いたので、今日は誰れか來るであらうと待つてゐるであらうと思つたので、もし行かなければ、又行けないと知らしてやらなければならぬと思つた。親類の書生が來てくれることになつてゐたので、二月ばかり待つてゐたが、たうとう來なかつたので、いつそ自分でいつて來る氣になつた。この前十五日に一寸行つて、十七日に歸つて來てから丁度十日ばかりになるが、その間に病氣したので、何だか感傷的な氣分が募つて、もしかしたら、あれつきり會へなかつたものに會ふやうな氣がした。

そして六時過ぎに向うに着いて行つてみると、ガラス戸の窓も玄關の扉も閉鎖してゐて、外から聲を掛けて呼んでも返事がないので、近處の家主にいつて訊いてみると、家主では、吃驚したやうな顔をして、主人夫婦玄關に出て來て、

「あなたが大變にお悪いといふので、奥さん、ひどく心配してゐらつしやいましたが、今日午后一時の汽車でお歸りになりました。……そして御病氣はいかゞですか。もうお加減はおよろしいんですか。」

上品な人柄の家主の主人はさういつた。

私はちよつと人騒がせをし過ぎたやうな極り悪さを思つたが、

「ありがたうございます。何だか、かうしてその大病人が自分でやつて來たところでは、まるで嘘のやうですが、一時一寸心配いたしましたので、腦貧血で頭が上らなかつたものですから。」私はそこに腰を掛けながら息を吐いた。そしてポケツトから、葡萄酒を調劑してあるらしい、淡紅色の水藥を取り出して、

「ごめん下さい。」といひながら、罎の口から一回分の筋を透してみて嚥んだ。

「迎へに來ると知らして置いたのですが、ぢや歸りましたか。」

「どなたかお迎へにゐらつしやるかも知れぬと仰有つて、待つてゐらしつたやうでしたが、十一時の汽車までお待ちになつたやうですけれど、おいでにならなかつたので、あんまり遅くなると、あちらにお歸りになつて夜になるからと仰有つて一時の汽車でおかへりになりました。あなたが御自身でおいでになるとはお思ひにならなかつたのでございませう。」

「いや、毎度飛んだご厄介になります。」

「どういたしまして。」

私はそれから、皆な歸つた後に、泊つていつてもいゝと思つたが、夜具などもすつかり持つて歸つたらしい、家主の奥さんの話なので、それでは、久しぶりに一つ宿屋へ泊つてみてもいゝと思つたが、私と行きちがひに、もう今時分は東京の家

に皆な歸つて、手紙の樣子ではひどく惡かつた筈の私が自分で熱海に出掛けていつてゐないので、安心もするし、氣の抜けたやうな氣持ちがしてゐるところであらうと思ふと、今夜のうちに、そこへ又引返して行きたくなつた。病後の身體に三時間の汽車を飛脚のごとく往復するのは過激である。殊に、大事とりの細川主治醫が聞いたら驚くであらうと思つたが、病は氣からといふ言葉もあるとほり一つは氣のものであるから、と元氣を出して、家主の内で早速電話を掛けて自動車を呼んでもらひ、ものゝ三十分もゐないで、それから又すぐ熱海驛に引返し、六時五十五分の汽車に乘つて、家へ歸り着いたのは十二時に近かつた。

つい餘計なことをいつてゐた。で、その時の病氣はそれきり何事もなく癒つたやうであつた。十一月は時候も好く格別のこともなかつたが、十二月の初、ある宴會に出席して、その晩酒も盃に二三杯しか飲まなかつたのだが、用心しながら食べても、つい意地汚く度を過したせいか、それよりも、やつぱり不斷の健康を損ねてゐるせいであつたらうと思ふ。私は、親しい友人と二人きりで少し早目に引揚げて出て戻つた。二人共酒はいけないので、段々狼藉になりさうな氣配の見えて來た酬酢の席には堪え得ない方であつた。そして自動車に同乘して私は四谷驛で友人に別れ省線電車に乘つた。九時半頃の省電は滿員であつたうへに、スチームに蒸された車內の空氣がむつとして、私は車室に入るや否や、忽ち嘔吐を催した。はて、酒も過してゐないのに變な身體の樣子だと思ひながら、捉へるものにぶら下つて、つとめて身體を靜つとして居らうとしてゐたが、ひとりでに油汗が額に浸んで來て、いよ〳〵堪らなくなつたので、人込みを分けて、靜に入口の方に出て來て人と人とに支へられながら突立つてゐたが、どうにも堪えられなくなつて、代々木驛で一時下車して、そこのプラットフォームで外氣に吹かれてゐた。まだ十二月の初めのことで、夜でもそんなに風は冷くなく、殊にその晩は靜かな夜で白い夜霧が一面に立て罩めてゐた。何かの蔭になつて正體の見えない蒼白い月の色がそこらの物を間接な光で照し

ゐるのが心地を靜めてくれる筈であるが、胸の吐き氣はなか〱に治まらない。しかし、もう此處まで歸りついてゐるのだから、又あんまりぐづ〱してゐると遂に東中野までも歸られなくなつて來るので、私は元氣を出して、ふたゝび省電に乘つてみたが、やつぱりいけない。私は一生懸命に堪えながら凝乎と腰掛に凭れて、

「どうしてから身體が弱つてゐるのかなあ」と心細いことを考へ〱嘔氣のするのを我慢してゐた。

そして東中野驛に下車すると、直に俥に乘つて自分の家まで戾り、門をあけて玄關に入るやいなや、いつもするとほりの洋服にブラッシュもあてず、靴の塵埃もはたかず、オバアから上着を玄關の室から、座敷から廊下へと續けて脫ぎ棄てゝ、自分の寢所に入つて行き、

「おい、何だか私は先刻電車に乘つた時から嘔きさうな氣がするんだ。吐から、早く金盥を持つて來てくれ。」と、お母さんにいひ付けて、そこに設けてあつた寢床に俯伏して出るだけのものを殘り無く戾してしまつた。

「どうしたんでせうねえ。」お母さんは、あまりに私の戾した汚物の量の澤山なのに魂消てしまつて、心配さうに顏を曇らせながら、波を打つ私の背を擦つてゐた。

「いやもう大丈夫だ。なに、あんまりいろんな物を入れ過ぎたから、平常まづい物ばかり食べてゐる者が、偶に御馳走を食べると、このとほりだ。はゝゝ。」

私は、苦し涙に聲を濕らしながら、そんな戯談をいつて、泣きさうな笑ひを發した。吐いてしまふと、胸が樂になつた。

「やつぱりこの間からの病氣が、すつかり良くならないんですねえ。」

「なに、そんなことはなからうと思ふ。吐いてしまへば何の事もない。今日は此の間の時のやうに眩暈などはせぬ。あれとこれとは別だらうと思ふ。」

といつたが、私自身にも、全身的の健康がひどく損じてゐるのは爭はれないと思つた。それでその翌日は朝床に休まなかつたが、午后からは平常と異つたことはなかつた。靜かな暖かな冬の日が照つてゐたので、そこらを一とまはりして來ると氣持ちも大分さつぱりしたので、もう此の間から書き惱んでゐた新年の雜誌に載する物の仕事をつゞけた。身體がそんな具合であつたので、それも力の入つた物を書くことは出來なかつた。やつとあと二日ばかりでそれを片づけてしまつたところで、その朝寢てゐて、早曉ひどく腰から下の方が寒いのを夢うつゝに感じながら、身體を海老のやうにして寢てゐたことが、すつかり眼が覺めてから分つたが、急に寒氣が襲來して氣溫が低下したゝめであつた。そして濕つぽい空から冷い雨が降つて來た。たうとうその爲に昨夜風邪をひいたのであつた。ひどく鼻粘膜を冒されたと思はれて、鼻が潰れてしまふやうに、くしやみがのべつに出て來るのをこらへ〳〵、やつと晩方までに書きおはつて、筆を擱くと同時に寢床を敷かして横になつた。お母さんもその日は何だか一日身體が怠くつて、いくらか體溫が高いやうなことをいつて横になつてゐたので、二人倒れては大變だと思つて、又細田さんに來てもらつた。お母さんは大したこともなかつたが、やつぱりお父さんの方は、咽喉がひどく赤くなつてゐるといつて、藥を塗つてくれて、

「暖くして靜つと寢てゐないといけません。」といつて、歸つていつた。

「年暮に風邪を引いて寢たんぢや、お正月は來やあしない。早く癒さないと困る。」といつて、それから三日ばかり暖くして寢てゐた。そして吸入をかけたり含嗽をしたり、藥を服んだりしてゐると、ひどいくしやみもぴつたり止つてしまつたし、七度三四分の熱も七度以下にさがつてしまつたので、又二三日つゞけて市中の方へ用事で出歩いた。お前達をつれて牛込の方へ買ひ物かた〴〵散歩にいつて、百合子が八月に疫痢を病んだ時來てもらつた牛込のお醫者さんにまだお禮に行つてゐなかつたので、年末に又熱海に行かぬ前に一度、健康になつた百合子を連れてお禮に行かねばならぬと思つてゐたので、ついでにそこへも寄つて來た。歸りはお前達にせがまれて新宿の三越支店に寄つて食堂でホツトケーキを食べたり

した。

そしてその翌日又みんなで熱海に來た。私の風邪もまだ何だか咽喉の奥の方に絡んでゐるやうであつたし、どうせ借りて置く別莊なので、早く行つた方がいいといふので、近いうちに來るつもりではあつたが、何かかゝ遲れてゐたのを、俄かの思ひ立ちで十五日に來ることにした。

「なに、熱海に行けば、これくらゐの風邪はぢきに癒つてしまふ。」といつて、私ははづんでやつて來た。すると、その翌日、どうも身體があんまり怠くつて、節々が痛むのが變だと思つて、檢温器を挿んでみると、果して七度三分くらゐある。

この七度三分くらゐの熱が、まことに始末が惡い。といつて、それより尙ほ高くつては一層困るが、朝のうちは定つて六度三四分なので、これなら大丈夫だと思つてゐると、夕方七時八時頃になつて必ず七度二三分に上り、何ともいへない不快な氣持である。まさか肺病になつたわけでもあるまいが、その翌日も七度四分、その又翌々日は七度八分といふやうに上つて行くので、私は、寢てゐて、又例のヒポコンドリイを起こしてしまつた。どうも先日のやうに今度はくしやみもせぬところを見ると、もしかしたら、チブスになつたのではあるまいかと思ふと、どうしてもそれに疑ひを容れないやうに思へて來て、とても安心して靜つと寢てはゐられない。それで又熱海の掛り附けの先生を迎へにやつて來てもらつた。十六日から三日つゞけて來てもらつた。通じはある方だが、一度下劑をもらつて、十分に通じもあつた。それでも翌日七度八分を越したので、もういよ／＼チブスに違ひないと思つて、お父さんは、枕頭にお母さんを呼んで、遺言をした。

去年の十月したきり、今年はまだ豫防注射をしてゐないので、私達はそのことが氣にかかつてゐた。

「もし、そんな病氣にでも罹つたら、散々だ。金はないし、第一此の土地では隔離室などの完備した醫院はなさゝうだし、こんな處の避病院などへ放り込まれるよりは、一足飛びに火葬場へ連れてゆかれる方がましなくらゐなものであらう。そ

れに私の此の衰弱した身體では、とても耐らない、癒つたら死ぬに定まつてゐる。死んだ後のことが氣にかゝつてならぬが、しかし、それも壽命なら仕方もない。……もつと私が生きてゐたら、子供のことについても、いろ〳〵都合のいゝやうにして置いてやらうと思つてゐるんだが、今となつては、それも、及ばぬことだ。」

それから、私の死んだ後、差當り東京の知友の中でいろ〳〵相談したり、依頼したりすべき人の名を五六人指定した。

「××君は差づめ、近い處ではあるし、お前の知つてゐるとほり深切な、好い人だから、あの人と、それから××も近處のことだし、よく物の分つた人間だから、何かの判斷に加はつて世話を燒いてもらひなさい。……私が死んで、お前達遺族を引取つて養つてもらひたいといふわけでないのだから、みんな厭とはいふまい。金でも無心するのならさうはゆかぬが。……女の子であつても女學校でも濟んでしまつてゐるといふなら、又何とでもなるが、今のところでは、私が死んだら、收入の道はないのだから、居食と思はなければならぬ。どうかして元金に手を着けずにその利子で三人くらゐの生活は立つやうに、基本金――貯金をこしらへて置きたいと思つたが、それも間に合はなかつた。銀行にも預金はないし、早速明日の日から困らなければならぬ。その代り死んだら保險金が一萬五千圓は受取れる。……どうか同じ死ぬなら、あんまり長く患はないで、そして金がかゝらないで死にたいものだ。といつて、自殺も出來ないし。それから改造社や春陽堂からまだ少しくらゐ全集本の印税の金が入つて來るかも知れぬ。そんなことは、今いつた二人ではいけない、さういふことの方は、何といつても、やつぱり××君が顔が利く、それから××君だ。この二人とそれから、××社の社長と此の三人で相談していゝやうにしてもらふんだが、それ等の人にお前から直に話が出來にくければ、前の二人から話してもらへばいゝ。しかし、いくらお前でも私が死んでゐないとなると、さう〳〵人が來るたびに隱れてばかりも居られない。話きるといふことは一生懸命なことなんだから、そんな含羞んで人に顔を合はさないといふわけにもならぬ。今もいふとほり、どうぞ養つて下さいといつて縋るんでないから、それだけの五六人の人に差當つてのこと、それから出版書肆との協

議を依頼するのだ。しかし出版書肆といつても、さう大したことを私の書いた物で望めないから、もし、どうかなつたら、してもらふといふくらゐのことだ。それよりも、やつぱり確實に當てになるのは一萬五千圓の保險金だ。死んで受取るとして、幾日くらゐ經つて拂つてくれるものか知らんが、あそこの保險會社には重役に一寸知つた人があるから、これも、誰れかに賴んで、なるたけ早く拂つてもらふやうに便宜を計つてもらひなさい。無論私の鄕里からも、兄なり甥なりが出て來るであらう。長い先々のことは、やつぱり鄕里の者とも相談して、その厄介にならねばならぬが、東京のいろんな事情に暗いんだから、遠い親類よりも近い他人の譬で、差當つてのことは田舍の人間では埒があかぬ。」

私が仰向きに寢ながら、それからそれへと、いろんなことを言ひ出したものだから、お母さんは涙を浮べて、じつと聽いてゐた。

それから一と息吐いて、私は又檢溫器を脇に挿入れてみたが、やつぱり七度八分ある。

「どうしても今日の體溫の上り具合は、變だ。昨日あれほど通じもあるし、それに先日、こちらへ來る前に東京で寢てゐた時のやうに鼻カタルといふのでもなく、格別咳が出るのでもないのに、今朝は六度四五分であつたものが、どん／＼上る一方だ。もう一度四分から上つてゐる。新聞の衞生欄などに書いてゐるのを見ると、チブスといふものは初め五六日は風邪と同じやうな低い熱がつゞくものださうだから、今度のは、どうもさうぢやないかと思ふよ。」

「でもチブスだつたら、食べる物なんかとても食べる氣になりませんよ。」

「うむ、お前は一度それを、やつたんだつたな。」

「パラチブスといふんでした。一番輕いといふんでした。それでも、ひどい頭痛がして、とても耐らない。頭痛はしないんでせう。」

「あゝ、頭は別に痛くもない。それに食べる物は味がある。」

「やつぱり風邪でせう。」

「風邪だといゝんだが、しかし變な熱だ。」

そんなことをいつてゐるところへ、かれこれ五時近くになつて、いつものとほりお醫者さんが來診した。物靜な態度の靜かな、高塚醫師は、いつものとほり一とゝほり診察しながら、私がいろ〳〵なことをいひ出すのを、おとなしい調子で輕い返事で聞いてゐたが、柔和な顏を私の方に向けて、

「昨日はあのとほり、好い通じもあつたでせう。やつぱりお風邪です。そんな症候は少しもございませんから、御安心なさいまし。」

さういつて、咽喉の奥に藥を塗つてくれた。懷中電燈で咽喉の奥を照しながら、

「あゝ、こゝが大分腫れてゐます。」といひつゝ藥を塗つた。私が、あんぐり口を大きく開けてゐるので、

「あなたはお上手です。」

高塚さんは靜に笑つた。

私はいがらつぽい藥の味に顏を顰めながら、

「やはり、この咽喉のせいですかなあ。」

「さうです。チブスぢやございません。」高塚さんは始終靜に笑つてゐた。

「どうも有難うございました。」

「しかしまた、この模樣だと晩には、まだ少しくらゐ上るかも知れません。明日も別にお使ひを下さいませんでも、私の方からまゐりますから。」高塚さんは簡単にいつて、歸つて去つた。

けれどもその翌日も翌々日も毎日一番高く上る時刻の夕方の七時八時になつても七度を越さなかつたので、チブスではなか

つた。それから用心しい／＼寢る前に湯にも入つた。暖い、風のない日には、お前達を連れてそこらを散歩もした。しかし、あんまり風邪が長い爲に、すつかり臆病になつてしまつて、大抵朝から晩まで安火を抱へて閉ぢこもつてゐた。初は物の味のおつた胃にも、却つて段々食欲が減退して來た。何を食べてみる氣にもなれなかつた。

「こんなことでは爲方がない。熱海に來てゐて、毎日安火を抱へて閉ぢこもつてゐるやうでは、私もいよ／＼老込んでしまつた。」私は長大息するのであつたが、夕方になると、どうかすると、やつぱり身體に熱氣を覺えた。そして檢溫器を挿んでみると、やつぱり七度を二三分越してゐた。

「やつぱりあるよ。」

私は氣を腐らしてしまつた。

「どうしたんでせうねえ。」お母さんは傍で何か針仕事をしながらいつた。

「肺病でないし。…………脈になつてしまふ。もう一つ仕事をしなければ、お正月は來ないんだ。から、どうも十二月の初から一と月も寢てゐるやうでは、私も、いよ／＼駄目だ。」と悲觀した。

「東京で眞鍋さんにでも診てもらつたらどうです。」

お母さんは、三四年前、眞鍋さんの内科に入院して、重患から救はれたのであつた。

「さうしてもいゝ。しかし、差當つて一つ仕事をしなければならないのが、それが出來なくつては、どうすることも出來ぬ。…………この間も、今にも死ぬやうな氣がして、お前に言ひ遺して置かうとしたのだが、あれからお醫者さんが來たので、それつきりになつてしまつた。いづれ、そのうちに、委しく書いておかうと思つてゐるが、しかし、そのうちといつてゐる間に、そのうちがどうなるか分らない。その保險金と、印稅――印稅は全く水もので見當がつかぬが、――とで、その利子ぐらひで、どうかこうか活計が立てられゝば、まあ、いゝんだが、そこがたゞむづかしいものだ。それからお前の

知つてゐる。あの借金は何を措いても先きに拂つてしまひなさい。それから此處の土地で借金をして資料を買つておる。あれくらゐは、全集の印税が豫想どほりに入れば拂へるであらうと思ふが、あれは決して賣つてはならぬ。いつかは賣る方が悧巧な時が來るかも知れぬが、それは、まだ〳〵先のことだ。しかしその所置はお前には出來ないから、そんなことは郷里(くに)の兄にでも相談するのだが、あたりまへだつたら、十一も年上の兄の方が先きに死ぬ道理だが、今のところ、こんな身體の具合では、どうしても私の方が先きだ。郷里(いなか)の方では、田地を賣るとか買ふとか、兄もなか〳〵やる方だが此處の樣子は分ぬから、不都合だが、まあ、その時にはどうにかなるだらう。兄も近ごろ大分失敗してゐるので氣の毒に思つてゐるが、どつち道、私と同じやうに幼い者よりは先きに死んでゆくんだ。私の二人の子供が路頭に迷はぬやうなことは所置をとつてくれるだらう。けれども何度もいふとほり兄は私より十一年も年長だ。兄が私より長命するものとは限らない。そのことを考へて、私は郷里の甥達にも遺言の依頼狀を書いておくつもりだ。兄の相續人の啓一郎はお前も知つてゐる。それから今年の春此處に來た速雄、あれは金持へ養子に行つたのだが、度々いふとほり、養つてもらふのでない、たゞ、いろんな相談對手になつてもらふのだ。それから、これもお前が知つてゐる筈だ、それ三四年前の春一寸來た、私の姉の子だ。あそこの家は大して物も持つて居らぬが、堅い家で、大分の山持ちだ。もつとも山持ちでも金持ちでも、それは他人(ひと)の物だ。そのご厄介にならうといふのではないが、私の甥達だから、いづれも二人の子供とは從兄妹同志(いとこ)に當る。いとこといつても、その甥達からいへば、まるで二人の女の子とは、親と子とのやうなものだ。恰ど甥共の子と同じくらゐのものだ。まことに心細い次第だ。それで、今先もいふとほり遠方に居る者は、何のたそくにもならぬが、不幸はどんな形で襲ひかゝつて來るかわからない。私が死んだ後で、又お前が早く死ぬやうなことがないともいへない。尤も子供が死なゝいとも限らぬが、子供は無事で居るものとしての話だ。で、兩親とも亡くなつて、子供がまだ小さい時のことを考へて置かねばならぬ。

先達つてから、寢ながら、いろ〳〵考へて見たが郷里には親類緣者が多いといつても、理詰めが來ぬ先から遠方の田舍に子供を連れて引込むといふことも爲かねる。――今、私の頭の中は、二人の子供の將來を出來るたけ幸福にしてやりたいといふことよりほかに考へはないのだ。廣い世間には、自分の子供や家族のことよりも、もつと一般の社會の幸不幸について心配してゐる人がある。そんな人の心掛けは誠に立派なものだが、世の中の人が、みんな銘々のことを幸福にすることを努めたら、そんな心配は少くなるだらうと思ふ。しかし、どんなにそれを心掛けても意地の惡い不運は執固く附き纏ふかも知れぬが。……まあ、そんな餘計のことはさておき、私には彼奴等二人の一生を幸福にしてやることが今のところ精一杯だ、それも思ふとほりにならぬ有樣だ。

それで、女の子を二人田舍で大きくして、田舍で嫁がして幸福に遺憾なきかといふに、さうばかりともいへない。何も都會の榮耀榮華をさせたいわけではないが、私達兩親が亡くなつて孤兒にでもなれば爲方もないが、まづ、それまでは生まれた土地で成人させたい。さう思ふと、どうも遠方の親類ではあんまり頼りにならない。ところが、又、いくら親しい友人や同じ仕事の仲間であつても、金錢のことになると、必ず遠慮をするから、私が死んだ後で出版書肆への交渉ごとなどは、さういふ人達に頼むとしても、保險金その他なにがしかの金が纏つたとした上で、その金の使用法については、今いつた甥達三人連帶の監督にしてもらひなさい。兄といつても、何度もいふとほり明けて六十四になる。私より頑健ではあるが、近頃の失敗で大分年を取つたのが眼に見えて來た。私のそれ等の甥は、大抵どれも、幼い時分に、一昨年死んだ祖母の世話になつたものだ。私の仲の兄は二人とも四つか五つの子を遺して若死をしたが不幸中の仕合せには、私の母が達者で、しつかりしてゐたのでそのお婆さんの七光りのお蔭でみんな大きくなり、今ではもう、私の子供くらゐの子供の幾人もの親となつてゐる。私の子供だけが、お婆さんの息が掛らないことになる。それを思ふと、甥共も、自分達の幼少であつた時分のことを考へて、私の子供の不幸に同情してくれるだらう。そのくらゐの同情を甥達から求めるのは不當で

ない。私の甥の一人は生まれてやう〳〵四つになつたばかりで父親に死なれ、又もう一と組の甥達三人は六つと十と十二とで父親に死なれた。私も何だか、自分の子供がそれと同じ不幸な身の上になりはせぬかといふやうな氣がしてならぬ。親はなくとも子は育つといふ世の諺にもあるとほりで、それ等の甥達は、お前も知つてゐるとほり、みんなどれももう一人前の父親になつてゐるのだが、同じことをいふやうだけれど、それ等が父親に死なれた時分には、今から三十年も二十年も前のことで、私の母である祖母といふもの、眼が光つてゐた。が、今はその祖母といふものがない。その祖母のないといふことが、私に、どれだけ力を落さすか知れない。しかし、その祖母は、あのとほり一昨年の春死んだのだが、たとひ生きてゐたところで、正氣が大分違つてゐるのだから、何の頼りにもならないのだ。私の死んだ兄達は、四つや六つの幼子を遺して死んだのは不幸この上もないことだつたが、しかし、私が今死ぬよりはまだ仕合せだ。私は、思ふて効なきことではあるが、私の母——これ等の祖母であつた人の、幼くつて父親に死なれた不幸な孫を慈み憐んだ有様をよく記憶してゐるがあんな人があつたら、私は、たとひ明日の日に死んでも、後のことを、そんなに心配しない。安心して息を引取ることが出來る。

身上持ちがよかつたとか、そんな家計のことについては、何の働きをした人でもなかつたが、父親の死んだ孫を可愛がつたことだ、殊に私の今の場合では強く思ひ起されるのだ。」

そんなことをいつてゐると、いつしか私は自分の言葉に聞きとれてしまつて、仰向きに寢てゐる眼から、熱い涙がはら〳〵と頻に落はつた。母の愛、祖母が幼い不幸な孫を慈み憐んだ愛の、いかに清純な、感傷的なものであつたかといふことを思ふと、さういふ慈悲憐憫の心持ちを、どうか人類全般の上に遍滿せしめたい。否な單に人類のみに止らず、凡ての生物に及ぼしたい。それが、慈悲を説き、博愛を説かれた昔の聖賢達の心である。[illegible]しかし、い[illegible]の祖母がこ
[illegible]したのて、[illegible]のない[illegible]、双いで[illegible]のなにゐる孫達に[illegible]たつて

は、大變だ。が、その一番不幸な場合を考へて置かねばならぬのだ。そんなことを、やきもき思つてゐると、私は胸が迫つて、息が詰まるやうな心地がして來た。輕微な熱に浮かされて、恰も、白晝夢を見てゐるやうな頭の加減で、自分の亡き後のことが、まぼろしのやうに浮んで來るのであつた。

「おい。」と、私は又お母さんに呼びかけた。

「今死んでも、微々ながら、どうかかうか、三人口食ふだけのことは、何とか方角が附くやうに思へるが、先刻もいつた財產のことだ。それは、たとひ遠くに居るのであつても、ぜひ共甥達に相談してやらないといけないよ。いゝか。東京の同じ職業仲間の友人達も深切にいろ／＼心配はしてくれるであらうが、何といつても他人のことだから、金錢上のことになると、入つて來る方法について一應出版書肆との交涉などはしてくれても、その金の保管とか、使ひ途については遠慮して指圖がましいことは差控へるにちがひない。それから後の長い前途のことが一番私には心配なのだ。三井とか三菱とかいふ處に信託といふものがあつて、財產の保管を引受けてゐるが、それに信託するにしても、相當こちらに知識がなければならぬ。から、どうしても、その事は、甥等に相談するのだ。しかし、前にもいつたとほりに、一人の甥ではいけないよ。三人だ。三人の甥の協議に依つてどうともするのだ。三人で、それは、かうしたがよからうといふことになつたところで、それを實行するのだ。度々いふとほり、基本財產といふものが確定してゐれば、私も大いに安心出來るのだが、今のところ、それが自分にも、どのくらゐのものになるか、まるで見當がつかない。無論大したものでもないが、その利子でお前達三人が食つて行かれるだけのものにしたい。それも、いろ／＼程度のあることだが、今の私の家の暮らし向きから考へてみれば、それもほゞ見當がつく。

ところで、まあ、細々ながら、假りに食つてゆけるだけのことは、働き人がなくなつても、どうかなるとして、その次に私の心配でならぬのは、二人の奴らの教育のことだて。私が生きてゐてさへ、そのことは、もう今からいろ／＼迷つてゐ

る。死んだら尚更ら方角が附くまいと思ふ。尤もあいつ等の教育のことになると、これは又、金錢上のことでないから、東京在住の、私の懇意であつた人に、相當智慧を授かつてもよい。相談仕掛けられる人達の方でも、さう、うるさいとか迷惑だとか思ふまいとおもふ。

どうせ私とお前との間に出來た子供等だから、あんまり頭の好い子供でもあるまいが、でも、今のところ、まるきり白痴でもなさゝうだな。」

お母さんは笑つていつた。

「どうですか……六つになつても、まだ數が數へられないところをみると……」

「六つになつたつて、やつと、明けてさうなるので、まだ滿四年と少々だ。數くらゐは追々數へられるやうになるだらうが、あんまり學校が出來ないでは困る。大變な女の學者などになれなどゝうぬぼれてはゐないけれど、これからの女は、女であつても、男同樣に、何かしら身に相應な技能を教へ込んで置きたいのだが、さて何を仕込んでいゝか、今から定めても置かれない。私が長く生きてゐると、能不能、賢い愚かに依つて、臨機應變の考もあるのだが、それは、お前にはとても思案に能はぬことだ。……何事も天命だと諦めてしまへば、それまでだが、まあ、さういふ賢い人は、さう思つてゐるも勝手だが、私には、やつぱり死んだ後の事が氣になつて爲樣がない。それも、二十(はたち)くらゐにもなつて、どうなりかうなり、自分で獨立の思案の能ふほどになつてゐれば、それから先を無暗に氣苦勞したつて爲方がないが、今、死んでは實に困る。

よく新聞に出てゐるが、女學校の入學では親達も當人もそれが大變な苦勞ださうだから、私は、附屬の小學校のある女學校へ入れたい考でゐる。それは市中でないとならない。私もよくいつてゐる、あの學校がよいと思つてゐるのだが、あそこ[illegible]

を聞いてゐる。出來の好い子供なら、そこらの、どんな學校へ放り込んでもいゝのだが、小學校からして市中のでないと、設備萬端整つてゐないといふことだ。それにしても、どうかして私が達者でゐるなら、市中に住みたいものだなあ。つく〲市中に住みたい。今のところ、それが私の第一の計劃なんだが、思ふとほり出來るかどうか。そしたら子供の學校に行く方針も立つ。しかし、こゝ一二年の中に死ぬやうなことがあると、これも水の泡だ。やつぱり今までの處にゐて、近處の學校に入れるのだ。さうするより他爲方がない。それから先きの事だが、大きい方は、よく泣くが、あのとほり高い聲だ。育も惡くない。歌を唄はすと好さゝうだ。唄歌ひを職業にすると、いろんなうるさいことがあつて、それで苦勞をするやうでも困るし、西洋の唱歌といふやつは、私が死んでからなら、知らないが、どうも、私達の樂みにはなりかねる。お前だつてさうだらう。犬の夜泣きのやうな聲でやられても耐らない。すると長唄だが、こいつも樂みくらゐには好いが、かりに天分があつても長唄の藝人にでもと考へものだしねえ。××さんは繪師にするといつてゐたが、私も繪は好きだから、もし自分がやる氣なら繪を習はすのは好い。私が生きてゐれば別にいつて置く必要もないが、死んだ時のことだ。よく心得て置きなさい。もし繪を好むやうだつたら繪を習はすだ。だが、てんで學問などを好まない者なら爲方もないが、さうでなかつたら、英語でも何でもいゝから、外國語だけは必ず勉强さしてくれ。私の本當の底意は、やつぱり文學を勉强さしたいのだ。男は尙更のこと、女でも小說を書くやうな女に、あんまり品行の好い者はない。小說の種とりに、わざ〲自分免許で、女道樂や男ぐるひをしてゐる。それをいふと、私なども御多分に洩れない方だ。私はそれが何より子供に惡い影響を及ぼしはしないかと心配してゐる。どうかそんなことがないやうにと心から祈つてゐるのだ。それで、文學を勉强させるといつても必ず小說を書くといふのではないのだ。女小說家ではない、女文學者なのだ。私が長く生きてゐたら、漢學を勉强させたいと思つてゐるのだが、漢學ばかりぢやない、日本の古い文學、西洋の物、文學書類を讀まして、女の文學者にしたいのだ。それが人間としての修養になるのだ。繪をやるもいゝ、歌を唄ふのもいゝ、音樂を稽古するのもいゝ

が、その前に文學者であつてほしい。幾度もいつた答だが文學者といふのは、小說家とは少しく違つてゐる。小說家にならなくつてもいゝから文學者には、ぜひ、なつてくれ、今日の雜誌や新聞に出てゐる戀愛小說を讀むなとはいはない、讀んでもいゝが、その前に古い文學書類を讀むのだ。私が生きてゐたら、年齡相當に、その時々に適當な書物をあてがつてやるのだが、今から、一々細かい指圖もできない。しかし、まさか、今日明日(けふあす)の中に死ぬとも思はぬから、此の身體が起き上られるやうになつたら、さうなつた場合に、私になり代つて、私の心持を最もよく理解してくれさうな人を撰定して、よく頼んで置くから、その人から時々助言をしてもらひなさい。度々いふとほり、養つてくれといふのでないから、賴まれた人も厭とはいはないだらう。

これから最も肝腎なことを、つい、言ひ忘れるところであつた。かりに私が運好くあともう二十年近く――さつと七十歲まで生き伸びたところで、お前達の緣が定まるのを見られるか、どうかは覺束ない。それは私がたとひ七十まで生きてゐても諦めてゐる。尤も、一と口にもいへない。私が七十まで生きるとすれば、もう十七年ある。さうすると今六歲のものが二十三になり四つの者が二十一になるから、良緣がないともいへないが、もしあつても惡緣でないとも測られない。こんなことまで今から取越し苦勞をしてゐては、まつたく遣り切れないが、しかし、私は今にも自分が死ぬやうに思へてならぬから、これから二十年も先のことまで、何も斯も一度に考へて置かなければならない。

それで、破れ鍋にとぢ蓋(ぶた)のたとへで、身分相當の緣を求めるにして、お前達女の子が二人ばかりなのだが、別に財產があるわけでもないのだから、養子などに來てくれる者もないし、又、それは望みもしない。相當な處に嫁に貰つてもらふのだ。この間も、ある懇意な人が、

「もう、あなたの方のお孃さんなんか、何處か心當りの出來の好い男の子をお貰ひになつて、今から中學校にでもやらしておおきになつたがいゝでせう。[illegible]

このとほり、いろ〳〵取越し苦勞をする私であるが、さすがに、そのことまではおもへてゐなかつた。なるほど、さういはれてみると、六歳の子には、今年あたりから中學校に行くゝらゐの男の子が丁度いゝのだ。出來のいゝ男の子を一人もらつて、それを仕立てるのは、許嫁のことはさておいて、樂みでもあるが、私は自身に明日にも死ぬやうな氣がするので、こんな遺言をして置くところだ。私が恙なく存命するものなら、後日嫁合はすことは預りにしても、將來私の手助けにもなつていゝことゝ思ふが、何分資産が無い。そんなことをしては却つて、お前達遺族の生活を複雑にし、禍の種を蒔くことにもならぬともかぎらぬ。私が確實に今後十七年生きるものと定つてゐれば、そんなことをしても悪くもないが、到底覺束ない。

私の知つた人の中には、學んだ學校教育その他の事情から、一旦、相思の間で嫁して數年の後離別して、若い身空で生涯を尼院に委ね神に奉仕して過す決心をした人もある。又亡くなつたお父さんの、生前の行ひから婦人の結婚生活を呪つて、今たしか三十を過ぎてもまだ嫁さない娘さんもある。それは、もつと深い事情を聞いたら、私の知らぬ理由がまだ他にあるかも知らないが、前の尼院に入つた娘さんなどは、とにかく自分の獨立の思想なり、意志でさうと決心したのだから、一生を尼院で暮すことを勸めはせぬが、それだけの決心をするだけの教養があれば、それでよいのだ。私が前に、何よりも文學者になつてくれといつたのは、そのことを思つたからだ。文學と一と口にいつたつて、だらしない戀愛小説を讀むことでは、決してないのだ。宗教のおはなしを聽くのもいゝ。高僧の傳記などを讀むのも最も好いことだ。高僧にかぎらない、一體に古今東西の偉人匹夫を問はず、いやしくも出色の働きをした人達の傳記はよく讀みなさい。

お前達がもし良縁を選ぶとしても、そのことまで今から私が細かく遺言しておく譯にもいかぬから、自分で獨り立ちの出來る、しつかりした思慮を鍛へるために文學者になんなさいといつたことだ。こゝのところをよく味つてもらひたい。

私の古く知つてゐる人に、一人きりの娘さんがあつた。なか〳〵の美人で才發でもあつたが、その才發はいさゝか方向

が狂つてゐたのではないかと思ふのは、その娘は、もう小學校に行く時分から、不良少年などに騒がれてゐた。娘自身も兩親も多少それを、彼女が目に立つ美少女である反映として得意がつてゐた。やがて女學校に行く年頃になつて、傍の騒ぎは一層盛になつた。後には、あんまりそれがうるさいので、得意になつてばかりも居られず、警察に願つて、附添ひに刑事を一人頼み、それに學校の送り迎へをさせたものだ。すると、その刑事がどうしたといふのか、その娘をぜひとも自分の女房にもらひたいと强請して、動かなかつた。娘はそんなことから、たうとう妙なところに嫁いでしまつたといふ話を聞いてゐる。お前達はそんな美人にもなれさうにないから、不良少年などに附き絡はれることもなからうが、その娘の親達からいへば、あたら、一人娘を臺なしにしてしまつたのだ。

一々起りうる場合を想像して遺言することもできぬから、お前達が一本立ちして、何事に依らず處決するだけの思慮分別の基となる頭――智惠を養はねばならぬ。それには宗教と文學とに興味を持つてもらひたい。

生計上のことが何よりも差當つての心配だが、これも、ほゞ初にいつたとほりにするよりほかに爲方がない。本當に私は死にさうだ。これだけ書くのも、骨が折れた。（一月十二日）



月のやさしさ
日の明るさを
兼ねて生れた
新マツダランプ
マツダ
神奈川縣 東京電氣株式會社 川崎市

公論

定價	送料
一冊 八十錢	參錢
六冊 四圓八十錢	送料共
十二冊 九圓六十錢	同

毎月一回 一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます
△御照會文簿詳細御回答申上ます

廣告料

昭和三年三月十八日印刷
昭和三年四月一日發行
（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作

印刷人　高木島三

印刷所　秀英舍
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　中央公論社
東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
電話丸ノ内二〇六六番
振替東京三四番

昭和二年末

一資產總額　金四千參百五拾餘萬圓

一保險金額　金貳億貳千貳百餘萬圓

一一ケ年間收入保險料　金壹千〇四拾餘萬圓

明治二十七年九月設立

仁壽生命保險株式會社

本社　東京市麴町區內幸町一丁目三番地

支店

東京市　仙台市　新潟市
大阪市　金澤市　熊本市
名古屋市　函館市　横濱市
福岡市　神戸市　松本市
小樽市　高松市　秋田市
廣島市　京都市

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.



陽春四月の三越

流行と實用の良品を

……各種豊富に取揃へ陳列いたします……

花笑ひ鳥歌ふ長閑な春がまゐりました。三越にも清新の香に滿つ春の流行品や實用品が、美しい色彩に輝いて居ります

春のお買物は何卒三越へ御用命下さいますやう偏に御願ひ申し上げます

各地よりお手紙にて御注文の際は「三越呉服店通信販賣係」宛に御用命願上ます

東京市 三越呉服店 駿河町